

三ツ木遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
建設省

『三ッ木遺跡』正誤表 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
P 3	(註)	鉄工株式会社	鉄工株式会社
P 11	11行目	方形四脚墓	方形四脚墓
P 15	26行目	炭火物粒	炭火物粒
P 19	8行目	7号住→8号住	8号住→7号住
"	31行目	炭火物粒	炭火物粒
P 28	1行目	小形鉢	小形鉢
P174	3行目	11基のピット	10基のピット
P193	6行目	(10世紀前半)	(10世紀代)
P227	4行目	第38図-5	貯蔵穴
		床面	
		?	
P227	8行目	第38図-9	貯蔵穴
"	10行目	第38図-11	"
"	11行目	第38図-12	"
"	16行目	第38図-17	"
"	18行目	第38図-19	"
P272	3行目	第272図-1	第274図-1
P350	1行目	Gは口縁部破片で	Gは口縁部破片で
"	1行目	…められる。G	…められる。G
P358	16行目	, S r k α	, S r K α
PL.3		23号住貯蔵穴	23号住ピット

資	財 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 法 令 第 101 号 保 管	61-330
		8-1
NO.	61年 1月 17日	(4)
60-1660		

三ツ木遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

序

群馬県と埼玉県を結ぶ国道17号線のバイパスとして計画された上武国道もすでにその一部は工事も完了し、地域の幹線道路としての役割を果たしつつあります。

これら工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、昭和48年以来継続して実施しております。ここに報告します三ッ木遺跡もその一つです。調査の結果、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡およそ200軒をはじめ、掘立柱をもつ建物跡等が発見されました。遺跡は、さらに河川敷周辺へひろがる様相をみせており、この地域における古墳時代から平安時代にかけての集落の変遷史を知る上で貴重な資料といえましょう。

酷寒・酷暑の日もいとわず、連日すすめられた調査の結果得られた、これらの貴重な資料を収め、後世の人々にも残す記録として、ここに本報告書が刊行できましたのも、建設省高崎工事事務所の関係者の方々をはじめとする、多くの方々の御指導と御協力の賜物であります。ここに厚く感謝の意を表します。

願わくば、本報告書が一人でも多くの方々に広くご覧いただき、有効に活用されますことを念じ序といたします。

昭和60年2月25日

群馬県教育委員会

教育長 横山 巖

例 言

- 1 本書は一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う事前調査として、昭和51年度に実施した、群馬県佐波郡境町所在の三ッ木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の所在地は以下の通りである。
群馬県佐波郡境町大字三ッ木字自光坊
字堂前
- 3 調査の実施は建設省の委託を受けて群馬県教育委員会文化財保護課が行ない、整理作業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行なった。
- 4 調査及び整理作業の実施期間は以下の通りである。
調査期間 昭和51年4月5日～昭和51年12月25日
整理期間 昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
- 5 遺跡命名は佐波郡境町大字三ッ木地内において小字界を越えた長大な範囲を対象とし、遺跡範囲も広範囲に亘ると判断されたため大字名を採用して「三ッ木」遺跡とした。
- 6 調査及び整理の実施にあたっては下記の職員が関係した。

発掘調査

事務担当

磯貝福七、白石保三郎、森田秀策、阿久津宗二、飯塚喜代子、女屋等志

(群馬県教育委員会文化財保護課)

調査担当

井上唯雄、須田 茂 (群馬県教育委員会文化財保護課)

調査員

内田恵治

整理作業

事務担当

小林起久治、白石保三郎、梅沢重昭、松本浩一、大沢秋良、定方隆史、秋池 武、国定 均
笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏
野島のふ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子 (事務補助)

整理担当

飯田陽一、大木紳一郎

浅井良子*、平野照美、細井敏子、山田キミ子、押江さゆり、関口貴子、今井智江美、島崎敬子、石田幸子、坂庭美代子、狩野道子、小海美和子、関口加津枝、田村千穂 (整理作業補助)。
*は整理担当補佐)

- 7 遺構の写真撮影は井上唯雄、須田 茂、遺物写真撮影は佐藤元彦が担当した。
- 8 本書の編集は主に大木紳一郎が行ない、執筆にあたっては下記の者が行なった。

第 I、II、III、VI、VII 章	井上唯雄
第 IV、V 章—1・2・4・5・6・7・8・10 (弥生土器)	大木紳一郎
第 V 章—3	須田 茂
第 V 章—9	石塚久則
第 V 章—10 (縄文土器)	藤巻幸男
第 V 章—10 (石器)	岩崎泰一
住居跡出土土器観察表	浅井良子 (大木が一部加筆、修正を行なった。)

なお用語の統一等の点で大木が一部加筆、修正を行っており、文責は大木にある。

- 9 須恵器の胎土分析は群馬県工業試験場 花岡絃一氏に依頼した。
- 10 遺物の保存処理は関 邦一、宮沢健二が行なった。
- 11 本書の作成にあたり下記の方々の御指導、御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
 岩上照朗、藤田典夫 (以上財団法人栃木県文化振興事業団)、坂爪久純 (境町教育委員会)、大江正行
 下塚 正、津金沢吉茂、関 晴彦、女屋和志雄、神谷佳明、谷藤保彦、関根慎二
 なお本事業団職員である石塚久則、藤巻幸男、岩崎泰一の各氏には多忙の折、執筆の労をとって頂いた
 事はまことに有難く、ここに感謝の意を表する次第である。
- 12 出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1 遺構番号について

本遺跡は同時に実施した早川河川改修工事に伴う発掘調査（以下早川調査と略す。）で検出された遺跡と同一であると判断されたため遺構番号は両者を統合して一連の番号を付けた。早川調査の遺構については本文中に（早川河川改修地域調査分）と明記してある。

遺構番号は調査時登録のものを遵守する事を原則としたが、その後の検討により、又混乱を避けるために番号の変更をしたものがある。これについては次頁に表として掲げた。なお変更の結果、欠番となったものについては本文中に（欠番）と明記してある。

2 遺構名の略称について

本文中及び図、写真図版における遺構名の略称は以下の通りである。

住—竪穴住居跡 掘立—掘立柱建築遺構 井戸—井戸跡 塹—土塹 P—ピット

なお攪乱部分については横位の方線スクリーントーン、焼土は網スクリーントーンによって図示した。

3 遺構及び遺物図の縮尺率について

遺構—竪穴住居跡、土塹、井戸跡1/60 掘立柱建築遺構1/80 方形周溝墓1/120 溝、櫛列不定、遺物—小形土器（杯、碗、皿等）、縄文土器、弥生土器、石器1/3 大形土器（甕等）、埴輪1/4 鈴帯具、紡錘車、鉄製品1/2 石製模造品1/1 土錘1/3

なお遺物写真図版の縮尺率は一定していないが、極力図と一致するように努めた。

4 遺構、遺物の計測部位については下記のように定めた。

遺構 規模———主軸方向の最大値×主軸直交方向の最大値。

主軸方向———竪穴住居跡はカマド設置辺の直行軸、掘立柱建築遺構は桁方向。

深さ———遺構検出面と床及び底面との比高差の最大値～最小値。

柱間距離———柱穴底面の中心間距離。

カマド規模———長さは煙道端からそで部端の距離、幅はそで部外郭線間距離最大値。

カマド軸方向———燃焼部幅の中心と煙道幅の中心を結ぶ線。

遺物 口径———口唇部外面における最大径。

器高———口唇部上面から底面までの最大値。

底径———底部外縁における最大値。

5 遺物図の中で軸のかかっているものについては点描又は網スクリーントーンで、又石器、砥石の使用痕の範囲は——で示してある。

6 遺構図の方位記号は磁北を指す。

7 周辺の遺跡（第2図）は国土地理院発行「高崎」（昭和58年1月）「深谷」（昭和52年12月）を使用した。

9 遺物重量の計測には「電磁式はかり」（製造 研精工業株式会社）を使用した。

10 遺物観察表中の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修財日本色彩研究所色票監修「標準土色帖」（昭和51年9月）を参考にした。

11 遺物観察表、挿図、写真図版のNaは一致する。

遺構番号照合表

報告書登録番号	調査時登録番号	遺 構 番 号 変 更 の 理 由
(欠番)	2号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	5号住居跡	#
(欠番)	9号住居跡	#
11号土壌	12号住居跡	住居跡の属性が認められない。
(欠番)	16号住居跡	18号住居跡と同一。
(欠番)	40号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	44号住居跡	#
43号土壌	60号住居跡	住居跡の属性が認められない。
(欠番)	75号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	91号住居跡	59号住居跡と同一。
(欠番)	121号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	134号住居跡	#
(欠番)	157号住居跡	#
74号土壌	161号住居跡	住居跡の属性が認められない。
172号住居跡	173号住居跡	172号住居跡と同一。
(欠番)	180号住居跡	179号住居跡と同一。
71号土壌	192号住居跡	住居跡の属性が認められない。
(欠番)	197号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	202号住居跡	攪乱域と判断。
(欠番)	203号住居跡	#
(欠番)	218号住居跡	217号住居跡と同一。
(欠番)	227号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	245号住居跡	249号住居跡と同一。
(欠番)	246号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	2号掘立柱遺構	柱筋が通らないため。
11A号掘立柱遺構	11号掘立柱遺構	
11B号掘立柱遺構	12号掘立柱遺構	11A号掘立柱遺構の拡張あるいは束柱と考えられる。
3号井戸	6号井戸	一連の通し番号に変えたため。
4号井戸		新登録
5号井戸		新登録
6号井戸	7号井戸	一連の通し番号に変えたため。
7号井戸	8号井戸	#

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第 I 章	発掘調査に至る経過と調査の概要 …………… 1
第 II 章	遺跡の立地と地理的環境 …………… 3
第 III 章	周辺の歴史的環境 …………… 5
第 IV 章	遺跡の概要 …………… 11
第 V 章	検出された遺構と遺物 …………… 12
	1 竪穴住居跡 …………… 12
	2 住居跡出土遺物 …………… 220
	3 掘立柱建築遺構 …………… 287
	4 土 塼 …………… 295
	5 井戸跡 …………… 320
	6 溝 …………… 324
	7 柵 列 …………… 334
	8 方形周溝墓 …………… 336
	9 遺構出土の埴輪 …………… 341
	10 遺構外の出土遺物 …………… 349
第 VI 章	調査の成果と問題点 …………… 355
第 VII 章	結 語 …………… 360
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺地形図	4	第60図	38号住居跡	54
第2図	周辺の遺跡	8	第61図	38号住居跡出土遺物	54
第3図	基本土層	11	第62図	39号住居跡及び出土遺物	55
第4図	1号住居跡	12	第63図	41号住居跡	56
第5図	1号住居跡出土遺物	13	第64図	42A・42B号住居跡	56
第6図	3号住居跡	14	第65図	43号住居跡	57
第7図	4号住居跡	14	第66図	45・46号住居跡	57
第8図	6号住居跡	15	第67図	45号住居跡出土遺物	58
第9図	6号住居跡出土遺物	15	第68図	47号住居跡及び出土遺物	58
第10図	7号住居跡	16	第69図	48号住居跡	59
第11図	7号住居跡出土遺物	16	第70図	49号住居跡及び遺物分布図	60
第12図	8号住居跡	17	第71図	49号住居跡出土遺物(1)	61
第13図	8号住居跡出土遺物及び分布図	18	第72図	49号住居跡出土遺物(2)	62
第14図	10号住居跡	19	第73図	50号住居跡及び出土遺物	63
第15図	11号住居跡及び出土遺物	20	第74図	51号住居跡	64
第16図	13号住居跡	21	第75図	51号住居跡出土遺物	65
第17図	13号住居跡遺物分布図	21	第76図	52号住居跡	66
第18図	13号住居跡出土遺物(1)	22	第77図	52号住居跡出土遺物	66
第19図	13号住居跡出土遺物(2)	23	第78図	53号住居跡	67
第20図	14・15号住居跡	24	第79図	53号住居跡出土遺物	67
第21図	17・18号住居跡	25	第80図	54号住居跡及び遺物分布図	68
第22図	17号住居跡出土遺物	25	第81図	54号住居跡出土遺物	69
第23図	19号住居跡及び出土遺物	26	第82図	55・56・59号住居跡	70
第24図	20号住居跡	27	第83図	55号住居跡出土遺物	71
第25図	20号住居跡出土遺物	27	第84図	56号住居跡出土遺物	72
第26図	21号住居跡及び出土遺物	28	第85図	57号住居跡	73
第27図	22号住居跡	29	第86図	57号住居跡出土遺物	73
第28図	23号住居跡	29	第87図	58号住居跡	74
第29図	23号住居跡出土遺物	29	第88図	58号住居跡出土遺物(1)	74
第30図	24号住居跡	31	第89図	58号住居跡出土遺物(2)	75
第31図	24号住居跡出土遺物	32	第90図	59号住居跡出土遺物(1)	75
第32図	25号住居跡及び出土遺物	33	第91図	59号住居跡出土遺物(2)	76
第33図	26号住居跡	34	第92図	59号住居跡出土遺物(3)	77
第34図	26号住居跡出土遺物	35	第93図	61号住居跡及び出土遺物	78
第35図	27号住居跡	35	第94図	62号住居跡	78
第36図	28号住居跡	36	第95図	63号住居跡及び出土遺物	79
第37図	28号住居跡遺物分布図	37	第96図	64号住居跡	80
第38図	28号住居跡出土遺物(1)	38	第97図	65号住居跡	80
第39図	28号住居跡出土遺物(2)	39	第98図	65号住居跡出土遺物	81
第40図	28号住居跡出土遺物(3)	40	第99図	66号住居跡及び出土遺物	81
第41図	29号住居跡	41	第100図	67号住居跡及び出土遺物	82
第42図	29号住居跡出土遺物	42	第101図	68号住居跡及び出土遺物	83
第43図	30号住居跡	42	第102図	68号住居跡出土遺物(1)	84
第44図	30号住居跡出土遺物	43	第103図	68号住居跡出土遺物(2)	85
第45図	31号住居跡	43	第104図	69号住居跡	85
第46図	32A号住居跡	43	第105図	70・71・72号住居跡	86
第47図	31号住居跡出土遺物	44	第106図	73号住居跡及び出土遺物	87
第48図	32A号住居跡出土遺物	45	第107図	74号住居跡	88
第49図	32B号住居跡	46	第108図	76号住居跡	88
第50図	32C号住居跡	46	第109図	76号住居跡出土遺物	88
第51図	33号住居跡	47	第110図	77号住居跡	89
第52図	34号住居跡及び出土遺物	48	第111図	77号住居跡出土遺物	89
第53図	35号住居跡	49	第112図	78号住居跡	90
第54図	35号住居跡出土遺物	50	第113図	78号住居跡出土遺物	91
第55図	36号住居跡	50	第114図	79・80号住居跡	92
第56図	36号住居跡出土遺物	51	第115図	79号住居跡出土遺物	92
第57図	37号住居跡	52	第116図	80号住居跡出土遺物	93
第58図	37号住居跡出土遺物(1)	52	第117図	81・82号住居跡	94
第59図	37号住居跡出土遺物(2)	53	第118図	82号住居跡出土遺物	94

第1182区	83号住居跡	95	第1202区	164号住居跡	135
第1183区	83号住居跡出土遺物	95	第1203区	164号住居跡出土遺物	136
第1184区	84号住居跡	96	第1204区	165号住居跡	136
第1185区	84号住居跡出土遺物①	97	第1205区	165号住居跡出土遺物	137
第1186区	84号住居跡出土遺物②	98	第1206区	166号住居跡	138
第1187区	85号住居跡	98	第1207区	166号住居跡出土遺物	138
第1188区	85号住居跡出土遺物	99	第1208区	167号住居跡	139
第1189区	86号住居跡	99	第1209区	167号住居跡出土遺物	140
第1190区	86号住居跡出土遺物	100	第1210区	168号住居跡及①出土遺物	141
第1191区	87号住居跡及①出土遺物	101	第1211区	169号住居跡及①出土遺物	142
第1192区	88号住居跡	102	第1212区	170号住居跡	143
第1193区	88号住居跡出土遺物	102	第1213区	171号住居跡	143
第1194区	89号住居跡	103	第1214区	171号住居跡出土遺物	144
第1195区	89号住居跡出土遺物	103	第1215区	172号住居跡	145
第1196区	90号住居跡	104	第1216区	174号住居跡	146
第1197区	90号住居跡出土遺物	105	第1217区	174号住居跡出土遺物	146
第1198区	92号住居跡	105	第1218区	175・176号住居跡	147
第1199区	93号住居跡	106	第1219区	175号住居跡出土遺物	148
第1200区	94号住居跡	107	第1220区	176号住居跡出土遺物	149
第1201区	94号住居跡出土遺物	107	第1221区	177・178号住居跡	150
第1202区	103号住居跡	108	第1222区	178号住居跡出土遺物	150
第1203区	103号住居跡出土遺物	108	第1223区	179・189号住居跡	151
第1204区	104号住居跡	109	第1224区	179号住居跡出土遺物	151
第1205区	105号住居跡	109	第1225区	181号住居跡及①出土遺物	152
第1206区	105号住居跡出土遺物	110	第1226区	182・183号住居跡及①182号住居跡出土遺物	153
第1207区	108号住居跡	110	第1227区	183号住居跡出土遺物	154
第1208区	120号住居跡	111	第1228区	184号住居跡	155
第1209区	120号住居跡出土遺物	111	第1229区	184号住居跡出土遺物	155
第1210区	129号住居跡	112	第1230区	185号住居跡	156
第1211区	129号住居跡出土遺物	112	第1231区	185号住居跡遺物分布圖	156
第1212区	130号住居跡	113	第1232区	185号住居跡出土遺物①	157
第1213区	130号住居跡出土遺物	113	第1233区	185号住居跡出土遺物②	158
第1214区	131・132号住居跡	114	第1234区	185号住居跡出土遺物③	159
第1215区	131号住居跡出土遺物	114	第1235区	186号住居跡及①出土遺物	160
第1216区	132号住居跡出土遺物	115	第1236区	187号住居跡及①出土遺物	161
第1217区	140号住居跡	116	第1237区	188号住居跡	161
第1218区	140号住居跡出土遺物	117	第1238区	188号住居跡出土遺物	162
第1219区	141号住居跡及①出土遺物	117	第1239区	189号住居跡出土遺物	162
第1220区	142号住居跡	118	第1240区	190号住居跡	163
第1221区	142号住居跡出土遺物	119	第1241区	190号住居跡出土遺物	163
第1222区	143・146号住居跡	119	第1242区	191号住居跡	163
第1223区	144号住居跡	121	第1243区	193A号住居跡	164
第1224区	144号住居跡出土遺物①	121	第1244区	193A号住居跡出土遺物	165
第1225区	144号住居跡出土遺物②	122	第1245区	193B号住居跡	165
第1226区	145号住居跡	122	第1246区	194号住居跡及①出土遺物	166
第1227区	145号住居跡出土遺物	123	第1247区	195・196・205・206号住居跡	167
第1228区	149号住居跡及①出土遺物	124	第1248区	195・196号住居跡出土遺物	168
第1229区	150号住居跡	125	第1249区	198・199号住居跡及①198号住居跡出土遺物	169
第1230区	150号住居跡出土遺物	125	第1250区	199号住居跡出土遺物	170
第1231区	151号住居跡	126	第1251区	200号住居跡	171
第1232区	152号住居跡	126	第1252区	200号住居跡出土遺物①	171
第1233区	153号住居跡	127	第1253区	200号住居跡出土遺物②	172
第1234区	154号住居跡	127	第1254区	201号住居跡及①出土遺物	173
第1235区	154号住居跡出土遺物	128	第1255区	204号住居跡	173
第1236区	155号住居跡及①出土遺物	128	第1256区	204号住居跡出土遺物	174
第1237区	156号住居跡	129	第1257区	205号住居跡出土遺物	175
第1238区	156号住居跡出土遺物	130	第1258区	207号住居跡	175
第1239区	158号住居跡	131	第1259区	208号住居跡	176
第1240区	159号住居跡	131	第1260区	209号住居跡	176
第1241区	160号住居跡及①出土遺物	132	第1261区	209号住居跡出土遺物	176
第1242区	162号住居跡及①出土遺物	133	第1262区	210・211号住居跡	177
第1243区	163号住居跡	134	第1263区	210号住居跡出土遺物①	177
第1244区	163号住居跡出土遺物	134	第1264区	210号住居跡出土遺物②	178

第164區	211号住居跡出土遺物	179	第180區	住居跡出土土製円板	281
第165區	212号住居跡	180	第181區	住居跡出土砥石①	282
第167區	212号住居跡出土遺物①	181	第182區	住居跡出土砥石②	284
第168區	212号住居跡出土遺物②	182	第183區	住居跡出土鉄製品	285
第169區	213号住居跡及び出土遺物	183	第184區	住居跡出土土鉢	286
第170區	214号住居跡及び出土遺物	184	第185區	1号竪立柱建築遺構	287
第171區	215号住居跡	185	第186區	3号竪立柱建築遺構	288
第172區	215号住居跡出土遺物①	185	第187區	6号竪立柱建築遺構	288
第173區	215号住居跡出土遺物②	186	第188區	7号竪立柱建築遺構	289
第174區	216号住居跡及び遺物分布図	187	第189區	8号竪立柱建築遺構	290
第175區	216号住居跡出土遺物	188	第190區	10号竪立柱建築遺構	291
第176區	217号住居跡	189	第191區	11A号・11B号竪立柱建築遺構	292
第177區	217号住居跡遺物分布図	190	第192區	13号竪立柱建築遺構	293
第178區	217号住居跡出土遺物①	190	第193區	14号竪立柱建築遺構	294
第179區	217号住居跡出土遺物②	191	第194區	縄文時代の土壌	295
第180區	219号住居跡	191	第195區	土壌出土遺物(縄文土器)	296
第181區	219号住居跡出土遺物	192	第196區	弥生時代の土壌	297
第182區	220号住居跡	192	第197區	土壌出土遺物(弥生土器)	297
第183區	220号住居跡出土遺物	193	第198區	古墳時代の土壌	299
第184區	221号住居跡	194	第199區	土壌出土遺物(古墳時代)	300
第185區	222号住居跡	194	第200區	平安時代の土壌①	301
第186區	223号住居跡	195	第201區	平安時代の土壌②	302
第187區	223号住居跡出土遺物	195	第202區	土壌出土遺物(平安時代)①	303
第188區	224号住居跡及び出土遺物	196	第203區	土壌出土遺物(平安時代)②	304
第189區	225号住居跡及び出土遺物	197	第204區	中世の土壌	305
第190區	226号住居跡及び出土遺物	198	第205區	土壌出土遺物(中世)	306
第191區	228・229・230・231号住居跡	199	第206區	土壌出土遺物(鉄貨)	307
第192區	230号住居跡出土遺物	200	第207區	土壌出土遺物(鉄貨)	309
第193區	231号住居跡出土遺物	201	第208區	土壌①	310
第194區	232号住居跡及び出土遺物	201	第209區	土壌②	311
第195區	233号住居跡	202	第210區	土壌③	312
第196區	233号住居跡出土遺物	203	第211區	土壌④	313
第197區	234号住居跡	204	第212區	土壌⑤	314
第198區	235号住居跡	204	第213區	井戸跡	321
第199區	235号住居跡出土遺物	205	第214區	井戸跡出土遺物	322
第200區	236号住居跡及び出土遺物	205	第215區	4号溝	325・326
第201區	237号住居跡	206	第216區	9号・10号・11号・12号溝	327・328
第202區	237号住居跡出土遺物①	207	第217區	1号・2号・3号・6号溝	329
第203區	237号住居跡出土遺物②	207	第218區	5号溝	331
第204區	238号住居跡	208	第219區	7号溝	332
第205區	239号住居跡及び出土遺物	208	第220區	3号溝出土遺物	333
第206區	240号住居跡	209	第221區	12号溝出土遺物	334
第207區	240号住居跡出土遺物	209	第222區	溝列	335
第208區	241・242号住居跡	210	第223區	1号方形埴溝遺物分布図	336
第209區	241号住居跡出土遺物	210	第224區	1号方形埴溝遺	337
第210區	242号住居跡出土遺物	211	第225區	1号方形埴溝遺物断面図	338
第211區	243号住居跡	212	第226區	1号方形埴溝遺物出土遺物①	338
第212區	243号住居跡出土遺物	212	第227區	1号方形埴溝遺物出土遺物②	339
第213區	244号住居跡	213	第228區	円筒埴輪①	342
第214區	247号住居跡及び出土遺物	214	第229區	円筒埴輪②	343
第215區	248号住居跡及び出土遺物	215	第230區	円筒埴輪③	344
第216區	249号住居跡	215	第231區	円筒埴輪④	345
第217區	249号住居跡出土遺物	216	第232區	形象埴輪	346
第218區	250・251・252号住居跡	216	第233區	遺構外出土の縄文土器	349
第219區	250号住居跡出土遺物	217	第234區	遺構外出土の弥生土器	350
第220區	252号住居跡出土遺物	217	第235區	遺構外出土の石砌①	353
第221區	253号住居跡及び出土遺物	218	第236區	遺構外出土の石砌②	354
第222區	254号住居跡及び出土遺物	219	第237區	胎土分析資料	357
第223區	255号住居跡	219	第238區	群馬県内の主要な家産資料	359
第224區	255号住居跡出土遺物	220	第239區	築時位置図	359
第225區	住居跡出土鈿帯具	279	第240區	遺跡位置図	巻末
第226區	住居跡出土玉釧・骨石製模造品	279	第241區	遺跡位置図	巻末
第227區	住居跡出土鉄鎌	280			

写真図版目次

- PL.1 I~IV全景
- PL.2 1・3・4・6・7・8・10・11・13・14・17・18・19・20・21・22号住居跡
- PL.3 23・24・25・26・28・29・30・31・32A・B・33・35・37・38・39・41号住居跡
- PL.4 42A・B・43・45・47・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・61・62・74号住居跡、43号土壇
- PL.5 64・65・67・68・70・71・72・73・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85号住居跡
- PL.6 86・87・88・89・90・93・103・104・105・108・120・129・130号住居跡
- PL.7 131・132・140・141・142・143・144・146・149・150・151・152・153・154・155・156・158号住居跡
- PL.8 159・160・162・164・165・166・167・168・169・170・171・172・174・175・176・177号住居跡
- PL.9 181・182・183・184・185・188・190・193A・193B・194・195・196・198・199・200・201・204・205・206・209号住居跡
- PL.10 211・212・213・214・215・216・217・219・220・221・222・223・224・225・226・228・229~231号住居跡
- PL.11 232・233・234・235・236・237・238・239・240・241・242・243・247・248・249・250・251・252号住居跡
- PL.12 253・255号住居跡、1・3・6・7・8・10・11A・11B・13・14号掘立柱建築遺構
- PL.13 方形周溝墓、2・3・4・5号溝、柵列
- PL.14 2・6・7号井戸、2・4・10・14・20・21・22・23・24・25・26・30・31号土壇
- PL.15 1・6・8・13・31・36・38・49・51・55・59・68・77号住居跡カマド
- PL.16 79・80・84・90・104・143・164・175・185・190・193・200・220・233・239号住居跡カマド
- PL.17 1・6・8号住居跡出土遺物
- PL.18 11・13・17号住居跡出土遺物
- PL.19 19・21・23・24・25号住居跡出土遺物
- PL.20 26・28号住居跡出土遺物
- PL.21 28・29・32号住居跡
- PL.22 31・35・36・37・38・39・45号住居跡出土遺物
- PL.23 47・49号住居跡出土遺物
- PL.24 51・52・53・54・55号住居跡出土遺物
- PL.25 55・56・58・59号住居跡出土遺物
- PL.26 59・65・73・76号住居跡出土遺物
- PL.27 68・78・79・83号住居跡出土遺物
- PL.28 84・86・87・88号住居跡出土遺物
- PL.29 89・90・105・120・129・130・131・132号住居跡出土遺物
- PL.30 142・144・145・155・156・162・163・164・165・166号住居跡出土遺物

- PL.31 169・171・174・175・176・178・181・182・183号住居跡出土遺物
- PL.32 185号住居跡出土遺物
- PL.33 187・188・196・198・199・200・210号住居跡出土遺物
- PL.34 204・209・211・212・214・215号住居跡出土遺物
- PL.35 216・217・219・202号住居跡出土遺物
- PL.36 223・225・226・230・232・233号住居跡出土遺物
- PL.37 235・237・239・241・242・243・247号住居跡出土遺物
- PL.38 253・255号住居跡出土遺物
- PL.39 住居跡出土鈎帶具、石製模造品、紡錘車、土製凹板、鉄製品
- PL.40 住居跡出土砥石
- PL.41 住居跡出土土錘
- PL.42 方形周溝墓出土遺物
- PL.43 土壇・溝出土遺物
- PL.44 土壇出土錢貨・紡錘車拡大写真
- PL.45 縄文・弥生土器
- PL.46 凹筒埴輪
- PL.47 凹筒埴輪
- PL.48 凹筒埴輪
- PL.49 埴輪部分拡大 形象埴輪
- PL.50 石 器
- PL.51 刻書土器
- PL.52 墨書土器

第1章 発掘調査に至る経過と調査の概要

上武道路は、佐波郡境町の東北部、三ッ木、西今井地区では、蛇行しながらほぼ東南方向に流れる早川に沿って計画された。そして、上武道路の建設に先立ってまず早川部分の河川改修工事を優先させることになった。早川河川改修部分と接する上武道路部分も同時に調査することが進捗上も有利であるとの判断から、昭和50年7月に西今井地区から開始された。そして、そこから下流に向けて調査を進め、昭和52年度の河川改修工事に支障を来さないような調査工程が組まれた。

調査区域は、長さ370m、幅約85mで、その内約45mが河川改修部分である。当初、西今井地区から逐次南下する方式で調査を進めたものの、西今井地区では、遺跡が沖積土中にあり、その検出や精査に時間を要することが判明したため、急拠51年度からは、下流側の三ッ木部分から上流側に向けても開始し、進捗を図ることになった。従って、三ッ木遺跡の調査は早川河川改修との関連で急拠調査団が組織されて対応することになったものである。

三ッ木遺跡は、佐波郡境町大字三ッ木地区にあり、小字名は字堂前・自光坊である。共に「寺」に関連する地名であることから、それらの遺構検出も予測されたが、その実態は認められなかった。

調査は昭和51年4月から開始されたが、その内上武道にかかる部分に関するものを抽出すると下のようである。

項目	内容
所在地	佐波郡境町大字三ッ木字自光坊・堂前399他
調査期間	昭和51年4月5日～昭和51年12月25日
調査面積(上武道分)	10,600m ²
調査担当者	井上唯雄・須田 茂 (県文化財保護課)
調査協力	内田恵治 境町教育委員会

調査は南部の下流から始められ、下流から100mごとにⅠ～Ⅳ区に4区分し、Ⅱ区以降で早川改修分と併行して調査が行なわれた。

この内、調査の段階をいくつかに分けると、次のようである。

段階区分	調査期間	調査内容
試掘	昭 51.4.5～5.7	トレンチ設定による遺構分布の確認。
Ⅰ区	昭 51.5.8～7.7	古墳時代の集落が中心。
Ⅱ区	昭 51.6.16～8.20	古墳時代・奈良・平安時代集落・方形周溝墓。
Ⅲ区	昭 51.8.10～12.13	奈良・平安時代集落中心、掘立柱建物群。
Ⅳ区	昭 51.9.2～12.25	奈良・平安時代集落、掘立柱建物群。

調査の方法

1. 調査の区割り、建設省の打設になる中心杭を基準にしている。20m毎の中心杭をFラインとする4mメッシュの開放トラバースを組んだ。その方向は、磁北から36°56'西にふれたもので、I区の台地南端部の杭を起点としている。
2. 調査の区域を100m毎に区切って、南からI区～IV区とした。従って、各区は25に細分されることになる。そして、幅のひろがりアルファベットで、長さを算用数字で呼称することにした。グリッドの呼称は南方基準点をもってF-5のように呼称することとした。
3. 遺構番号は発見順に付すが、遺構の重複が認められる場合は、現地の所見で新しい時期のものに若い番号を与えている。
4. 各遺構の実測は原則として1:20を基準とするが、他に状況に応じて1:10、1:40のものも含んでいる。1:40は地層断面の一部等である。

三ッ木遺跡発掘調査進行表

調査区	調査工程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月			
I区	準備・トレンチ設定 トレンチ調査 表土削・遺構確認 遺構調査 実測 写真											
II区	準備・トレンチ設定 トレンチ調査 表土削・遺構確認 遺構調査 実測 写真											
III区	準備・トレンチ設定 トレンチ調査 表土削・遺構確認 遺構調査 実測 写真											
IV区	準備・トレンチ設定 トレンチ調査 表土削・遺構確認 遺構調査 実測 写真											

第II章 遺跡の立地と地理的環境

三ツ木遺跡が所在する台地は、大きくみると関東平野に組み込まれる低地部との境に位置している。この台地は赤城山の南から東にかけて中小河川で分断された形をみせている。特に大間々町付近を扇頂とする大間々扇状地の扇端部には伊勢崎、濁名、木崎、太田などの台地を並列させている。

三ツ木遺跡はこの中の木崎台地の西側の小台地上にある。大間々扇状地は早川を境として、以西は桐原面以東を載深面と呼称している。三ツ木は載深面に属しており桐原面より形成時期は新しいとされる。その基盤は扇状地礫層で、その上に上部関東ローム層がのる。西に隣接する濁名台地は桐原面の南端部にあたり、中部ローム層以上をのせている。又東側の木崎台地は砂丘を基盤とし中部ローム層をのせる邑楽台地の西端に相当する。この周辺の台地には40m前後の等高線が東西に走っており、全体に北から南にかけて緩い傾斜面を呈している。

これら扇端部の低台地上は古くから伏流水が湧出していたこともあって、多くの遺跡が存在している。遺跡の周辺の湧水は大間々扇状地端部と沖積低地の境目から湧き出すもので、それを起源として小さな谷地を形成していることも多い。

周辺の川筋をみると、南を流れる広瀬川とそれが往く利根川の主流が東西方向に流れ、それに向かっていくつかの河川が注いでいる。旧利根川が最も東流したとされる広瀬川は、伊勢崎台地の西を限り、そこから東南流して境町米岡地内で利根川に合流する。濁名台地は西に粕川、東に早川が流れる幅1.5kmほどの南にのびる台地であるがその中は湧水起源の小沖積地で更に二つに分断される。

遺跡のある地域はすぐ東側を流れる早川や西から南へかけての粕川の氾濫により開析されたこととみられ、その開析低地は水田として利用され、台地上は主に畑地として利用されてきている。しかし、この部分における水田と畑地の比高差は1mほどで、むしろ微高地と呼称の方がふさわしいかもしれない。

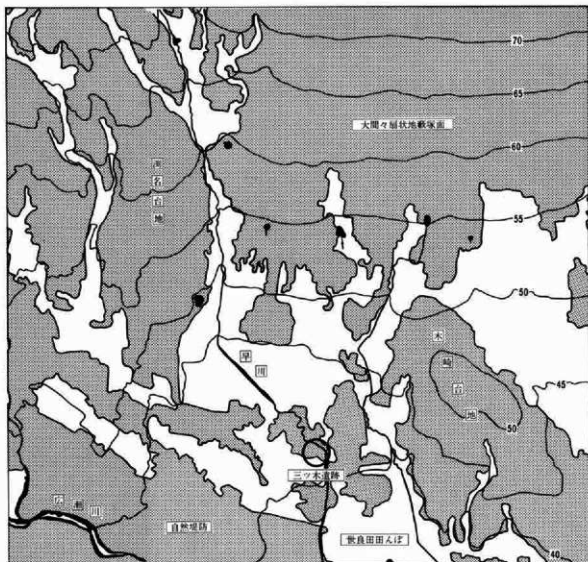
三ツ木遺跡における地質は主として前述の如く洪積台地で関東ローム層が中心であるが、部分的にはこのローム層が途切れて沖積土が堆積し、河流に分断されたことを物語っている。更に遺構の在り方をみると、河流により半分削られたものもある事から、過去において河川の氾濫がしばしばあり、地形を変化させていたことが推察された。

調査期間中もしばしば経験したが、幅5～6mの早川が一時的にまとまった雨量があるとすぐに橋上冠水するような状況があり、しかも複雑な蛇行の状況からすると相当なあばれ川であったことが容易に推察された。更に、境町市街地から尾島町の北部にかけて標高40m内外の低地が続いており、広瀬川(旧利根川)、粕川が直に濁名台地の南を流れた可能性も推測される。その観点からすれば、沖積地はかなり地形的に変化を受けており、複雑な様相を呈していたことが考えられる。

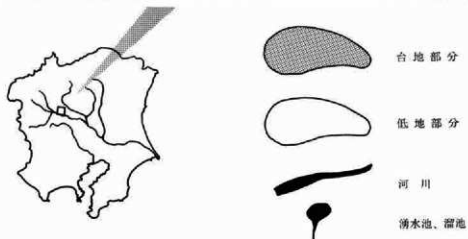
上武道路はこの濁名台地の先端をよこぎることになったために地形的にも洪積台地、沖積地の境界線を通り遺構の様相も変化に富んでおり調査が困難を極めた面もある。三ツ木遺跡は全長400m弱にも及び、すぐ北に続く西今井遺跡と合わせると1kmほどにも達する広大なものであった。その範囲は、路線よりかなり広がる様相がみられ、早川右岸台地いっばいに展開するものとみられた。

(注)

1 周辺地形の分類については時厚純夫・池登健「赤城山南麓の開発と遺構〈女型〉」(『URBAN KUBOTA』19 久保田鉄工株式会社 1981) 所載の地形区分図(図登欄、地形一沢口宏)を参照させて頂いた。



(1:50,000)



第1図 遺跡周辺地形図

第三章 周辺の歴史的環境

三ッ木遺跡の周辺の地形は大別して粕川、早川、石田川の川筋を境にして4つに分けられる。更に、それぞれの区域が扇状地としての台地と流域を中心とした低湿地に分けることができ、それぞれの歴史的環境に特色をみせている。

(1) 広瀬川（古利根川流路）以西

伊勢崎市街の西を西北から南東方向によぎる広瀬川は、古くは利根川の流路として一時的に機能していたといわれている。従って、広瀬川以西の地域には遺跡が極端に少ない傾向がある。これは利根川の上流では前橋市田口町付近からみられる傾向で、利根川が最も東に寄ったラインが広瀬川だとする説を裏づけている伊勢崎市西部でもこの傾向は明らかでほとんど原始・古代に属する遺跡は認められない。

ただ全体的に川の流路を追跡してみると、伊勢崎市連取町地内で広瀬川は伊勢崎市街に突き当たるが、一時的には現在の市街地を南東方向に横切り、下榑木地内で現在の粕川に合流し、いっきに東武伊勢崎線に沿って大間々扇状地の扇端部を洗い流したのではないと思われる。これは下流の境町の北側、尾島町世良田の「世良田田んぼ」を流した可能性が遺跡の面で裏づけられることからの推察である。

(2) 広瀬川～粕川流域（伊勢崎台地）

伊勢崎市街地から粕川・広瀬川の合流点までの部分である。市街地北部の安塚町付近は標高70mほどあり台地先端部では45mほどになるから、全体としてはかなり南面する傾斜を呈しているといえる。この部分の遺跡の多くは広瀬川沿いに集中する傾向にある。安塚町のお富士山古墳から茂呂町の古墳群へつづく遺跡は主として古墳時代以降であり、他の時代のものはお富士山古墳周辺の広瀬川自然堤防上にある弥生期の集落跡等が注目される程度である。

古墳はお富士山古墳を除けばほとんどが後期古墳であり、小円墳が多い。その他には、^{9,10,11}保泉部落の西側で採土中に検出された保泉遺跡がある。時期的には石田川式土器を伴うものであるが、おそらく流域の低湿地を開拓した人々の集落であろう。遺跡はそうした低湿地を控えた台地や微高地上にあるとみられるが、この地域の調査はほとんど実施されていないのが実情で今後の解明が待たれる。

(3) 粕川～早川流域（濁名台地）

田佐位郡佐位郷、濁名郷に属する部分とみられる地域で、^{12,13,14}大間々扇状地の扇端にあたる。伊勢崎市街地の東部八寸あたりから早川までの台地幅は2kmほどであるが、その中央に天ヶ池起源の中川という小流が、ほぼ中央を二分する形で南流する。

この濁名台地は古くから安定した生活の場であったことが推測され、かなり多岐にわたる遺跡が、数多く発見されている。^{15,16,17}豊城町には前期旧石器が出土した可能性をもつ権現山遺跡や、6世紀以降の古墳群がある。これは八寸あたりまでのびてかなり広大な古墳の集中がみられたが、ほとんど平夷されてしまっている。その古墳の中で注目されるのが、伊与久の雷電神社古墳である。横穴式石室の形状や構造、使用された角閃石安山岩からみて前方後円墳としては最終末期に該当するこの古墳は、その後すぐ北側につくられる十三宝塚遺跡との関係が注目される。尚、この周辺には6世紀後半から7世紀にかけての集落の存在も確認されている。

更に古墳では上武士・下武士の古墳集中地区が注目される。上毛古墳総覧によれば、前方後円墳5基、円墳102基が存在したとされるこの古墳群は今も数基のわずかな土の高まりを確認できる程度になってしまっ

た。昭和41年以来数次に亘る調査でようやく10数基の存在が明らかにされたが、その全貌は知る由もない。この内主墳とみられる天神山古墳（岡志村30号墳）は前方部を北北西に向けた前方後円墳で、往時は全長が127m、高さ5.5mあったという。ただ、かなり平夷が進んでいたため主体部は不明で、埴輪類から6世紀末頃のものとみられている。この上武士の地域の東には下武士の古墳群が連続しているが、その配置はやや粗である。

律令時代になると、伊与久に所在する十三宝塚遺跡が注目される。伊勢崎佐波工業団地内に発見されたこの遺跡は東面する低台地上に東西150m、南北300mほどの範囲に全面的に配された溝、櫓列で囲まれた中核部、それに付随する3群の掘立柱群の検出、そこから出土する奈良三彩陶、郷名瓦、多量の墨書土器等から佐位郡断ないしそれに関連する遺跡とみられている。特に台形に櫓列で囲まれた部分には南に門、その正面（区画中央）に基壇建物（瓦葺）、その西南に地覆石をめぐる正方形基壇があり、西から北は浅い溝で画している。更に、東にある3群の掘立群は建替も含めると60棟近くにも及ぶもので、意図的な配置がみられるものである。

そのすぐ東の狭長な低湿地を隔てた東側の台地は濁名部落がのる洪積台地である。上濁名古墳群（前方後円墳4基、円墳44基）の内5基の調査がなされているが、他の大部分については明らかでない。この群の主墳とみられる雙見山古墳は、岡重巖「伊勢崎風土記」（1798年）にその記載がみられる。全長80m、高さ6～8mの周塼をもつ前方後円墳である。内部主体は後の確認で椽名山二ヶ岳の角閃石安山岩を使用している。横穴式石室の規模は不明だが、妾女小学校の西にある日露戦争戦没者顕彰碑の踏石となっているのが、天井石であるとされるが、その大きさからするとかなり大きかったとみられる。出土品は刀剣、装身具、鎌、仏具土器等であるということが明確ではない。他には埴輪の出土することがはっきりしている。

この他には、国学院大学で調査した古墳があるが、その第1号墳には袖無型石室から、重圏文鏡を含む直刀5振、メノウ玉類、耳環4、馬具、刀子等を出土した。これは7世紀ごろのものと考えられ、この一群も古い時期の古墳は含まないようである。

濁名は律令時代は濁名郷であったことは疑いをいれず、現在上と下に分かれている台地部全てを含んだものと推定される。十三宝塚遺跡の郷名瓦に「濁」の正字、逆字のものがあり、濁名郷からもたらされたものであることは間違いない。その主要地域は濁名部落の南部の低地を臨む台地先端部にあったとみられる。上武道や境町のほ場整備地区で調査した部分では延喜式内社「大國神社」を中心に奈良～平安時代に及ぶ大集落が調査され、また大量の墨書土器を出土する大きい溝等も検出されている。佐位郡の「佐位郷^{ウツノ}戸^コ前^ノ部^ノ黒麻呂、郡司大領外檢前部君賀美麻呂」（正倉院古製銘）（749年）や、上毛野佐位朝臣性を賜わった「檢前君老刀自^{ウツノノ}」^{ウツノノ}、「掌膳采女佐位朝臣老刀自^{ウツノノ}」を上野国国造とするなどの記事からすると、この地域を支配していたのは檢前君一族（上毛野氏一族）であったことがうかがわれる。

律令朝における佐位郡八郷（佐位、名橋、岸新、反治、雀部、美呂、濁名、駅家）の中では、佐位郷、濁名郷が共に有力な郷で、濁名台地を二分して東西に対峙していたものと推定される。

濁名台地の先端部の矢島、及び西今井、三ツ木の立地する台地は洪積台地が周辺を削られて中洲状に残った部分であろうと思われる。この地形の形成の原因として古利根川の水が粕川に流れ込み、一気に東武伊勢崎線に沿って南東方面に押し出し、境町北部の世良田の低地に流れたためとみられる。特に西今井・三ツ木遺跡にみられるローム層の分断やそれを埋めた黒色土中への集落の拡大等をみると古墳時代から平安時代にかけては、かなり不安定な土地の状況をみせていたものと考えられる。なお、低地部には遺跡はほとんどみられない。

(4) 早川以東（木崎台地）

小角田部落、中江田部落、下江田部落の先端を境に低地と台地に分けられる。台地部は湖名台地と同様に古くから開けていたことは遺跡が立証している。中江田の台地は西の水田地帯とは3～5mの比高差をもっているが、そこからは先土器時代の遺跡からはじまって営々と続く人々の歴史の跡を知ることができる。

特に台地部の大開々扇状地扇端部の湧水を起源とする低湿地の周辺を中心として各時期の遺構が検出されている。標高60mラインがそのほぼ境界で、人々の生活の舞台も大きく二分される傾向にある。原始・古代における様相は湖名台地と大きく異なることはないが、この地域が脚光をあびるのは中世からである。

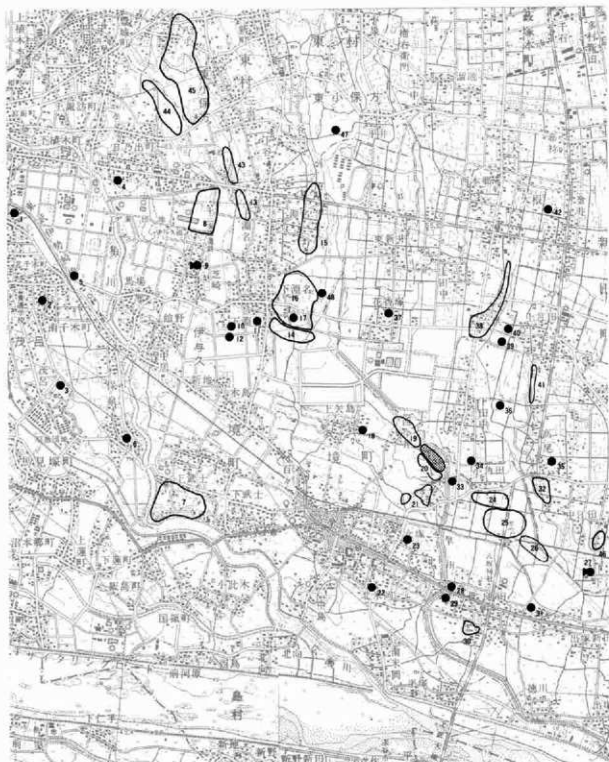
それは言うまでもなく、尾島町の世良田周辺を中心とした地域である。新田義重を中心としてひろげる新田荘と長楽寺を中心とする文化は、この地域を特色付けるものであった。長楽寺は新田義季の開基で開山は栄西の高弟栄朝である。台密、臨済二宗を兼ねたこの名刹は末寺900をかかえたという。また、新田氏関係の文書も数多く「長楽寺文書」5巻、130通は鎌倉から室町時代の数少ない基本資料である。

この他、長楽寺周辺は多くの遺跡が分布し、法照禪師月船瑠璃塔所ならびに善光庵跡は五世の死後、その弟子牧翁一か塔を興したもので、偶然発見されたこの遺跡は禪宗僧侶の埋葬型式、菩提尊を立証した貴重な遺跡である。

これらの各地区はそれぞれ地形に左右されながら多くの人々の歴史の跡をとどめているが、その実態はまだ不明な部分が多い。

周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	概 要	文 献 等
1	八幡宮境内古墳	伊勢崎市今泉町字本郷1102	径40m、高さ22.5mの円墳。八幡宮の社殿がのる。	
2	南千木古墳群	伊勢崎市茂呂町字河俣院	数基の円墳。現在は1基が主体部がわかるのみで他は平墳。	
3	羽黒台古墳群	伊勢崎市茂呂町字羽黒台	広瀬川左岸の古墳群。保泉と茂呂の境の道端。大部分平墳。	
4	蛇塚古墳	伊勢崎市日乃出町	横穴式石室。金環、玉類、埴輪馬、人物埴輪等出土。順進第2小学校に移築。周辺に土師器包蔵地あり。	埴輪は中央公民館蔵
5	南千木包蔵地	伊勢崎市南千木町下赤沼	船川右岸の低古地上にある千木-伊勢久道路脇。土師器が出土。	伊勢崎第1中学校保管
6	保泉遺跡	佐波郡地町保泉	船川右岸の台地上にある古墳時代前期の集落跡。地町教委調査。	「地町古代遺跡」地町役場 昭和53年
7	武士古墳群	佐波郡地町上武士、下武士	前方後円墳5、円墳45基ほどあったといわれる。数次に亘る調査を実施。	「上武士の古墳」地町教委 昭和43年 「下武士遺跡」地町教委 昭和53年 「武士遺跡」地町教委 昭和56年
8	十三宝塚遺跡	佐波郡地町伊勢久	佐波郡南関係遺構。昭和51～56年の6次に亘る調査を実施。三彩陶、甕瓦等出土。	「十三宝塚遺跡発掘調査概報」I～III 地町教委 昭和50～52年 IV 地町教委 昭和56年
9	雷電神社古墳	佐波郡地町雷電裏	前方後円墳。横穴式石室が社殿下に開口。大刀、耳環が出土。7世紀代と思われる。	



第2図 周辺の遺跡 (1:50,000)

- 1八幡宮境内古墳 2南千木古墳群 3羽黒台古墳群 4蛇塚古墳 6保泉遺跡 7武士古墳群 8十三宝塚遺跡 9雷電神社古墳 10土橋遺跡第4地点 11土橋遺跡第3地点 12島海戸遺跡 13上河名遺跡 16下河名遺跡 15上河名古墳群 17大國神社 18上矢島遺跡 19西今井遺跡 20三ッ木遺跡 21西林遺跡 22北米岡遺跡 23女塚遺跡 24小角田前遺跡 25尾島工業団地遺跡 26歌舞伎遺跡 27矢伏神社古墳 28世食田上新田遺跡 29新田稲跡 30長栄寺 31二休地蔵古墳 32中江田遺跡 33三ッ木地蔵遺跡 34中道遺跡 36谷津遺跡 39西田遺跡 40江田稲跡 42矢大原遺跡 43三宅入遺跡 45伊勢崎重工業団地遺跡 47鶴巻古墳 48寺家の遺跡

No	遺跡名	所在地	概要	文献等
10	土橋・三ッ古屋遺跡	佐波郡境町下河名土橋	平安時代の溝検出。墨書土器出土。古墳。	「土橋、三ッ古屋、出口、島海戸遺跡発掘調査概要」境町教委 昭和52
11	出口遺跡	佐波郡境町下河名出口	住居跡57軒、祭祀遺構、井戸等検出。	同上
12	島海戸遺跡	佐波郡境町下河名島海戸	古墳時代集落を中心とした遺跡。鎌名山二ッ岳火山灰層(FA)下の住居跡が注目される。	
13	上河名遺跡	佐波郡境町上河名字橋町	平安水田跡。古墳時代後期集落跡。昭和54年度埋文事業団調査。	
14	下河名遺跡	佐波郡境町下河名字桜木新屋敷	古墳、平安時代集落跡、大溝の3地点。墨書土器多数出土。	「下河名遺跡発掘調査概要」境町教委 昭和53年
15	上河名古墳群及び包蔵地	佐波郡境町上河名字願吉	銀杏地区に群集墳あり。古墳～平安時代の集落跡。	「上毛古墳探検」群馬県教委 昭和12年 「群馬県佐波郡栄女村上河名古墳発掘報告」国学院大学考古学会 「上代文化」18 昭和23年
16	下河名遺跡	佐波郡境町下河名神明地	古墳。古墳～平安時代の集落跡。館跡。14に北接。	「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概要V」群馬県教委 昭和51年
17	大國神社	佐波郡境町下河名	延喜式内社。檢前一族の祭祀場か。	「延喜式」
18	上矢島遺跡	佐波郡境町矢島字上矢島	は場整備関係の調査で一部集落跡を検出。	「上矢島遺跡発掘調査概要」境町教委 昭和54年
19	西今井遺跡	佐波郡境町西今井	上武道。早川河川改修に伴う発掘調査で奈良時代以降の集落跡を検出。南接地はは場整備関係の境町教委による調査。	「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概要IV」群馬県教委 昭和53年 「西今井・三ッ木遺跡調査概要」境町教委 昭和55年
20	三ッ木遺跡	佐波郡境町三ッ木自光坊	本報文所収。なお南接地は同遺跡名で境町教委が調査。	同上
21	西林遺跡	佐波郡境町三ッ木西林	古墳～平安時代の集落跡検出。境バイパス関連調査。	「西林遺跡第1次発掘調査概要」境町教委 昭和54年
22	北米岡遺跡	佐波郡境町北米岡257地	縄文～古墳時代包蔵地。金子規矩雄氏蔵岩版出土地。	「境町古代遺跡」境町役場 昭和53年
23	女塚遺跡	佐波郡境町女塚道西	群馬大学史学研究室で一部発掘。古墳時代末期の住居跡を検出。	同上
24	小角田前遺跡	新田郡尾島町世良田・小角田前	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の集落跡。古墳2基検出。	「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概要V」群馬県教委 昭和53年
25	尾島工業団地遺跡	新田郡尾島町世良田・小角田前	小角田前遺跡に続く集落跡。古墳群。企業局調査。	

第Ⅲ章 周辺の歴史的環境

26	歌舞伎遺跡	新田郡尾島町世良田歌舞伎	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の住居跡約200軒を検出。	「歌舞伎遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和57年
27	矢伏神社古墳	新田郡新田町下江田	前方後円墳。角四石安山岩使用石室。埴輪、大刀、玉部が出土。	出土品は東京国立博物館蔵
28	世良田上新田遺跡	新田郡尾島町世良田、上新田	土師器片出土。	遺物は世良田中保管
29	新田館跡	新田郡尾島町世良田、中	早川左岸台地上に存する龍待寺境内を中心とする面積3500m ² の方形給跡。	山崎一「群馬県古城景址の研究」上 昭和46年
30	長栄寺周辺遺跡	新田郡尾島町世良田東照宮西	中世墳墓群、文珠山古墳（前方後円墳）等多彩。	「長栄寺遺跡」尾島町教委 昭和53年、56年
31	二休地蔵古墳	新田郡尾島町世良田、下町	東武伊勢崎線世良田駅から田代高地上に続く古墳群のうちの一基。	
32	中江田遺跡	新田郡新田町中江田、原	通称「世良田田んぼ」の東側台地上にあり、先土器～平安時代の包蔵地。	
33	三ッ木越戸遺跡	佐波郡境町三ッ木字越戸	平安時代の集落跡。境バイパス工事に伴う調査。	「三ッ木越戸」群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和56年
34	中道遺跡	新田郡新田町下田中道	古墳～平安時代の集落跡。	
35	熊遺跡台帳	新田郡新田町高尾字大通付	縄文・平安時代の土器片散布。	
36	谷津遺跡	新田郡新田町上江田字谷津	古墳～平安時代の集落跡。掘出土。	
37	熊遺跡台帳	新田郡新田町花香塚	古墳～平安時代の土器片散布。	
38	熊遺跡台帳	新田郡新田町上田中字六供	古墳。その他縄文・古墳時代以降の土器片散布。	
39	西田遺跡	新田郡新田町上江田字西田	古墳・平安時代の集落跡。昭和50年調査。	
40	江田館跡	新田郡新田町上江田字西郷	江田行義の館跡といわれる。室町時代の土塁。壘が残存。県指定史跡。	山崎一「群馬県古城景址の研究」上 昭和46年
41	熊遺跡台帳	新田郡新田町上江田字西田谷津	古墳時代の土器片散布。	
42	矢大原遺跡	新田郡新田町大字大原	縄文時代集落跡。矢大原湧水池がある。	
43	三堂A遺跡	佐波郡東村小保方字三堂	古墳時代後期の集落跡。木製品出土。昭和56年埋文事業団調査。	
44	伊勢崎東流通団地遺跡	伊勢崎市日乃出町 佐波郡東村東小保方	古墳～平安時代の集落跡。埴輪墓、銅造遺構等を検出。	「伊勢崎・東流通団地遺跡」群馬県企業局 昭和57年
46	熊遺跡台帳	新田郡新田町中江田字本郷	奈良～平安時代の集落跡。瓦塔片出土。	
47	鶴巻古墳	佐波郡東村東小保方字鶴巻	角四石安山岩使用の横穴式石室	
48	寺家前遺跡	佐波郡境町下河名寺家前	昭和58年度境町教委調査。宋書土器出土。	「昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」境町教委 昭和59年

第IV章 遺跡の概要

三ツ木遺跡は前章で述べたように早川の蛇行部分にあたる右岸台地に立地する。調査は上武国道の路標部分について台地の南東縁から台地中央の窪み部分までを対象としている。なおこの窪み部分より北面側は西今井遺跡(第2図参照)として登録され、調査が実施されている。本遺跡の立地する台地の標高は現在40m前後を測るが、後世において削平の憂き目にあったようで、表土が薄く、従って遺構残存状態の不良ものが比較的多かった。又調査中央のIII区付近では地山が黒色粘質土であるため、覆土との区別が非常に困難で、遺構の検出作業に労を多くした。以上のような比較的劣悪な条件下ではあったが、調査の結果調査区のほぼ全面に亘って遺構が密集し、予想を越える多数の遺構を検出した。

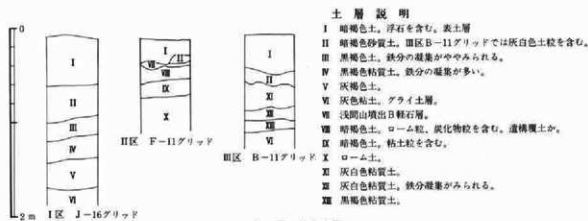
検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建築遺構、土塋、方形周溝墓、溝、井戸、櫓列で、時期は縄文時代～中世に亘る。竪穴住居跡の大部分は古墳時代後期～平安時代に属し、方形周溝墓は古墳時代初頭期のもので、その他の掘立柱建築遺構、土塋、溝、井戸等は時期の不明なものが多い。各遺構の検出数は竪穴住居跡199軒、掘立柱建築遺構9棟(10棟の可能性あり)、土塋72基、井戸6基、方形周溝墓1基、櫓列1列、溝11条である。なお早川河川改修分を含めると、全域で竪穴住居跡235軒、掘立柱建築遺構12棟、土塋81基、井戸7基、方形周溝墓1基、櫓列、溝12条となる。

遺構の分布状況は調査区中央部の窪み部分を境にして北西部と南東部に二分される様相を呈する。時期毎あるいは遺構毎の分布の特徴については第VI章で述べる。

検出遺構の種類と総数は以上のものであったが、調査区の東側は早川の浸食崖、又北西端と南東端は黒色泥炭質土を地山としており、遺構の検出がほとんどできなかった。遺跡全体の範囲を想定した場合、その分布の様相から早川崖の方向に広がっていた事は明らかである。又北西に隣接する西今井遺跡、南西に隣接する遺跡(「西今井・三ツ木遺跡調査概報」境町教育委員会1980)を含めて考えれば本遺跡の立地する台地のほぼ全面が遺跡の様相を呈する事にならう。

基本土層

本遺跡における地層は以下の図のとおりである。



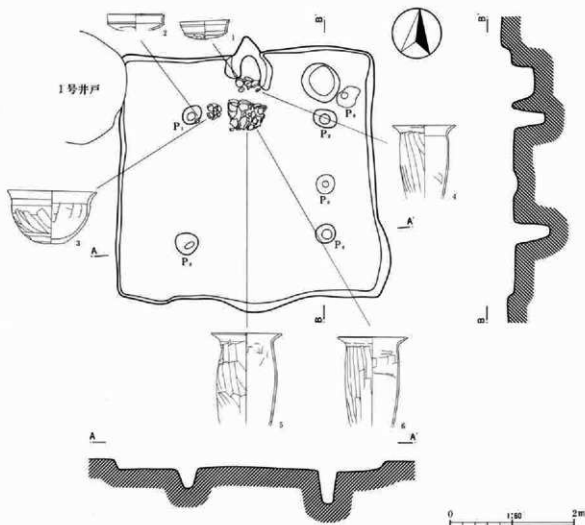
第3図 基本土層

第V章 検出された遺構と遺物

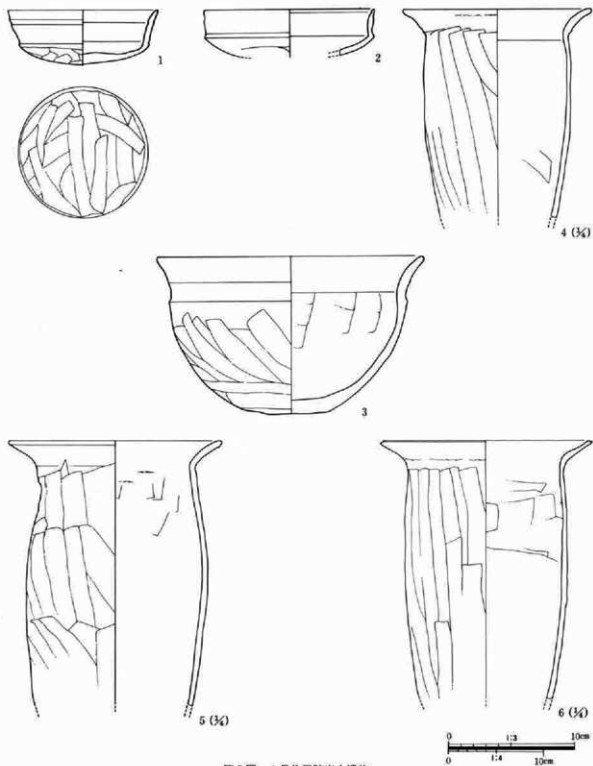
1 竪穴住居跡

1号住居跡 (第4図, PL.2)

I区A-12, B-11・12, C-12グリッドに位置する。平面は南辺の歪む正方形。規模は4.17×4.40m、面積16.46㎡を測る。主軸方向はN-10°-Wを指す。壁は外傾し、確認壁高は20~5cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや高い。カマドは北壁中央に構築され、残存状態は良好。そで部は壁内へ60cm張り出し、燃焼部も壁内にある。煙道部は天井の一部を残し、急角度で立ち上がって壁外25cm程で開口している。規模は長さ85cm、幅76cm、煙道開口部径は10cmを測る。軸方向はN-13°-W。貯蔵穴は北東コーナー部で検出された。平面は楕円形で、規模64×55cm、深さ37cmを測る。ピットは6基で、規模はP₁径34cm深さ



第4図 1号住居跡

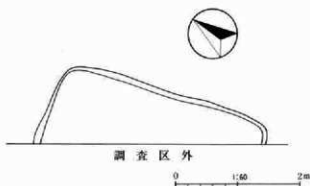


第5図 1号住居跡出土遺物

39cm, P₂径38×27cm深さ53cm, P₃径36cm深さ32cm, P₄径34cm深さ55cm, P₅径31cm深さ8cm, P₆径39×27cm深さ26cmを測る。柱間距離はP₁-P₂2.15m, P₃-P₄2.20m, P₁-P₂2.04m, P₂-P₄1.83mを測る。

遺物は杯、鉢、瓦が出土しており、カマド内及び焚口部分に集中する。

重複遺構は1号井戸跡で、わずかに接する程度であるため新旧関係は不明である。



第6図 3号住居跡

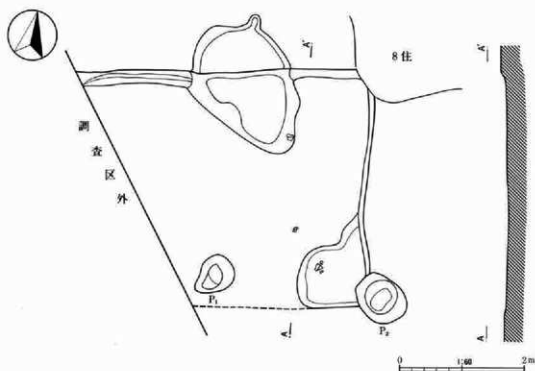
2号住居跡 (欠番)

3号住居跡 (第6図、PL.2)

I区A-12グリッドの調査区の境界にかかって検出された。平面は長方形かと思われる。規模は不明。主軸方向は東壁でN-18°-Wを指す。カマド、貯蔵穴等は不明。壁は外傾し、確認壁高30cmを測る。床面は地山ローム土を利用し、平坦。覆土はレンズ状の堆積で、ロームブロックを少量含む黄褐色土及び黒褐色土を主とする。出土遺物はない。

4号住居跡 (第7図、PL.2)

I区A-13・14グリッドに位置する。平面は長方形を呈する。規模は3.77×(4.80以上)mを測る。調査区境界にかかり南西部は不明。主軸方向はN-11°-Wを指す。壁はほとんど残存せず、土層断面での壁高は16cmを測る。床面は凹凸が激しく、周辺部は軟質である。カマドは明確ではない。北壁中央に浅い皿状の掘り込みがあり、その性格は不明である。規模は2.3×1.5mを測る。ピットは南壁際のほぼ中央と南東コーナー部壁外に検出された。P₁は不整形円形で、規模は57×55cm、深さ24cmを測る。P₂は規模84.0×67.0cm、深さ47cmを測る。又南東コーナー部には1.10×1.00m程の浅い掘り込みが検出されたが、貯蔵穴あるいは掘り込みの可能性が考えられ、その性格については特定できない。周溝は東壁の北半部のみ検出され、規模は幅20cm、



第7図 4号住居跡

深さ15~1cmを測る。覆土はロームブロックを多く含む黄褐色土、黒褐色土が堆積する。

遺物は床面上より裏と思われる土器片数点が、又円筒埴輪片、灰釉陶器片、スラグ等が覆土より出土している。

重複遺構は8号住居跡で、新旧関係は不明である。

5号住居跡 (欠番)

6号住居跡 (第8図、PL 2)

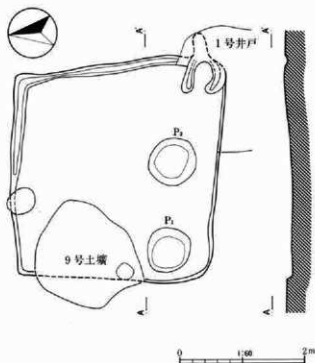
I区A-12・13、B-12・13グリッドに位置する。平面は南辺の長い歪んだ方形を呈し、規模は3.60×3.38mで、面積は11.21㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高13~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部は硬質で、周辺部は凹凸が多く軟質である。カマドは東壁南部に構築される。両所で部、燃焼部が残存し、煙道部は不明である。規模は幅70cmを測る。そこで部は壁内に50cm程張り出す。本住居跡に伴うと思われるピットは2基で、南壁にそってほぼ中央と西寄りの位置で検出された。規模はP₁径70cm深さ53cm、P₂径80cm深さ24.5cmを測る。これらは位置関係や規模から柱穴とは考えにくく、特にP₁はむしろ貯蔵穴の可能性が考えられよう。周溝は東壁及び北壁の東半部分にそって検出された。幅22~9cm、深さ6~2cmを測る。覆土はブロック状の堆積状態を示し、炭火物粒及びロームブロックを含む暗褐色砂質土が主に堆積する。

遺物は大形の裏片がカマド内より、又須恵器裏片、杯片が覆土より出土している。古墳時代後期と平安時代の土器が混在している。

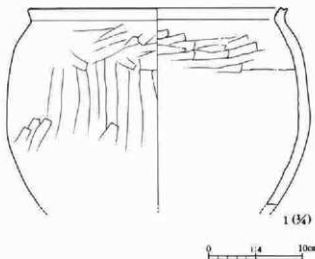
重複遺構は1号井戸、9号土壌で、新旧関係はカマドの存在より1号井戸→6号住で、9号土壌については不明である。なお北壁と

西壁にピットが2基検出されたが覆土の相違から本住居跡には伴わないものと思われる。

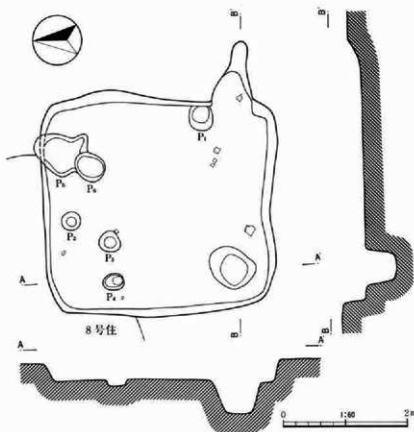
時期はカマド出土遺物から平安時代と推定される。



第8図 6号住居跡



第9図 6号住居跡出土遺物



第10図 7号住居跡

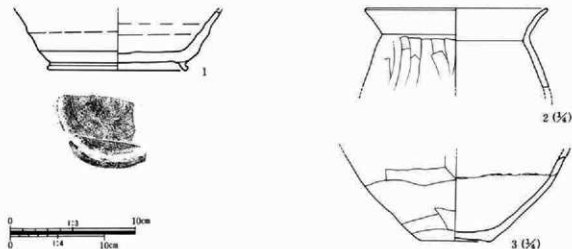
7号住居跡(第10図、PL. 2)

I区B-13、C-13グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は3.55×3.80m、面積12.67㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はやや外傾気味に立ち上がり、確認壁高は36~9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部分がやや高い。カマドは東壁の南端に構築され、そでの基部、燃焼部、煙道部が残存する。長さ1.1m幅0.6mを測る。うち煙道部長は50cm程である。軸方向はN-68°-Eを指す。残存状態からそでは壁内に若干張り出し、燃焼部は壁外に張り出すものと思われる。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。平面は

不整楕円形で、規模は74×60cm深さ54cmを測る。ピットは6基で、規模はP₁径38cm深さ8cm、P₂径30cm深さ23.5cm、P₃径35cm深さ21.5cm、P₄径25.4cm深さ12cm、P₅は径120cm深さ13.5cm、P₆は径50.4cm深さ18cmを測る。覆土はレンズ状堆積でロームブロックを含む暗褐色砂質土を主とする。

遺物はカマド内から壘片、床面上より壘片、覆土より須恵器杯、土錘、埴輪が出土している。時期は平安時代初頭のものとして推定される。

重複遺構は8号住居跡で、土層観察より新旧関係は8号住→7号住である。

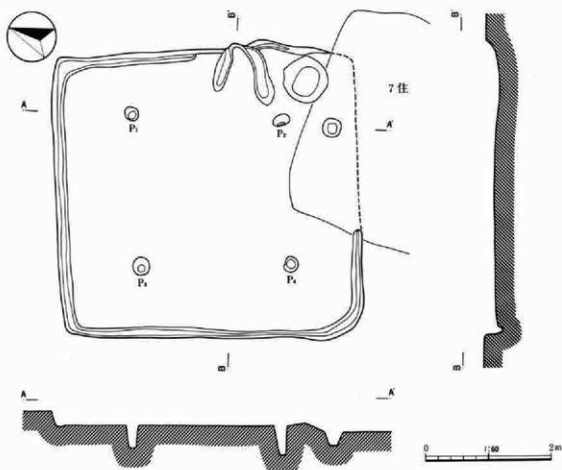


第11図 7号住居跡出土遺物

8号住居跡(第12図、PL.2)

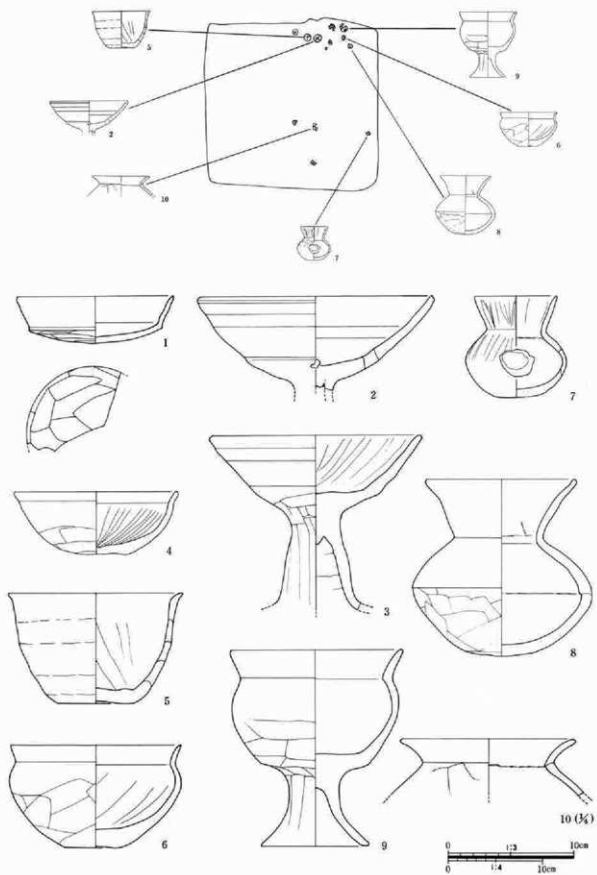
I区B-14、C-14グリッドに位置する。平面は正方形で、規模は4.50×4.85m、面積21.98㎡を測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁は残存状態良好で、ほぼ直立して立ち上がり、確認壁高は34-16cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや高くなっているが、全体に平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りの位置に構築される。そこで部、燃焼部が残し、煙道部については不明である。長さ1m、幅1mを測る。そこで部は大きく壁内に張り出している。又燃焼部中央で左右1対2個体の高杯が倒立の状態で検出された。これはおそらく支脚あるいは補強材として用いられたものかと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部のカマド右脇から検出された。平面は垂んだ楕円形を呈し、規模は75×66cm深さ30cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径20cm深さ36cm、P₂径26×18cm深さ47cm、P₃径28cm深さ38cm、P₄径25cm深さ47cmを測る。位置関係から以上4基は主柱穴と考えられる。なお柱間距離はP₁-P₂2.4m、P₂-P₃2.4m、P₁-P₃2.4m、P₂-P₄2.2mを測る。周溝はほぼ全周すると思われ、規模は幅20-10cm、深さ10-4cmを測る。覆土はレンズ状堆積を示し、ローム粒、軽石を含む暗褐色砂質土を主とする。

遺物は杯、高杯、小形壺、甕、埴、鉢、台付鉢等が出土している。出土遺物のうちほとんどは古墳時代後期に属するものである。



第12図 8号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

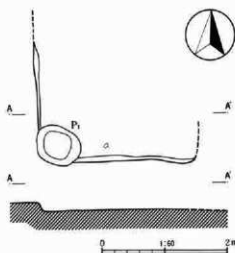


第13図 8号住居跡出土遺物及び分布図

遺物出土状況はカマド及びその周辺部分に集中しており、又その残存状態が比較的良好である事から、本住居跡廃絶前の状態か、あるいはその時点で捨てられたものと考えられよう。時間的には高杯や和京式の形態を残し又塔が存在する事等から本遺跡で検出された鬼高期の中でも最古段階に位置付けるのが妥当であろう。

重複遺構は7号住居跡、17号住居跡で、新田関係は土層断面観察より7号住→8号住である事が判明したが、17号住との関係は不明である。

時期は出土遺物や住居形態より古墳時代後期と思われる。



第14図 10号住居跡

9号住居跡（欠番）

10号住居跡（第14図、PL. 2）

I区C-12・13グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、北半部が削平されているため全形及び規模は不明である。南西コーナー部にピットが1基検出された。規模は70×60cm深さ38cmを測る。床面はローム土を利用しているが後世の攪乱が激しく、一面に荒れている。

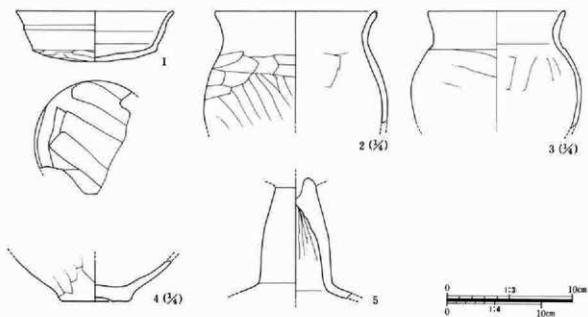
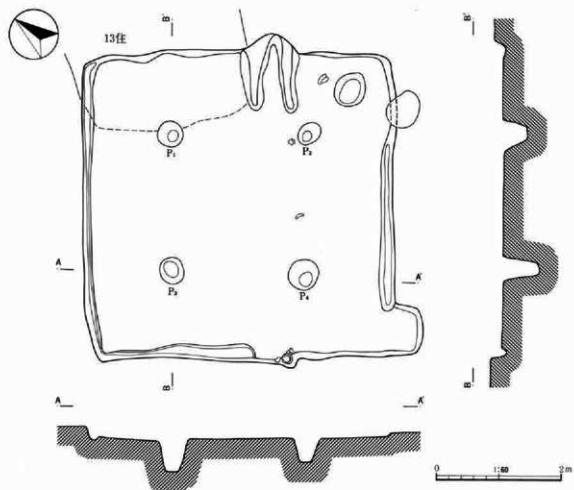
遺物は土鏝が2点出土している。時期は不明である。

11号住居跡（第15図、PL. 2）

I区D-11・12、E-11・12グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.88×4.95m、面積は24.16㎡を測る。主軸方向はN-58°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は28-6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、全体に平坦であるが、中央部はやや高く硬質である。カマドは東壁中央のやや南寄りに構築されており、そで部、燃焼部、煙道部の一部が残存する。規模は長さ1.23m幅0.9mを測る。そで部長さは85cmを測り、壁内に張り出す。燃焼部の平面規模は比較的狭小で、幅30cm前後である。煙道部は急角度で立ち上がるが、壁外にさほど張り出していない状態から煙道開口部（出口）は住居壁に比較的近いものと思われる。カマド軸方向はN-53°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部のカマド右脇から検出された。平面は楕円形を呈し、規模は55×47cm深さ28cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径40cm深さ38cm、P₂径37cm深さ36cm、P₃径42cm深さ59cm、P₄径49cm深さ38cmを測る。以上4基は位置関係や規模から主柱穴と考えられる。柱間距離はP₁-P₂2.13m、P₂-P₄2.25m、P₃-P₄2.14m、P₁-P₂2.10mを測る。又他に南壁東寄りに住居内に1基ずつピットが検出されたが、これらは後世攪乱によるものである。周溝は北壁と西壁北半及び南壁中央部に沿って検出され、規模は幅25-11cm深さ8-2cmを測る。又南壁西隅に76×45cmの規模をもつ張り出し部分が検出された。これは床面と同一レベルである事、この部分で周溝が切られる事から本住居跡に伴う施設と考えられる。覆土はブロック状の堆積状態を示し、上層に軽石、炭火物粒、焼土粒を含む黒褐色砂質土、下層にロームブロックを多量を含む黒褐色土が堆積する。

遺物は小形甕が西壁際、その他甕、杯、高杯、須臾器長頸壺の破片及び土鏝が床面と覆土下層より出土している。

重複遺構は13号住居跡で、新田関係は11号住→13号住である。



第15図 11号住居跡及び出土遺物

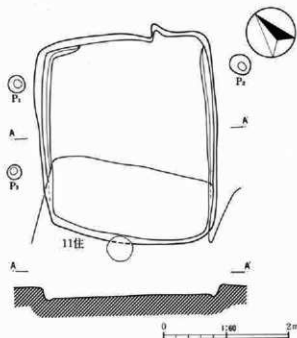
12号住居跡 (欠番)

13号住居跡 (第16図、PL. 2)

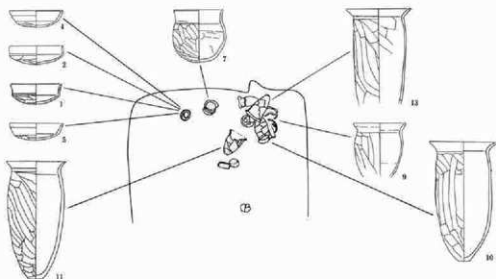
I区E-12グリッドに位置する。平面はやや縦長長方形で、規模は3.30×2.90m、面積8.84㎡を測る。主軸方向N-40°-Eを指す。壁は直立し確認壁高27~14cmを測る。床面はローム土で平坦である。カマドは北壁東寄りに構築される。長さ90cm前後を測る。そこで部が壁内に張り出し、煙道部は壁を若干削って立ち上がる。両所で部に裏を倒立させている。又カマド燃焼部に3個体の裏が潰れた状態で出土しており、これらはカマドに懸けてあったものか天井部構築材として用いられたものと思われる。ピットは住居外で3基検出されており、規模はP₁径22cm深さ17cm、P₂径35cm深さ28cm、P₃径23cm深さ39cmを測る。これらが柱穴かどうかは不明であるが、その位置関係より本住居跡に伴う可能性が強い。周溝は東西両壁に沿って検出され、規模は27~12cm深さ6~3cmを測る。

遺物は甕、杯がほとんどで、他に円礫2点がカマド前面の床より出土している。完形品が比較的多く、いずれもカマド及びその周辺より置き去られたと思われる状態で出土している。特に杯は北壁際西寄り部分で6個体が重ねられた所謂「入れ子」の状態で検出された。なおこの6個体のうち2個体は調査後所在不明となっている。床面直上出土の土器はすべて鬼高期のものである。

重複遺構は11号住居跡、14号住居跡、15号住居跡で、判明した新旧関係は11号住→13号住である。

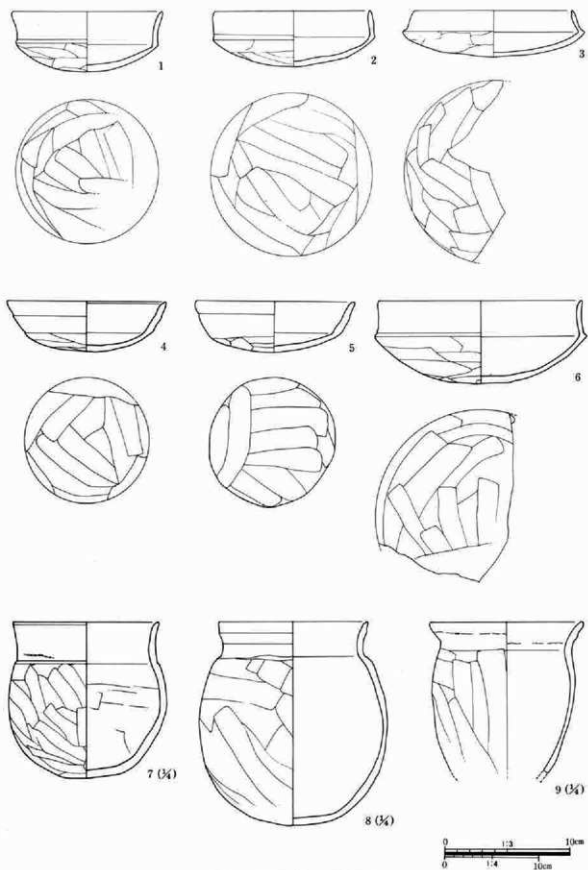


第16図 13号住居跡

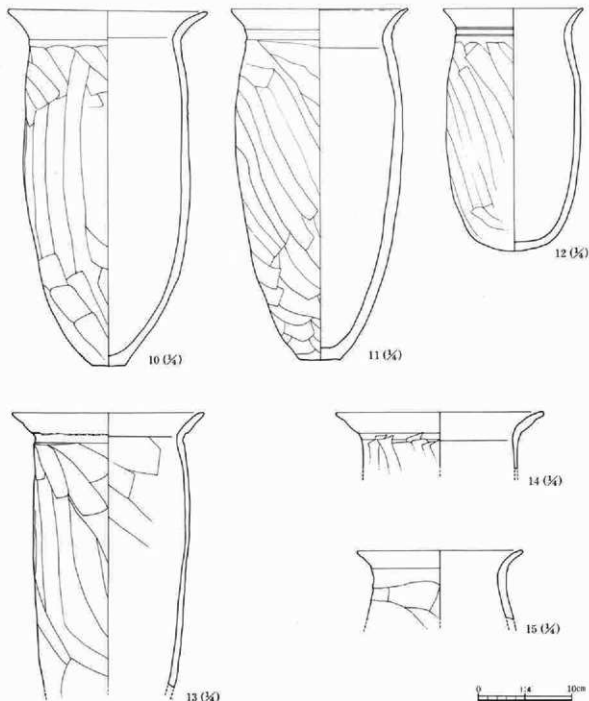


第17図 13号住居跡遺物分布図

第V章 検出された遺構と遺物



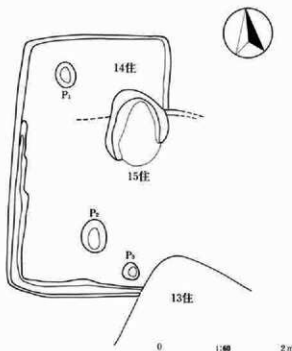
第18図 13号住居跡出土遺物(1)



第19図 13号住居跡出土遺物(2)

14号住居跡(第20図、PL.2)

1区E-12・13、F-13グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、東半については残存せず不明。規模は4.15×(2.20以上)mを測る。西壁の方向はN-6°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は14~2cmを測る。床面は地山のローム土で、中央部がやや高い。カマドは検出できなかった。ピットは3基検出されその規模はP₁径40.3cm深さ11.5cm、P₂径40.5cm深さ23cm、P₃径29.0cm深さ16.0cmを測る。P₁とP₂は位置から柱穴の可能性も考えられるが、4本の主柱を想定した場合、これに対応する他の2本の柱穴が検出さ



第20図 14・15号住居跡

れておらず、断定できない。厨溝は西壁、南壁に沿って検出された。

遺物は甕、高杯、須恵器杯等の小破片が覆土中より出土している。平安時代の土器片も出土しているが量的には古墳時代後期のものが主体を占める。

重複遺構は13号住居跡、15号住居跡で、新旧関係はカマドの存在から14号住→15号住で、13号住は不明である。

15号住居跡 (第20図)

I区E-13グリッドに位置する。平面形及び規模は不明で、カマドのみ残存する。カマドはおそらく北壁に構築され、そで部が壁内に大きく張り出す。規模は長さ1.10m、幅1.00mを測る。

本住居跡に伴う出土遺物は不明である。

重複遺構は14号住居跡、13号住居跡で、新旧関係は14号住→15号住である。

16号住居跡 (欠番)

17号住居跡 (第21図、PL.2)

I区C-14、D-14グリッドに位置する。平面は長方形と思われるが、東半を他遺構及び攪乱によって切られており、全形及び規模については不明である。残存する西壁も状態は不良である。確認壁高の最大値は17.0cmである。床面は凹凸が激しく、当時の面はほとんど残存していない可能性もある。カマド、ピット等の住居施設は検出されなかった。

遺物は杯が2個体分覆土から出土しているが、18号住居跡に伴う可能性もある。

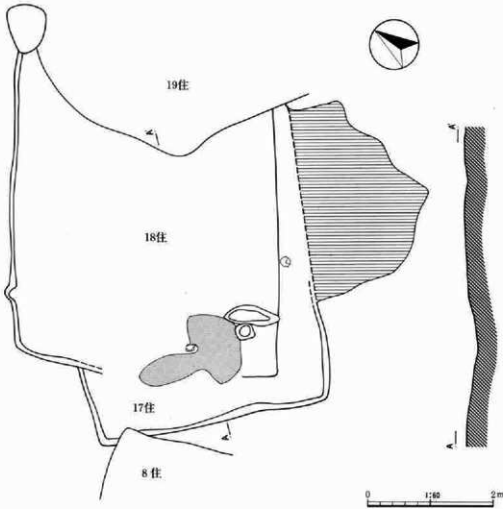
重複遺構は8号住居跡、18号住居跡で、判明した新旧関係はカマドの存在より17号住→18号住である。

18号住居跡 (第21図、PL.2)

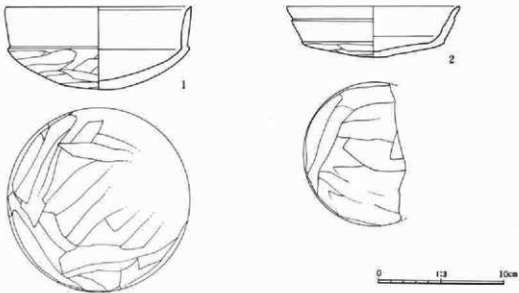
I区C-14・15、D-14・15グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は4.30×(4.75以上)m、面積(21.12以上)m²を測る。東端部は不明。主軸方向はS-55°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は17.5~5cmを測る。床面は凹凸が激しい。カマドは南東壁の西端に構築される。左そで部のみ残存し、燃焼部から南西壁際にかけて焼土が検出されている。又燃焼部に浅い落ち込みが認められるが、これは灰掻きの窪みと思われる。他の住居内施設は検出されなかった。

遺物は時期不明の土師器小片が数点出土したのみである。

重複遺構は17号住居跡、19号住居跡で、新旧関係は17号住→18号住で、19号住との関係は土層や床面の有無では確認できず不明である。



第21図 17・18号住居跡

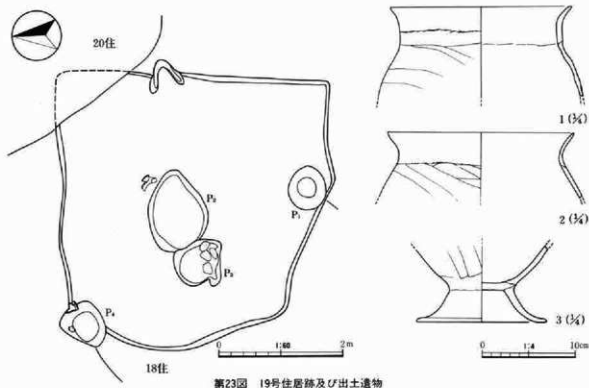


第22図 17号住居跡出土遺物

19号住居跡 (第23図、PL. 2)

I区D-14・15、E-14・15グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南西部分は18号住居跡との重複により不明瞭となっている。規模は推定で(4.30) × (4.37) mと思われる。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は南東部が最も残存状態良好で、この部分の確認壁高は24cmを測る。床面は中央がやや高く凹凸が激しい。カマドは東壁中央の北寄りに構築される。そこで部は壁内に張り出し、煙道部は比較的ゆるやかな角度で立ち上がる。規模は長さ53cm、幅55cmを測る。カマド軸方向はN-78°-Eを指す。ピットは4基検出された。規模はP₁径70×60cm深さ42cm、P₂径120×100cm深さ11cm、P₃径83×78cm深さ18cm、P₄径75×60.5cm深さ24cmを測る。P₃には円礫が4ヶ出上している。規模や位置から柱穴とは考えられない。

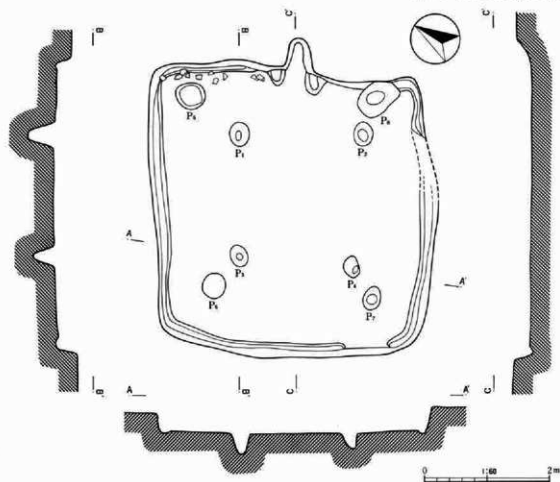
遺物は甕、台付甕、高杯、杯の破片が出土しており、平安時代の土器を主体とするが、古墳時代後期～奈良時代の土器片も多量に混在する。



第23図 19号住居跡及び出土遺物

20号住居跡 (第24図、PL. 2)

I区E-14・15、F-14・15グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は4.65×4.55mで、面積は19.77 m²を測る。主軸方向はN-55°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は47~21cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、ほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁中央に構築され、そこで部、燃焼部、煙道部が残存する。長さ90cm幅90cmを測る。軸方向はN-68°-Eを指す。そこで部は20cm前後壁内に張り出し、燃焼部は壁外にまで若干張り出す。煙道部は比較的急角度で立ち上がる。ピットは8基検出された。規模はP₁径47.3cm深さ43cm、P₂径37.3cm深さ22cm、P₃径43.3cm深さ33cm、P₄径30.3cm深さ23cm、P₅径67×46cm深さ49cm、P₆径40cm深さ14cm、P₇径35.3cm深さ13cm、P₈径37.3cm深さ37cmを測る。位置的にP₁~P₄は主柱穴と思われるが、各柱間距離は以下の通りである。P₁-P₂2.00m、P₃-P₄1.80m、P₂-P₃2.15m、P₁-P₃1.95mを測る。P₅とP₆は位置、形態、規模から貯蔵穴となる可能性も考えられる。又P₇、P₈の配置は柱穴とも考えられるが、深さが浅くP₁

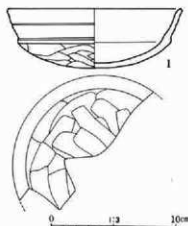


第24図 20号住居跡

—P₁とは性格が異なるものと思われる。周溝は西壁南端部を除いて全周する。幅30～15cm深さ4～1cmを測る。周溝の切れる部分は幅70cmで入口施設が存在した可能性もある。

遺物は杯、甕、壺等が出土し、カマド周辺の床面上に集中する。又南半～西半の覆土中から平安時代の土器片が多く出土しているが、重複する19号住居跡に伴うものが流れ込んだ可能性が高い。なお床面上より出土のものは鬼高期を主体としている。

重複遺構は19号住居跡、23号住居跡、12号土壇で、新旧関係の判明したのは23号住→20号住である。



第25図 20号住居跡出土遺物

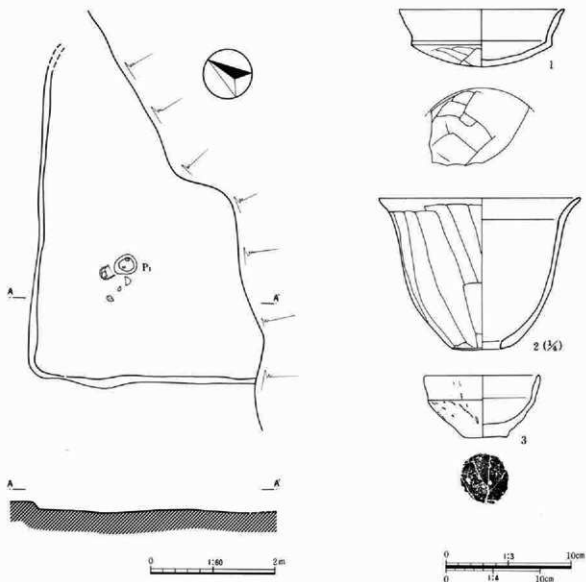
21号住居跡 (第26図、PL.2)

1区C-8・9、D-8・9グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南東半を崖で切られており全形は不明である。規模は北西壁の長さ4.90mを測る。又北西壁の方向はN-35°-Eを指す。西側コーナー部より2m程離れてピットが1基検出された。規模は径35cm深さ18cmを測る。位置的には主柱穴のうちの1本と考えられよう。

第V章 検出された遺構と遺物

遺物は杯、小形杯、瓶が出土しており、他に覆土中より薬片が若干出土している。時期は鬼高期のものを主体としている。

重複遺構はない。



第26図 21号住居跡及び出土遺物

22号住居跡（第27図、PL. 2）

I区F-12グリッドに位置する。形態は長方形と思われるが、南半部は攪乱が激しく、残存状態は不良。規模は推定値で(2.35) × (3.75) mを測る。主軸方向はN-(50°)-Eを指す。壁はわずかに残存するのみで、確認壁高は5 cm前後を測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が激しいが全体の床状況については不明である。カマドは明確ではないが、東壁の南寄りに張り出し部分が認められる事から、これがカマド掘り形になる可能性がある。

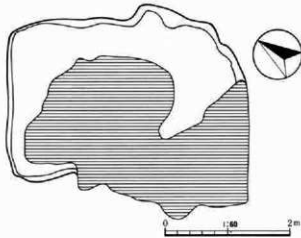
遺物は比較的少なく、鬼高期の杯と平安時代の高台付碗の破片が出土している。

重複遺構はなく、南半大部分を後世の攪乱で削られている。

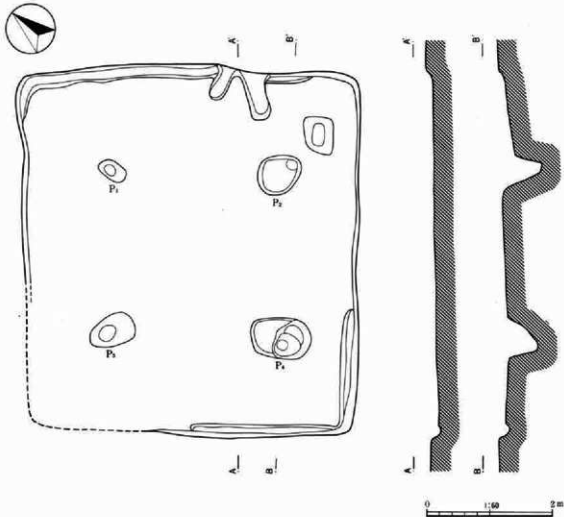
23号住居跡 (第28図、PL.3)

I区F-13・14、G-13・14グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は5.85×5.35m、面積は31.16㎡を測る。主軸方向N-48°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高15-2cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、カマド前面部がやや高くなっている。カマドは東壁の南寄りに構築されておりその部、燃焼部のみ残存する。長さ80cm幅90cmを測る。上半をほとんど削平されているため、全体の形状はつかみ得ない。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。歪んだ長方形を呈し、規模

は57×46cm深さ47cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径46×26cm深さ39cm、P₂径67cm深さ62cm、P₃径75×45cm深さ57cm、P₄径95cm深さ48cmで、これらはいずれも主柱穴と思われる。又P₂の掘り形から壁が

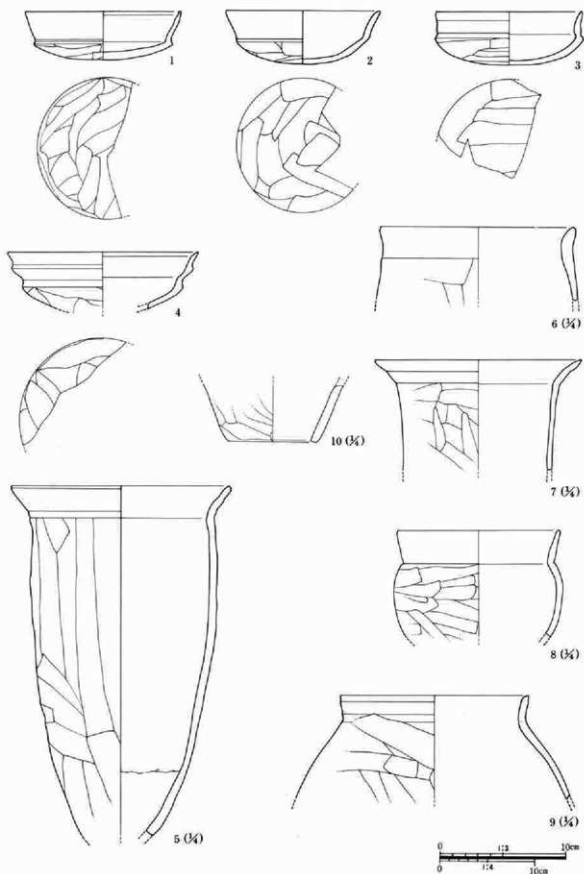


第27図 22号住居跡



第28図 23号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物



第29図 23号住居跡出土遺物

横転して出土している。柱間距離は P_1-P_2 2.90m、 P_1-P_2 2.80m、 P_1-P_2 2.60m、 P_2-P_3 2.85mを測る。周溝は東壁と南側コーナー部に沿って廻っており、規模は幅28-17cm深さ5-1cmを測る。

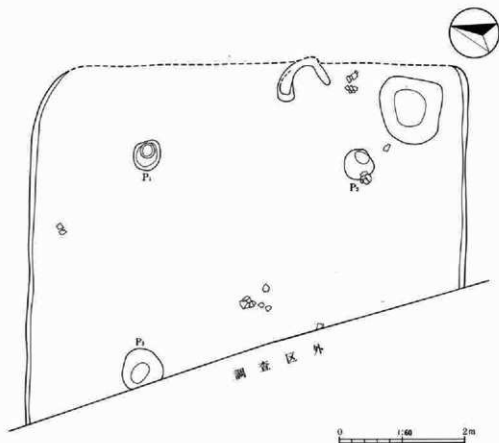
遺物は甕、瓶、杯が出土しており、前述の柱穴出土の甕を除いて他は覆土下層から出土している。時期は平安時代のももの混入するが、鬼高期のもものを主体としている。

24号住居跡(第30図、PL.3)

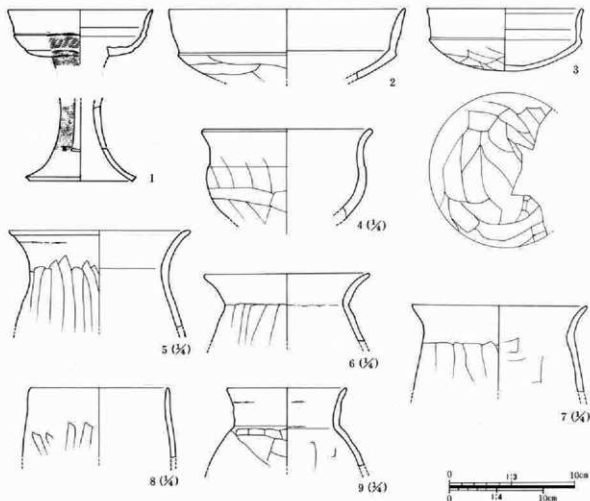
I区A-16・17、B-16・17グリッドに位置する。東壁は不明瞭で、西壁は調査区外のため不明。正方形を呈すると思われ、規模は(5.90以上)×6.96mを測る。主軸方向はN-(70°)-Eを指す。南北の両壁が若干残存しており、確認壁高は35-8cmを測る。床面はローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、そでの一部と燃焼部が残存する。そでは灰色粘土を用いて構築され、わずかに左そで部が壁内に張り出す。燃焼部底面は浅い窪みを呈するが、これは灰掻きによるものであろう。貯蔵穴は南東コーナー部に検出された。不整楕円形を呈し、規模は1.04×1.00m深さ62cmを測る。ピットは3基検出され、規模は P_1 径33cm深さ45cm、 P_2 径45cm深さ57cm、 P_3 径65cm深さ19.5cmを測る。位置関係から主柱穴と思われる。柱間距離は P_1-P_2 1.73m、 P_1-P_3 1.75mを測る。覆土は黒色土がブロック状に堆積する。

遺物は床面のカマド右脇、中央付近から出土し、又覆土より多量の土器片が出土する。器種は甕、杯、鉢、壺、須恵器無蓋高杯、砥石が出土している。時期は鬼高期のもものが大部分を占める。

重複遺構は検出された部分においては認められない。



第30図 24号住居跡



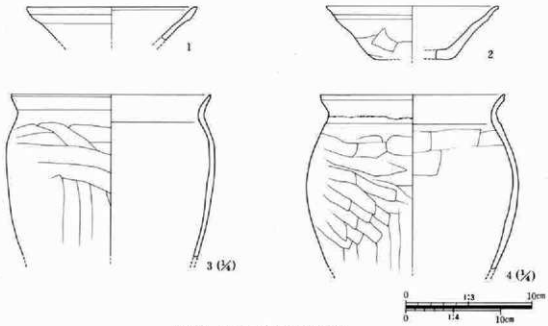
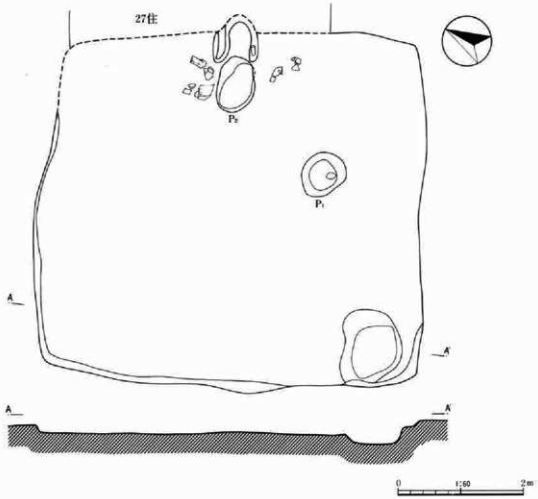
第31図 24号住居跡出土遺物

25号住居跡 (第32図、PL. 3)

I区15・16、C-15・16グリッドに位置する。東壁は不明瞭。横長方形を呈し、規模は5.55×6.15mを測る。面積は推定値で(33.44)㎡を測る。主軸方向はN-60°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は、17~6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、ほぼ平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、その部が残存する。幅は73cmを測る。貯蔵穴は南西コーナー部から検出された。規模はP₁径70cm深さ29cm、P₂径90×60cm深さ40cmを測る。ピットはカマド前方部と南半中央部に検出された。規模はP₁径70cm深さ29cm、P₂径90×60cm深さ40cmを測る。なおP₁から円礫が1ヶ出土している。P₂はカマドとの関係でその性格が理解されると思うが、具体的な性格を推定させるような痕跡、遺物などは検出されなかった。覆土は粘土、ローム土粒を多量に含む黒褐色土がブロック状の堆積を示す。

遺物はカマド周辺に集中しており、甕、杯が出土する。覆土からの出土遺物は鬼高期の土器片が約8割を占めるがカマド内及び床面上からは平安時代のものを主体としている。

重複遺構は27号住居跡で、覆土の切り合い関係やカマドの残存状況から新旧関係は27号住→25号住と考えられる。なお本住居跡の時期についてはカマドの構造や貯蔵穴の位置から鬼高期のものに近似するが遺物の出土状況を重視し、平安時代として考えておきたい。



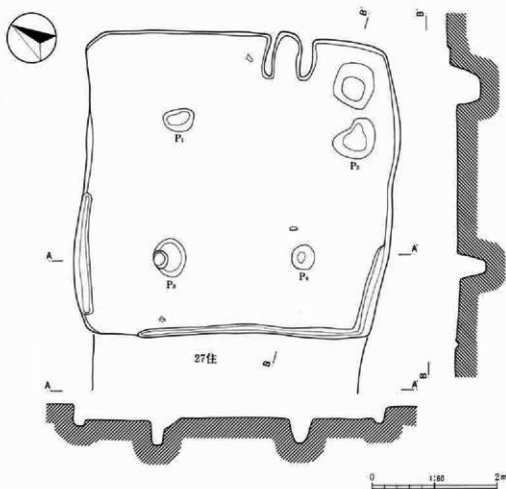
第32図 25号住居跡及び出土遺物

26号住居跡 (第33図、PL.3)

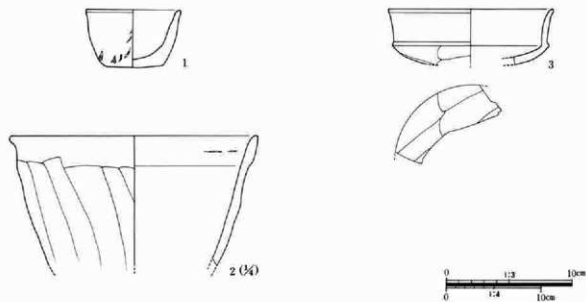
I 区D-16、E-16グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.80×5.00m、面積は23.17㎡を測る。主軸方向はN-60°-Eを指す。壁はわずかに外傾し、確認壁高は27~9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、カマド前方部がやや高く他はほぼ平坦である。カマドは東壁の中央より南寄りに構築されその部、燃焼部が残存し、煙道部は不明である。規模は長さ70cm幅85cmを測り、軸方向はN-64°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、隅丸方形を呈する。規模は70×65cm深さ47cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径47.4cm深さ19cm、P₂径70.6cm深さ35cm、P₃径62.5cm深さ43cm、P₄径47cm深さ21cmを測る。なおP₃は階段状に掘り込まれている。これが掘り形か柱抜き穴かは不明である。以上の4基はP₂がやや重んでおり、配置がずれるが、主柱穴と考えて良いだろう。柱間距離はP₁-P₂2.90m、P₂-P₃2.30m、P₁-P₃2.25m、P₂-P₄2.10mを測る。周溝は南西壁に沿って廻っており、規模は幅26~12cm、深さ10~6cmを測る。覆土は灰、ローム粒子を含む黒褐色土が主体で、レンズ状の堆積状況を示している。

遺物は杯、小形鉢、鉢、甕が覆土より出土している。床面からも小破片が出土しており、鬼高期のものを主体とする。

重複遺構は27号住居跡で、土層観察より新旧関係は27号住→26号住である。



第33図 26号住居跡



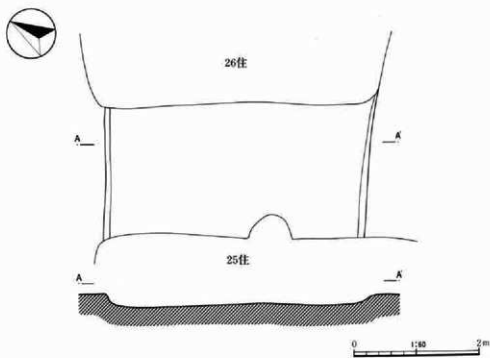
第34図 26号住居跡出土遺物

27号住居跡（第35図）

I区C-16、D-16グリッドに位置する。東壁及び西壁部分をそれぞれ重複住居跡に切られるため、平面形、規模は不明。壁は垂直で確認壁高は19～5cmを測る。床面はほぼ平坦である。カマド、ヒット等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕が若干出土しており、鬼高期のものを主体としている。

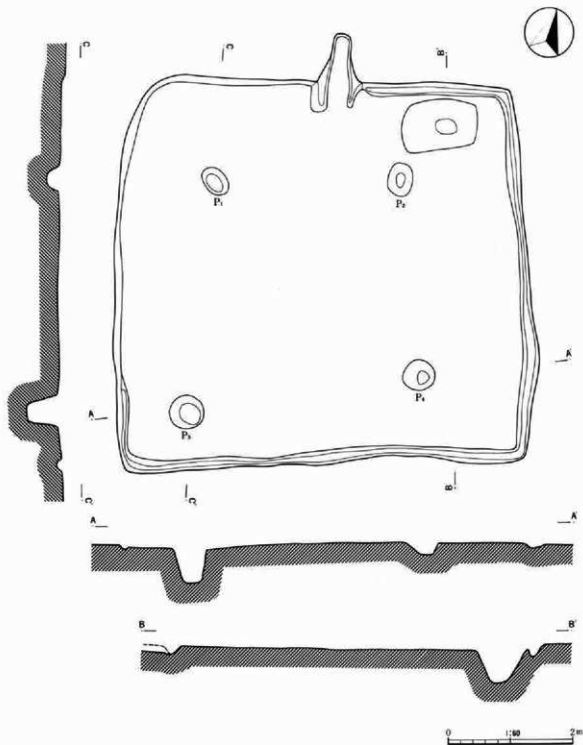
重複遺構は25号住居跡、26号住居跡で、新旧関係は27号住→25号住・26号住である。



第35図 27号住居跡

28号住居跡 (第36図、PL. 3)

I区F-16・17、G-16・17グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は6.26×6.80m、面積は40㎡を測る。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁は垂直で確認壁高は14～3cmを測る。床面は比較的凹凸が多い。

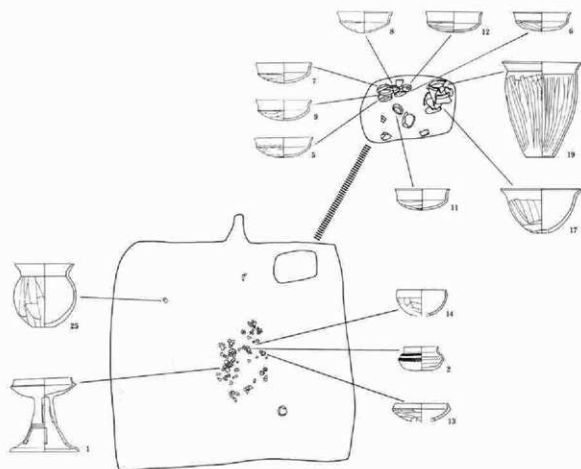


第36図 28号住居跡

カマドは北壁中央に構築され、そで部、燃焼部、煙道部が残存する。規模は長さ1.22m幅0.87mを測り、軸方向はN-9°-Wを指す。煙道部の立ち上がりは極めて緩やかで、燃焼部との境は不明瞭である。貯蔵穴は北東コーナー部、カマド右脇で検出された。平面は歪んだ長方形を呈し、規模は125×80cm深さ55cmを測る。又貯蔵穴と北壁及び東壁との間は周辺の床面に比べやや盛り上がっている。ピットは4基が検出された。規模はP₁径50.3cm深さ17cm、P₂径52×39cm深さ不明、P₃径55.0cm深さ50.0cm、P₄径50.0cm深さ20.5cmを測る。これらは規模とその位置関係から主柱穴と考えられる。柱間距離はP₁-P₂3.00m、P₂-P₃3.80m、P₁-P₃が3.70m、P₂-P₄3.20mを測る。周溝はカマド右脇から東壁、南壁及び西壁の一部に沿って検出された。規模は幅27~17cm深さ9~3cmを測る。

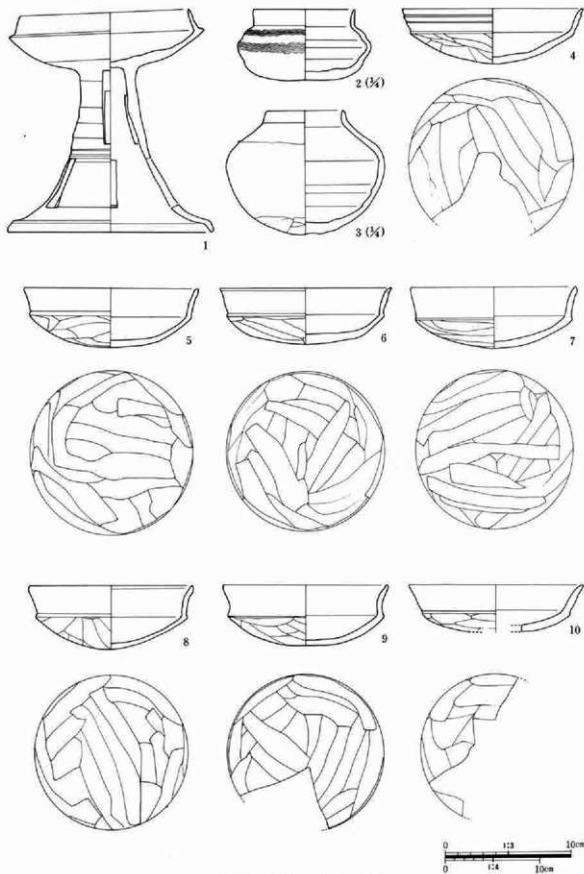
遺物は甕、壺、杯、甌、鉢、碗、須恵器短頸壺、同高杯が出土しており、大部分が鬼高期のものである。出土位置は第37図に示すとおり貯蔵穴と住居中央部に集中している。貯蔵穴内出土土器は杯8個体分、甌2個体分、甕1個体分が認められ、そのうち杯6個体、甌2個体は完全あるいは若干の部分を欠くのみで、外側から流れ込むような状態で検出された。又床面の中央部分に集中して出土したものはほとんどが破片の状態であり、復元に復するものはない。従って貯蔵穴出土土器は周辺に置かれていたものであり、又一方床面中央の土器は破砕後廃棄されたものとして理解できるのではないだろうか。

重複遺構はなく単独で検出されている。

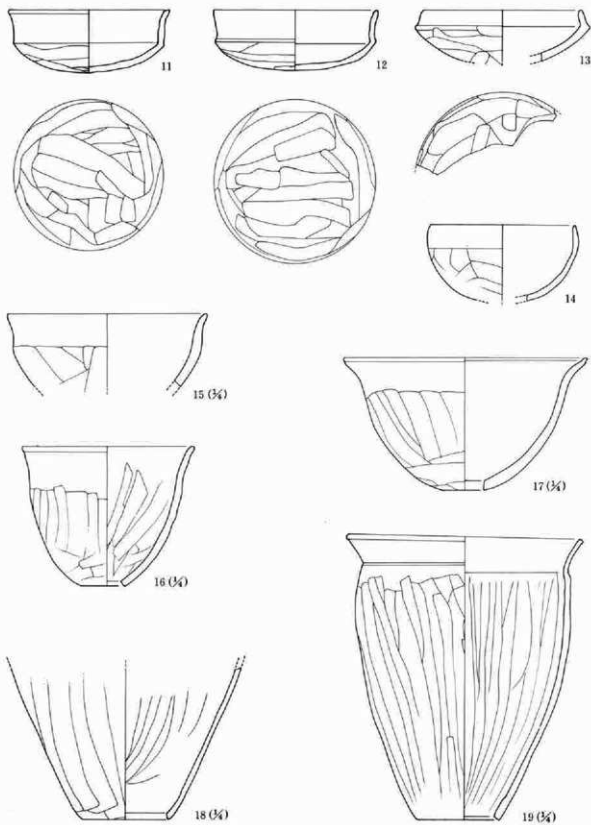


第37図 28号住居跡遺物分布図

第V章 検出された遺構と遺物

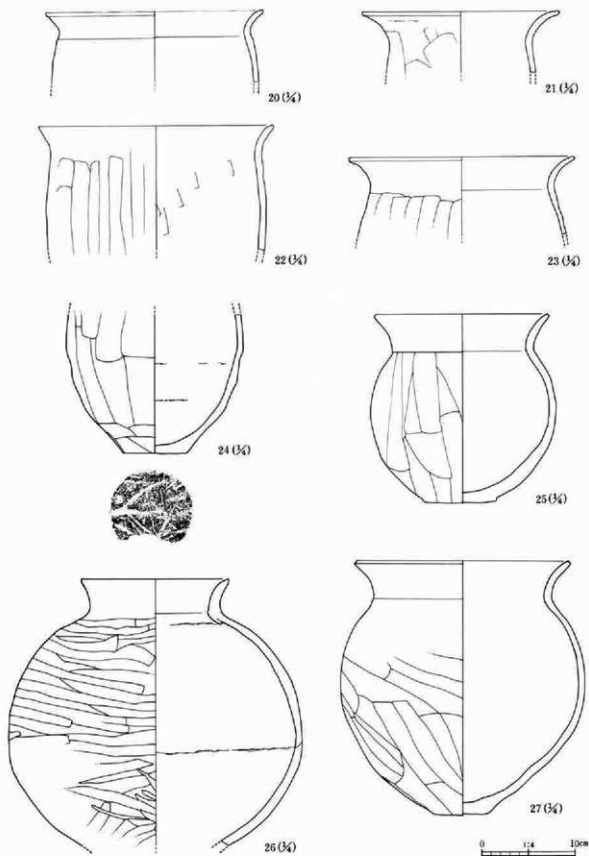


第38図 28号住居跡出土遺物(1)



第39回 28号住居跡出土遺物(2)

第V章 検出された遺構と遺物

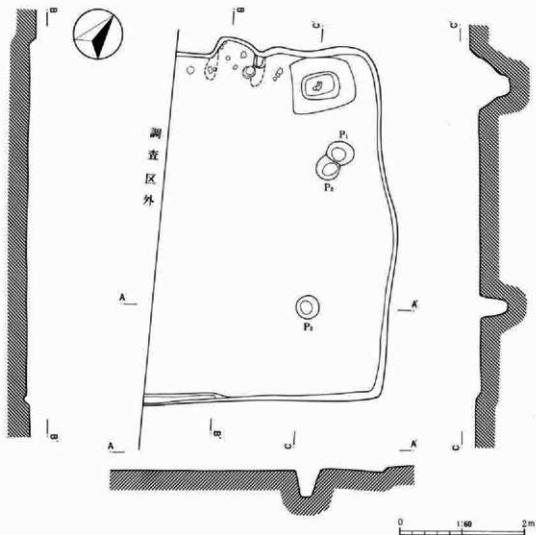


第40図 28号住居跡出土遺物(3)

29号住居跡 (第41図、PL.3)

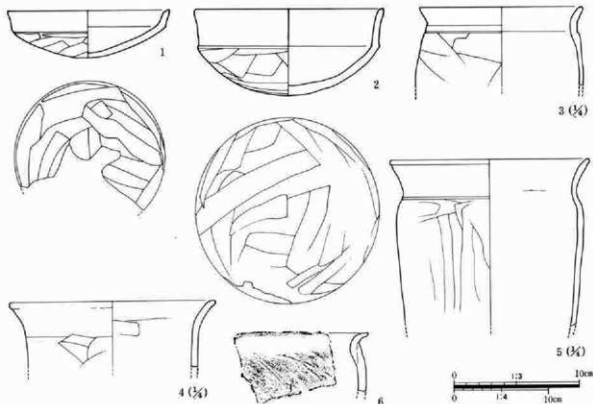
I区A-18・19、B-18・19グリッドに位置する。平面形は南西半が調査区外のため全形は不明であるが、おそらく正方形に近い形状を呈すると思われる。主軸方向の長さは5.56mを測る。主軸方向はN-40°-Wを指す。壁は残存状態不良で、やや外傾する。確認壁高は21~3cmを測る。床面は中央部がやや盛り上がる。カマドは北西壁の中央付近に構築され、右そで部と燃焼部が残存する。長さ75cm、幅95cmを測る。比較的幅広い形状を呈する。貯蔵穴は北部コーナーで検出され、平面は歪んだ長方形を呈する。規模は101×86cm深さ51cmを測る。断面は階段状を呈する。ピットは3基検出された。P₁径35.5cm深さ30cm、P₂径37.4cm深さ28.0cm、P₃径35.0cm深さ44.2cmを測る。なお規模と位置関係からこれらは主柱穴の可能性が高い。P₁とP₂は隣接している事から柱を建替えた可能性も考えられる。周溝は南東壁の南半部に沿って検出された。幅は18~13cm、深さは8~4cmを測る。

遺物は甕、杯、須恵器杯、同蓋の破片が出土している。カマド内及び貯蔵穴の周辺部に集中する。なお第42図-3の甕上半部片はカマド右そで部に正立して置かれており、粘土の付着が甚しい事からそで補強材として使用されたと思われる。遺物は奈良時代を主体としているが、貯蔵穴より鬼高期の杯が出土している。



第41図 29号住居跡

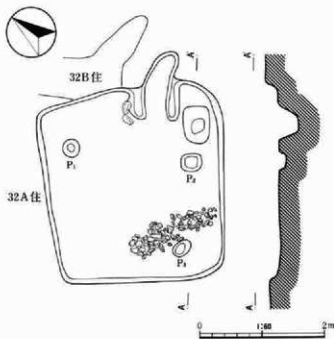
第V章 検出された遺構と遺物



第42図 29号住居跡出土遺物

30号住居跡 (第43図、PL. 3)

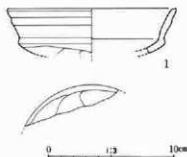
I区B-17、C-17グリッドに位置する。やや歪んだ隅丸正方形を呈する。規模は3.15×2.95mで面積は8.64m²を測る。主軸方向はN-55°-Eを指す。壁は外傾し、確認壁高は21-6cmを測る。床面はほぼ平坦である。カマドは北東壁の南寄りに構築されており、そで部、燃焼部、煙道部が残存する。そで部は壁内側に60cm程張り出す。長さ1.10m幅0.83mを測る。煙道の軸方向と燃焼部の軸方向が異なり、前者はN-84°-Eで、後者はN-56°-Eを指す。貯蔵穴は東側コーナー部のカマド右脇から検出された。隅丸長方形を呈し、規模57×43cm深さ32cmを測る。ピットは3基検出され、規模はP₁径28cm深さ13.5cm、P₂径34×28cm深さ11cm、P₃径32×21cm深さ14cmを測る。いずれも小規模であるが、位置関係から主柱穴と思われる。柱間距離はP₁-P₂1.93m、P₂-P₃1.40mを測る。



第43図 30号住居跡

遺物は32A、32B号住居跡と重複した部分の覆土中より多く出土しており、その帰属が不明瞭である。本住居跡に伴う確実な出土遺物は杯片で、鬼高期のものである。又ピットP₂の東側に礫が多量に出土しているが、その性格については不明である。

重複遺構は32A号・32B号住居跡で、カマドの切り合い関係より新旧関係は32A号住→30号住→32B号住の順である。



第44図 30号住居跡出土遺物

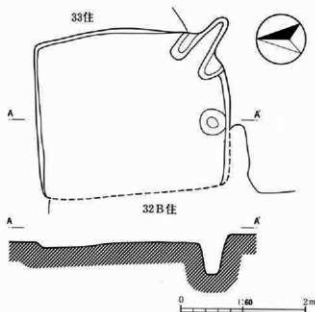
31号住居跡 (第45図、PL.3)

I区C-17・18、D-17・18グリッドに位置する。平面は長方形と思われるが、32B号住居跡と重複するため不明瞭である。規模は北壁-南壁間3.05mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は15cmを測る。床面は地山のローム土と33号住居覆土で、ほぼ平坦である。33号住との床面レベル差は6~9cmで本住居跡が低位である。カマドは南東コーナー部に構築されており、ほぼ全形が残存する。そこで部は壁内に40cm程張り出す。又煙道部は住居プランの対角線方向で壁外に40cm程張り出す。規模は長さ1m幅0.85mを測り、軸方向はS-54°-Eを指す。又燃焼部中央より円礫が1点出土しているが、おそらく支脚として用いられたものと思われる。ピットは1基南壁際中央から検出された。

径40cm深さ48cmを測る。他に住居跡に伴う施設は認められない。覆土はロームブロックを含む黒色粘質土が堆積する。

遺物は鬼高期の杯、甕がカマド周辺及び床面より出土している。

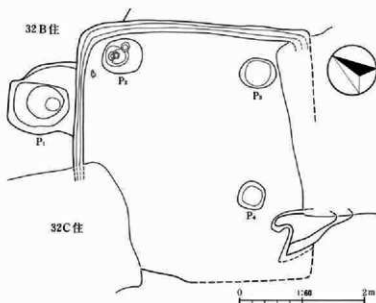
重複遺構は32B号住居跡、33号住居跡で、新旧関係は33号住→31号住→32B号住である。



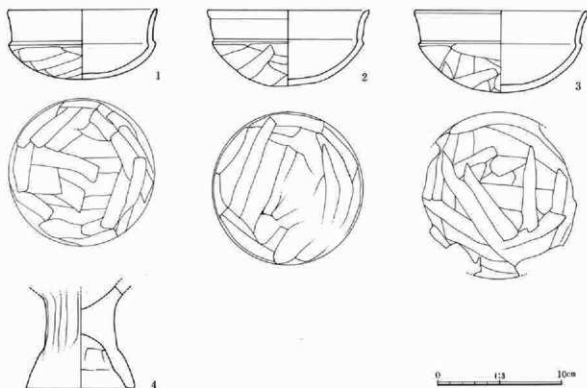
第45図 31号住居跡

32A号住居跡 (第46図、PL.3)

I区B-18、C-18グリッドに位置する。正方形に近い平面形を呈する



第46図 32A号住居跡



第47図 31号住居跡出土遺物

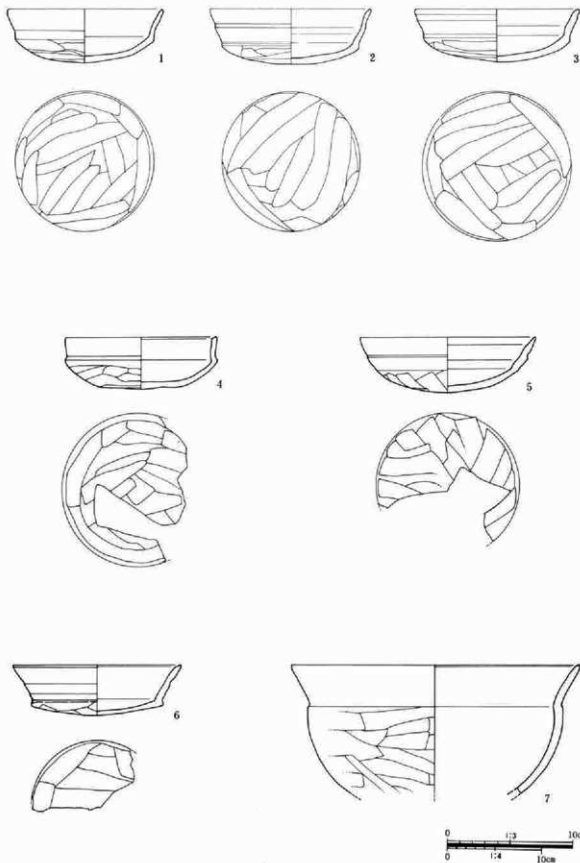
と思われるが、南壁と西側コーナー部は他住居跡と重複するために形状が不明である。規模は推定値(3.5×3.7)mを測る。主軸方向はS-35°-Eを指す。壁は残存部分で壁高15cmを測る。床面は平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築される。後世の削平と30号住居跡に切られるため全形は不明。そこで部に壁内に張り出すものと思われる。ピットは4基検出された。P₁は北西壁から外方へ1.1m程張り出して掘り込まれる。P₂は北側コーナー部、P₃とP₄は一般的な4主柱穴の位置にある。規模はP₁径58cm深さ106.5cm、P₂径62×55cm深さ46cm、P₃径56cm深さ30cm、P₄径42cm深さ10cmを測る。P₂は形状が方形を呈する事、内部から完形の土器が出土している事等から貯蔵穴の可能性がある。P₁は本住居跡に伴う張り出しピットとして扱ったが、重複する単独ピットの可能性もあり、その性格については不明である。P₃、P₄は柱穴と思われ、柱間距離は1.95mを測る。周溝は北一東壁際で検出され、規模は幅20-12cm深さ8-1cmを測る。

遺物は杯、鉢が確実に本住居跡に伴って出土している。なお貯蔵穴と思われるピットP₂より杯完形品3個体と破片1点が出土している。時期は鬼高期と思われる。

重複遺構は30号住居跡、32B号住居跡、32C号住居跡で、土層観察より新旧関係は32A号住→30号住・32B号住・32C号住である。

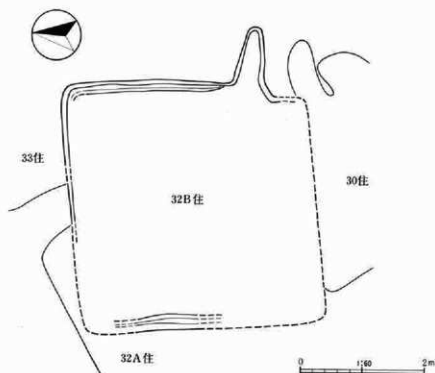
32B号住居跡(第49図、PL.3)

I区C-17・18に位置する。平面形は不明。主軸方向はN-82°-Eを指す。壁は検出部で13cmを測る。床面は平坦。床面レベルは重複する33号住、32A号住の床面より6-7cm高位にある。カマドは東壁の南寄りに構築される。そこで部は認められない。燃焼部と煙道部の境は不明瞭。規模は長さ85cm幅45cmを測り、軸方向はS-89°-Eを指す。周溝は東西壁に沿った位置にわずかに検出された。

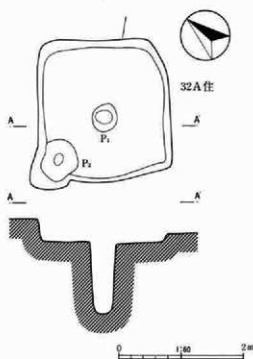


第48図 32A号住居跡出土遺物

遺物は平安時代の土器片が覆土中より出土しているが、本住居跡に伴うものである確証は得られなかった。重複遺構との新旧関係は土層観察より32A号住・30号住・33号住→32B号住である。



第49図 32B号住居跡



第50図 32C号住居跡

32C号住居跡(第50図)

I区B-18・19グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は2.24×2.10m、面積は4.60㎡を測る。主軸方向はN-49°-Eを指す。壁は外傾しており、確認壁高は42-14cmを測る。床面はローム土を利用し、比較的平坦である。カマド及びびろ溝は検出されなかった。ピットは2基検出されP₁は住居中央に、P₂は西コーナー部に掘り込まれている。規模はP₁径43cm深さ112cm、P₂径66×57cm深さ30cmを測る。P₁を柱穴と考えた場合、中心柱によって棟木を支え切妻の形状を呈するか、柱を中心に底面正方形の角錐状の寄棟形を呈する上屋構造が想定されよう。

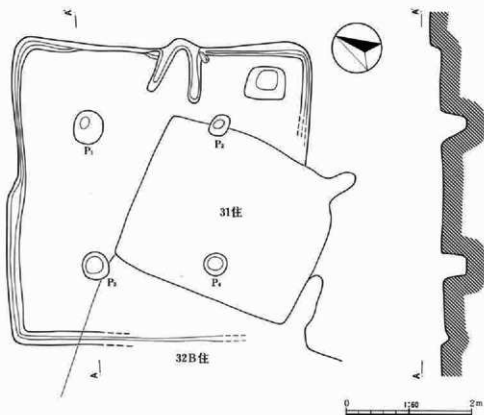
遺物は時期不明の土師器小片が出土したのみである。重複遺構との新旧関係は土層観察より32A号住→32C号住と思われる。

本遺構は住居跡として扱ったが、小形でカマドがない事から作業小屋的な性格も考えられる。

33号住居跡 (第51図、PL.3)

I区C-17・18、D-17・18グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は4.80×4.78m、面積19.60㎡を測る。主軸方向はN-62°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は22cm前後を測る。床面は地山のロームでほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁の中央からやや南寄りに構築される。煙道部は残存しない。その部は壁内に90cm程張り出す。長さ90cm、幅85cmを測る。軸方向はN-78°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部に検出された。歪んだ長方形を呈し、規模は62×50cm深さ56cmを測る。ピットは4基検出され、位置的に主柱穴と思われる。規模はP₁径53cm深さ39cm、P₂径38cm深さ56.5cm、P₃径45cm深さ38cm、P₄径37cm深さ45cmを測る。又各柱間距離はP₁-P₂1.13m、P₂-P₃2.20m、P₃-P₄1.93m、P₁-P₄2.25mを測る。周溝はカマド左脇を除いて全周する。規模は幅30-7cm深さ9-2cmを測る。覆土はロームブロック、炭化物、灰を含む褐色土が堆積する。

遺物は鬼高期のものが出土しているが、図化できるものはない。



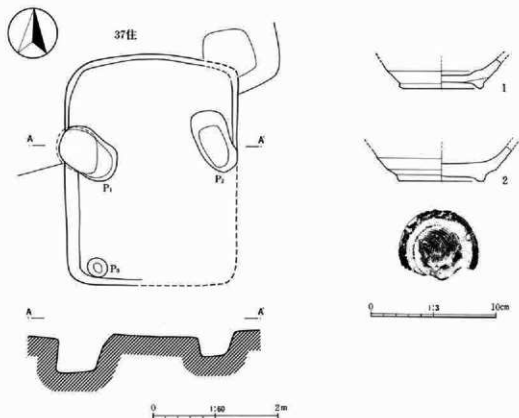
第51図 33号住居跡

34号住居跡 (第52図)

I区D-18・19、E-19グリッドに位置する。長方形を呈する。規模は推定値で(3.55)×(2.75)mを測る。面積は9.5㎡前後を測る。壁は確認壁高12.5-2cmを測る。床面はほぼ平坦である。ピットは3基検出された。規模はP₁径100×65cm深さ40cm、P₂径105×55cm深さ33cm、P₃径33cm深さ15cmを測る。

遺物は須恵器高台付椀、土師器甕が出土している。鬼高期のものも含むが、主体は平安時代である。

重複遺構との新旧関係は、出土遺物より37号住→34号住と思われる。



第52図 34号住居跡及び出土遺物

35号住居跡 (第53図、PL.3)

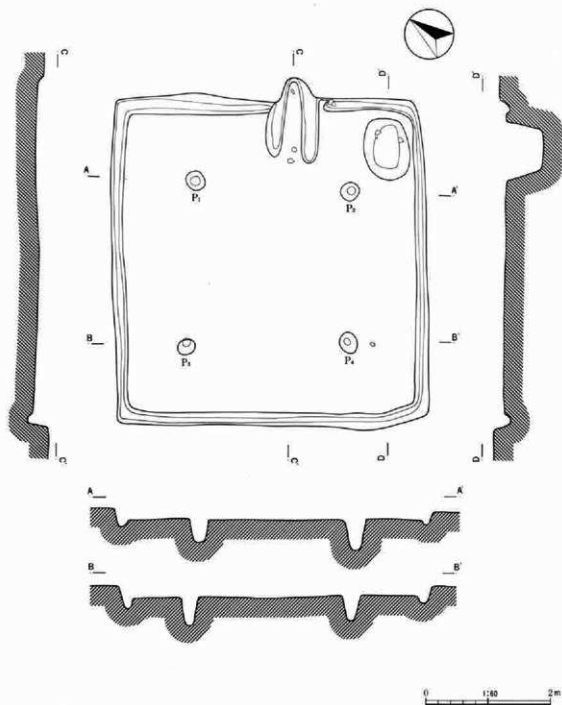
I区E-17・18、F-17・18グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は 5.29×5.02 mで、面積は 26.10 ㎡を測る。主軸方向はN-51°-Eを指す。壁は比較的残存状態良好で、やや外傾し確認壁高は $27 \sim 5$ cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、中央部分がやや高くなっている。カマドは北東壁の中央よりやや南東寄りに構築されている。残存状態は良好で、煙道上半部のみを欠く。規模は長さ 1.35 m幅 0.85 mで軸方向はN-54°-Eを指す。そで部は壁内側に 1 m程張り出す。又燃焼部は比較的狭小で、幅 30 cmを測る。煙道は急角度で立ち上がる。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。形状は楕円形で、規模は 96×72 cm、深さ 63.5 cmを測る。ピットは4基が検出され、その配置関係から主柱穴になると考えられる。規模はP₁径 31 cm深さ 41 cm、P₂径 30 cm深さ 47 cm、P₃径 23 cm深さ 45 cm、P₄径 30 cm深さ 40 cmを測る。又それぞれの柱間距離はP₁-P₂ 2.52 m、P₂-P₃ 2.60 m、P₁-P₃ 2.55 m、P₃-P₄ 2.38 mを測る。周溝は全壁に沿って廻っており、幅 $30 \sim 5$ cm、深さ $13 \sim 2$ cmを測る。覆上にはロームブロックを多量に含む褐色土がブロック状に堆積している。

遺物は妻が多量に出土しており、その他に杯、高杯が含まれる。出土位置はカマド周辺と貯蔵穴周辺に集中するが、完成品はほとんどが小破片である。時期はすべて鬼高期のものに限定される。

重複遺構は認められず、単独で検出されている。

36号住居跡 (第55図)

I区F-19・20グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は $3.26 \times (3.60)$ m、面積は 11.40 ㎡

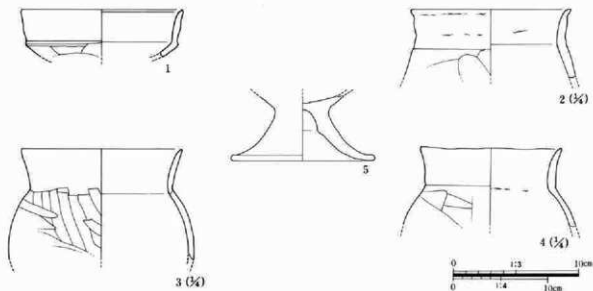


第53図 35号住居跡

を測る。壁は残存状態不良で、確認壁高は9-1cmを測る。床面は凹凸が多く軟質である。カマドは東壁の南端に構築されている。そで部は確認できない。燃焼部は壁を長さ60cm幅50cm前後掘り込んで築かれている。軸方向はS-67-Eを指す。ピットは2基検出された。P₁はカマド前方部、P₂はカマドに對面する西壁際に掘り込まれる。規模はP₁径58×46cm深さ53cm、P₂径78×65cm深さ55cmを測る。P₂は形状、規模、位置等から貯藏穴の可能性が高いが、P₁の性格については不明である。

遺物はカマド周辺から中央部分にかけて土器片が多量に出土する。甕、杯、鉢、須恵器高台付碗等があり、

第V章 検出された遺構と遺物

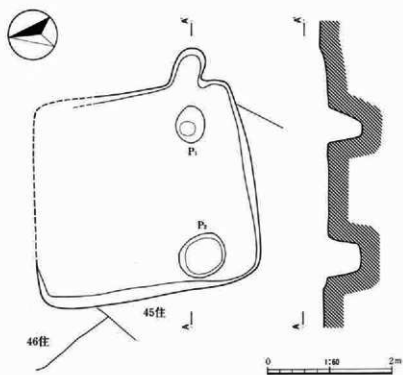


第54図 35号住居跡出土遺物

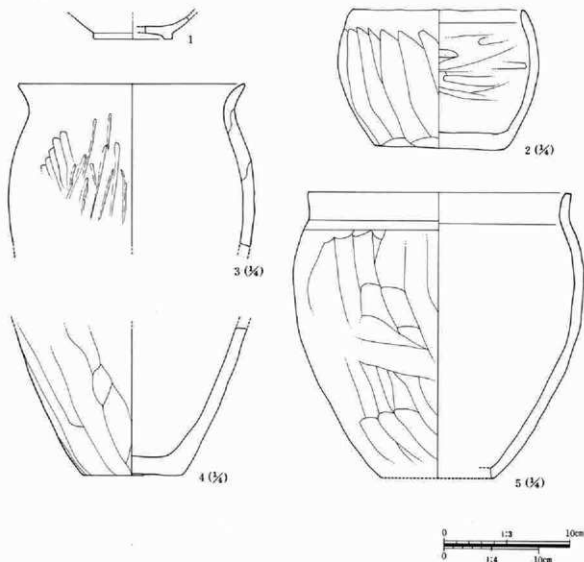
時期は平安時代のものが主体を占める。なおカマドのそで部から燃焼部にかけて円筒埴輪片が10数片出土しているが、これはおそらくカマドの補強材として転用されたものと考えられる。

重複遺構は45号住居跡と46号住居跡で、判明した新旧関係は45号住→36号住であった。

なお本住居跡は46号住居跡とともに北東端部を崖によって切られており、この部分の形状については破線で推定ラインを図示した。



第55図 36号住居跡



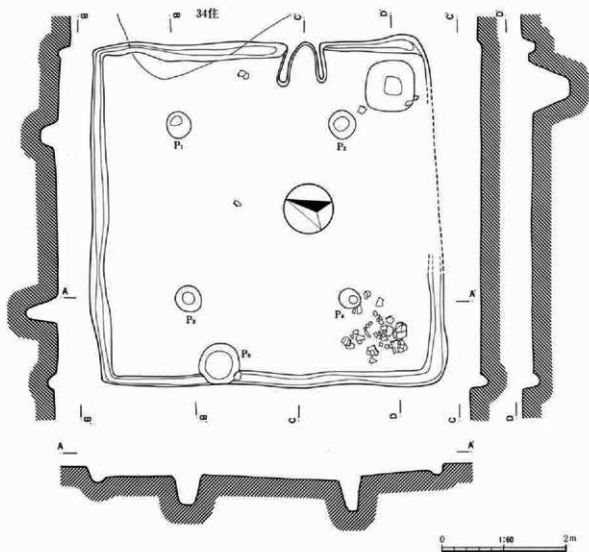
第56図 36号住居跡出土遺物

37号住居跡 (第57図、PL. 3)

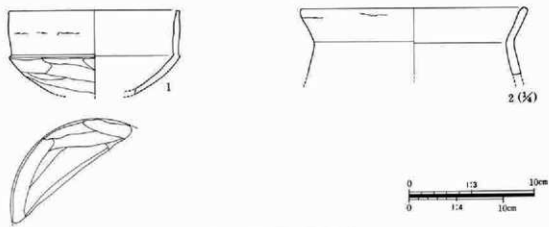
I区D-19・20、E-19・20グリッドに位置する。平面は正方形で、規模は5.50×5.60m、面積は29.80㎡を測る。主軸方向はN-68°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高18-2cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦で硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、そで部と燃焼部が残存する。そで部は壁内側へ60cm程張り出す。燃焼部は奥行60cm幅44cmを測る。軸方向はN-75°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、規模は80×77cm深さ64.5cmを測る。ピットは5基が検出された。P₁~P₄は配置関係から支柱穴と思われる。規模はP₁径42cm深さ54cm、P₂径45cm深さ53cm、P₃径40cm深さ50cm、P₄径35cm深さ57cm、P₅径63cm深さ75cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.63m、P₂-P₄2.72m、P₁-P₃2.80m、P₃-P₄2.63mを測る。周溝は全周するものと思われ、幅30~15cm、深さ13~3cmを測る。覆土はロームブロックを含む黒色土がブロック状に堆積する。

遺物はピットP₄周辺に集中して出土する。鬼高期の甕が多く、その他に杯、甕、高杯がみられる。

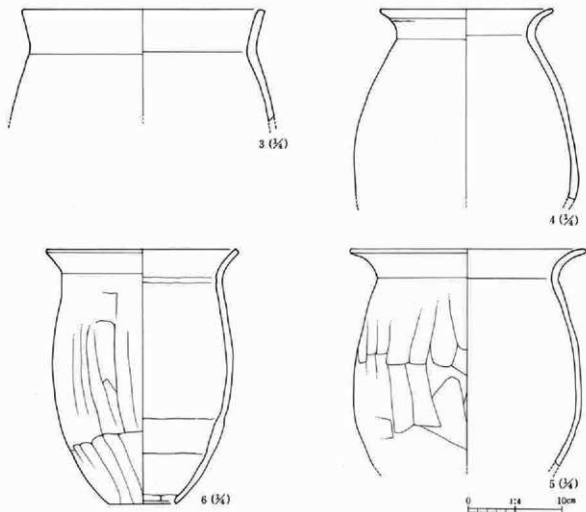
重複遺構との新旧関係は37号住→34号住である。



第57図 37号住居跡



第58図 37号住居跡出土遺物(1)



第59図 37号住居跡出土遺物(2)

38号住居跡(第60図、PL.3)

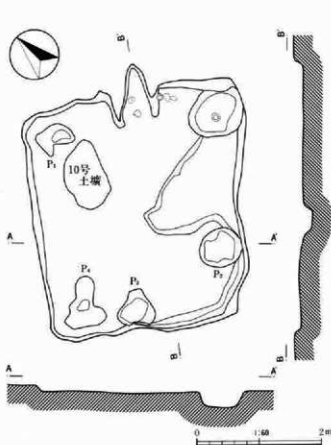
I区C-20・21グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈する。規模は3.88×3.55m、面積は12.50㎡を測る。主軸方向はN-34°-Eを指す。壁は残存状態不良で凹凸が激しい。確認壁高は15~20cmを測る。床面は軟質で凹凸が激しい。カマドは北東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は比較的良好で全形が知り得る。長さ93cm幅80cmを測り、軸方向はN-39°-Eを指す。その部は灰色粘土を使用し壁内に50~45cm張り出している。焚口部は浅い窪みを呈し、それに続く燃焼部中央には15cm大の円礫を直立させて支脚としている。燃焼部と煙道部の境は不明瞭で、煙道は緩やかに傾斜し、末端部で急角度で立ち上がる。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。平面は不整形円形を呈し、規模は径93×79cm深さ35cmを測る。ピットは4基が検出されている。P₂以外はいずれも不定形を呈する。規模はP₁径60×31cm深さ18cm、P₂径69×60cm深さ21.5cm、P₃径55×47cm深さ23cm、P₄径80×60cm深さ23.5cmを測る。P₁とP₄は住居コーナー部分に位置し、底面形と規模が近似する事から柱穴になる可能性が考えられる。P₂、P₃については壁際であり、規模も比較的大きく貯蔵穴的な性格を想定できるが、すでに定量化した貯蔵穴を具備している事から、むしろ別の性格をもつピットと考えた方が妥当である。周溝は南東壁から南西壁中央部ピットP₂の間に沿って廻っている。幅は20~5cmで深さ3cm以下の小規模なものである。又貯蔵穴とピットP₂間に不定形の掘り込みが認められるが、これは

第V章 検出された遺構と遺物

おそらく掘り形の痕跡と思われる。

遺物は貯蔵穴内より鬼高期の杯完形品1点出土し、他にカマド周辺を中心にして同時期の杯、鉢、甕の破片が多数出土している。

重複遺構は10号土壌で、新旧関係は38号住→10号墳である。



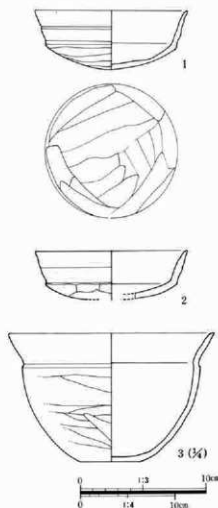
第60図 38号住居跡

39号住居跡(第62図、PL.3)

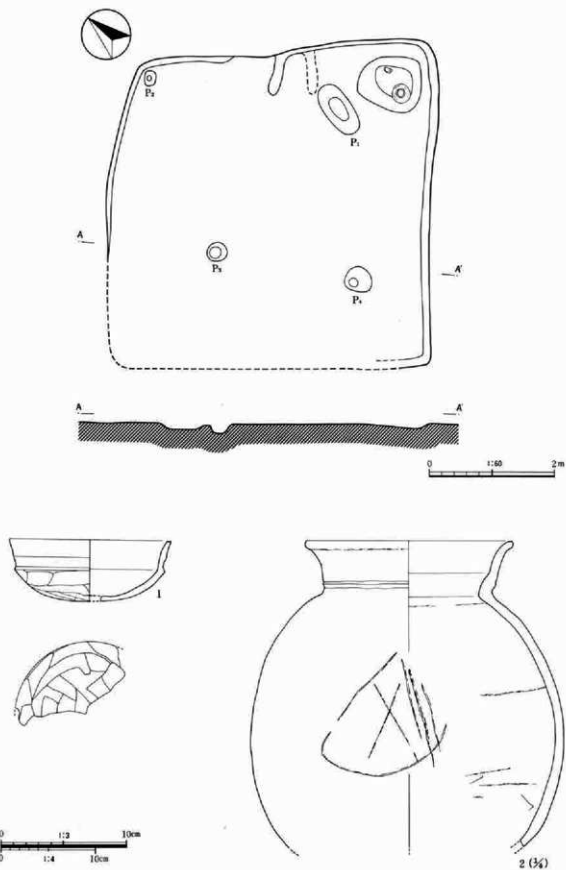
I区B-21・22、C-21・22グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈し、規模は5.17×5.18m、面積は推定で(25.0)㎡を測る。主軸方向はN-47°Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高7~1cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており比較的平坦。カマドは北東壁の中央部に構築され、左そで部のみ残存する。そで部は壁内に65cm程張り出す。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。平面は不整形円形を呈しており、規模は100×85cm、深さ53.5cmを測る。ピットは4基が検出された。規模はP₁径90×44cm深さ16cm、P₂径24×17cm深さ25cm、P₃径29cm深さ12.5cm、P₄径40×45cm深さ16cmを測る。P₁とP₄は位置関係から柱穴の可能性が考えられるがP₂とP₃は性格不明である。

遺物はきわめて少なく、本住居跡に伴うものとしては貯蔵穴内より鬼高期の杯、壺が出土している。覆土からは小形壺、杯の破片が数点出土しているが、時期はすべて鬼高期のものである。なお貯蔵穴内出土の壺の胴部には篋掃による記号様の刻線がみられる。

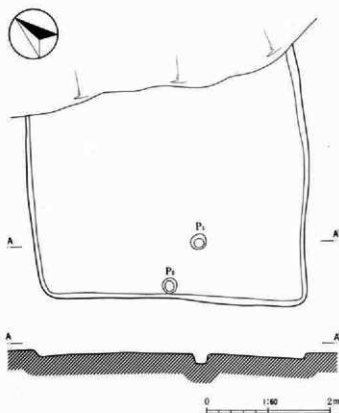
本住居跡との重複遺構はなく単独で検出された。



第61図 38号住居跡出土遺物



第62図 39号住居跡及び出土遺物



第63図 41号住居跡

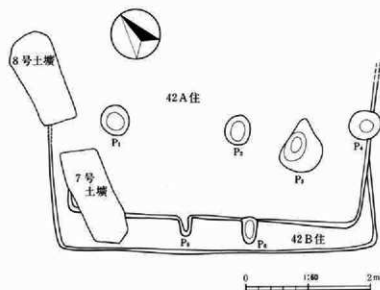
40号住居跡 (欠番)

41号住居跡 (第63図、PL.3)

I区E-21・22グリッドに位置する。東半部を崖で切られる。平面は長方形を呈すると思われる。北西壁—南東壁間の距離は4.52mを測る。南東壁の方向はN-48°-Eを指す。壁は外傾しており、確認壁高は12~4cmを測る。床面は地山のローム土を利用して平坦である。カマドは検出されなかったが、おそらく北東壁に構築されたと推定される。ピットは2基検出され、P₂は南西壁際中央にある。規模はP₁径24cm深さ18cm、P₂径24cm深さ16cmを測る。

遺物は器厚の厚い甕の胴部片が10数片出土しているが、時期については不明である。

重複遺構は認められない。



第64図 42A・42B号住居跡

42A号住居跡 (第64図、PL.4)

I区G-17・18、H-17・18グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが北東半を崖で切られ全形は不明。南西壁の方向はN-50°-Wを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高10.5~5cmを測る。床面は凹凸が多い。ピットは4基検出された。P₁径47cm深さ37cm、P₂径47.4cm深さ15cm、P₃径83.7cm深さ26cm、P₄径47.5cm深さ46cmを測る。

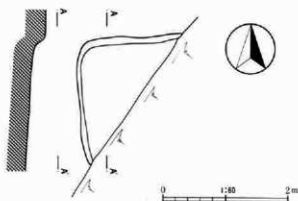
42B号住居跡 (第64図、PL.4)

II区G-17・18、H-17・18グリッドで42A号住居跡と重複して検出された。南西壁の長さは5.15m、方向はN-53°-Wを指す。壁は13~5cmの高さを測る。ピットが南西壁際の中央に2基並列して検出された。P₃は径32.2×20cm深さ5cm、P₄径42×22cm深さ17cmを測る。ピット間距離1mを測る。入口施設に関わるものであろうか。遺物は鬼高期の甕、杯、甌、高杯等40数片が出土している。

43号住居跡 (第65図、PL. 4)

I区B-8グリッドに位置する。方形のコーナーのみ検出され、大半は崖によって切られる。壁は外傾し、確認壁高は22~4cmを測る。床面は凹凸が多い。カマド、周溝、ピット等の施設は全く検出されなかった。

遺物は高杯、鏝、鉢、須恵器鏝等の小破片20数点が出土した。時期は鬼高期を主体とする。

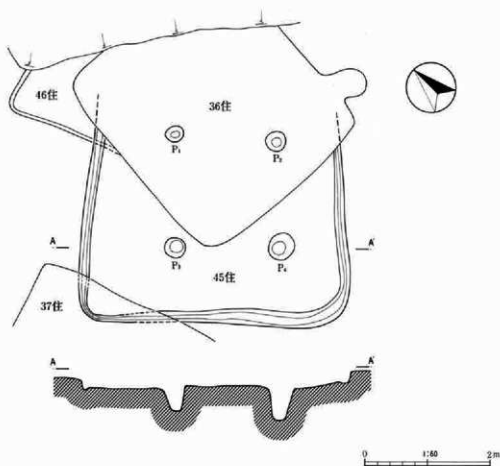


第65図 43号住居跡

44号住居跡 (欠番)

45号住居跡 (第66図、PL. 4)

I区F-19・20、G-19・20グリッドに位置する。正方形を呈すると思われる。南西壁の長さは4.34mを測る。主軸方向はN-(40°)-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は18~6.5cmを測る。床面は比較的凹凸が多く、中央部分がやや窪む。カマドは検出されなかったが、おそらく北東壁に構築されたと思われる。ピットは4基検出された。位置関係からこれらは主柱穴と思われる。規模はP₁径25cm深さ20cm、P₂径32cm深さ20



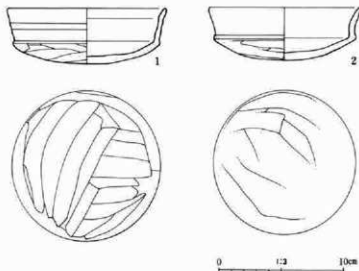
第66図 45・46号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

cm、 P_3 径32cm深さ33cm、 P_4 径43cm深さ40cmを測る。各柱間距離は P_1-P_2 1.63m、 P_2-P_3 1.66m、 P_3-P_4 1.65m、 P_1-P_3 1.75mを測る。周溝は検出された部分においては全周し、その規模は幅35~10cm深さ4~2cmを測る。覆土はローム粒を多く含む黒褐色土が堆積している。

遺物は杯、甕等が覆土より出土している。ほとんどが鬼高期に属するものである。

重複遺構との新旧関係は土層観察より37号住→45号住→36号住である。



第67図 45号住居跡出土遺物

46号住居跡 (第66図)

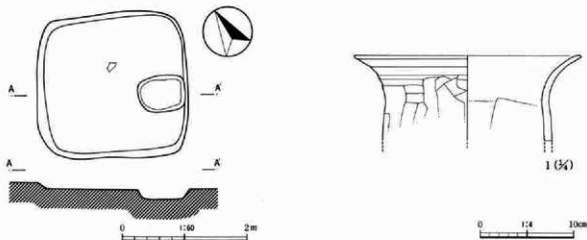
I区F-20グリッドで36号住居跡、45号住居跡と重複して検出された。平面は方形を呈すると推測されるが、西側コーナー部分のみ認められ、全形及び規模等については不明である。壁はやや外傾し、確認壁高は14~9cmを測る。

出土遺物はなし、重複遺構との新旧関係は不明である。

47号住居跡 (第68図、PL.4)

I区C-23、D-23グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は2.31×2.42mで面積は5.10㎡を測る。主軸方向はN-32°Eを指す。壁は外傾し、確認壁高は17~3cmを測る。床面は比較的平坦。ピットは東壁際中央に1基検出された。平面は隅丸長方形で、規模76×58cm深さ18.5cmを測る。形態、規模から貯蔵穴になる可能性がある。

遺物は甕、杯の破片が床面及び覆土から出土しており、すべて鬼高期のものである。



第68図 47号住居跡及び出土遺物

48号住居跡 (第69図)

II区C-24、D-24グリッドに位置する。西半部を崖及び6号土壌により失われているため、全形及び規模は不明。壁は残存状態不良で、確認壁高6.5~3.0cmを測る。

遺物は床面より杯、甕の小破片が出土している。時期は不明である。



第69図 48号住居跡

49号住居跡 (第70図、PL.4)

II区C-23・24、D-23・24グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈する。西側コーナー部は崖に切られ不明である。規模は4.68×4.88m、面積(21.6)㎡を測る。主軸方向はN-54°Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は22~16.5cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が激しい。カマドは

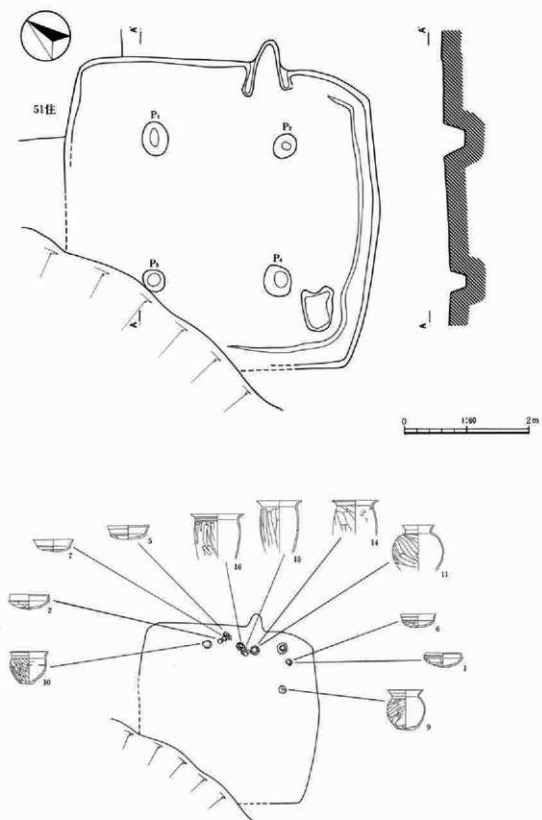
北東壁の中央よりやや南東寄りに構築されている。残存状態は比較的良好で、そこで部、燃焼部、煙道部が残る。規模は長さ90cm、幅80cmを測る。軸方向はN-57°Eを指す。そこで部は壁内に50cm前後張り出す。燃焼部は比較的幅広く、45cm程を測る。煙道部は燃焼部より弱い段を形成して緩い角度で立ち上がる。なお焚口のやや右側に壺上半部と甕の上半破片が重なる状態で出土しているが、支脚用としての二次的利用が推定される。貯蔵穴は南側コーナー部で検出された。規模は51×49cm深さ11cmで、比較的浅いものである。ピットは4基検出された。これらは位置、規模等より主柱穴と考えられる。規模はP₁径53×42cm深さ34cm、P₂径37cm深さ58cm、P₃径35cm深さ25cm、P₄径44cm深さ41cmを測る。なお各柱間距離はP₁-P₂2.12m、P₂-P₃2.11m、P₁-P₃2.02m、P₃-P₄2.00mを測る。又南東壁に沿って幅27~14cm、高さ8~5cmのテラス状施設が検出されているが、これが本住居跡の構造なのか、あるいは住居拡張に伴う旧壁面なのかは判断できなかった。

遺物は床面及び甕土より杯、甕、小形甕、高杯、高台付甕、紡錘車が出土している。高台付甕及び杯の破片については平安時代のもを含むが、ほとんどが鬼高期に属するものである。出土位置はカマド焚口部分及びその周辺に集中している。杯のうちには完形で出土したものもあるが、ほとんどは破片の状態であるため住居廃絶以後廃棄されたものと考えたい。

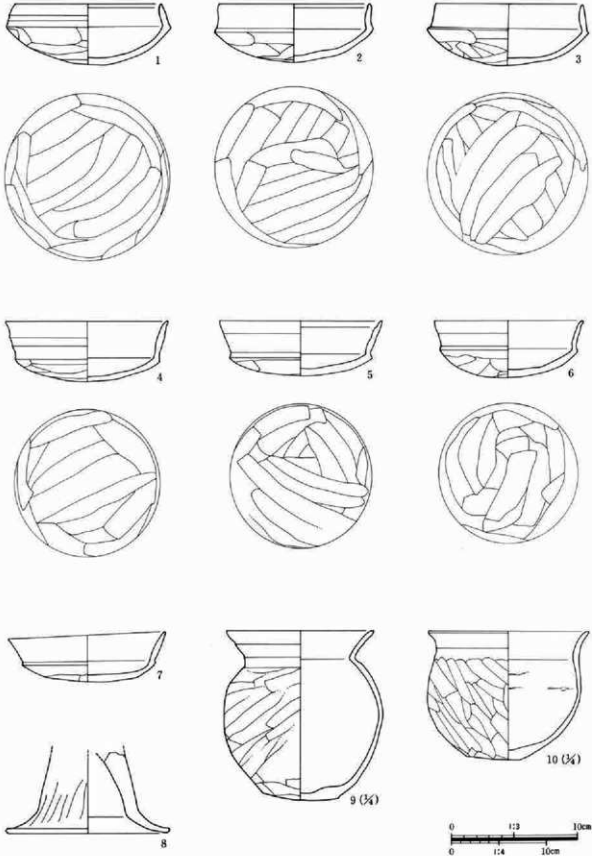
重複遺構は51号住居跡で、新旧関係は不明であった。

50号住居跡 (第73図、PL.4)

II区D-25、E-25グリッドに位置する。平面は歪んだ縦長長方形を呈する。西壁部分は現道路に切られて不明である。規模は(4.23以上)×3.92mを測る。主軸方向はN-87°Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は46~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用し比較的平坦である。カマドは東壁の南隅に構築され、そこで部は不明瞭で、燃焼部と煙道部が残存する。長さ1.24m、幅0.50mを測り、軸方向はS-84°Eを指す。煙道は緩い曲線を描いて立ち上がり、その末端付近で甕彩土器片が出土している。これは煙道部の補強的な意味をもつものかもしれない。貯蔵穴は北東コーナー部で検出された。規模は71×62cm、深さ30cmを測る。ピット

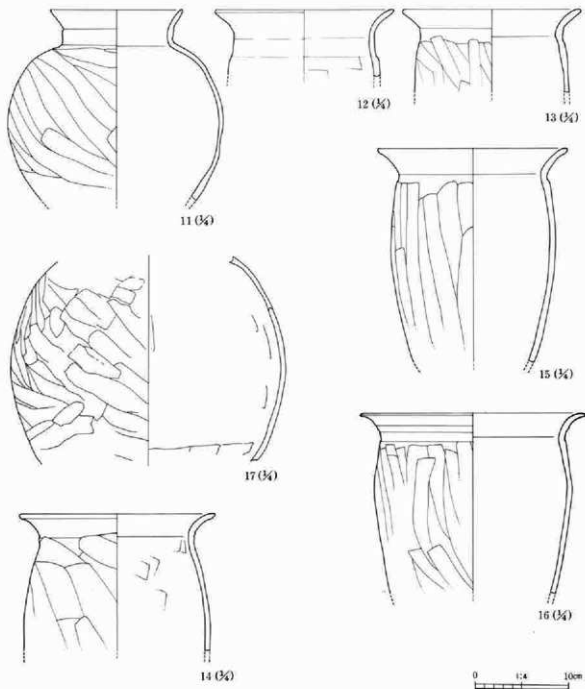


第70図 49号住居跡及び遺物分布図



第71図 49号住居跡出土遺物(1)

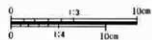
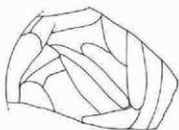
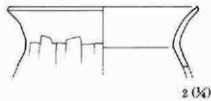
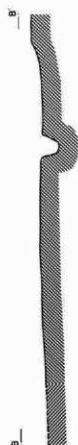
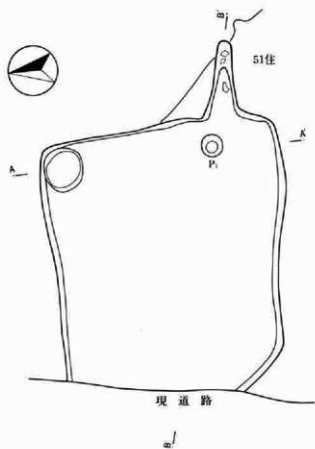
第V章 検出された遺構と遺物



第72図 49号住居跡出土遺物(2)

はカマド焚口手前に1基検出された。規模は径35cm深さ26.5cmを測る。位置から柱穴とは考え難く、その性格については不明である。覆土は黒色土を基調にしてロームブロックを多量に含んでおり、堆積状況がレンズ状ではなくむしろブロック状であるため、人工的埋土の可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、埴輪の破片がカマド周辺を中心に多数出土している。時期は奈良時代のものが主体である。重複遺構との新旧関係はカマド残存状況より51号住→50号住と考えられる。

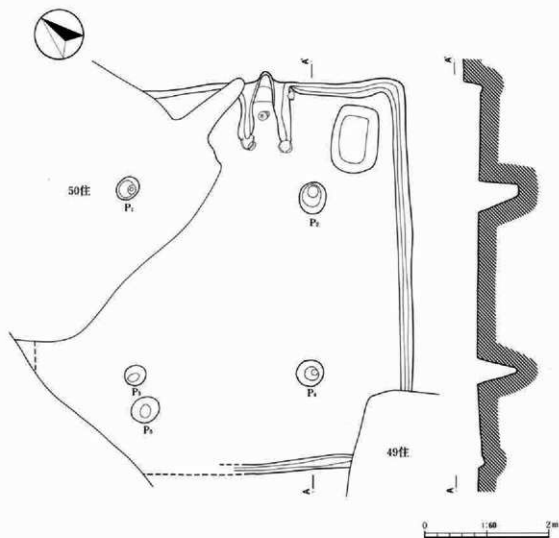


第73図 50号住層跡及び出土遺物

51号住居跡 (第74図、PL.4)

II区D-24・25、E-24・25グリッドに位置する。平面は正方形を呈すると思われるが、西半部については50号住居跡、現道路に切られて不明である。規模は6.90×(4.20以上)mである。主軸方向はN-44°-Eを指す。壁は比較的良好な残存状態を示しており、確認壁高は25~13cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が多い。カマドは北東壁中央よりやや南東寄りに構築されている。規模は長さ1.28m幅は0.85mを測る。軸方向はN-57°-Eを指す。その部は壁内側に1.10m程張り出す形態で、煙道部は燃焼部から段を形成して急角度で立ち上がる。なおその部先端には襖を伏せて焚口部の補強としており、又燃焼部中央には高杯を倒立設置し支脚用としている。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。これは隅丸長方形を呈し、規模108×70cm、深さ85cmを測る比較的大形のものである。ピットは5基検出され、規模はP₁径40×32cm深さ63cm、P₂径51×43cm深さ65cm、P₃径35cm深さ55cm、P₄径44cm深さ64cm、P₅径45cm深さ34cmである。このうちP₁~P₄は主柱穴と思われる。柱間距離はP₁-P₂2.92m、P₃-P₄2.91m、P₁-P₃2.97m、P₂-P₄2.88mを測る。又周溝は南東半の壁に沿って検出されている。規模は幅26~15cm深さ11~1cmを測る。

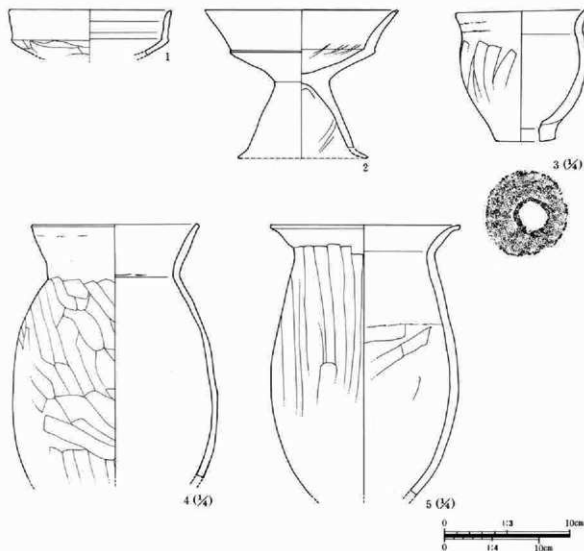
遺物は主にカマドを中心にして出土しており、杯、襖、甌、高杯、白玉等がみられる。時期は鬼高期のも



第74図 51号住居跡

のを主体としている。

重複遺構との新旧関係は51号住→50号住である。

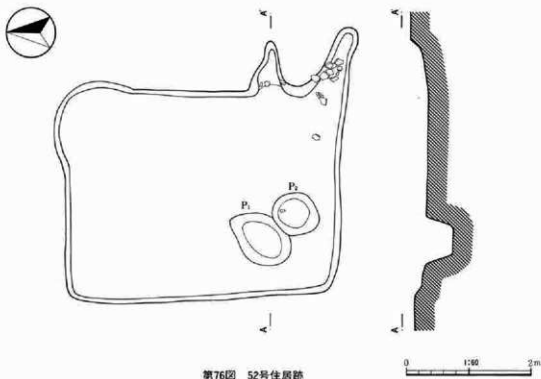


第75図 51号住居跡出土遺物

52号住居跡 (第76図、PL. 4)

III区B-4・5、C-5グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈する。規模は3.50×4.38m、面積は14.20㎡を測る。主軸方向はN-89°-Eを指す。壁は残存状態良好ではば垂直に掘り込まれており、確認壁高は29-10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦で硬質である。カマドは東壁の南端に2基検出された。1号カマドは長さ88cm幅50cm、軸方向S-89°-Eで、2号カマドは長さ128cm幅75cm、軸方向S-74°-Eを測る。両カマドともその部はみられず、燃焼部と煙道部のみを残す。ピットは2基検出され、P₁径110×71cm深さ45cm、P₂径76×67cm深さ49cmを測る。いずれも貯蔵穴と推定されるが、南北に並列しており、カマドがこれに対応するように並列する事から、これを本住居跡が南方へ拡張したものと想定し、それに伴い1号カマド-ピットP₁、2号カマド-ピットP₂のセットで移設したと考えられるようである。

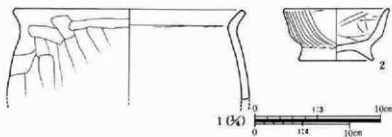
遺物は甕、高台付杯、支脚及び円筒埴輪片が2号カマド内より出土している。平安時代のものである。そ



第76図 52号住居跡

の他に縄文土器加曾利E式の土器片が覆土から多く出土しているが、これは周辺からの流れ込みと考えられる。

重複遺構はなく単独で検出されている。

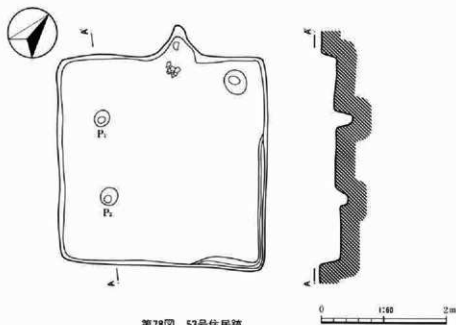


第77図 52号住居跡出土遺物

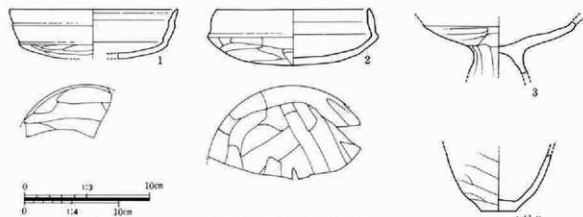
53号住居跡 (第78図、PL. 4)

II区B-15・16グリッドに位置する。ほぼ正方形を呈し、規模は3.33×3.37m、面積11.30㎡を測る。主軸方向はN-37°-Wを指す。壁は残存状態良好で、確認壁高は37-25cmを測る。又床面は地山のローム土を利用し、ほぼ平坦な面を呈する。カマドは北西壁のほぼ中央に構築される。規模は長さ60cm幅72cmを測る。軸方向はN-44°-Wを指す。そで部はみられず、やや幅広い燃焼部をもつ形態を呈する。煙道部は緩い角度で立ち上がる。貯蔵穴は北側コーナー部のカマド右脇で検出された。平面は円形を呈し、規模は38×37cm、深さ38cmを測る。ピットは2基が検出されている。いずれも南西壁より60cm程離れて、壁の走向と並列して掘り込まれている。規模はP₁径25cm、深さ30.5cm、P₂径28cm、深さ20.5cmを測る。以上の2基は位置関係と規模から主柱穴の可能性を考えたいが、4本柱を基本として想定した場合に対応する他の2基については確認できなかった。周溝は東側コーナー周辺に沿って検出された。幅17-8cm、深さ12-2cmを測る。

遺物は杯、高杯、甕、埴輪等がカマド周辺より出土している。いずれも破片で鬼高期のもと思われる。重複遺構はない。



第78図 53号住居跡



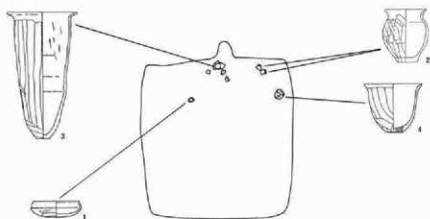
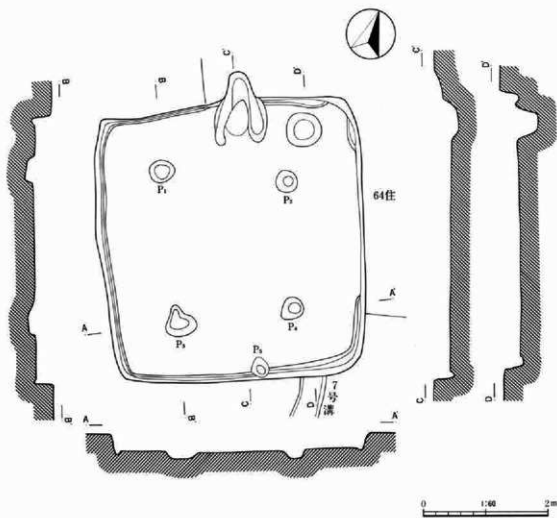
第79図 53号住居跡出土遺物

54号住居跡 (第80図、PL. 4)

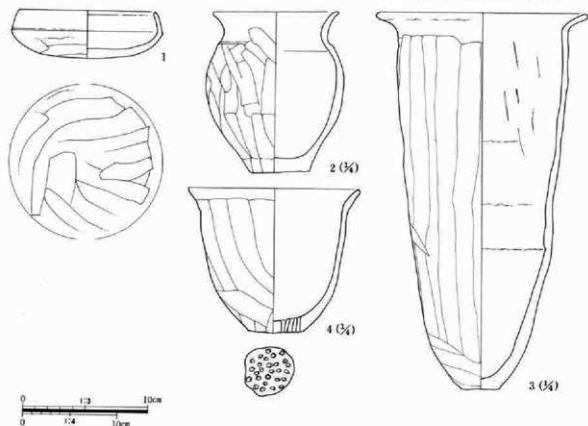
III区G-20・21グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.42×4.29m、面積18.20㎡を測る。主軸方向はN-24°-Wを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は31-16cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、硬質で全体に平坦である。カマドは北壁中央に構築され、残存状態は良好であった。規模は長さ1.15m 幅0.83mを測る。軸方向はN-22°-Wを指す。そで部は壁内へ63cm程張り出す。燃焼面は浅い皿状を呈して窪む。煙道部は段を形成して燃焼部と区別され、比較的緩い傾斜角度で立ち上がる。貯蔵穴はカマド右脇で検出された。円形を呈し、規模は径53cm深さ34cmを測る。ピットは5基検出された。P₁-P₄は位置的に主柱穴と考えられる。規模はP₁径41cm深さ11cm、P₂径35cm深さ13cm、P₃径50×47cm深さ12cm、P₄径39cm深さ12cm、P₅径33cm深さ20cmを測る。柱間距離はP₁-P₂2.03m、P₃-P₄1.90m、P₁-P₂2.42m、P₃-P₄2.00mを測る。周溝は東壁沿いの一部を除いて全周し、幅25-6cm深さ6-2cmを測る。

遺物は甕、杯、甕、小形甕が出土している。全て鬼高期と思われる。

重複遺構との新旧関係は64号住→54号住である。



第80図 54号住居跡及び遺物分布図



第81図 54号住居跡出土遺物

55号住居跡（第82図、PL. 4）

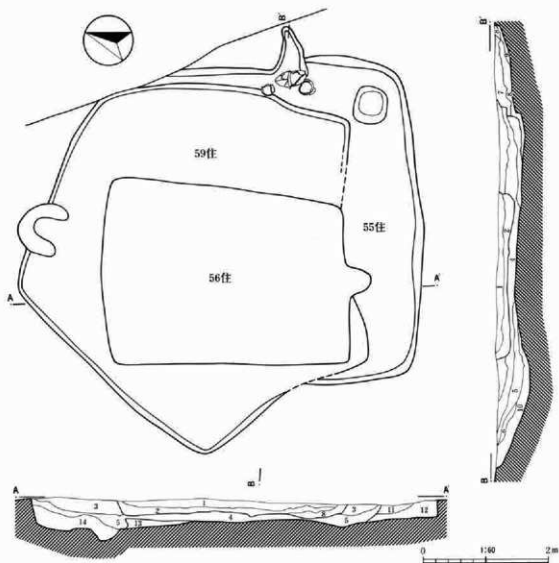
II区H-22・23グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、他遺構との重複により全形は不明。東一西壁間は5.16mを測る。主軸方向はN-73°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は27.5~16.5cmを測る。カマドは東壁のはは中央に構築され、残存状態は比較的良好である。長さ1.10m前後、幅0.86mを測る。軸方向はN-75°-Eを指す。そこで両端部に襷を伏せ、又焚口~燃焼部で2個の襷が合口の「合掌造」様の状態で出土した。これらはおそらく焚口部分の構造補強材に用いられたと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。隅丸正方形を呈し、規模は58×53cm深さ42.5cmを測る。

遺物は本住居跡に伴出するものとしてカマド及び貯蔵穴出土のものが全てと考えられ、鬼高期の襷が主体を占める。重複遺構は56号住居跡、59号住居跡で、新旧関係は土層観察より55号住→59号住→56号住である。

56号住居跡（第82図、PL. 4）

II区H-22・23グリッドに位置する。縦長長方形を呈する。規模は3.95×2.95m、面積は10.90㎡を測る。主軸方向はS-21°-Eを指す。壁は土層断面より26cmを測る。床面は59号住居跡覆土で、中央部がやや高く軟質である。カマドは南壁中央付近に構築されたと思われ、37×56cmの規模で焼土分布が見られる。貯蔵穴、ビット、周溝等は検出されなかった。

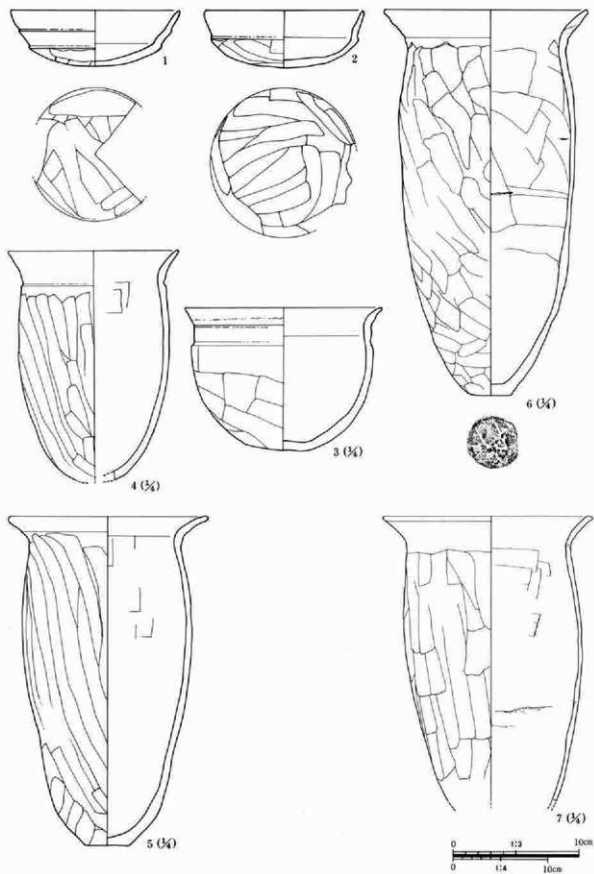
遺物は住居内全体に分布して覆土から破片が出土している。杯、襷、須恵器杯、同壺等が主で、奈良時代のものが主体を占める。



- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土層 | 粘性少なく軟質。鉄分凝集が見られる。 |
| 2 黒色土層 | 粘性少なく硬質。鉄分凝集が若干見られる。 |
| 3 暗褐色土層 | 粘性少なく硬質。鉄分凝集が若干見られる。 |
| 4 黒色土層 | 粘性あり、鉄分凝集が若干見られる。 |
| 5 黒色土層 | 粘性あり、ローム粒を多量に含む。 |
| 6 暗褐色土層 | 黒色土粒とローム粒の混合土。 |
| 7 黒褐色土層 | 焼土アロックを多量に含む。 |
| 8 褐色土層 | 焼土粒と灰を多量に含む。 |
| 9 褐色土層 | 焼土粒と炭化物粒を多量に含む。 |
| 10 黒色土層 | 粘性あり、ロームアロックを多量に含む。 |
| 11 黒色土層 | ローム粒と軽石を多量に含む。 |
| 12 黄褐色土層 | ロームアロックを主体とする。 |
| 13 暗褐色土層 | 黒色土粒とローム土粒の混合土。ロームアロックと炭化物を若干含む。 |
| 14 黄褐色土層 | ロームを主とし、黒色土をアロック状に含む。 |

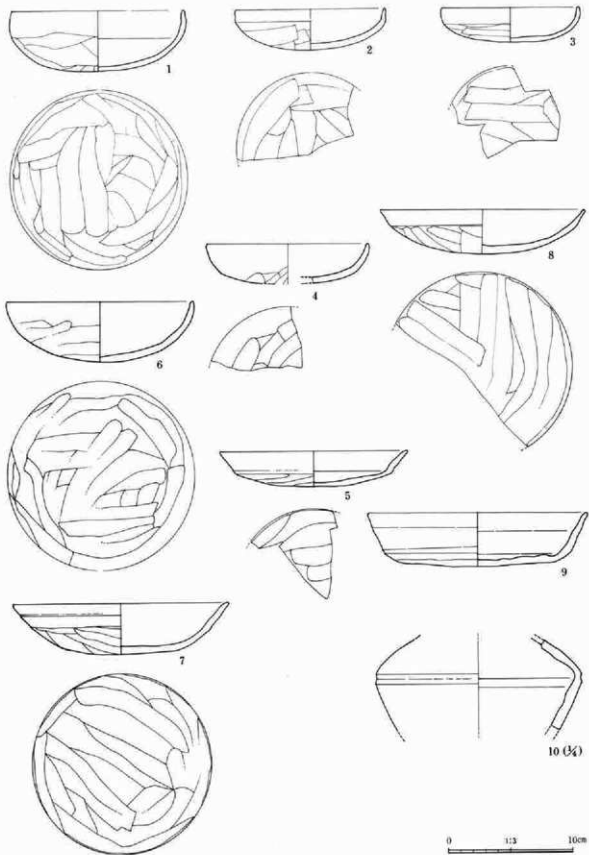
- 1・2・8——56号住居跡覆土
 3・6・13——59号住居跡覆土
 7・9・11・12——55号住居跡覆土
 10・14——木根による覆土

第82図 55・56・59号住居跡

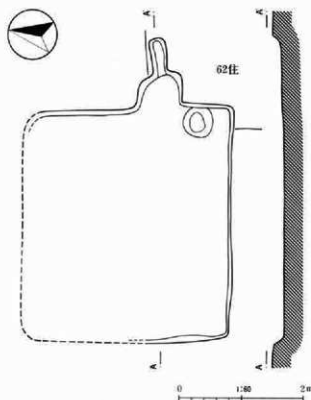


第83図 55号住居跡出土遺物

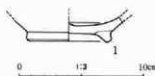
第V章 検出された遺構と遺物



第84図 56号住居跡出土遺物



第85図 57号住居跡



第86図 57号住居跡出土遺物

57号住居跡（第85図、PL. 4）

II区E-24・25、F-24・25グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる、規模は3.80×3.25m、面積は12.30㎡を測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。壁は残存状態不良で北西部は後世の削平のため不明瞭である。確認壁高は27~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築されており、残存状態は比較的良好である。長さ1.13m、幅0.74mを測り、軸方向はN-72°-Eを指す。そで部は見られず、燃焼部は奥行50cm程壁の外に張り出す。煙道は燃焼部レベルとはとんど差をもたず延び、末端部で急角度をなして立ち上がる。貯蔵穴は南東端のカマド右脇で検出された。円形を呈し、径47cm深さ15cmを測る。ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物は高台付碗、杯、甕が若干出土したのみである。時期は平安時代と考えられる。

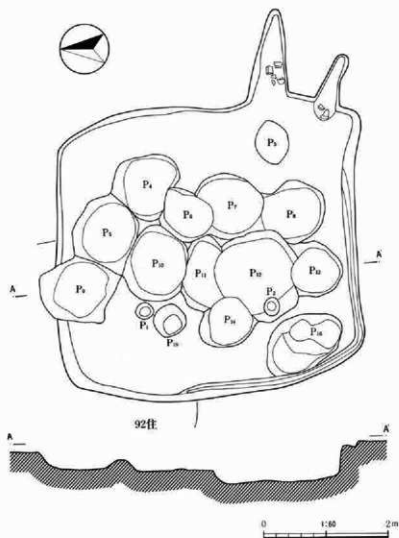
重複遺構は62号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状態より62号住居→57号住居と思われる。

58号住居跡（第87図、PL. 4）

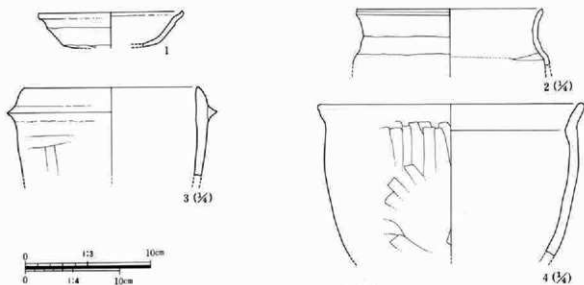
II区D-21・22、E-21・22グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈し、東西壁はやや外方に膨らむ。規模は4.65×4.88mで、面積は22.30㎡を測る。主軸方向はN-88°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は18~1cmを測る。床面はロームブロックの混入する褐色土で、比較的平坦である。カマドは東壁南端に2基が並列して検出された。いずれもそではもたず、煙道が壁外に長く延びる形態である。規模は1号カマド長さ140cm幅66cm、2号カマド長さ88cm幅45cmを測る。軸方向は1号はS-83°-E、2号はS-68°-Eを指す。ピットは16基検出された。規模はP₁径27cm深さ31cm、P₂径23cm深さ20cm、P₃径70×53cm深さ19cm、P₄103×100cm深さ40.5cm、P₅径113×98cm深さ24.5cm、P₆径95×73cm深さ30.5cm、P₇110×100cm深さ32cm、P₈径100cm深さ57cm、P₉径123×108cm深さ25cm、P₁₀径120×104cm深さ18cm、P₁₁径128cm深さ23.5cm、P₁₂径140×137cm深さ49cm、P₁₃径88cm深さ53cm、P₁₄径95cm深さ38cm、P₁₅径50cm深さ43cm、P₁₆径135×90cm深さ53cmを測る。P₁とP₂は主柱穴、P₁₆は貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は幅18~15cm深さ2~4cmを測る。

遺物は甕、杯、羽釜片が覆土より出土する。又カマドより円筒埴輪片が出土している。時期は平安時代中葉頃と思われる。

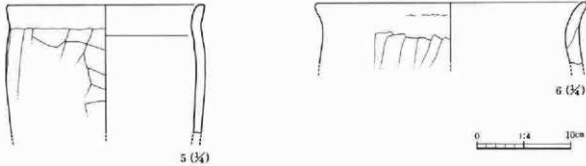
重複遺構は92号住居跡で新旧関係は不明であった。



第87図 58号住居跡



第88図 58号住居跡出土遺物(1)



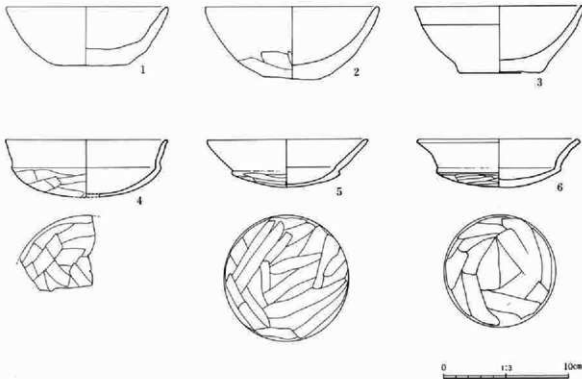
第89図 58号住居跡出土遺物(2)

59号住居跡(第82図、PL.4)

II区G-22・23、H-22・23グリッドに位置する。平面は歪んだ方形と思われるが、他遺構との重複が激しく全形は確認し得なかった。壁はやや外傾し、確認壁高は34cmを測る。床面は地山ローム土と、重複する55号住居跡覆土を利用している。カマドは北壁のやや西寄りに構築されており、煙道部は不明瞭で、本体部分が「馬蹄」形に残存する。長さ74cm幅84cmを測り、軸方向はN-7-Wを指す。貯蔵穴、ピット、周溝等の住居内施設は検出されなかった。

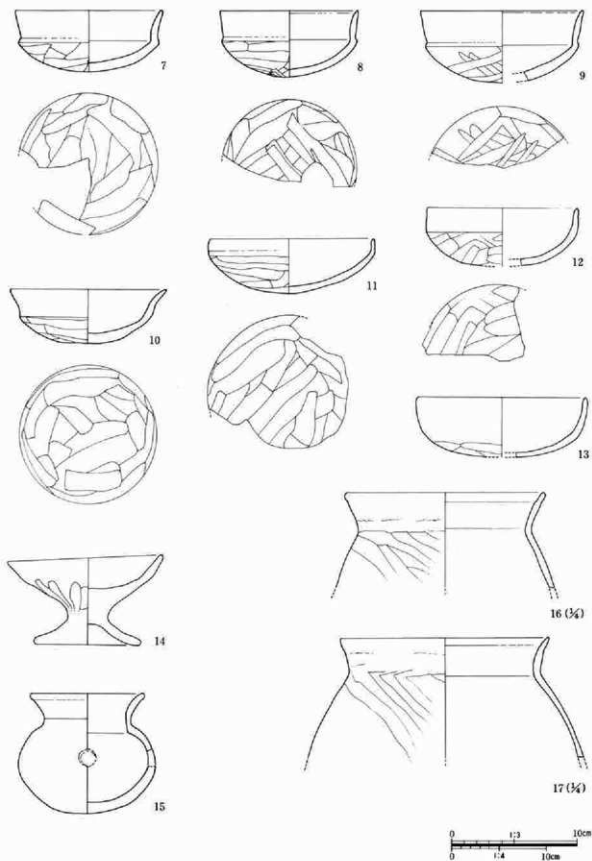
遺物はカマド及びカマド左脇の壁際で出土している。甕、杯、高杯、壺があり、時期は鬼高期のものが主体を占める。なおカマド出土の小形甕(第92図-19)と高杯(第91図-14)は前者が後者の上に載せられた状態で出土した。これは当時のカマド使用状況のまま残されたものと考えられる。

重複遺構との新旧関係は55号住→59号住→56号住であるが、本住居跡はその形態の複雑さから複数の住居跡である可能性も考えられる。

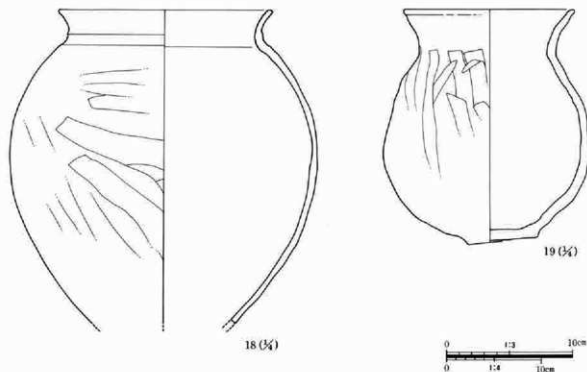


第90図 59号住居跡出土遺物(1)

第V章 検出された遺構と遺物



第91図 59号住居跡出土遺物(2)



第92図 59号住居跡出土遺物(3)

60号住居跡 (欠番)

61号住居跡 (第93図、PL.4)

II区H-24・25グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、東半が調査区外のため全形を知り得ない。北壁-南壁間は3.60mを測る。壁は外傾し、確認壁高58~22cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、比較的平坦で硬質である。周溝は南壁に沿って検出され、幅40cm、深さ13cmを測る。覆土は上層に焼土と灰を含む黒色砂質土、下層にロームブロックを含む黒色土が堆積する。

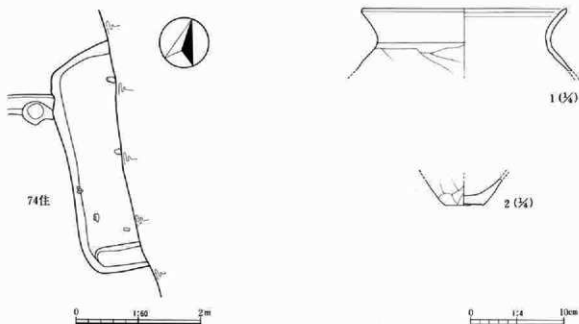
遺物はほとんどが覆土から出土しており、器種は甕が大部分で、すべて小破片のため時期を限定し難いが数量的には鬼高期のものが多い。

重複遺構は74号住居跡で、新旧関係は土層観察より74号住居→61号住居である。

62号住居跡 (第94図、PL.4)

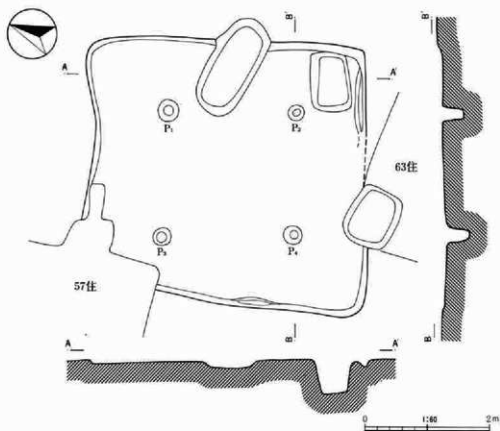
II区E-23・24、F-23・24グリッドに位置する。平面は南辺のやや長い垂直な正方形を呈する。規模は4.20×4.45m、面積は19.0㎡を測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高6~1cmを測る。カマドは東壁中央部に構築されたと思われるが、掘り形しか検出されなかった。長さ165cm、幅75cmの規模で楕円形に掘り込まれている。軸方向はS-83°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部に検出された。平面は長方形で、規模は94×57cm深さ56cmを測る。ピットは4基検出された。これらは位置的に主柱穴と思われる。規模はP₁径33cm深さ30cm、P₂径26cm深さ35cm、P₃径29cm深さ38cm、P₄径30cm深さ36cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.05m、P₃-P₄2.13m、P₂-P₁1.92m、P₁-P₃2.00mを測る。周溝は南壁沿いの貯蔵穴付近で検出され、幅16cm深さ10cmを測る。

第V章 検出された遺構と遺物



第93図 61号住居跡及び出土遺物

遺物は鬼高期の杯片が1点覆土より出土したのみである。重複遺構との新旧関係は62号住→57号住である。

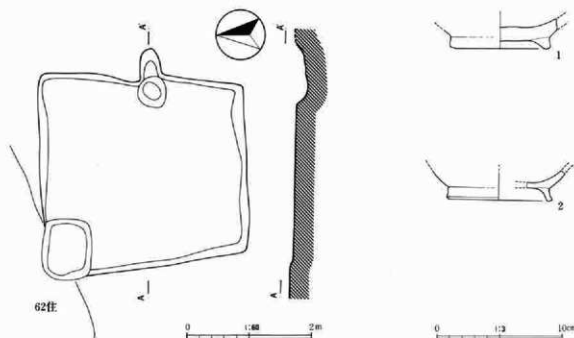


第94図 62号住居跡

63号住居跡 (第95図)

II区E-22・23、F-22・23グリッドに位置する。平面は台形状を呈しており、規模は3.25×3.20mで、面積は9.97㎡を測る。主軸方向はS-87°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高12~1.5cmを測る。床面は地山のローム土とロームブロックを含む埋土を利用する。カマドは東壁中央に構築されたと思われるが、掘り形しか検出されなかった。規模は長さ93cm、幅40cm前後のもので、焚口~燃焼部の底面には径43cm、深さ18cmの浅い皿状の掘り込みがある。軸方向はS-83°-Eを指す。貯蔵穴は北西コーナー部で検出された。平面は隅丸長方形を呈し、規模は96×79cm深さ14cmを測る。ピット及び周溝は検出されなかった。

遺物は須恵器高台付杯の破片が2点出土している。重複遺構は62号住居跡で、新旧関係は不明であった。



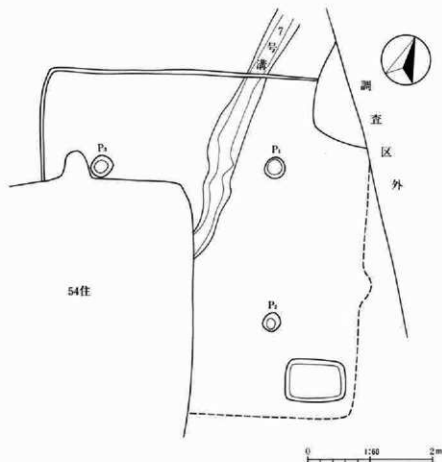
第95図 63号住居跡及び出土遺物

64号住居跡 (第96図, PL. 5)

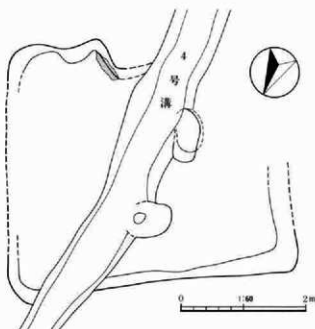
II区G-20・21・22、H-20・21・22グリッドに位置する。平面は正方形を呈すると思われる。東半及び南半部は壁、床面とも残存していない。壁の残存するのは北西部のみで、確認壁高は9~1cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは検出されなかった。貯蔵穴は南東コーナー付近に検出された。平面は隅丸長方形で、規模は96×67cm深さ69cmを測る。ピットは3基検出された。いずれも支柱穴と思われる。規模はP₁径33cm深さ27cm、P₂径28cm深さ23cm、P₃径35cm深さ7.5cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.45m、P₁-P₃2.78mを測る。

遺物は床面より甕片、覆土より高台付椀、小皿、土製円板等の破片が出土している。本住居跡の形態より鬼高期の可能性が考えられるが、時期を限定できるような遺物及び出土状況は認められなかった。

重複遺構との新旧関係は64号住→54号住である。なお北東コーナー部は矩形に屈曲する幅30cm前後の溝状遺構によって切られているが、これは覆土や走向角度より住居跡となる可能性が高い。しかしここは調査区域外にあるため、調査はできなかった。



第96図 64号住居跡



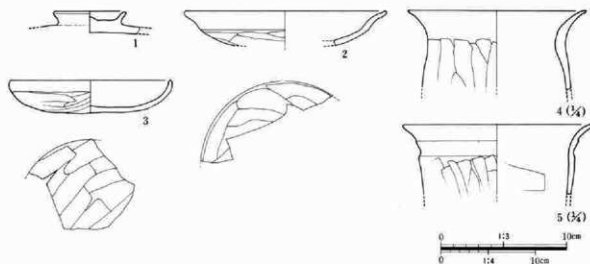
第97図 65号住居跡

65号住居跡（第97図、PL.5）

II区C-15・16、D-15・16グリッドに位置する。平面は歪んだ横長方形を呈する。後世の削平や攪乱が激しく、壁と床面のほとんどは残存状態不良である。規模は(3.85×4.60)mと推定される。壁高は5～2cmを測る。カマドは南壁の東寄りに構築され、長さ65cm幅56cmの規模で残存する。そこで部はほとんど認められず燃焼部は壁外へ張り出す形態を呈すると思われる。ピットは中央部分で2基検出されたが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

遺物は甕、杯、須恵器蓋が覆土より出土しており、時期は奈良時代に属すると考えられる。

重複遺構は4号溝で、新旧関係は不明であった。



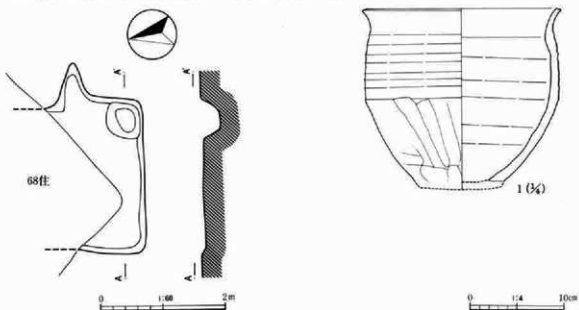
第98図 65号住居跡出土遺物

66号住居跡 (第99図)

II区B-19・20グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、北半は他遺構と重複するため不明。東壁一西壁間は2.46mを測る。主軸方向はS-81°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は6~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が多い。カマドは東壁に構築され、燃焼部と煙道部が残存する。又そで部は認められないが、カマド左壁と右壁では段違いに掘り込まれる。規模は長さ75cm幅50cmを測る。軸方向はS-86°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。隅丸正方形を呈し、規模は57×51cm深さ29cmを測る。

遺物は甕、杯等10数片が覆土より出土している。時期は平安時代のものが主体と考えられる。

重複遺構は68号住居跡で、新旧関係は68号住→66号住である。

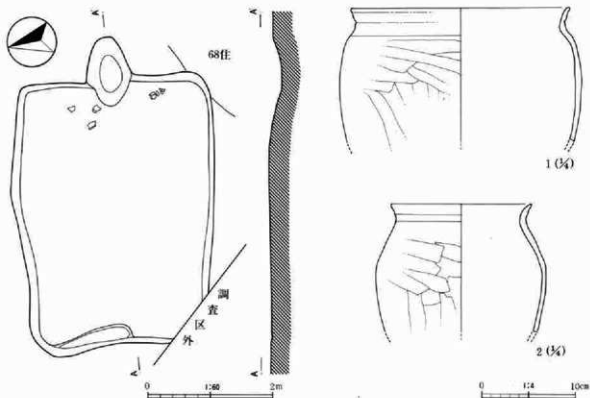


第99図 66号住居跡及び出土遺物

67号住居跡 (第100図、PL.5)

II区B-21・22、C-21グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.3×3.2mで、面積は13.30㎡を測る。主軸方向はS-79°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は9~1cmを測る。おそらく後世の削平を受けたものと思われる。床面は、地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁中央に構築され、そで部は認められず、掘り形のみ検出された。これは楕円形を呈し、径1.10×0.72m、床面よりの深さ約18cmを測る浅い皿状の形態のものである。これより燃焼部を含むカマド本体は壁外側に張り出す形状を呈すると思われる。周溝は明確ではないが西壁北半に沿って検出された。幅25~7cm深さ6~1cmを測る。

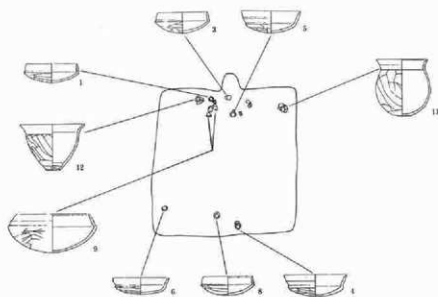
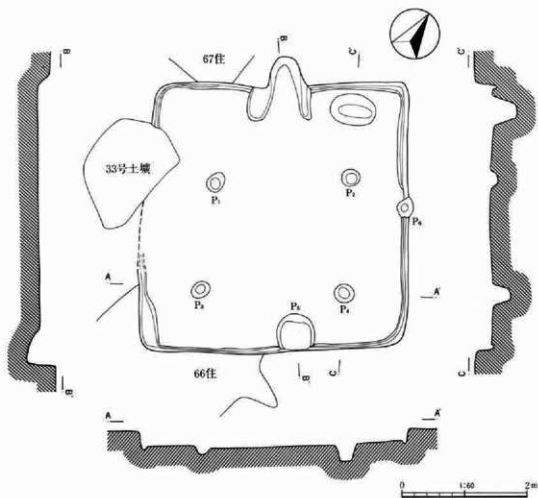
遺物は甕、高台付碗の破片がカマド周辺より10数点出土している。すべて平安時代後半のものと思われる。重複遺構は68号住居跡で、新旧関係は68号住居→67号住居である。



第100図 67号住居跡及び出土遺物

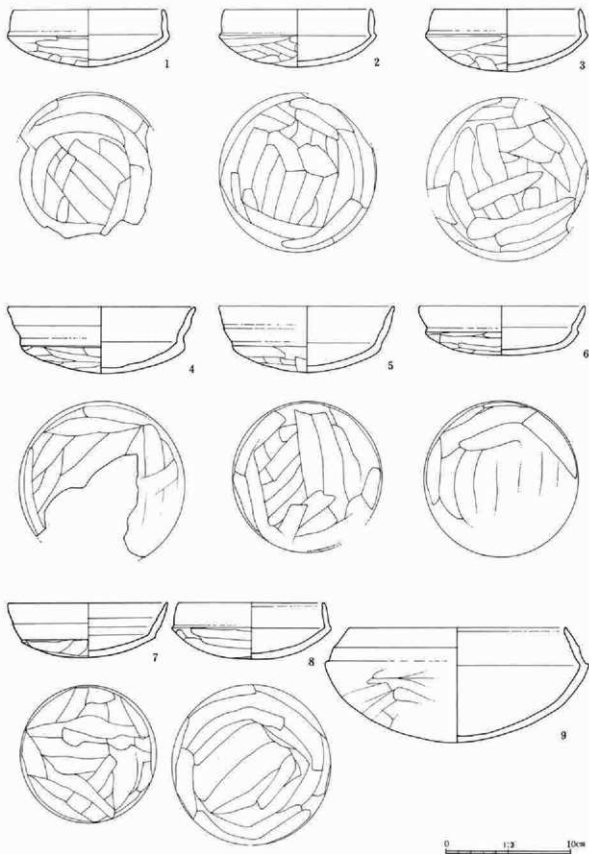
68号住居跡 (第101図、PL.5)

II区B-20・21、C-20・21グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模4.30×4.32m、面積18.20㎡を測る。主軸方向はN-34°-Wを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高32~12cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや盛り上がっている。カマドは北西壁中央に構築され、そで部と燃焼部が残存する。規模は長さ88cm幅101cmを測る。軸方向は、N-33°-Wを指す。そでは50cm程壁内に張り出す。貯蔵穴はカマド右脇で検出され、楕円形を呈し、規模は径72×48cm深さ41cmを測る。ピットは6基検出され、うちP₁-P₄の4基は主柱穴と思われる。規模はP₁径30cm深さ11.5cm、P₂径27cm深さ11cm、P₃径25cm深さ15.5cm、P₄径29cm深さ18cm、P₅径61×57cm深さ23.5cm、P₆径27cm深さ41cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.20m、P₃-P₄2.32m、P₁-P₃1.67m、P₂-P₄1.78mを測る。周溝はほぼ全周すると思われ、幅29~6cm深さ11~3cmを測る。

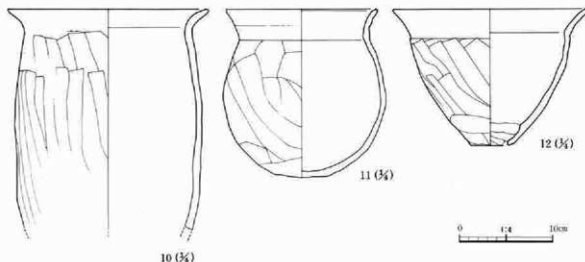


第101図 68号住居跡及び遺物分布図

第V章 検出された遺構と遺物



第102図 68号住居跡出土遺物(1)



第103図 68号住居跡出土遺物(2)

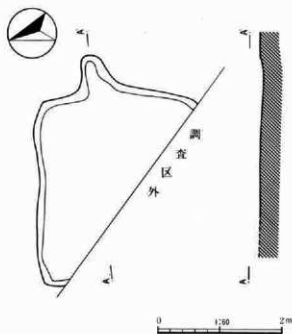
68号住居跡出土遺物は杯を主とし、他に甕、瓶の破片及び紡錘車が出土している。出土分布はカマド周辺及び南壁際の床面上に集中している。時期は鬼高期のものがほとんどである。

重複遺構は66号住居跡、67号住居跡で、新旧関係は68号住→66号住・67号住である。

69号住居跡 (第104図)

II区B-18・19グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、南西半については調査区外のため不明である。東壁-南壁間距離は2.93mを測る。主軸方向はS-86°-Eを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高6~2cmを測る。土層断面の観察によれば壁の上半は後世の削平によりほとんど失なわれているようである。床面は荒れており凹凸が多い。カマドは東壁のやや北寄りに構築されており、燃焼部の掘り込みのみ残存する。規模は長さ70cm、幅93cmを測る。軸方向はS-82°-Eを指す。なお貯蔵穴、ビット、厨溝等の住居内施設に関しては、調査した範囲では全く検出されなかった。

遺物は甕、小皿、高台付椀、灰釉碗の破片が覆土より出土している。これらは全て小片で数量も少ない事から時期を限定するのは難しいが、住居形態等も考慮し、おそらく平安時代後半のものと思われる。



第104図 69号住居跡

70号住居跡 (第105図、PL.5)

II区B-24グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、西半は72号住居跡に切られるため不明である。

第V章 検出された遺構と遺物

北壁—南壁間距離は3.10mを測る。主軸方向はN-66°-Eを指す。壁はほとんど残存せず、土層断面で確認できた壁高は最大値6cmである。床面は暗褐色土を基盤としており軟質である。カマドは東壁のやや北寄りに構築され、燃焼部の掘り込みのみ残存する。長さ64cm、幅63cm程の小規模なものである。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は甕、杯等の破片20数点が出土しており、いずれも鬼高期の新段階に属するものである。

71号住居跡（第105図、PL.5）

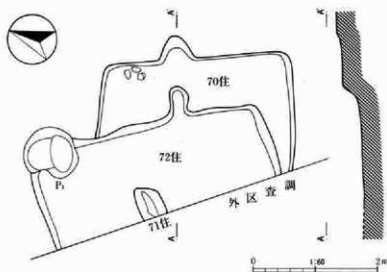
II区A—24グリッド付近に位置する。カマドのそで部のみ検出され、住居跡本体については調査区外にあたるため不明である。

72号住居跡（第105図、PL.5）

II区B—24グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、西半については調査区外にあたるため不明である。北西壁—南東壁間距離は3.28mを測る。主軸方向はN-56°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は27.5~8.5cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、比較的平坦な面を呈する。カマドは北東壁のやや南東寄りに構築されており、燃焼部—煙道部のみ残存する。規模は長さ52cm、幅37cmを測り、軸方向はN-68°-Eを指す。ピットは北コーナー部に1基検出された。階段状あるいは2基のピットの重複とも考えられる形態を呈しており、径90×83cm深さ58cmを測る。これが本住居跡に伴うものかどうかは判明できず、従ってその性格についても不明である。

遺物は器種不明の土器片20数点が出土している。これらの時期は不明である。

重複遺構は70号住居跡、71号住居跡で、新旧関係はカマド残存状況より70号住→72号住→71号住と思われる。



第105図 70・71・72号住居跡

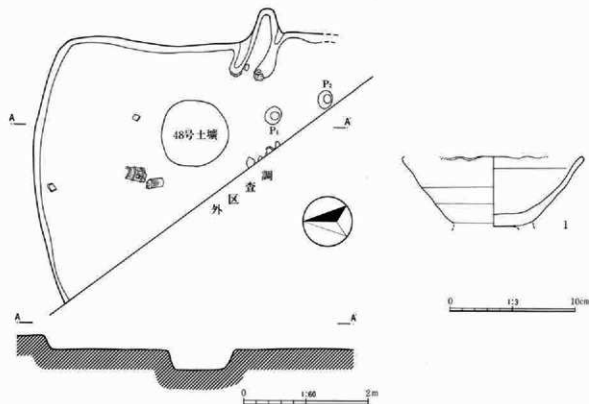
73号住居跡（第106図、PL.5）

II区B—25、III区B—1グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが南西半は調査区外のため不

明である。壁の残存状態は比較的良好で、確認壁高は24~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦な面を呈する。カマドは東壁の中央付近に構築され、そこで部と燃焼部の一部が残存する。煙道は不明瞭ながらも外傾して立ち上がる状態で検出された。規模は長さ1.23m幅0.70mを測る。軸方向はS-74-Eを指す。ピットは2基検出された。規模はP₁径28cm深さ19cm、P₂径27cm深さ25cmを測る。これらのピットは位置的に柱穴の可能性は少ないと思われる。

遺物はカマドで部と中央床面上より円筒埴輪片が出土している。その他には高台付椀、甕片が若干出土している。全体に遺物量は少ないが、平安時代のものが主体を占めている。

重複する遺構は48号土壌で、新田関係は不明である。



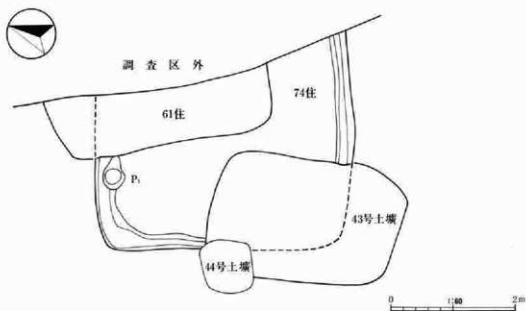
第106図 73号住居跡及び出土遺物

74号住居跡 (第107図、PL. 4)

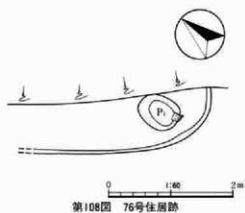
II区H-24・25グリッドに位置する。方形と思われるが、東半は調査区外にあり、又南西コーナー部は他遺構との重複により形状、規模等は不明である。壁はやや外傾し、確認壁高は28~2cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、比較的平坦である。なお床面レベルは重複する61号住居跡床面より30cm程高位にある。カマドは検出されなかった。ピットは北壁際に1基検出された。規模は径35cm深さ64cmを測る。周溝は検出された部分においては壁に沿って全周する。幅40~20cm深さ7~1cmを測る。覆土は炭化物を含む黒色砂質土がブロック状に堆積する。

遺物は時期不明の土器片が数点出土したのみである。

重複遺構は61号住居跡と43号土壌、44号土壌で、土層観察によれば新田関係は61号住・43号壙・44号壙→74号住と考えられる。



第107図 74号住居跡



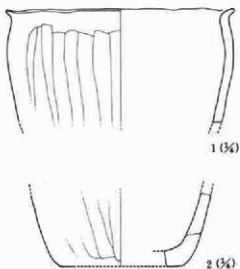
第108図 76号住居跡

75号住居跡 (欠番)

76号住居跡 (第108図、PL.5)

II区H-25グリッドに位置する。北半、東半については形状、規模は不明。南コーナー部より貯蔵穴と思われるピットが検出されている。平面は隅丸長方形を呈し、68×52cm、深さ28cmを測る。その他のピットや周溝等は検出されなかった。覆土は黒色粘質土が堆積する。

遺物は鏝、小皿等平安時代の土器片が10数点出土している。



1 (34)

2 (34)



3



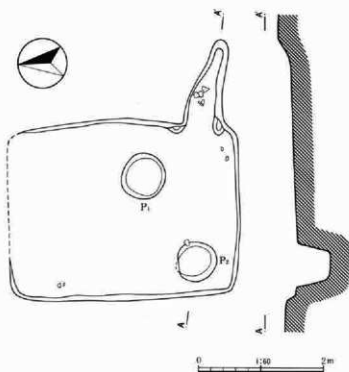
第109図 76号住居跡出土遺物

77号住居跡 (第110図、PL. 5)

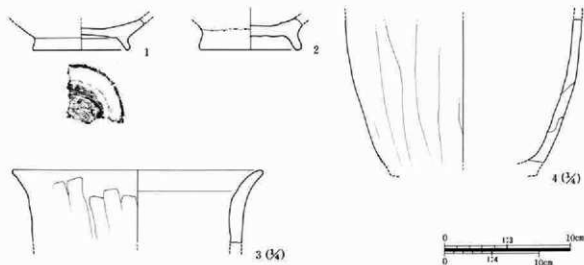
Ⅲ区G-2、H-2×3グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は12.90×3.66mで、面積は10.80㎡を測る。壁は残存状態不良で、確認壁高は25~15cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、比較的平坦である。なお床面は東から西方向に向かって低く傾斜している。カマドは東壁南際に構築されており、残存状態は比較的良好である。規模は長さ1.57m、幅0.70mを測り、軸方向はS-67-Eを指す。そこで部は若干粘土を貼り付けて壁内に張り出させ、燃焼部~煙道部は壁外に1.3m程張り出して構築される。煙道は燃焼部底面からそのまま比較的急角度をもって立ち上がる。ピットは2基が検出された。規模はP₁径71cm深さ22cm、P₂径64cm深さ55cmを測る。これらは位置や形態、規模等から柱穴とは考え難く、P₁に関してはむしろ貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は検出されなかった。覆土は炭化物を多く含む黒褐色粘質土が主で、レンズ状の堆積状況を示す。この事から本住居跡は自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は杯、甕、甕、高台付椀、須恵器甕、土鉢、滑石製模造品等の破片が覆土より出土している。時期は鬼高期と平安時代後半のものが混在する。

重複遺構はなく単独の検出である。



第110図 77号住居跡



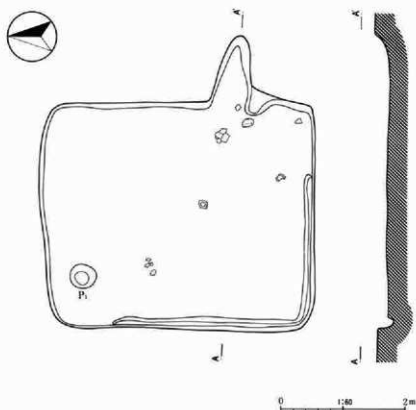
第111図 77号住居跡出土遺物

78号住居跡 (第112図、PL.5)

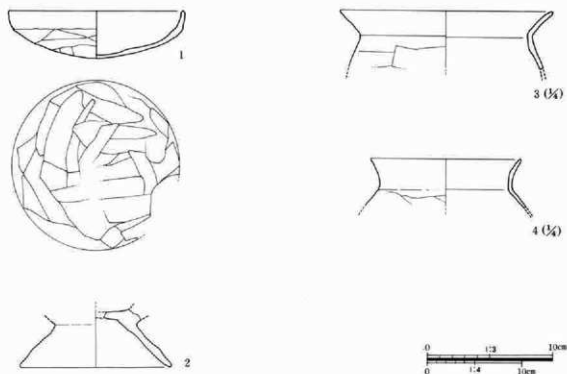
III区F-1・2、G-1・2グリッドに位置する。平面形は横長長方形を呈し、規模は3.85×4.40m、面積は16.20㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態が比較的良好で、やや外傾し確認壁高38cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、比較的平坦な面を呈する。カマドはそで部、燃焼部と煙道の一部が残存する。規模は長さ1.24m、幅0.53mを測り、軸方向はS-82°-Eを指す。左そで部はほとんど確認できないが、右そで部は粘土貼り付けにより若干張り出している。燃焼部は壁外側に張り出し、煙道部との境界は不明瞭である。又煙道は燃焼部底面より強い曲線を描いて急角度で立ち上がる。ピットは北西コーナー付近で1基検出された。平面はほぼ円形を呈し、規模は径42cm、深さ15.5cmを測る。形状と規模は柱穴にふさわしいと思われるが、これに対応する柱穴については確認できなかった。周溝は西壁南半と南壁西半部分に沿って検出された。規模は幅35-20cm、深さ5-2.5cmを測る。深さは全体に一定である。覆土は上層に黒褐色粘質土、下層にロームブロックを含む黒色土が堆積する。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は甕、杯、台付甕、須恵器甕等の土器片及び砥石が出土している。時期は古墳時代後期～平安時代のもが見られるが、数量的には奈良時代のものが多い。なお覆土より出土した須恵器の甕片は前述の77号住居跡出土の土器と極めて類似しており、同一個体破片の可能性も考えられる。

重複遺構は認められず、単独で検出された。



第112図 78号住居跡



第113図 78号住居跡出土遺物

79号住居跡 (第114図、PL.5)

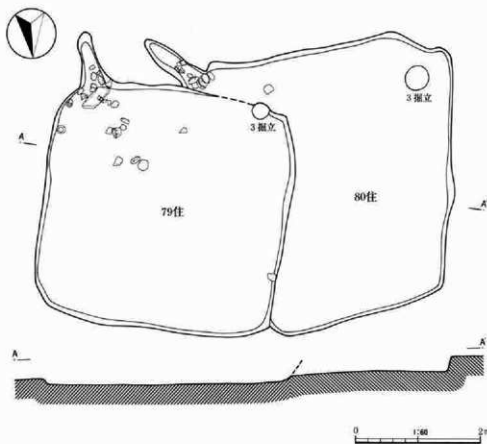
Ⅲ区E-1・2、F-1・2グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は3.85×3.98m、面積は14.6㎡を測る。主軸方向はS-12°-Wを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高は20～4cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で比較的平坦で中央部がやや高い。カマドは南壁の東端部に構築され燃焼部と煙道部が検出された。規模は長さ90cm、幅50cmを測り、軸方向はS-2°-Eを指す。燃焼部と煙道部の境は明瞭でない。両所で部に粘土は見られないが10cm大の円礫を直立させて構造物としている。又焚口部分に長さ50cmの長大な礫が横位で出土したが、これは焚口天井材として用いられたと考えられる。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は認められなかった。

遺物は鏝、羽釜、小皿、杯、須恵器蓋、灰軸輪等の破片約100片及び砥石、土製円板、埴輪、土鍾が出土している。遺物の分布はカマド周辺に集中しており、他には覆土中からの出土が大部分で、床面出土のものは少ない。時期は古墳時代後期～平安時代のもが見られるが、カマド内出土のものは平安時代に限られる。

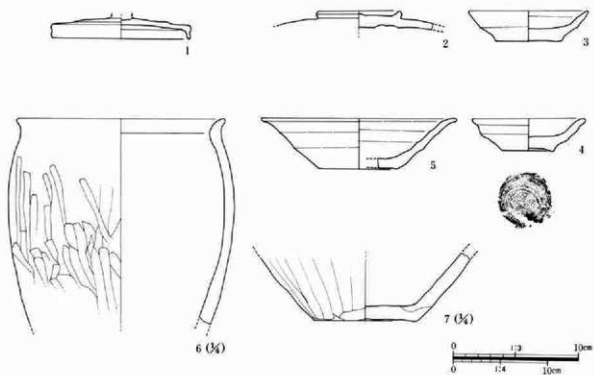
重複遺構は80号住居跡、50号土壌で土層観察より新旧関係は80号住→79号住である。

80号住居跡 (第114図、PL.5)

Ⅲ区E-1・2グリッドに位置する。平面は長方形と思われるが、79号住居跡と重複するため、東半部の形状、規模は不明である。北壁-南壁間距離は2.55mを測る。主軸方向はS-12°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高26～12cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、ほぼ平坦である。なお重複する79号住居跡との床面レベル差は5～7cm程で本住居跡が低位にある。カマドは南東コーナー部に構築され、燃焼部と煙道部が残る。規模は長さ1.19m、幅0.40mを測る。軸方向はS-50°-Eを指す。焚口部分から円筒埴輪片が出土して



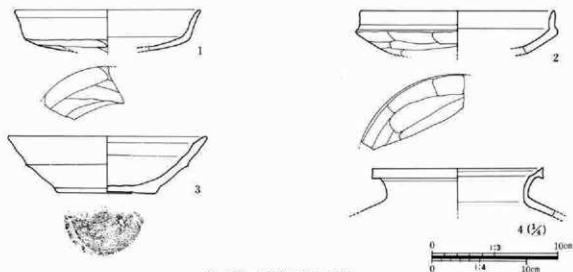
第114図 79・80号住居跡



第115図 79号住居跡出土遺物

いるが、これは焚口構造材として使用されたものと考えられる。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。覆土にはローム粒と炭化物を多く含む黒褐色砂質土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器甕、埴輪片、土鍾が出土している。土鍾は6点が出土しており、いずれも紡錘形を呈するものである。覆土からの出土が多く、時期は古墳時代後期～平安時代のものが見られるが、カマド内出土のものは埴輪を除き平安時代に属する。



第116図 80号住居跡出土遺物

81号住居跡 (第117図、PL.5)

Ⅲ区B-2、C-2グリッドに位置する。平面は縦長長方形と思われるが、西半は重複する82号住居跡に切られるため不明である。規模は北壁-南壁間距離2.80mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ垂直で確認壁高は17~5cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、比較的平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、そで部はなく煙道部のみ検出された。規模は長さ87cm、幅40cmで、軸方向はS-87°-Eを指す。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。住居覆土は黒褐色粘質土が主体で、上位には浅間B軽石を若干含む。堆積状況はレンズ状で自然堆積かと思われる。

遺物は覆土より杯、甕の小片10数点が出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代のものと思われるが重複する82号住居跡出土遺物との区別が困難で、本住居跡の時期を限定できるようなものはない。

重複遺構の82号住居跡との新旧関係は土層観察とカマド残存状況より81号住→82号住と考えられる。

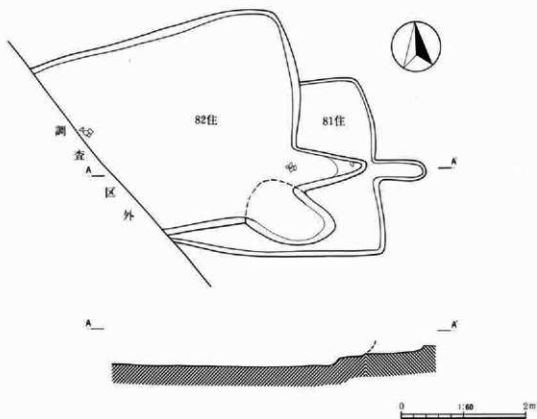
82号住居跡 (第117図、PL.5)

Ⅲ区B-2グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われるが、西南部は調査区外にあたるため不明である。規模は(4.30以上)×3.40mである。主軸方向はN-85°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高40~17cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で比較的平坦である。カマドは、東壁南端部に構築される。そで部は不明瞭。規模は長さ1.20m、幅0.67mを測る。軸方向はS-89°-Eを指す。なお燃焼部と煙道部の境は段をなし、煙道はやや高いレベルでほぼ水平に延びる。住居覆土は黒色粘質土で、堆積状態はレンズ状である。

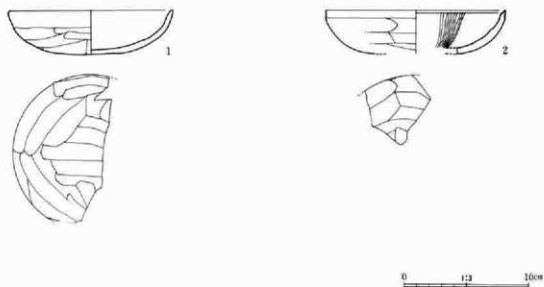
遺物はすべて覆土からの出土で、杯、甕、須恵器甕等の破片約50点である。古墳時代後期～奈良時代のものと思われるが、図示(第118図)したもの以外は小破片で時期を限定できるようなものは少ない。

第V章 検出された遺構と遺物

重複遺構は81号住居跡であるが、その他に南東コーナー部のカマド右脇に不整楕円形のピットが検出されている。規模は(1.5×0.9)mで深さ18cm前後を測る。これが単独遺構かあるいはいずれかの住居跡に伴うものかは判明できなかった。



第117図 81・82号住居跡



第118図 82号住居跡出土遺物

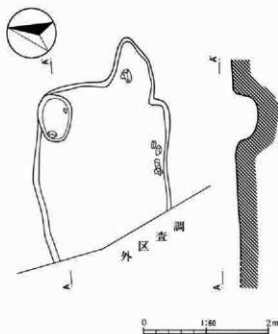
83号住居跡 (第119図、PL. 5)

Ⅲ区B-4 グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。南西部は調査区外にあたるため不明である。規模は(2.70以上)×2.20mを測る。主軸方向はN-68°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は20~6cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、比較的平坦であるが、小さな窪みも若干見られる。カマドは東壁のやや南寄りに構築される。そこで部はみられないが、壁をそのまま利用したものであろう。煙道部は不明瞭である。規模は長さ78cm幅80cmを測る。燃焼部右壁側は崩壊が激しく本来の形状を残していないようである。なお燃焼部中央には20cm大の楕円形の礫が直立して出土したが、これは支脚として用いられたと考えられる。貯蔵穴は北東コーナー部で検出され、平面は楕円形を呈する。規模は72×45cm深さ35cmを測る。

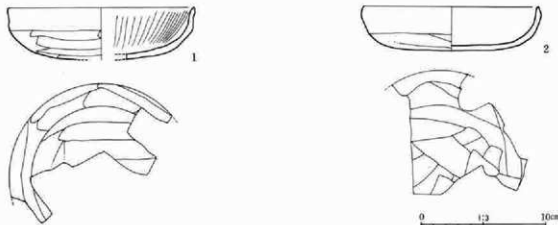
その他の住居内施設は検出されなかった。住居覆土はロームブロック、粘土、焼土を含む黒褐色土が堆積する。

遺物はカマド、南壁際、貯蔵穴周辺から杯、甕、須恵器杯、同甕等の破片が出土している。奈良~平安時代のものが見られるが、数量的には奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構はなく単独で検出された。



第119図 83号住居跡



第120図 83号住居跡出土遺物

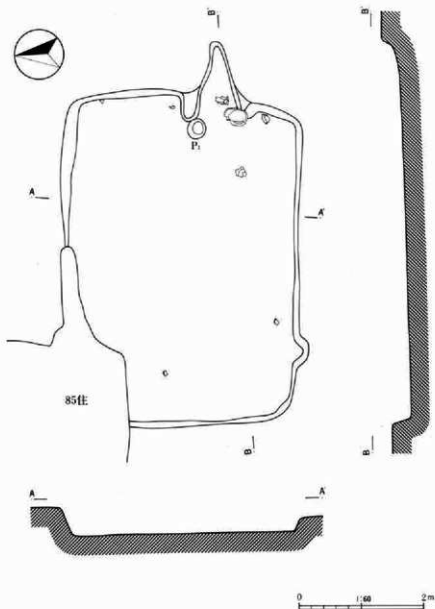
84号住居跡 (第121図、PL. 5)

Ⅲ区D-3・4、E-3・4グリッドに位置する。平面は縦長長方形で、規模は5.35×3.85m、面積は推定値で(19.20)㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は46~9cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、比較的平坦で硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、

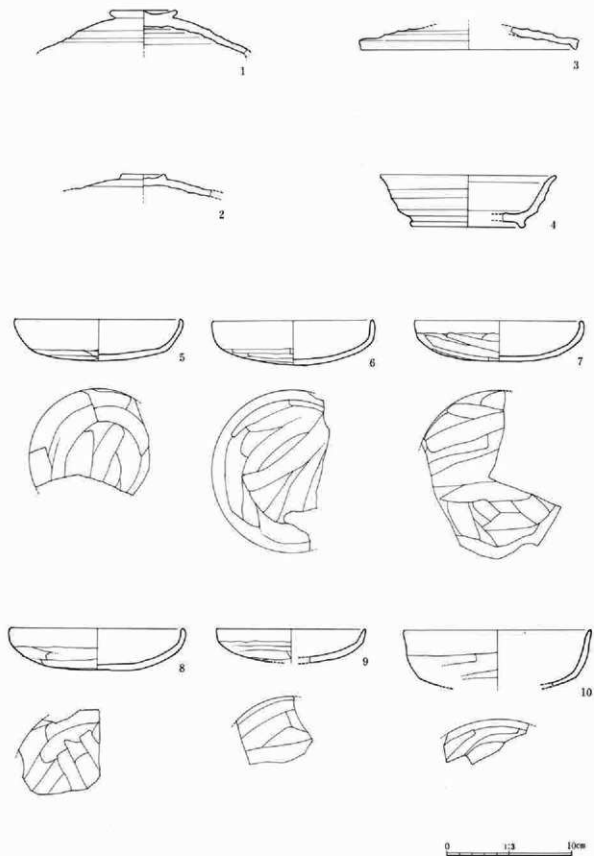
ほぼ全形が残る。長さは1.28m幅は1.25mを測る。軸方向はS-87°-Eを指す。そで部は壁内側に40cm程張り出す。右そで端部には龕が伏せられており、そでの補強材として用いられている。燃焼部はしだいに狭まり煙道部に続く。煙道は緩い傾斜で延びており、末端部で急激に立ち上がる。ヒットはカマド左そでに隣接して検出された。規模は径30cm深さ19cmを測る。位置的に柱穴とは考え難く、その性格については不明である。住居覆土は浅間B軽石を含む黒褐色粘質土を主体とし、レンズ状の堆積状態を示す。

遺物はカマド周辺及び覆土中から多量の土器片が出土している。器種は杯、甕、須恵器杯、同蓋等があり数量的には杯と甕が主となる。時期は古墳時代後期～平安時代のものであるが、鬼高期新段階～奈良時代のものが圧倒的に多い。

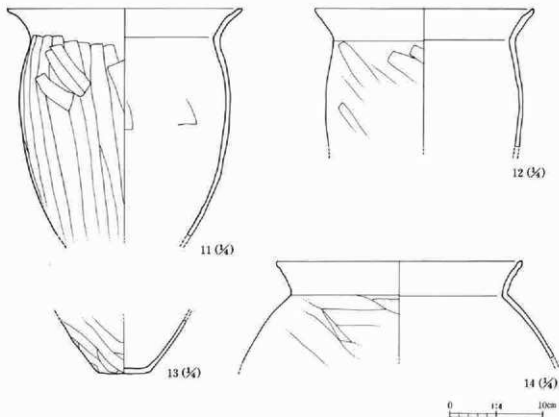
重複遺構は85号住居跡で、新田関係はカマド残存状況より84号住→85号住である。



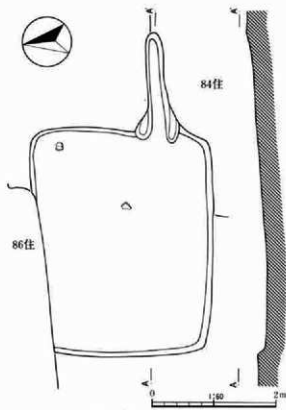
第121図 84号住居跡



第122図 84号住居跡出土遺物(1)



第123図 84号住居跡出土遺物(2)



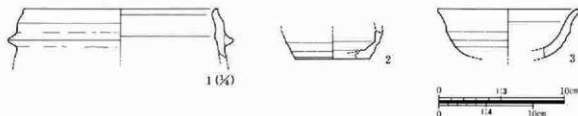
第124図 85号住居跡

85号住居跡(第124図、PL.5)

Ⅲ区C-5、D-4・5グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は3.60×2.90m、面積は推定値で10.0㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高16～6cmを測る。床面は、地山の黒褐色粘質土で、やや凹凸がある。カマドは東壁の南寄りに構築される。そで部は若干壁内側に張り出すが、燃焼部は壁外側に築かれる。規模は全長1.73m、幅0.70mを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。燃焼部は狭小で幅25cm前後を測る。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土は炭化物、粘土、ローム粒を含む黒褐色粘質土で、堆積状態はレンズ状である。

遺物は杯、高台付碗、羽釜、小形壺、磁石等が出土する。カマド及び覆土からの出土が多い。時期はほとんど平安時代後半期のものに限定される。

重複遺構は84号住居跡、86号住居跡で、判明した新旧関係は84号住→85号住であった。



第125図 85号住居跡出土遺物

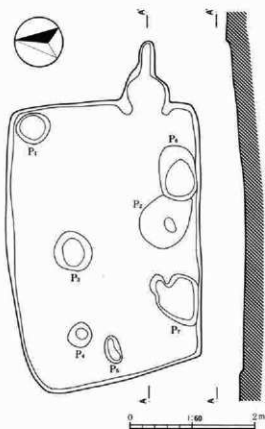
86号住居跡 (第126図、PL. 6)

Ⅲ区D-5・6、E-5・6グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.58×3.10mで、面積は13.80㎡を測る。主軸方向はN-80°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高40~3cmを測る。床面は黒色土とローム土の混合土でやや軟質。カマドは東壁の南際に構築される。そで部は若干壁内側に張り出し、本体の大部分は壁外側に張り出す。規模は全長1.16m幅0.82mで軸方向はN-89°-Eを指す。燃焼部は60×50cm程の規模で、煙道部長は50cm程を測る。ピットは7基検出された。規模はP₁径50cm深さ不明、P₂径80×75cm深さ11cm、P₃径62cm深さ53.5cm、P₄径38cm深さ14cm、P₅径45×25cm深さ16.5cm、P₆径93×60cm深さ18.5cm、P₇径104×72cm深さ15cmを測る。なおP₁、P₆、P₇は規模や形態、位置等から貯蔵穴の可能性も考えられる。しかしその他のピットで柱穴と考えられるようなものはない。住居覆土は焼土、灰、ローム粒を多く含む灰褐色土で、ブロック状の堆積状態を示す。

遺物はカマド及び床面上より多量に出土している。

器種は甕、須恵器器が主体で、須恵器杯、高台付碗、羽釜、皿、短頸壺等が見られる。なおピットP₁、P₂、P₄より高台付碗、杯が出土している。時期は平安時代(10世紀代)と思われるものが大部分を占める。

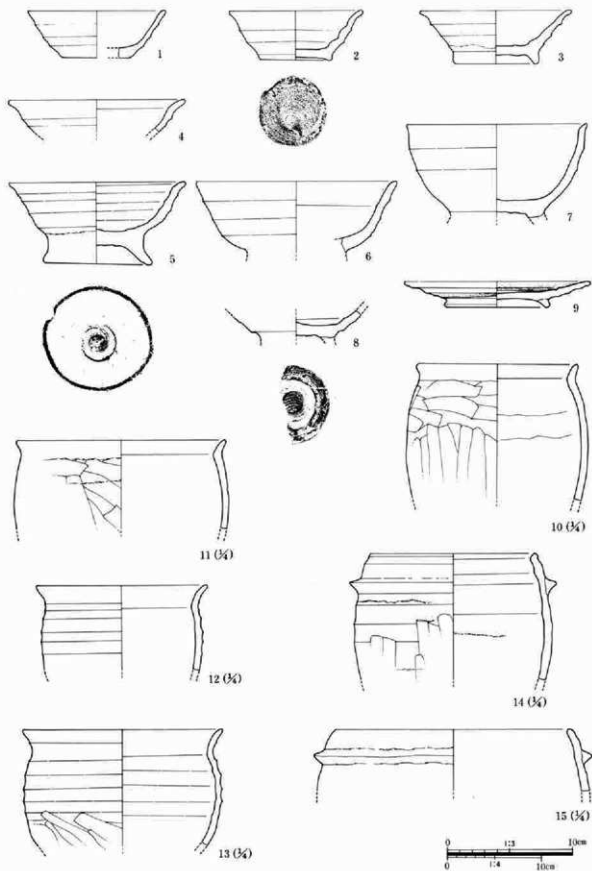
重複遺構は120号住居跡で、土層観察より新旧関係は120号住→86号住である。



第126図 86号住居跡

87号住居跡 (第128図、PL. 6)

Ⅲ区C-6・7、D-6・7グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.16×3.35m、面積13.30㎡を測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高22~7cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、ほぼ平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。規模は全長89cm、幅64cmを測る。軸方向はS-86°-Eを指す。そで部は若干壁内に張り出す。左そで部には15cm大の角礎が据えられており、おそらく補強材として用いられたと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。平面は円形を呈し、規模は69×62cm深さ32cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径35cm深さ15cm、P₂径45cm



第127図 86号住居跡出土遺物

深さ14cm、P₃径54×36cm深さ19cm、P₄径62×45cm深さ39cmを測る。P₁とP₂は規模がほぼ同一であり、又その位置的な関係から柱穴になる可能性もある。P₃とP₄については性格不明である。住居覆土は軽石を含む茶褐色土が堆積し、鉄分の凝集が多量に見られる。

遺物は簾、羽釜を主体としその他に杯、須恵器甕を含む。又土唾も2点出土している。出土位置はいずれも覆土中であった。時期は平安時代に属するものを主体としている。

重複遺構はなく単独で検出された。

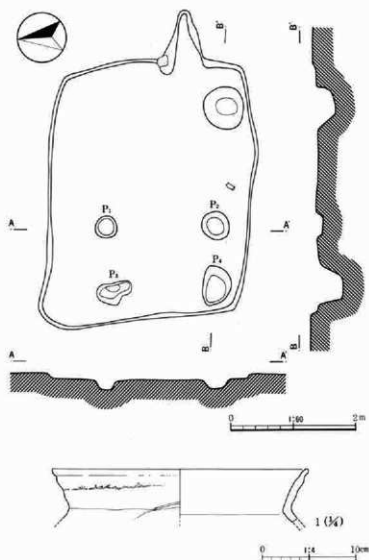
88号住居跡(第129図、PL. 6)

III区D-7・8、E-7・8グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われ、規模は3.60m×2.50mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高25cm前後を測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、比較的平坦面を呈する。カマドは、東壁南端に構築される。その部は確認されず、燃焼部のみ検出された。規模は長さ70cm幅57

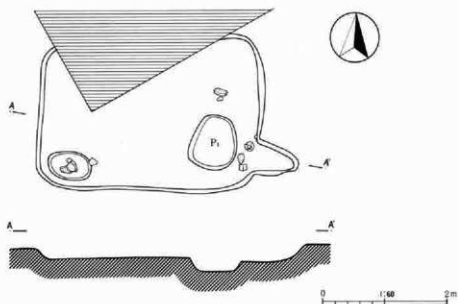
cmを測る。燃焼部前方の床面上に伏せた椀と円礫が並んで出土した。これは焚口部の構造と関係をもつものと思われる。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径70×48cm深さ16cmを測る。内部より角礫・円礫が3点出土したが、その性格については不明である。ピットはカマド前方部で1基検出された。これは卵形の平面形を呈し、規模は径87×76cm深さ15cmを測る。底面は比較的平坦で、攪乱層や掘り形ではないと考えられる。又本住居跡に伴うと考えた場合、カマド前面に位置する事からその性格はカマドの煮沸作業に伴う施設と推定されるが、それ以上の具体的な機能を推測しようような痕跡については検出されなかった。住居覆土は炭化物を多く含む鉄分凝集の見られる黒色粘質土で、堆積状態はブロック状であり、人為的な埋土とも解釈できるものである。

遺物は杯、高台付椀を主とし、これに灰軸椀、簾、羽釜、埴輪片等が数点加わる。時期は平安時代のものに限られる。

重複遺構はみられず、北西半部を後世の攪乱による土壌で切られている。



第128図 87号住居跡及び出土遺物



第129図 88号住居跡



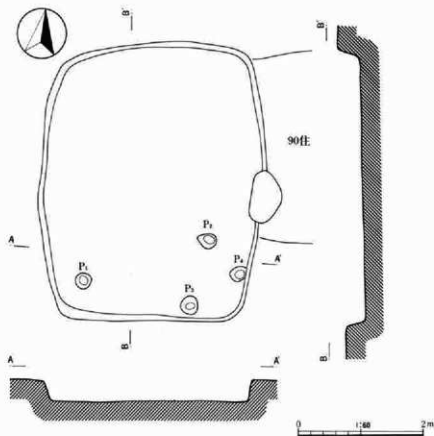
第130図 88号住居跡出土遺物

89号住居跡 (第131図、PL.6)

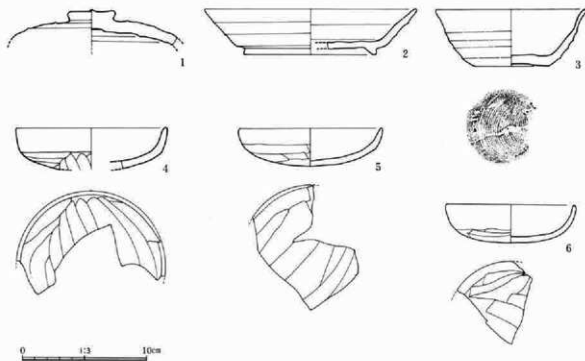
III区F-7、G-6・7グリッドに位置する。平面は胴張りの隅丸長方形を呈し、規模は4.40×3.45m、面積14.6㎡を測る。主軸方向はN-17-Wを指す。壁は比較的残存状態良好で、確認壁高38~31cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用しており、平坦で硬質である。カマドは検出されなかった。ピットは4基が検出された。規模はP₁径25cm深さ21.5cm、P₂径31×23cm深さ13.5cm、P₃径30cm深さ31cm、P₄径26×22cm深さ12cmを測る。いずれも住居南半部の壁際に集中する傾向が見られる。これらは規模、形状ともにほぼ同じものであるが、その性格については不明である。なお東壁の中央部に不整形円形ピットが検出されたが、これは重複する90号住居跡に伴うものと考えられる。

遺物は覆土より杯、須恵器蓋、同杯、甕等が出土しており、数量としては甕片が最も多い。時期は奈良時代のものを主体としており、その他に古墳時代初頭の甕片がみられる。

重複遺構は90号住居跡で、新旧関係は土層観察からは判断できなかったが、出土遺物の時期を参考にすれば89号住→90号住と推定される。



第131図 89号住居跡



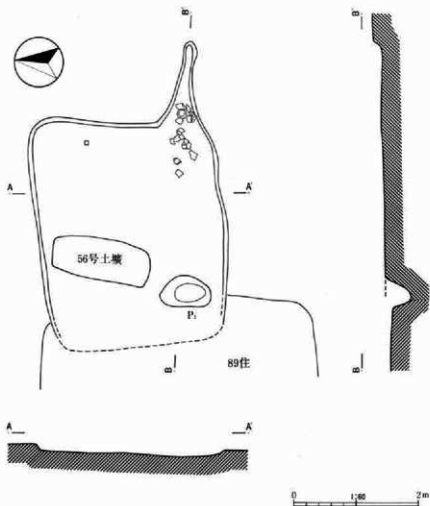
第132図 89号住居跡出土遺物

90号住居跡 (第133図、PL.6)

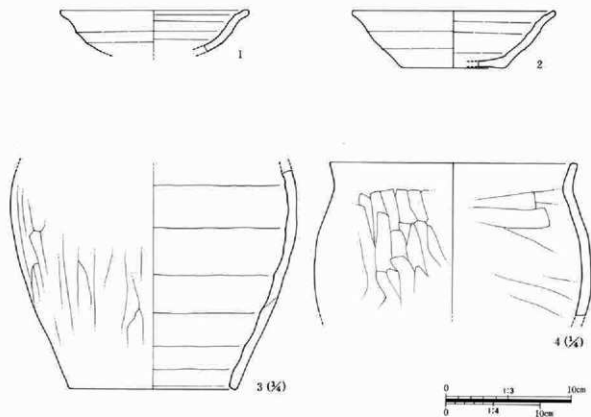
Ⅲ区G-6・7、H-6・7グリットに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は3.70×3.05m、面積14.7㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は外傾し、残存状態は不良で、確認壁高は24-6cmを測る。床面は凹凸が多く、北側がやや高くなっている。カマドは東壁南端に構築され、燃焼部と煙道部が検出された。その部は確認できなかったがおそらく壁をそのまま利用したと思われる。規模は全長1.38m、幅0.74mを測る。軸方向はS-85°-Eを指す。燃焼部～焚口部で円筒埴輪と羽釜片が出土しているが、特に埴輪については天井部補強材として用いられたものであろう。ピットは南西部隅に検出された。不整楕円形を呈し、規模は83×49cm深さ41cmを測る。これは貯蔵穴の可能性も考えられる。覆土は浅間B軽石と炭化物を含む褐色土で、レンズ状の堆積状態を示す。

遺物はカマド周辺の床面及び覆土下位から出土している。器種は甕、杯、羽釜、甑、埴輪等の破片で、時期は平安時代のものを主体とする。

重複遺構は89号住居跡、56号土塼で、新旧関係は89号住→90号住→56号塼と推定されるが、土層観察では確認できなかった。



第133図 90号住居跡



第134図 90号住居跡出土遺物

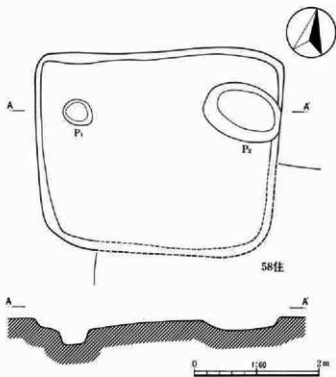
91号住居跡 (穴番)

92号住居跡 (第135図)

II区D-22・23、E-22・23グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南東部は58号住と重複するため不明である。規模は3.92×(3.33)mを測る。壁は残存状態不良で、確認壁高12~2cmを測る。床面は黒色土とロームブロック混合土を埋めたもので、軟質である。カマドは検出されなかった。ピットは2基検出され、P₁は円形を呈し、規模は径40cm深さ23.5cmを測る。P₂は楕円形を呈し浅い皿状の底面をもつもので、規模は径128×90cm深さ23.5cm前後を測る。形状からP₁は住居に伴う施設と思われるが、P₂は掘り形跡の痕跡と考えられる。

遺物はない。

重複遺構との新旧関係は不明である。



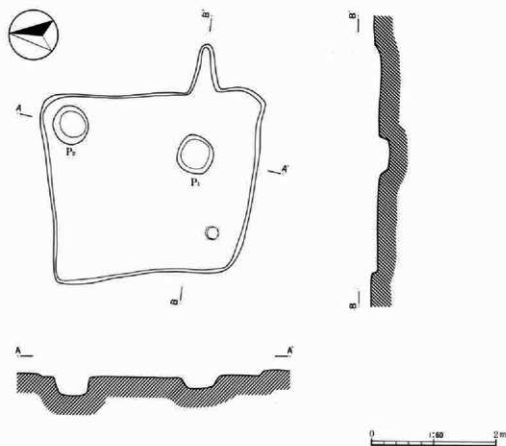
第135図 92号住居跡

93号住居跡 (第136図、PL.6)

Ⅲ区G-3・4グリッドに位置する。平面は台形に近い横長方形を呈し、規模は3.00×3.55m、面積は9.8m²を測る。主軸方向はN-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高8~3cmを測る。床面は黒色土を利用し、比較的平坦。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、燃焼部と煙道部が検出された。規模は全長76cm幅50cmを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。そで部はおそらく壁を利用したと思われる、本体の大部分が壁外に張り出すものと思われる。ピットは2基検出された。P₁はカマド前方70cm程の位置、P₂は北東コーナー部に位置する。規模はP₁径60×55cm深さ16cm、P₂径60×55cm深さ17.5cmを測る。P₂は位置や形状から貯蔵穴の可能性が考えられるが、P₁の性格については不明である。

遺物は覆土より箸、壺、須恵器蓋、埴輪等の小破片が20数点出土している。時期は奈良~平安時代のものである。

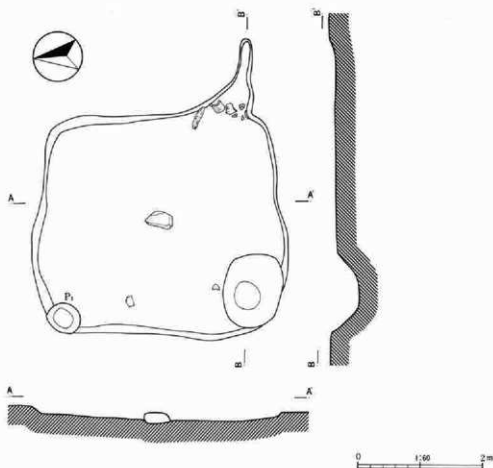
重複遺構はなく単独で検出された。



第136図 93号住居跡

94号住居跡 (第137図)

Ⅲ区H-4・5、I-4・5グリッドに位置する。平面形は歪んだ横長方形を呈し、規模は3.61×4.12m、面積は13.7m²を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で、特に北側については後世の擾乱によりかなり削平されている。確認壁高は17cm前後を測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、凹凸が激しい。カマドは、東壁南端部に構築される。長さ120cm幅69cmを測る。軸方向はS-71°-Eを指す。本体は住居跡の

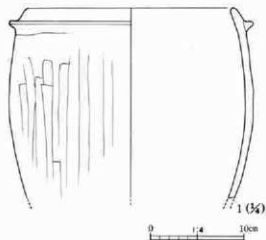


第137図 94号住居跡

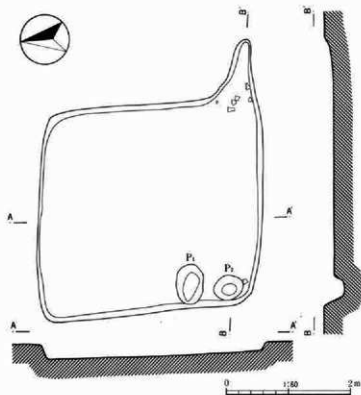
壁を掘り込んで構築されるが、この住居壁部分に円筒埴輪片を直立させそでの補強材としている。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。平面は垂んだ楕円形を呈し、規模は径130×83cm、深さ39cmを測る。ピットは北西コーナー部で検出された。規模は径47cm深さ37.5cmを測る。その性格については不明である。住居覆土は浅間B軽石と焼土を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は簀、羽釜、埴輪の破片が20点程出土している。カマド内と床面から出土したものは平安時代のものに限られる。又中央床面上に40cm大の扁平な角礫が出土したがその使用目的については不明である。

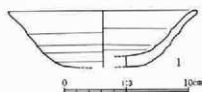
重複遺構は95号住居跡で、北東コーナー部分でわずかに重複するのみで、新旧関係は土層観察によっても判明できなかった。なお西側部分は前述のように後世の擾乱によりかなり破壊を受けているが、この擾乱自体は不定形で、いかなる遺構なのかは判明できなかった。



第138図 94号住居跡出土遺物



第139図 103号住居跡



第140図 103号住居跡出土遺物

95号・96号・97号・98号・99号・
100号・101号・102号住居跡（早川河川
改修地域調査分）

103号住居跡（第139図、PL. 6）

Ⅲ区H-8、I-8・9グリッドに位置する。やや歪んだ正方形を呈し、規模は3.33×3.58m、面積12.0m²を測る。主軸方向はS-88°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は19~13cmを測る。床面は、地山の灰褐色砂質土を利用しており、比較的平坦である。カマドは東壁南端に構築される。規模は長さ103cm、幅73cmを測る。軸方向はS-75°-Eを指す。

ピットは南西コーナー部に2基検出された。規模はP₁径63×43cm深さ19cm、P₂径45×40cm深さ18cmを測る。

2基とも壁際で70cm程の間隔で並

列していることから入口施設に伴う階段か梯子状のもの痕跡かと思われる。住居覆土は上層に暗灰褐色砂質土、下層に灰褐色砂質土がレンズ状に堆積する。

遺物は杯と円筒埴輪片が10数点出土した。時期は平安時代に属するものと考えられる。

104号住居跡（第141図、PL. 6）

Ⅲ区H-9・10、I-9・10グリッドに位置する。平面はやや歪んだ横長方形を呈する。南壁の西半分部分がやや外方に張り出す。規模は2.83×2.92m、面積10.7m²を測る。主軸方向はS-89°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は13~3cmを測る。床面は地山の灰色粘質土を基盤とし、平坦で軟質である。カマドは東壁南端に構築される。そで部は張り出さしておらず、本体は壁外に築かれる。規模は長さ110cm、幅52cmを測り、軸方向はS-86°-Eを指す。左そで部になるとと思われる住居壁とのコーナー部では埴輪が直立して出土しておりそで部補強材として用いられた可能性が高い。なお検出されたカマドの前方床面において炭化物物が散布しており、その部分が焚口になるとと思われる。ピットは床面中央部のやや西寄り検出された。平面はやや歪んだ円形を呈し、規模は径62×56cm深さ24cmを測る。位置的に柱穴あるいは貯蔵穴とは考え難く、その性格については不明である。住居覆土は灰色砂質土が単一で堆積している。

遺物はカマド燃焼部及び覆土中から甕及び円筒埴輪の破片が10数点出土している。甕片はいずれも平安時代のもと考えられる。

重複遺構は105号住居跡で、南西コーナー部分で重複する。新旧関係は、土層観察と床面の存在から105号

住→104号住と考えられる。

105号住居跡 (第142図、PL.6)

Ⅲ区G-9・10、H-9・10グリッドに位置する。平面は南壁がやや重むがほぼ正方形を呈する。規模は3.10×3.18mで、面積は9.6㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は22~11cmを測る。床面は地山の灰褐色砂質土を利用し、ほぼ平坦である。カマドは東壁南端に構築される。突出したその部は検出されなかった。規模は長さ113cm、幅69cmを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。煙道はほぼ水平に延び末端部分で急激に立ち上がる。なおカマド前方床面上には炭化物が集中して検出された。ピットは3基が検出された。規模はP₁径63×52cm深さ30.5cm、P₂径52×48cm深さ11.5cm、P₃径54×48cm深さ9cmを測る。性格については不明である。住居覆土は灰褐色砂質土(地山とほぼ同質)が堆積する。

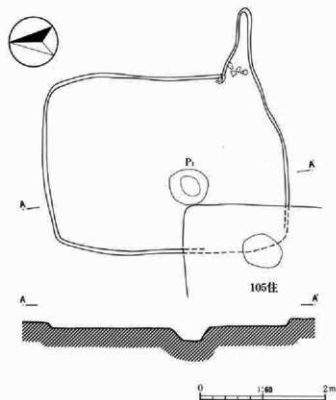
遺物は鏝と羽釜を主体とし、これに埴輪片1点加わる。カマド内と南西コーナー部分に集中して出土する。時期は平安時代(10世紀後半以降)に属するものと思われる。

重複遺構との新旧関係は105号住→104号住である。

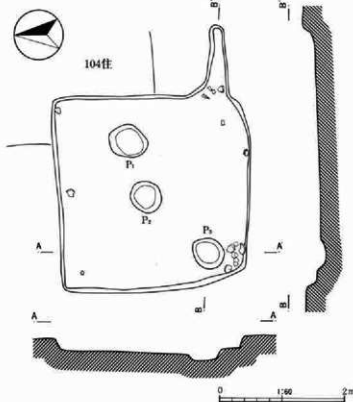
106号・107号住居跡 (早川河川改修地域調査分)

108号住居跡 (第144図、PL.6)

Ⅲ区H-3・4、I-3・4グリッドに位置する。平面は隅丸方形を呈すると思われるが、南東部分は調査区外にあるため形状、規模は不明で

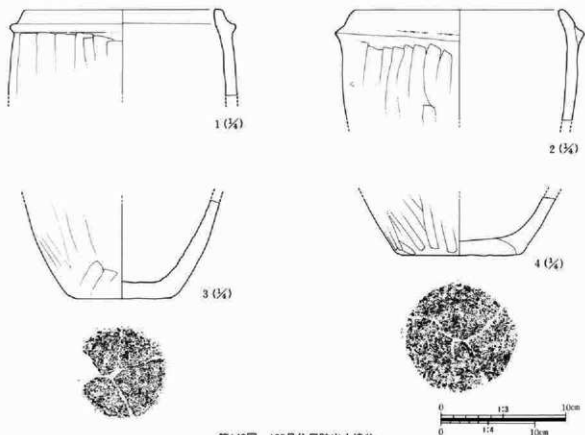


第141図 104号住居跡

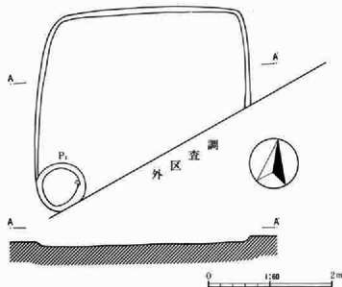


第142図 105号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物



第143図 105号住居跡出土遺物



第144図 108号住居跡

ある。壁はやや外傾し、確認壁高は8cm前後を測る。床面はローム土粒混入の黒褐色土で平坦ではあるが軟質。ピットは南西コーナー部で検出された。規模は77×75cm深さ20.5cmを測る。規模、形状、位置から貯蔵穴の可能性がある。カマド、周溝は検出されなかった。

遺物はピット及び覆土中から杯、甕、高台付椀、田筒埴輪等の小破片が約20片出土した。時期は平安時代に属するものと思われる。

109号・110号・111号・112号・113号・114号・115号・116号・117号・118号・119号住居跡（早川河川改修地域調査分）

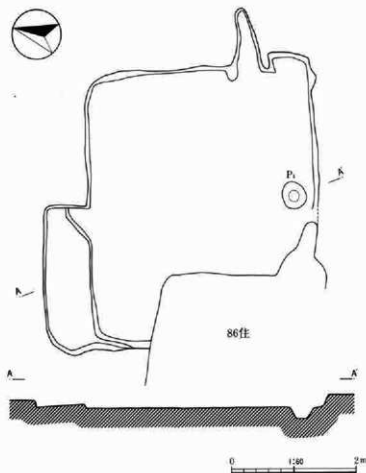
120号住居跡（第145図、PL.6）

Ⅲ区E-5・6グリッドに位置する。平面形は縦長長方形に北壁西半の方形張り出し部が付属する。規模は4.52×3.72mを測る。主軸方向はN-74°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高31~15cmを測る。床面は地山

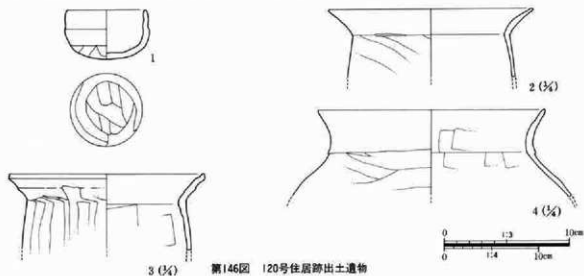
の黒褐色粘質土を利用する。小さな凹凸は見られるが、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。残存状態は良好である。規模は長さ112cm幅50cmを測る。軸方向はN-73°-Eを指す。その部は壁内に30cm程張り出す。煙道は緩傾斜で立ち上がる。張り出し部分は西壁の南半部に掘り込まれ、平面は長方形を呈する。規模は240×75cmを測り、底面レベルは14cm程住居床面より高く、境が段をなしている。なお張り出し部の覆土に焼土ブロックが堆積している。その性格としては階段あるいは祭祀用の壇、器具類を置く棚等が考えられるが、これについて言及できるような痕跡は検出されなかった。ピットは南壁際の中央付近に1基が検出された。規模は径40cm深さ16cmを測る。住居覆土は浅間B軽石とローム土粒を含む黒色砂質土が堆積している。

遺物は杯、甕、器台等があり、カマド周辺～東側コーナー部分に集中して出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代のもを主体としている。

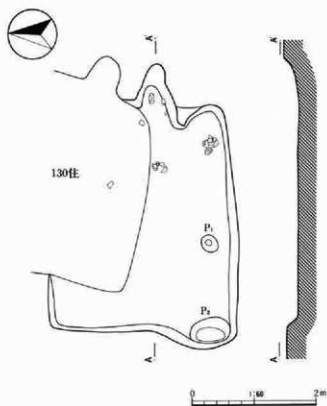
重複遺構は86号住居跡で、新旧関係は120号住→86号住である。



第145図 120号住居跡



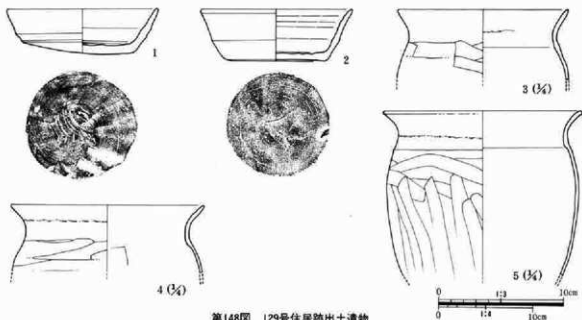
第146図 120号住居跡出土遺物



第147図 129号住居跡

P₁径30×25cm深さ29.5cm、P₂径64×40cm深さ10cmを測る。住居覆土は黒褐色土がレンズ状に堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋等が30数片出土している。甕が主体で、時期は奈良～平安時代に属する。重複遺構は130号住居跡で、新旧関係は土層観察より129号住→130号住である。



第148図 129号住居跡出土遺物

121号住居跡 (欠番)

122号・123号・124号・125号・126号・127号・128号住居跡 (早川河川改修地域調査分)

129号住居跡 (第147図、PL.6)

IV区H-4、I-3・4グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。西壁南端部がやや外方に張り出す。規模は3.85×(3.02)mを測り、主軸方向はN-87°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高31~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し小規模な凹凸が多い。カマドは東壁のほぼ中央に構築される。規模は長さ103cm幅62cmを測る。軸方向はN-77°-Eを指す。そで部は30cm程壁内に張り出す。又燃焼部中央には円礫を直立させ支脚としている。ピットは2基検出された。P₁は南壁際中央付近、P₂は南西コーナー部に位置する。規模は

130号住居跡(第149図、PL. 6)

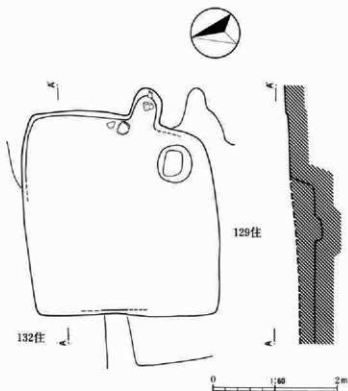
IV区I-4グリッドに位置する。

平面はやや歪んだ正方形を呈し、規模は3.21×(1.52)mを測る。主軸方向はS-86°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は31~3cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土を埋め貼床としている。中央部がやや高い。カマドは東壁中央よりやや南寄りに構築される。規模は長さ60cm、幅52cmを測る。軸方向はS-66°-Eを指す。煙道部は検出されなかったが、おそらく後世の削平により失なわれたと思われる。なお燃焼部の中央で礫が直立した状態で検出されたがこれは支脚として用いられたと思われる。又左そでと思われる部分に妻が倒立して出土したが、こ

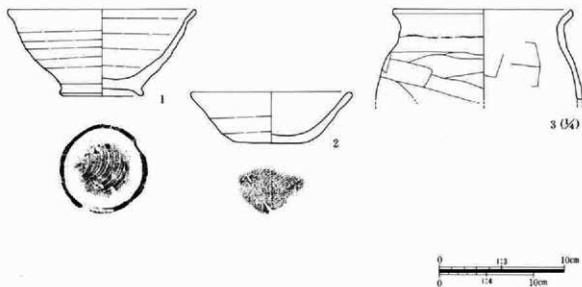
れは焚口部分の補強材として用いられたものであろう。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、平面は楕円形を呈する。規模は径56×53cm深さ16cmを測る。

遺物は杯、甕、高台付椀、砥石が出土している。出土位置はカマド周辺に集中する。時期は奈良時代~平安時代のものである。

重複遺構は129号住居跡、132号住居跡で、新田関係は土層観察により129号住・132号住→130号住であった。



第149図 130号住居跡



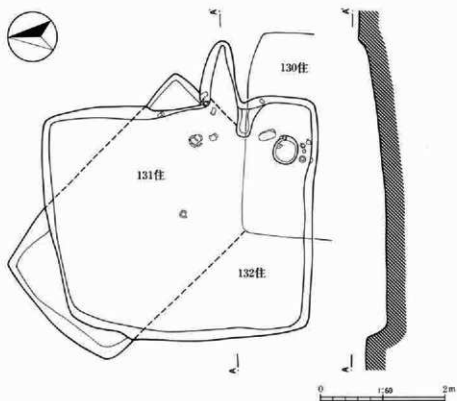
第150図 130号住居跡出土遺物

131号住居跡 (第151図、PL.7)

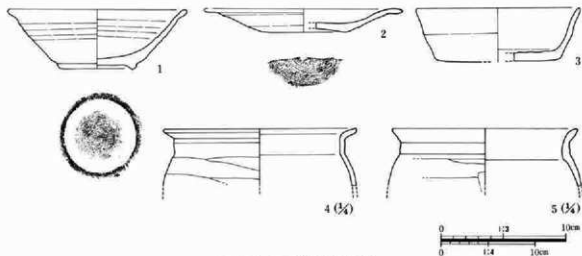
IV区I-5、J-5グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われ、規模は推定値で(4.15)×(2.39)mを測る。壁はやや外傾し、確認壁高は32-18cmを測る。床面は重複する132号住居跡の覆土をそのまま利用している。本住居跡に伴うカマド、貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同壺、砥石等が出土している。時期は奈良時代～平安時代のもので、平安時代を主とするがほとんどが覆土中からの出土であるため本住居跡の時期を限定できるような遺物は少ない。

重複遺構は132号住居跡で、新旧関係は132号住→131号住である。



第151図 131・132号住居跡



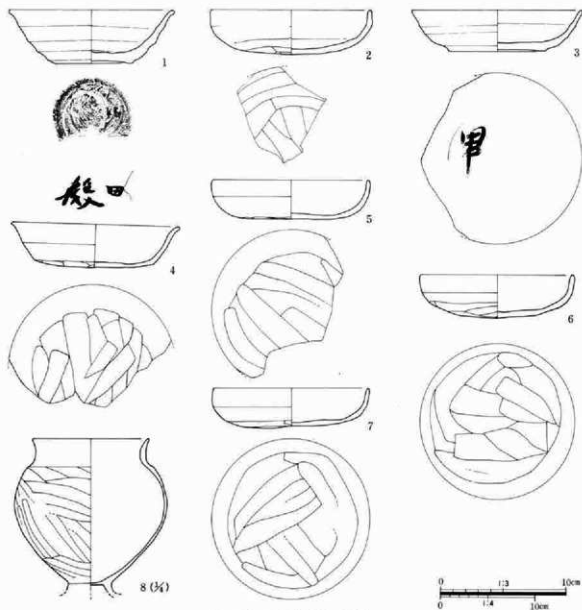
第152図 131号住居跡出土遺物

132号住居跡 (第151図、PL. 7)

IV区1-5、J-5グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.77×4.40m、面積は15.2㎡を測る。主軸方向はN-88°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は38-21cmを測る。床面は地山のローム土を利用する。又北東コーナー部と北壁の部分は掘り形に埋土し、貼床としている。カマドは東壁の中央より南寄りに構築される。左そで部は131号住に切られている。規模は151cm、幅65cmを測る。軸方向はN-88°-Eを指す。右そで部は壁内に55cm張り出す。貯蔵穴は南東コーナー部の東壁から約50cm離れて検出された。規模は45×41cm深さ10cmを測る。ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物はカマド及び貯蔵穴周辺に集中して出土する。器種は杯、甕、須恵器杯、同壺、高台付碗があり、時期は奈良時代-平安時代にわたるが、主体は平安時代のものである。特にカマド内、貯蔵穴内出土のものは平安時代に限られるようである。

重複遺構との新旧関係は132号住→130号住・131号住である。



第153図 132号住居跡出土遺物

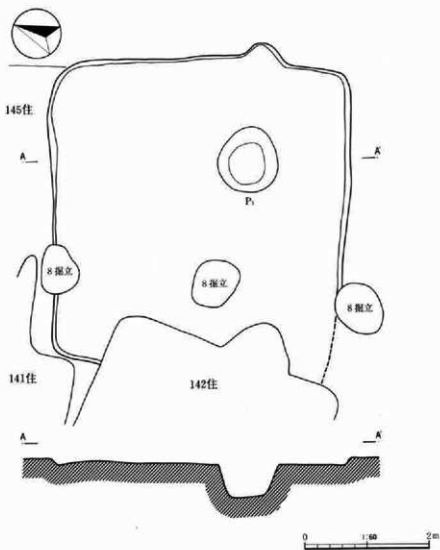
133号住居跡（早川河川改修地域調査分）

134号住居跡（穴番）

135号・136号・137号・138号・139号住居跡（早川河川改修地域調査分）

140号住居跡（第154図、PL.7）

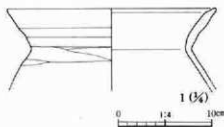
Ⅲ区H-16、I-16グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は4.82×4.86mを測る。主軸方向はN-71°Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高14~6cmを測る。床面は、地山のローム土を利用し比較的平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは東半部床面で1基検出され、規模は径1m深さ0.5mを測る。規模が比較的大きく、位置的にも柱穴とは考え難く、その性格は不明である。又東壁の雨寄りの部分に奥行20cm程の掘り込みが見られるが、これがカマドの痕跡かあるいは別の施設かは定かでない。



第154図 140号住居跡

遺物は主に覆土から出土しており、甕を主体に土器片100点前後を数える。しかしそのうちの大部分は重複する145号住居跡出土遺物との判別が困難で、本住居跡に伴うと確認できるものは少ない。時期は古墳時代前期～平安時代にわたっている。

重複遺構は142号住居跡、145号住居跡、8号掘立柱建築遺構で、新旧関係は140号住→142号住・145号住・8号掘立と考えられる。



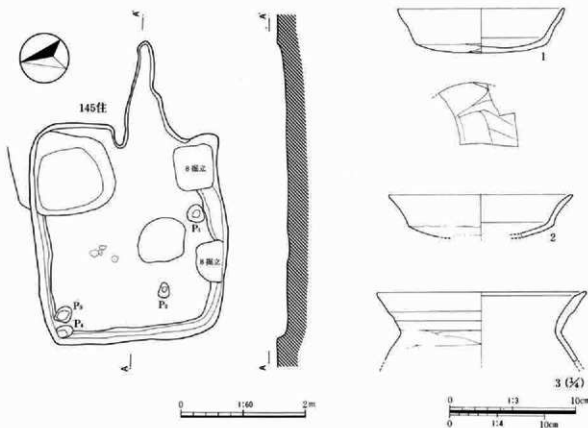
第155図 140号住居跡出土遺物

141号住居跡 (第156図, PL. 7)

Ⅲ区H-17・18グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は5.90×3.87m、面積10.6㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は24～9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し中央がやや高い。カマドは東壁中央に構築される。規模は165cm、幅71cmを測る。軸方向はS-87°-Eを指す。そで部は38cm壁内に張り出す。ピットは4基検出された。規模はP₁径28cm深さ20.5cm、P₂径25×15cm深さ31cm、P₃径32×25cm深さ16cm、P₄径25×18cm深さ12.5cmを測る。又北東コーナー部に1.32×1.33m深さ28cmを測る方形の落込みみがあるが、これが本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

遺物はカマド周辺を中心に杯、甕等の破片が出土している。時期は奈良時代を主体とする。

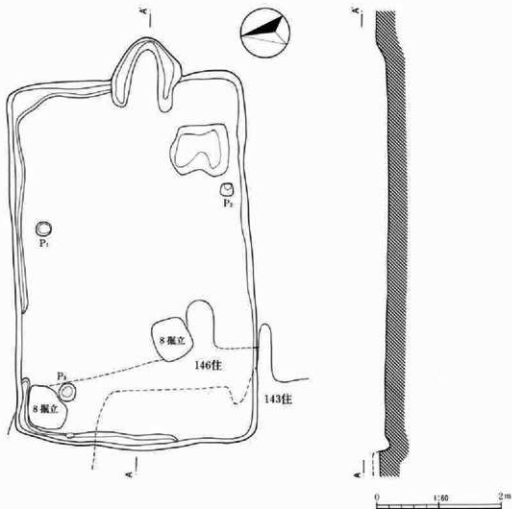
重複遺構は145号住居跡、8号掘立柱建築遺構で、確認された新旧関係は145号住→141号住である。



第156図 141号住居跡及び出土遺物

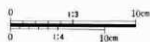
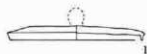
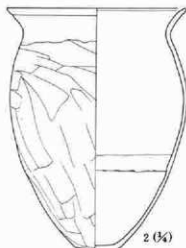
142号住居跡 (第157図, PL.7)

Ⅲ区G-16・17, H-16・17グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は5.90×3.87m、面積は22.1㎡を測る。主軸方向はS-84°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高31~6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや高いが比較的平坦である。カマドは東壁の中央より若干南寄りに構築される。煙道部は後世の削平のため不明である。規模は長さ1.10m、幅1.20mを測る。軸方向はS-73°-Eを指す。そで部は55cm程壁内に張り出す。貯蔵穴は南壁際東端で検出された。平面は「瓢」形に近い方形で、規模は95×75cm深さ61cmを測る。ピットは3基検出された。P₁とP₂は南北壁際に相対しており、P₃は北西コーナー部にある。規模はP₁径24cm深さ46cm、P₂径20cm深さ28cm、P₃径30cm深さ9cmを測る。これらは位置的に柱穴の可能性がある。周溝は北半の壁際に沿って検出された。北壁の西半部で1m程断絶する。規模は幅40~14cm深さ7~4cmを測る。住居覆土は上層に浅間B軽石を含む褐色土、下層にローム粒を含む黑色砂質土が堆積する。遺物は主に覆土下層から出土しており、杯、甕、高杯、高台付甕、須恵器蓋、埴輪等430点程がある。主体は平安時代の甕と杯である。



第157図 142号住居跡

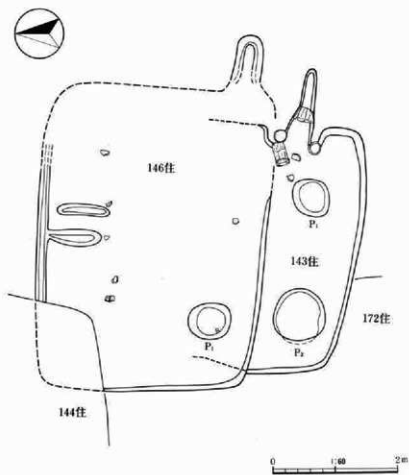
重複遺構は140号住居跡、
143号住居跡、146号住居跡、
8号掘立柱建築遺構で、確
認できた新旧関係は140号
住→142号住→143号住・146
号住である。



第158図 142号住居跡出土遺物

143号住居跡 (第159図, PL. 7)

Ⅲ区F-17、G-17グリッドに位置する。平面は方形と推定されるが北半は他遺構と重複するため不明瞭で



第159図 143・146号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

ある。規模は東壁—西壁間距離3.82mを測る。主軸方向はS—88°—Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は20—9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築されており、残存状態は良好である。規模は長さ130cm、幅44cmを測る。軸方向はS—78°—Eを指す。カマドの両そで部には円筒埴輪を直立させ補強材としている。なお焚口部にも埴輪が横転して出土しており、おそらく焚口天井部分に用いられたものと推定される。燃焼部奥壁には覆削部片を埋置し補強材としている。又燃焼部中央には支脚と思われる円礫が検出されている。ピットは南壁に沿って2基が検出された。規模はP₁径58cm深さ32cm、P₂径83cm深さ57.5cmを測る。いずれも位置的には柱穴と考えられるものであるが、規模が比較的大きく貯蔵穴の可能性もある。住居覆土は浅間B軽石とロームブロックを含む黒褐色砂質土が堆積する。

遺物はカマド周辺から集中して出土している。甕・杯等の小破片30数点程及び埴輪片、勾玉1点で時期は奈良時代—平安時代のものである。

重複遺構との新旧関係は、土層観察より142号住・146号住・172号住→143号住である。

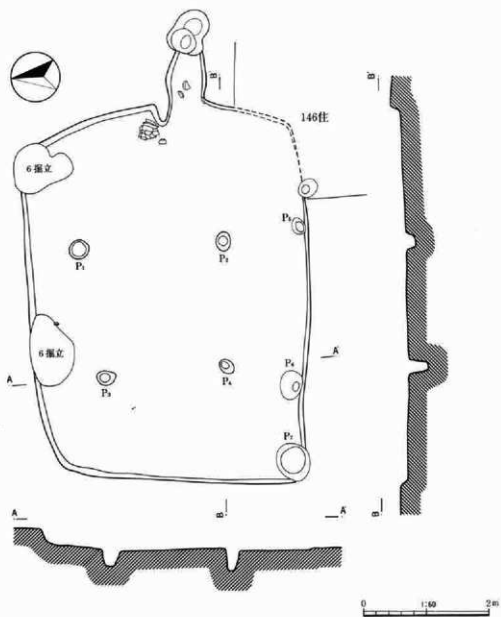
144号住居跡(第160図、PL.7)

III区F—18・19、G—18・19グリッドに位置する。平面はやや歪んだ縦長長方形を呈し、北壁はやや胴張りの形状となる。規模は5.96×4.55m、面積は推定値で25.9m²を測る。主軸方向はN—90°—Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高24—6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部が周辺よりやや高く硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築されており、残存状態は上半を削平されており不良である。煙道部は重複遺構のピットに切られており不明である。燃焼部は壁外に掘り込まれ、平面形はやや胴張りを呈し幅は65cmを測る。そで部は左そでのみ残存し、灰色粘土を用いて壁内に35cm程張り出させている。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは7基が検出された。P₁—P₄は床面のほぼ中央部で四角形を構成する対角線上に位置し、P₅・P₆は南壁に沿ってそれぞれ南東コーナー、南西コーナーからほぼ等距離の場所に位置する。P₇は南西コーナー部にある。規模はP₁径30cm深さ不明、P₂径30×23cm深さ15cm、P₃径30×23cm深さ26cm、P₄径20cm深さ32.5cm、P₅径25×20cm深さ49.5cm、P₆径40×35cm深さ38.5cm、P₇径60.6cm深さ17cmを測る。なおP₁—P₄は規模や位置等から主柱穴と思われるが、これらの柱間距離はP₁—P₂2.35m、P₃—P₄1.95m、P₁—P₃2.07m、P₂—P₄1.95mを測る。P₅・P₆の性格については入口施設と関連するもの、壁体の支柱、東柱等と考えられるが、具体的な痕跡は認められなかった。P₇は本住居跡の壁を一部切っており別遺構の可能性もある。周溝は検出されなかった。なお北西コーナー部に平面不定形状で床面よりの深さ約20cm程の掘り込みが検出されたが、これは底面の形状や覆土の観察から本住居跡の掘り形と推定される。従ってこの部分については人工的に埋土し貼り床としたものであろう。住居覆土は上層に浅間B軽石を含む黒褐色砂質土、下層にローム粒と粘土粒を多く含む黒褐色砂質土が堆積している。

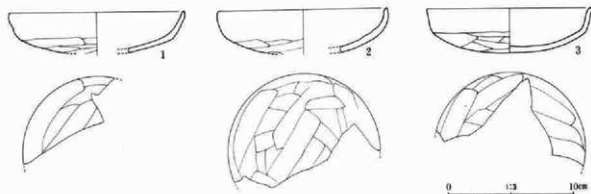
遺物はカマド内及びその周辺部と覆土下層から主に出土している。器種は杯、甕を主体としており、破片数は約580点前後を数える。時期は奈良時代—平安時代にわたるが、数量的には奈良時代に属するものが圧倒的に多い。

重複遺構は146号住居跡、172号住居跡、6号掘立柱礎遺構で、土層観察により新旧関係の判明したのは144号住→6号掘立であった。なおカマド煙道部とピットP₃東側の壁際に2基のピットが重複しているが、これらは本住居跡に伴う可能性は少なく、後世のものであると思われる。

本住居跡の時期は、前述の出土遺物や住居形態の特徴等から奈良時代に限定して間違いのないものと思われる。

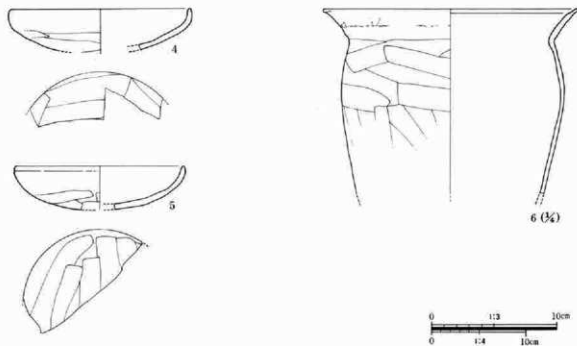


第160図 144号住居跡



第161図 144号住居跡出土遺物(1)

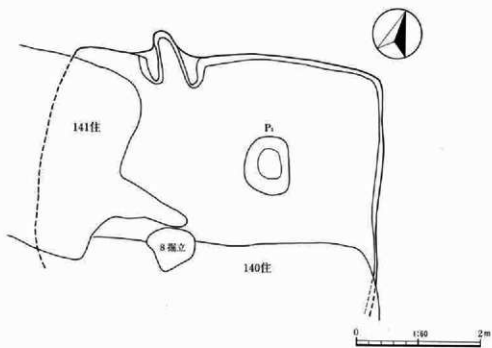
第V章 検出された遺構と遺物



第162図 144号住居跡出土遺物(2)

145号住居跡(第163図)

Ⅲ区I-16・17、J-16・17グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南半については重複遺構のため不明瞭である。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は23~10cmを測る。床面は、地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは北壁の西寄に構築される。規模は長さ95cm、幅110cmを測る。軸方向はN-39°-Wを指す。そで部は55cm程壁内に張り出す。ピットは床面のほぼ中央部に1基が

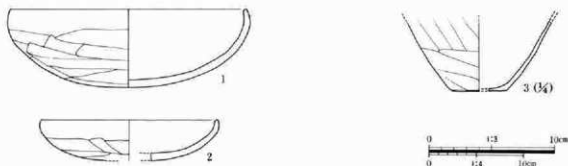


第163図 145号住居跡

検出された。平面は不整形円形を呈し、規模は径93×72cm深さ68.5cmを測る。

遺物は杯、甕、高杯等の破片が100点前後、覆土から出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代のものを主体としている。

重複遺構は140号住居跡、141号住居跡で、新旧関係は140号住→145号住→141号住である。



第164図 145号住居跡出土遺物

146号住居跡 (第159図, PL. 7)

Ⅲ区G-17・18グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は(4.90)×3.72mを測る。主軸方向はS-87°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は25-7cmを測る。床面は、地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁の南端に構築される。煙道部のみ残存し、燃焼部は不明瞭である。軸方向はS-82°-Eを指す。ピットは南西コーナー部で検出され、規模は69×58cm深さ29.5cmを測る。周溝は北壁に沿って検出された。規模は幅13cm深さ3cmを測る。又北壁中央付近から周溝に直行して内側方向に2条の溝が伸びる。幅25-18cmで深さはほとんど周溝と同様である。これらは20cm程の間隔をあけて90cmの長さで並走する。性格は不明である。住居覆土は上層に浅間B軽石と炭化物粒を含む褐色土、下層に粘土とローム土粒を含む褐色砂質土が堆積する。

遺物は床面及び覆土中から土器片が出土している。多くは重複する143号住居跡出土遺物との分離が困難で、本住居跡に確実に伴うと思われるものはわずかに10数点である。時期は奈良時代～平安時代のものであるが、カマド周辺及び床面上から出土したものは奈良時代に属すると考えられる。

重複遺構との新旧関係は、142号住→146号住→143号住である。

147号住居跡・148号住居跡 (早川河川改修地域調査分)

149号住居跡 (第165図, PL. 7)

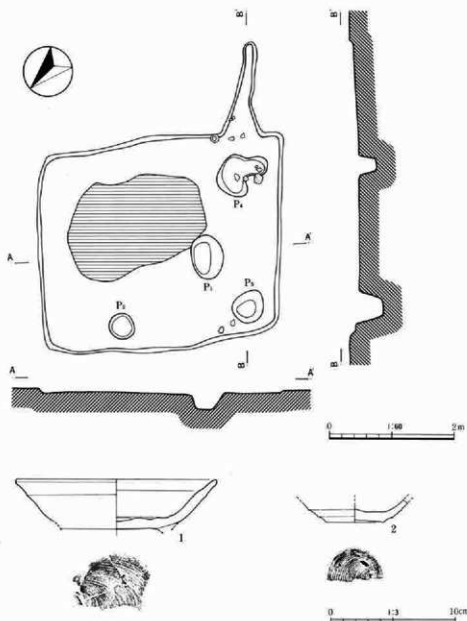
Ⅲ区F-23・24、G-23・24グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.40×3.85m、面積は13.0㎡を測る。主軸方向はS-49°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は14-2cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土で、比較的平坦である。カマドは南東壁の南西端に構築されており、規模は長さ153cm、幅65cmを測る。軸方向はS-38°-Eを指す。そこで部はおそらく壁をそのまま利用したと思われる。煙道部は比較的長く、水平に近い緩い傾斜で立ち上がる。ピットは4基が検出された。規模はP₁径67×50cm深さ36cm、P₂径42cm深さ41.5cm、P₃径48cm深さ43cm、P₄径83×65cm深さ34cmを測る。P₁、P₃、P₄は住居の南西半部に偏り、P₂のみ北半に位置する。これらの性格については不明である。住居覆土はロームブロックとローム

第V章 検出された遺構と遺物

粒を多く含む黒褐色砂質土がブロック状に堆積している。

遺物は杯、甕、須恵器甕、高台付椀、灰軸椀及び土鉢等がカマド周辺を中心に主に覆土中から出土している。時期は平安時代にほぼ限定される。

重複遺構としては、東半部床面に後世の攪乱と思われる土壌が検出されているのみである。



第165図 149号住居跡及び出土遺物

150号住居跡 (第166図、PL. 7)

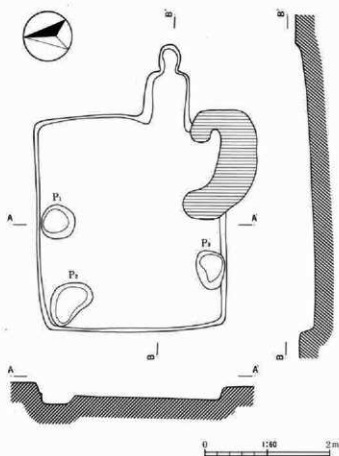
III区G-24・25、H-24・25グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈すると思われる。規模は3.44×3.04 m、面積は推定値(10.8)㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態不良であるが、ほぼ直立し確認壁高35~16cmを測る。床面は、地山のローム土を利用しほぼ平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築されており、残存状態は比較的良好である。そこで部は掘り形のまま地山のロームを掘り残したものである。

燃焼部の平面形は長方形を呈する。又煙道部は燃焼部奥壁の中心より張り込まれ外方に延びる。規模は長さ1.38m、幅0.83mを測り、軸方向はS-88°-Eを指す。ピットは3基が検出された。

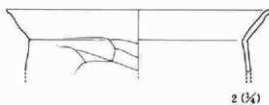
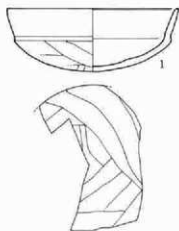
P₁は北壁際中央、P₂は北西隅、P₃は南壁際西寄りの位置である。規模はP₁径59×55cm深さ16cm、P₂径79×52cm深さ14.5cm、P₃径61×45cm深さ12.5cmを測る。これらの性格は不明である。住居覆土はロームブロックを多量に含む褐色砂質土が主で、堆積状態はブロック状を呈し、人工的埋土を想起させる。

遺物は杯、甕、羽釜、器種不明の須恵器片及び紡錘車等30数点出土しており、時期は古墳時代後期～平安時代にあたる。残存状態良好なものは古墳時代後期のものであるが、本住居跡の時期決定の根拠とするには不十分である。

重複遺構はなく単独の検出であるが、南壁東半部は後世の擾乱によって破壊されている。



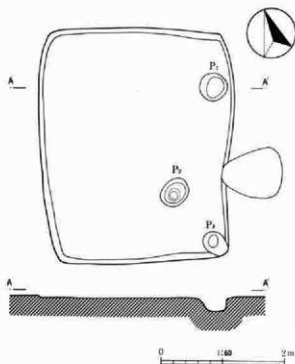
第166図 150号住居跡



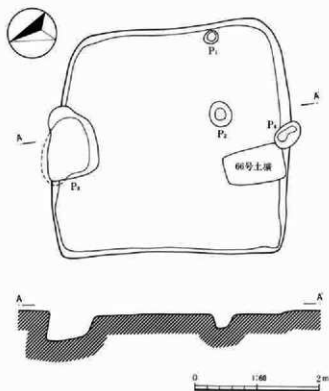
第167図 150号住居跡出土遺物

151号住居跡 (第168図, PL. 7)

Ⅲ区H-23グリットに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は3.73×3.13m、面積11.0㎡を測る。主軸方向はN-10°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高5.5~2.5cmを測る。床面は地山のローム土を利用



第168図 151号住居跡



第169図 152号住居跡

し、比較的平坦ではあるが、部分的に軟質で窪みを有する。カマドは検出されなかったが、東壁の中央よりやや南寄りに楕円形の浅いピットが検出された。規模は 1.0×0.8 mを測る。焼土等は確認ができなかったが、位置や形態等からカマドの痕跡である可能性が考えられる。その他にピットが3基検出された。規模は P_1 径45cm深さ19.5cm、 P_2 径49×39cm深さ21.5cm、 P_3 径45×34cm深さ26.5cmを測る。これらの性格は不明である。

遺物は杯、甕、台付甕、鉢、須恵器甕等の小片が60点程度土より出土している。時期は古墳時代後期～平安時代にわたり、本住居跡の時期を限定するには不十分である。

重複遺構はなく単独で検出された。

152号住居跡 (第169図、PL. 7)

Ⅲ区H-23・24、I-23・24グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈する。規模は 3.78×3.70 m、面積は 13.1 m²を測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高 $13.5 \sim 1$ cmを測る。床面は、地山のローム土を利用しており比較的平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは4基が検出された。規模は P_1 径23cm深さ8cm、 P_2 径41×35cm深さ21.5cm、 P_3 径115×91cm深さ40cm、 P_4 径47×31cm深さ16cmを測る。このうち P_3 は北壁中央に掘り込まれ、規模も大きいことから貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、須恵器甕、高台付碗の破片160点で覆土より出土している。時期は奈良～平安時代のものであり、平安時代の高台付碗を除く杯、甕の大部分は奈良時代のもと考えられる。

重複遺構は66号土壌で、新田関係は土層の切り合いより152号住→66号壁である。

153号住居跡(第170図、PL.7)

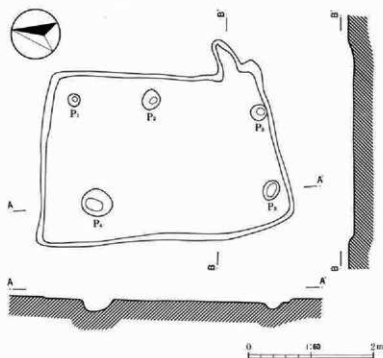
Ⅲ区F-24・25、G-24・25グリッドに位置する。平面はやや西辺の長い台形状を呈し、規模は2.78×4.06mを測る。面積は10.5m²を測る。主軸方向はN-83°-Eを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高8~2cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、小規模な凹凸が多い。カマドは東壁南端部に構築され、燃焼部の掘り込みだけ検出された。長さ64cm、幅43cm程の規模を測る。ピットは5基が検出された。規模はP₁径20cm深さ5cm、P₂径30cm深さ14cm、P₃径27cm深さ12cm、P₄径50×43cm深さ18.5cm、P₅径30cm深さ9cmを測る。P₁、P₃~P₅は柱穴となる可能性も考えられる。

遺物は斐片6点が覆土から出土したのみである。

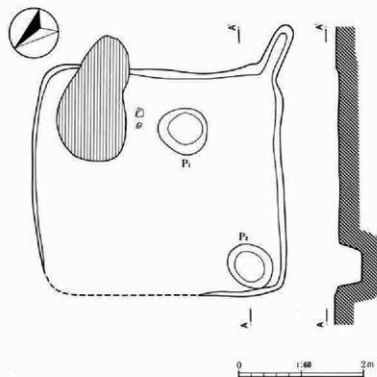
重複遺構はない。

154号住居跡(第171図、PL.7)

Ⅲ区F-25、G-25、Ⅳ区F-1、G-1グリッドに位置する。平面はほぼ長方形を呈すると思われる。北側コーナー部は71号土壌との重複で不明瞭。規模は3.67×4.40m、面積は推定値で(14.2)m²を測る。主軸方向はS-50°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高14~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用していると思われるが荒れていて不明瞭。カマドは南コーナー部に構築される。燃焼部は壁内と思われるが、その形状や規

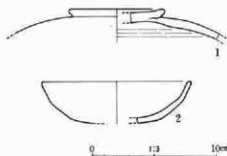


第170図 153号住居跡



第171図 154号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物



第172図 154号住居跡出土遺物

模等については不明である。煙道は住居平面形の対角線状に延びる。長さは95cmを測る。軸方向はS-27-Eを指す。ピットは2基が検出された。規模はP₁径80×73cm深さ40cm、P₂径78×64cm深さ37cmを測る。P₃は位置的に貯蔵穴の可能性も考えられる。

遺物は杯、甕、羽釜、須恵器杯、同甕、同蓋の破片約120点が覆土より出土しており、数量的には奈良時代のものが多い。

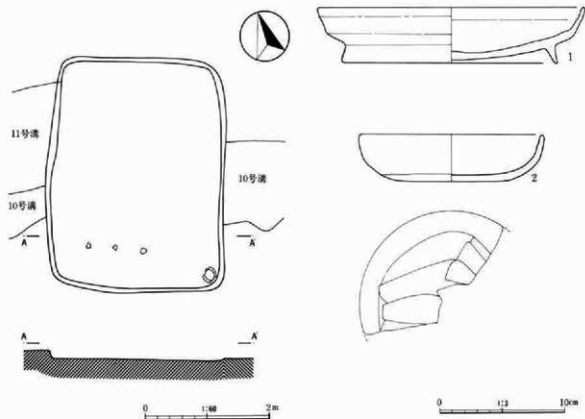
重複遺構は71号土壌で、新旧関係は不明である。

155号住居跡（第173図、PL.7）

IV区F-2・3グリッドに位置する。平面は長方形を呈する。規模は3.70×2.84mで、面積は9.9m²を測る。主軸方向はN-20°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は25-5cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土である。比較的平坦。カマドは検出されなかった。その他ピットや溝等は確認されなかった。なお床面の北半部中央に長方形の掘り込みが見られたが、後世の掘乱しと思われる。

遺物は杯、甕、須恵器甕、同高台付盤、砥石等の破片が30点程覆土から出土している。このうち図示した高台付盤（第173図-1）は南東コーナー部の床面上より出土しており、本住居跡に伴うものと考えてよい。時期は奈良時代のものを主体とする。

重複遺構は71号土壌と10号・11号溝で、いずれも新旧関係については不明である。



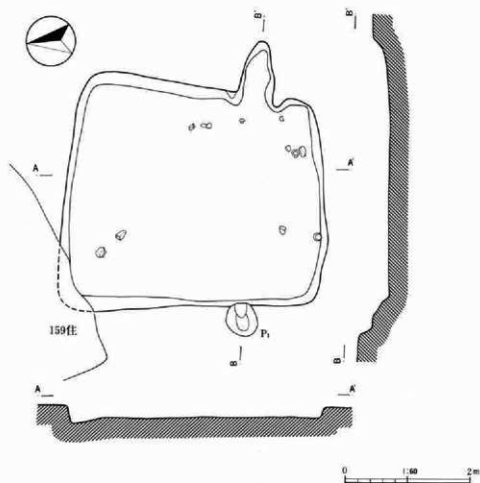
第173図 155号住居跡及び出土遺物

156号住居跡 (第174図、PL.7)

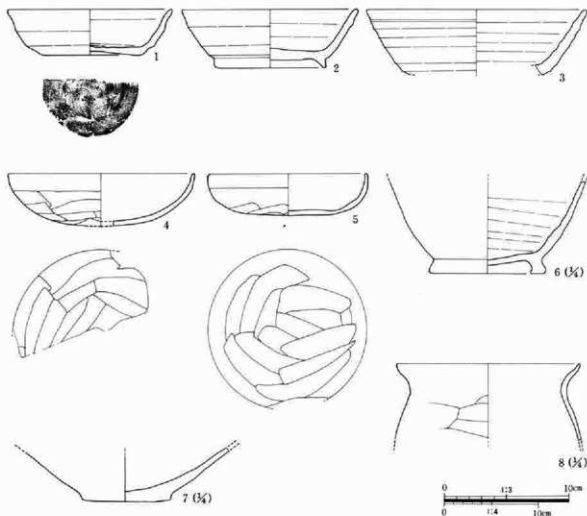
IV区F-3、G-3グリッドに位置する。平面形は歪んだ横長方形で、規模は3.79×4.30m、又面積は14.6㎡を測る。主軸方向はS-74-Eを指す。壁は残存状態良好で、ほぼ直立し確認壁高は54-16cmを測る。床面は地山のローム土を利用するが、一部住居跡以前の風倒木痕と思われる場所は黒色土となっている。カマドは東壁の南端部に構築され、残存状態は比較的良好である。規模は長さ113cm、幅58cmを測り、軸方向はS-74-Eを指す。その部は掘り形の段階で地山を若干掘り残して壁内に張り出させている。燃焼部は断面が「U」字状に掘り込まれ、底面は住居床面よりやや高い。煙道は比較的急角度で立ち上がる。ピットは西壁に外接してカマドに相対する場所で1基検出された。ほぼ円形を呈し、規模は径50cm、深さ24cmを測る。本住居跡に伴う確証はないが、位置や形状から入口施設（特に階段等）と関連する可能性を考慮し、ここで扱った。住居覆土は土層に浅間B軽石を含む褐色砂質土、下層にロームブロックを多量に含む黒褐色砂質土が堆積しており、その状態はブロック状で、人為的な埋土の可能性がある。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同壺、同釜、高台付杯が主に覆土より出土している。破片数は400点弱で、そのうち土師器杯と甕が8割強を占める。時期は奈良時代末～平安時代初期頭に集中すると思われる。

重複遺構は159号住居跡で、新旧関係は不明であった。



第174図 156号住居跡



第175図 156号住居跡出土遺物

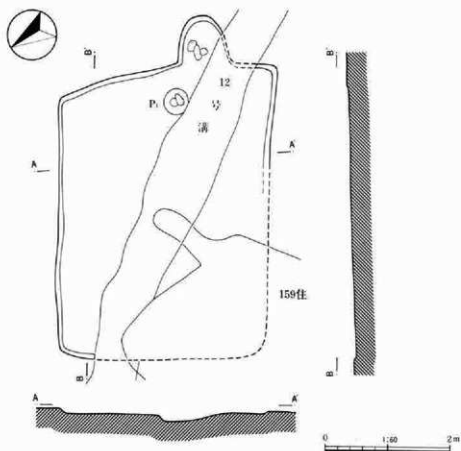
157号住居跡(欠番)

158号住居跡(第176図、PL.7)

IV区H-3・4グリッドに位置する。平面は縦長方形を呈すると思われるが、西半部は他遺構と重複するため形状、規模等は不明瞭である。規模は推定値で4.32×3.43mと思われる。主軸方向はS-71°-Eを指す。壁は残存部分で11-2cmの高さを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が多い。カマドは南東壁の南西寄りに構築され、燃焼部が残存する。規模は長さ76cm、幅99cmを測る。なおこの部分より10cm大の円礫3点が出土したがその用途は不明である。ピットはカマド左そで部と推定される位置よりやや内側に入った位置に検出された。円形を呈し、規模は径40cm深さ27cmを測る。なおこのピットの真上より円礫2点が出土した。

遺物は杯、甕、壺、須恵器杯等の破片が50点程出土している。いずれも小片で器形の明確なものが少なく、従って時期も不明とせざるを得ない。

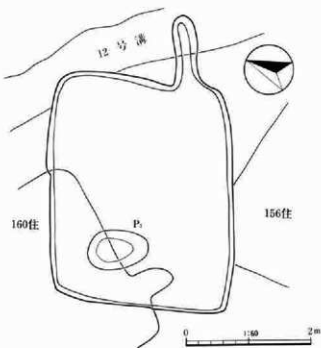
重複遺構は159号住居跡、12号溝で、新田関係は158号住→159号住・12号溝と思われる。なおこれら他遺構との重複関係や、本住居跡の平面形態及びカマド形態等から、その時期は奈良時代の可能性が高い。



第176図 158号住居跡

159号住居跡 (第177図, PL. 8)

IV区G-4, H-4グリッドに位置する。平面は歪んだ縦長方形を呈する。規模は $3.65 \times 2.98\text{m}$ 、面積 10.7m^2 を測る。主軸方向は $N-70^\circ-E$ を指す。壁は残存状態良好な部分でやや外傾し、確認壁高 $23 \sim 3\text{cm}$ を測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土で平坦。カマドは東壁の南隅に構築され、燃焼部と煙道部が残存する。燃焼部は煙道よりやや幅広いだけであり、実際は壁内に主体があったのかわるいは比較的小規模なものと思われる。規模は長さ 120cm 、幅 83cm を測り、軸方向は $N-65^\circ-E$ を指す。ピットは西側コーナー寄りに1基検出された。卵形を呈し径 $96 \times 63\text{cm}$ 、深さ 18.5cm を測る。規模や



第177図 159号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

位置から貯蔵穴とも考えられるが、他と比較してやや浅いように思われる。住居覆土はロームブロックを含む褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕の破片80点弱が覆土より出土している。このうち甕の胴部片が圧倒的に多い。時期は杯や甕の口縁の特徴等から奈良時代のもが多いようである。

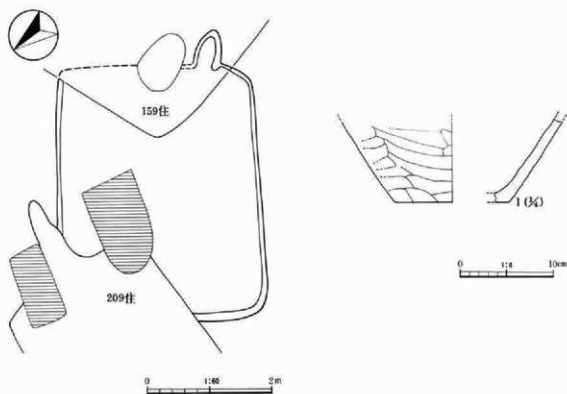
重複遺構との新旧関係は158号住→159号住→160号住である。

160号住居跡(第178図, PL. 8)

IV区G-4・5グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は4.05×3.20mで、面積は推定値で(13.1)㎡を測る。主軸方向はS-62°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は14~3.5cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で比較的平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築され、燃焼部のみ残存する。平面は砲弾状を呈し、底面は住居床面とはほぼ同レベルである。規模は長さ63cm、幅44cmを測る。軸方向はS-42°-Eを指す。カマドの他にピット、貯蔵穴、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土はローム粒を多く含む褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕、同蓋、小形壺、高台付椀等の破片が約100点覆土より出土する。このうち杯類のほとんどが糸切り底であり、又甕の中に「土釜ヒツツ」といわれるものが多数ある事から平安時代(注2)のものと考えられる。

重複遺構は159号住居跡と209号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状況及び土層観察から159号住→160号住→209号住と思われる。



第178図 160号住居跡及び出土遺物

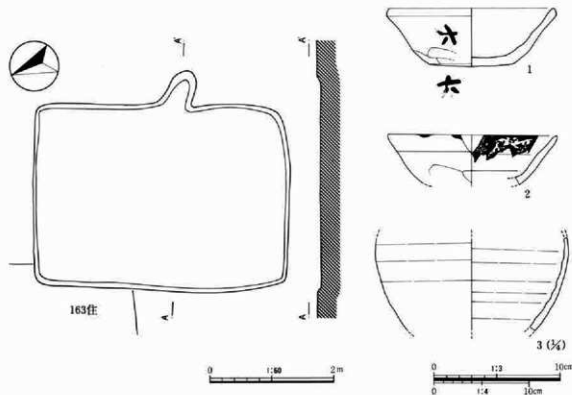
161号住居跡(欠番)

162号住居跡(第179図、PL.8)

IV区H-6・7、I-6・7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈する。規模は2.98×4.10mで、面積は12.0㎡を測る。主軸方向はS-66°-Eを指す。壁は残存状態不良であるが、やや外傾し確認壁高17~14cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており比較的平坦である。カマドは南東壁の中央よりやや南西寄りに構築されており燃焼部のみが残存する。規模は長さ68cm、幅59cmを測る。カマド以外の貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、高台付椀、須恵器杯、同壺の破片及び砥石が80点程床面及び覆土下層から出土している。ほとんどが平安時代のもと思われる。

重複遺構は163号住居跡で、新旧関係は163号住→162号住である。



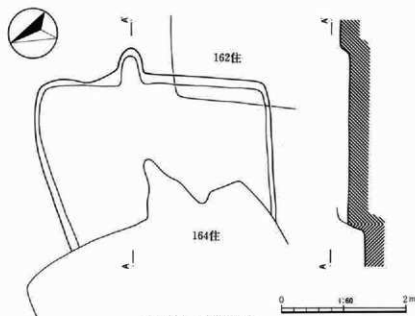
第179図 162号住居跡及び出土遺物

163号住居跡(第180図)

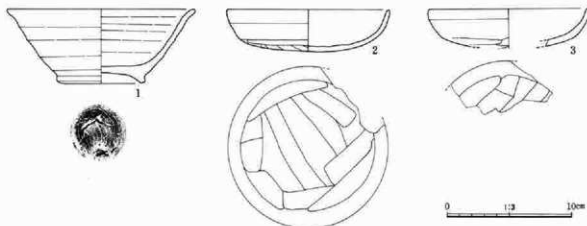
IV区H-7・8、I-7・8グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、西半は他遺構と重複するため不明。規模は北壁-南壁間距離で3.77mを測る。主軸方向はS-63°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は14~7cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で、比較的平坦。カマドは東壁のやや北寄りに構築される。燃焼部のみ残存し、規模は長さ60cm、幅54cmを測る。軸方向はS-66°-Eを指す。

遺物は杯、甕、高台付椀等の破片170点程が覆土より出土している。「コ」の字状口縁の甕や糸切り底をもつ杯、高台付椀を主体とする事から平安時代のもと思われる。

重複遺構は162号住居跡、164号住居跡で新旧関係は163号住→162号住・164号住である。



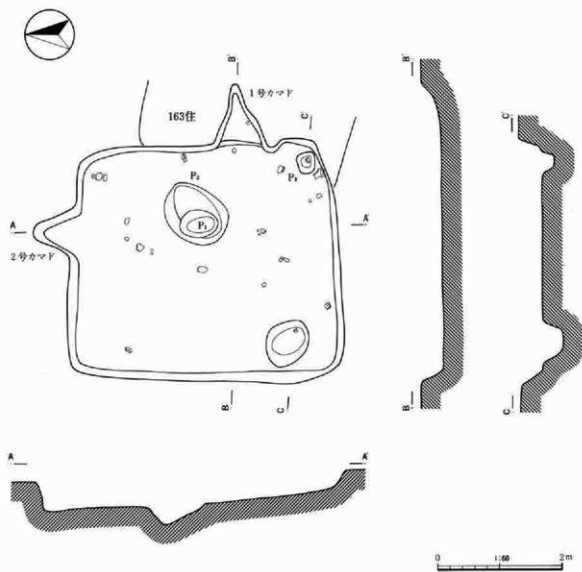
第180図 163号住居跡



第181図 163号住居跡出土遺物

164号住居跡 (第182図、PL. 8)

IV区H-7・8、I-7・8グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.40×3.73m、面積は16.4㎡を測る。主軸方向はN-4°-Eを指す。壁は比較的残存状態が良好で、ほぼ直立し確認壁高48~24cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りと北壁の東寄りに2基が検出された。前者を1号カマド、後者を2号カマドと呼称する。規模は1号カマドが長さ108cm、幅87cmで軸方向N-82°-Eを指す。2号カマドは長さ76cm、幅75cmで軸方向N-1°-Eを指す。1号カマド燃焼部は床面より弱い段をもってやや高い位置に掘り込まれる。又煙道は1号がやや緩い傾斜、2号が強い傾斜で立ち上がる。これら2基のカマドが同時使用されたのかあるいは時期の前後関係があるのかについては判明できなかった。貯蔵穴は西壁際南端に検出された。楕円形を呈し、規模は径81×66cm深さ33cmを測る。又ビットは3基検出された。規模はP₁径61×43cm深さ21cm、P₂径107×83cm深さ18.5cm、P₃径34cm深さ35cmを測る。このうちP₁とP₂は重複しており1基のビットである可能性も考えられる。又P₃は小規模ではあるが、カマド



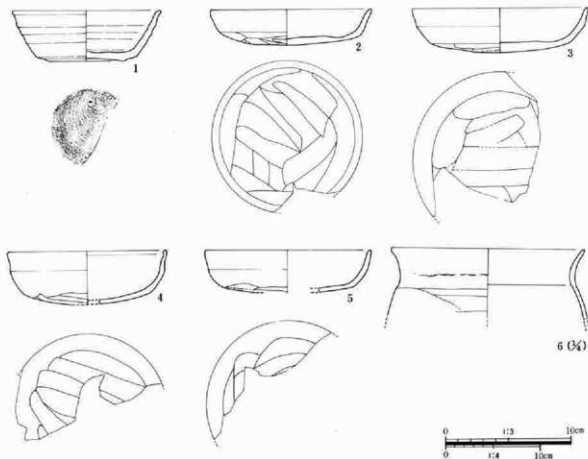
第182図 164号住居跡

との位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられる。周溝については検出されなかった。

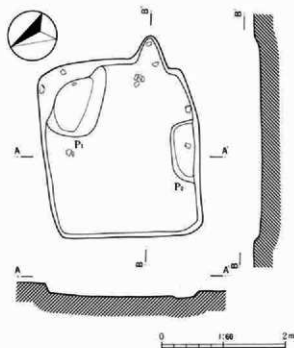
遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕、高古付櫛、砥石等の土器片約350点、大小の円礫8点が覆土下層を中心に出土している。床面上やカマド内からの出土は比較的少ない。出土した土器片のうち数量的に最も多い器種は土師器杯で全体の90%近くを占めている。須恵器杯には糸切り底が見られ、又甕の口縁部は所謂「コ」の字状口縁になる直前の段階のものと思われる。従ってこれらの時期は平安時代初頭に位置付けるのが妥当かと思われる。

重複遺構は163号住居跡で、南東部の1号カマド付近で重複する。新旧関係はカマドの残存状態からおそらく163号住→164号住と思われる。

第V章 検出された遺構と遺物



第183図 164号住居跡出土遺物



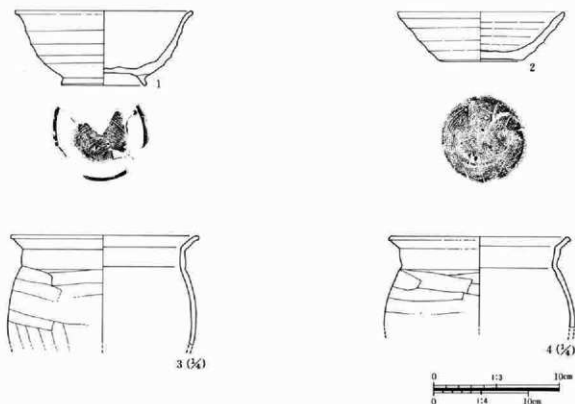
第184図 165号住居跡

165号住居跡 (第184図、PL. 8)

IV区G-8・9グリッドに位置する。平面はやや歪んだ縦長方形を呈しており、その規模は2.83×2.54m、面積6.8㎡を測る。主軸方向はS-67°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高19~7cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で比較的平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築され、二等辺三角形に壁外へ張り出した燃焼部のみ残存する。規模は長さ60cm幅56cmで、軸方向はS-61°-Eを指す。ピットは東側コーナー部と南西壁際中央部に検出され前者は三角形、後者は方形状を呈する。規模はP₁径118×90cm深さ12cm、P₂径94×36cm深さ4cmを測る。P₁は床下土壌か掘り形と思われるが、P₂については入口施設との関連が考えられようか。周溝、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋、高台付碗等の土器片100点程が主にカマド周辺及び覆土より出土する。甕が数量的に主体を占めており、時期は平安時代のものである。

重複遺構はないが、6号井戸と西側コーナー付近で接する。



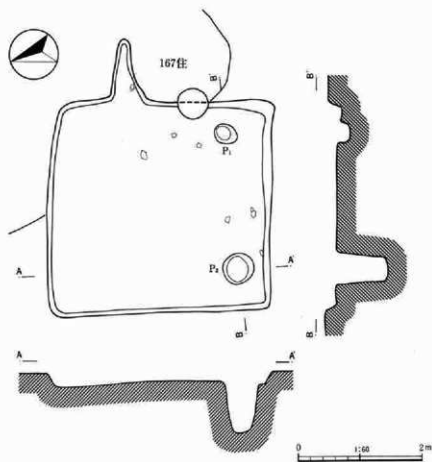
第185図 165号住居跡出土遺物

166号住居跡（第186図、PL. 8）

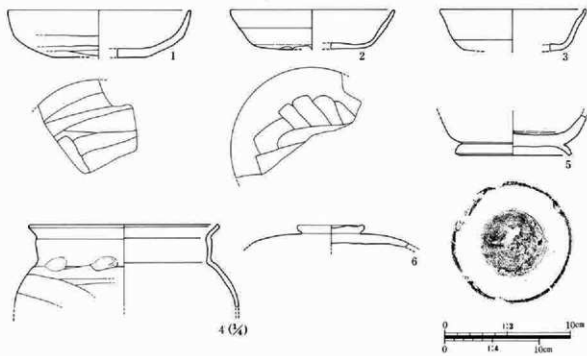
IV区H-9・10、I-9・10グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈する。規模は3.42×3.60m、面積は12.2㎡を測る。主軸方向はS-73°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は23~16cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で、比較的平坦である。カマドは東壁の北寄りに構築されており、燃焼部と煙道部が残存する。そこで部はカマド振り形の両壁をそのまま利用していると思われ、主体は壁外にあったものだろう。規模は長さ103cm、幅63cmを測る。軸方向はS-70°-Eを指す。ピットは2基が検出された。P₁は南東コーナ一部分、P₂は南西コーナ一部分に位置する。両者とも円形を呈し、規模はP₁径39×32cm深さ19.5cm、P₂径50×48cm深さ82cmを測る。これらのピットの性格については不明である。特にP₂については位置的に貯蔵穴とも考えられるが、他と比較して著しく深い事から別の性格を想定した方がよいと思われる。西壁に沿った床面がやや凹んでいたが、床面中央からの弱い傾斜で若干低くなっているものと解釈され、周溝とは考えられない。

遺物は杯、甕、須恵器蓋、同杯、同甕、高台付杯等の破片500点弱が出土する。出土位置は覆土中がほとんどで、床面上やカマド内から出土したものは小片数点のみである。数量的には土師器甕が最多で全体の50%程を占める。須恵器は全器種あわせて20点程である。時期は平安時代に位置付けられる。

重複遺構は167号住居跡で、北東部で重複する。新旧関係は本住居跡のカマド残存状態から167号住→166号住と思われる。



第186図 166号住居跡



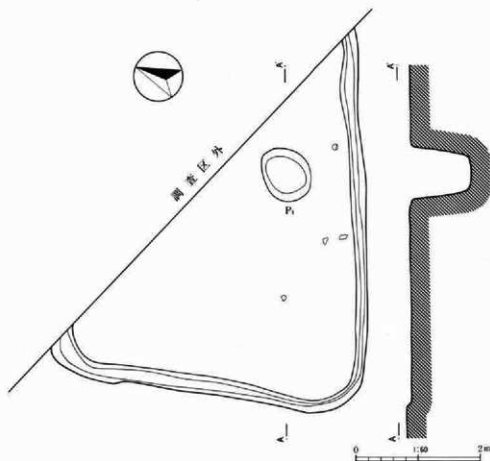
第187図 166号住居跡出土遺物

167号住居跡 (第188図、PL. 8)

IV区J-8・9、K-8・9グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われるが、北半は調査区外のために全形を知り得ない。壁はやや外傾し、確認壁高は50～38cmを測る。主軸方向は残存状態良好な南壁からN-(66°)-Eと推定される。カマドは検出されなかったが、遺物等より推定される時期から当然構築されたと考えられる。おそらく調査区外の北壁あるいは東壁に築かれたと思われるが、本遺跡における他の住居跡例からすれば東壁の可能性が高い。ヒットは南壁の中央より若干東寄りの位置から約20cm程離れた内側で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径92×75cm、深さ95cmを測る。これは屋内施設としては著しく深いもので、その性格については不明である。周溝は検出された範囲については壁に沿って全周しており、その規模は幅42～16cm深さ8～3cmを測る。住居覆土は上層に浅間B軽石、ローム粒、焼土、炭化物粒を含む褐色砂質土、下層にローム粒を多く含む黄褐色砂質土が堆積する。又周溝部分にはローム粒を含む黒色土が堆積する。堆積状態は概ねレンズ状を呈しており自然堆積の可能性が高い。

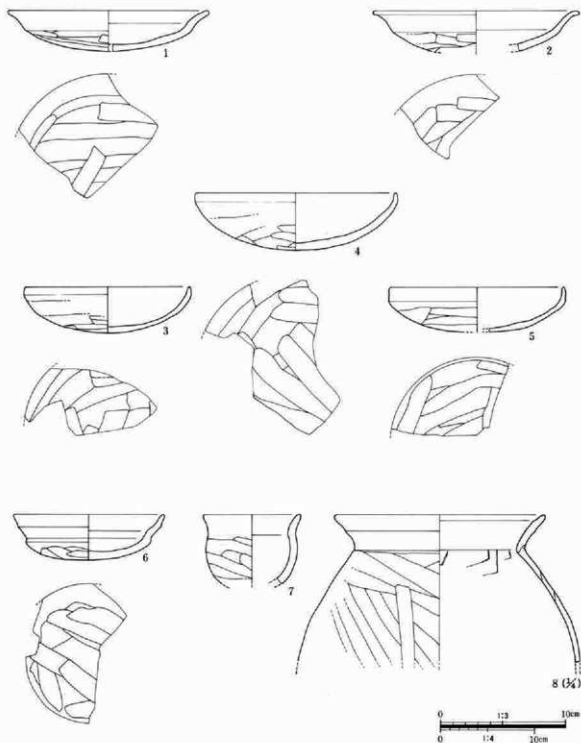
遺物は杯、甕、小形甕、須恵器杯、同蓋、同長頸壺、S字状口縁台付甕等の破片が約200点出土している。出土位置はほとんどが覆土下層である。これらの中で数量的に主体を占めるのは土師器杯で全体の約50%程を占める。時期は古墳時代後半～奈良時代にわたるが、主体は奈良時代のものである。

重複遺構は166号住居跡で、新旧関係は167号住→166号住である。



第188図 167号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物



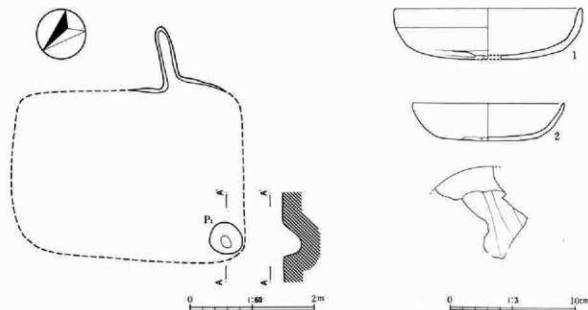
第189図 167号住居跡出土遺物

168号住居跡（第190図、PL. 8）

Ⅲ区F-11グリッドに位置する。平面は方形と推定されるが、ほとんど上半を後世の削平により失なわれており全形や規模を知り得ない。カマドとその両脇の壁のみがわずかに残存する。カマドは南東壁に構築されたと思われる。明確なのは煙道部で長さ95cm程が検出された。軸方向はS-51'-Eである。なお本住居跡の範囲内と思われる位置にピットが1基検出された。楕円形を呈し、規模は径53×50cm深さ30cmを測る。位置や

形状、規模等から本住居跡に伴う貯蔵穴の可能性はある。

遺物は床面及び覆土下層と推定される位置から土器片数点及び土製円板が出土している。いずれも平安時代に属するものと考えられる。



第190図 168号住居跡及び出土遺物

169号住居跡 (第191図, PL. 8)

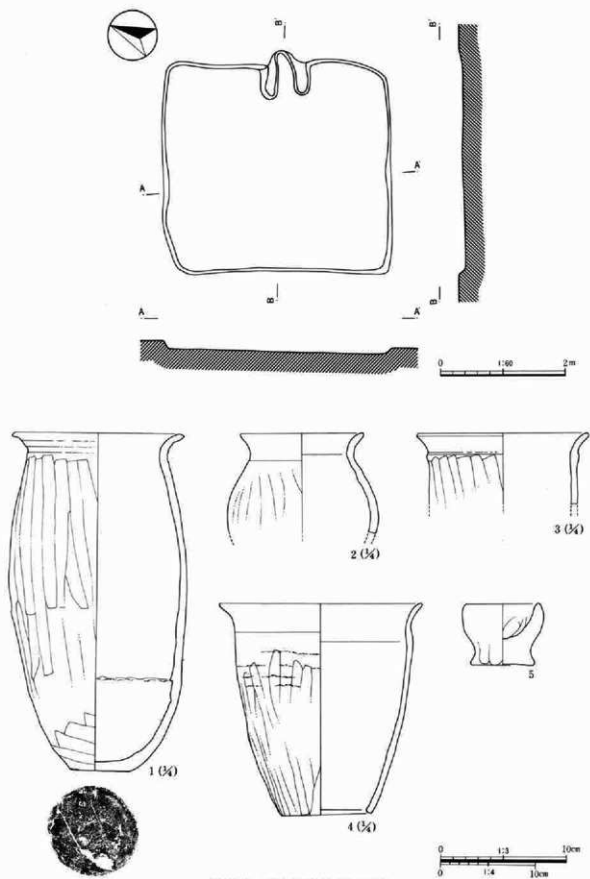
Ⅲ区H-12・13、I-12・13グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈する。規模は 3.35×3.67 mで、面積は 11.9m^2 を測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁は残存状態不良でやや外傾し、確認壁高は $14 \sim 7$ cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用している。比較的平坦な面を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に構築されており、残存状態は比較的良好である。規模は長さ 77cm 、幅 78cm を測る。軸方向はN-59°-Eを指す。そでは粘土で構築されており、壁内に 56cm 程張り出す。燃焼部は比較的狭小で幅 30cm を測る。煙道は燃焼部との境が不明瞭で、弱い傾斜で立ち上がる。カマド以外の貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、高杯、甕、甎、手捏ね土器等の破片約500点程が床面及び覆土下層より出土した。又カマドの焚口部分と思われる位置で 10cm 大の円礫が1点出土している。器種の中では甕の破片が数量的に最も多く、全体の約80%近くを占めている。時期は古墳時代後期（鬼高期の新しい段階）と思われる。

重複遺構はなく単独で検出された。

170号住居跡 (第192図, PL. 8)

Ⅲ区F-14・15、G-14・15グリッドに位置する。平面はやや胴張りの縦長方形を呈する。規模は $4.67 \times 3.85\text{m}$ で、面積は 16.9m^2 を測る。主軸方向はN-81°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高 $19 \sim 2\text{cm}$ を測る。床面は地山のローム土を利用している。カマドは東壁の南寄りに構築され、そで部、燃焼部、煙道部が残存する。長さ 154cm 、幅 94cm を測り、軸方向はN-(79°)-Eを指す。煙道はほぼ北東方向に延びた後、一段屈



第191図 169号住居跡及び出土遺物

曲して東方向に向かう。立ち上がりの傾斜は比較的緩やかである。その部はロームブロックを含む粘土で築き、壁内に36cm程張り出す。周溝は北壁の東寄りの部分から西壁中央部分にかけての間で検出された。規模は幅19～8cm、深さは5～2cmを測る。その他に貯蔵穴やピット等の施設は検出されなかった。

遺物は形状、時期の不明な土器片数点が出土したのみである。

重複遺構はなく単独で検出されている。

171号住居跡(第193図、PL.8)

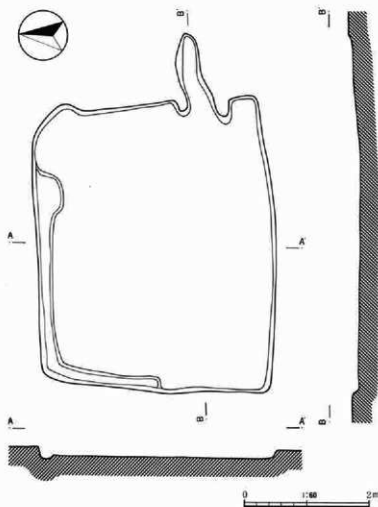
III区E-16・17グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、北半が他住居跡と重複して不明瞭なため全形、規模を明らかにしない。主軸方向はS-89°-Eを指す。壁はわずかに残存し、確認壁高9～2cmを測る。床面は地山のロームから黒褐色土への漸移土をそのまま基盤とする。カマドは若干の焼土の存在から東壁の中央部にあったと推定されるが、形状や規模については不明である。その他に住居に伴う施設は検出されなかった。

遺物は南壁際において杯、高台付杯等の破片が20点程出土している。時期は奈良時代後半～平安時代初頭に位置付けられよう。

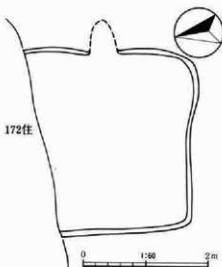
重複する遺構は172号住居跡で、新旧関係は後述するように171号住居→172号住居と思われる。

172号住居跡(第195図、PL.8)

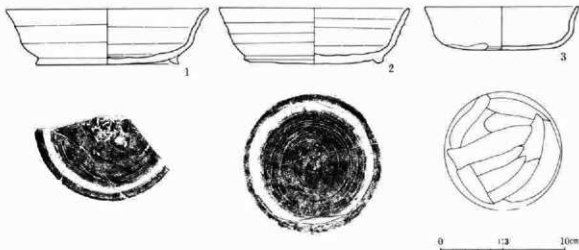
III区E-17・18、F-17・18グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈している。規模は7.83×7.95m、面積は62.9㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高19～3cmを測る。床面は地山のローム土を利用して



第192図 170号住居跡

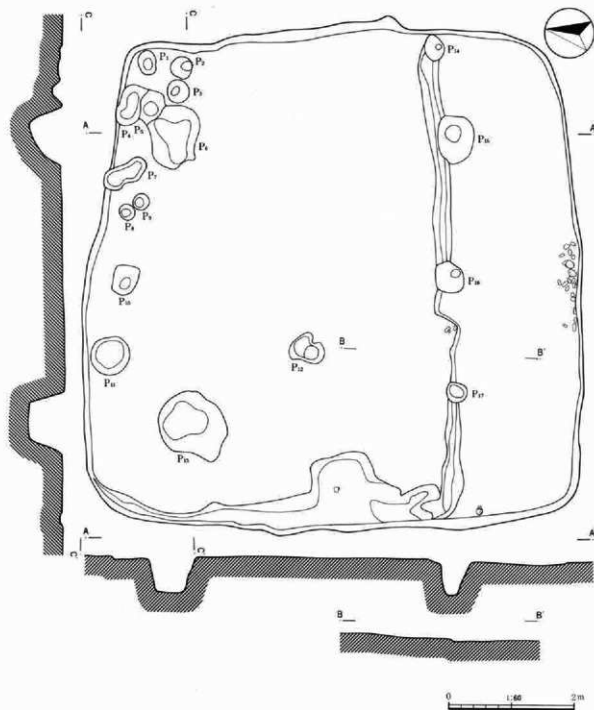


第193図 171号住居跡



第194図 171号住居跡出土遺物

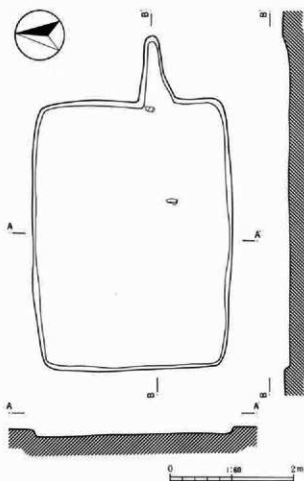
おり、小さな凹凸が比較的多い。カマドは検出されず、それらしい痕跡も認められない。ピットは全部で17基が検出された。P₁～P₁₁は西壁沿い、P₁₂とP₁₃は北西コーナーと南東コーナーを結ぶ対角線上の北西側に位置する。又P₁₄～P₁₇は南半部において、ほぼ東西方向の一直線上に並んでいる。規模はP₁径38×28cm深さ28cm、P₂径35×25cm深さ41cm、P₃径36×25cm深さ15cm、P₄径64×25cm深さ14cm、P₅径75×53cm深さ36cm、P₆径100×75cm深さ54cm、P₇径57×35cm深さ10cm、P₈径30×25cm深さ13cm、P₉径26×25cm深さ17cm、P₁₀径47×40cm深さ49cm、P₁₁径62×60cm深さ20cm、P₁₂径55×30cm深さ5cm、P₁₃径96×70cm深さ59cm、P₁₄径39×31cm深さ19cm、P₁₅径75×58cm深さ52cm、P₁₆径32×31cm深さ10cm、P₁₇径32×31cm深さ10cmを測る。周溝は西壁に沿った北半部分で検出され、その南端は掘り形と思われる不定形の浅い掘り込みに続く。幅は50～15cm、深さ10cm前後を測る。又住居南半部分でピットP₁₄～P₁₆及びP₁₇～西壁の間に間仕切りと思われる溝が検出された。幅は35～15cm深さは11～2cmを測る。なお間仕切溝によって二分された本住居跡の面積は北側45㎡、南側16㎡を測る。なおP₁₆とP₁₇の間は1.90mを測りここには溝が検出されていない。しかし北側床面のレベルが南側床面よりも5cm高く段差がついており、明らかに両者を区別している。これら多数のピットと溝がどのような性格をもっていたのかについては推定の域を出ないが、各々の規模と位置関係よりピットP₆、P₁₂、P₁₃は主柱穴と考えたい。この場合の各柱間距離はP₆～P₁₂が4.40m、P₆～P₁₃が4.40m前後とほぼ同距離を測る。しかしながらこの配置による基本的な4本柱構造を考えた場合に残る1本の柱穴が認められない。位置と柱間距離からあてはめるならばP₁₇がそれにあたると思われる。ただしこれは他3基に比べ著しく規模が小さい事から果して同様の性格付けをしてよいか疑問が残るところである。又P₁₄～P₁₇は間仕切溝の走行上に掘り込まれている事からこの両者が組合わされて住居構造の一部を形成していたと考えるのは自然であろう。最も可能性が高いと思われるのは、これらのピットに柱を立てて、この間の溝を利用して板あるいは藁状のものをさし込んで立て、仕切壁を作る事である。ちなみに各ピット間距離はP₁₄～P₁₅が1.4m程、P₁₅～P₁₆が2.2m程、P₁₇～西壁が2m程を測る。けっして正確な等間隔ではないが、この間仕切を四分割しようとする意識は窺う事ができる。もしこれらを仕切壁と推定した場合、溝のなかったP₁₄～P₁₇間は出入口になると考えられよう。そして住居自体の出入口を南側に想定できるとすれば、この仕切壁によって分けられた南側の狭小な部分と北側の広い部分はそれぞれ前者が「土間」^(註3)で後者が「奥部屋」といった構造になる。この「奥部屋」の奥壁ともいえる北壁にそって大小のピットが1基あるが、これらの性格については不明である。



第195図 172号住居跡

遺物は杯、甕、高杯、須恵器甕の破片が140点程覆土より出土している。又「土間」部分の南壁際で10cm大の円礫約20点が出土している。編み物用の鎌かあるいは入口施設に伴う何らかの痕跡かと思われる。土器片はいずれも小片で形態の不明なものが多いが、杯と甕を見るかぎり奈良時代後半～平安時代初頭のものと思われる。

重複遺構は143号・144号・146号・171号・190号住居跡であるが、新旧関係の判明したのは143号・146号・171号住→172号住である。



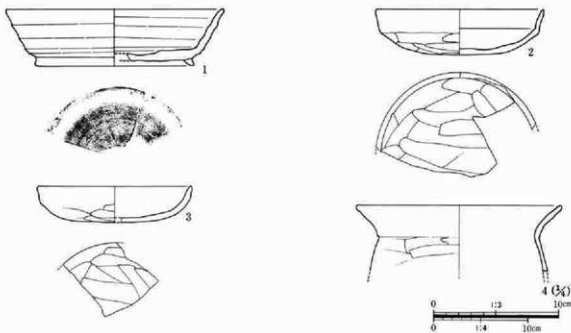
第196図 174号住居跡

174号住居跡 (第196図, PL. 8)

Ⅲ区B-18・19、C-19グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.30×3.18mを測る。主軸方向はN-87°Eを指す。壁は残存状態不良で、ほぼ直立し確認壁高は12~4cmを測る。床面は地山である黒褐色粘質土でローム粒を含んでいる。比較的平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。規模は長さ115cm、幅60cmを測る。軸方向はN-84°Eを指す。燃焼部は壁外に築かれたと思われる。そで部は両側の壁をそのまま利用したのであろう。煙道は燃焼部との境が不明瞭で、しだいにすぼまり、緩い角度で立ち上がる。カマド以外のピット、貯蔵穴、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土は浅間B軽石を多量に含む黒褐色土が堆積する。

遺物は杯、高杯、甕、鉢、小形壺、須恵器等の土器片約70点が床面及び覆土より出土している。時期はほとんどが奈良時代末~平安時代初頭に属するものと思われる。

重複遺構はなく単独で検出された。



第197図 174号住居跡出土遺物

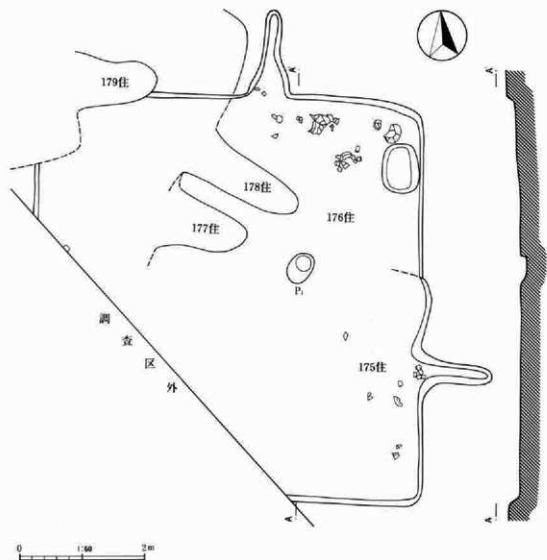
175号住居跡(第198図、PL. 8)

Ⅲ区B-19-20、C-19-20グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、176号住居跡と重複するため西半に関しては形状、規模共に不明である。主軸方向はS-88°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は24-12cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦である。カマドは東壁とほぼ中央と思われる部分に構築され、規模は長さ128cm、幅70cmを測る。軸方向はS-70°-Eを指す。燃焼部は焼土分布や床面との関係から壁内に構築されたと思われるが、形状等については不明である。カマド以外に貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器等の破片が約170点程床面及び覆土下層から出土している。時期は古墳時代後期-奈良時代にわたるが、主体は奈良時代のものである。

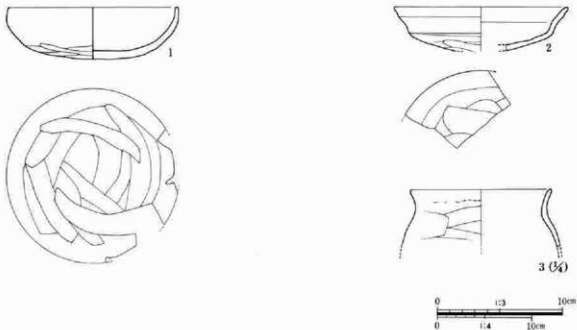
重複遺構は176号住居跡で、主軸方向がほぼ直交し、更に176号住の東壁がそのまま本住居跡の東壁に続くような状態で重複する。新旧関係は不明であった。

本住居跡は床面レベルが176号住とほぼ同一である事から、両者は単一住居跡である可能性も考えられる。



第198図 175・176号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物



第199図 175号住居跡出土遺物

176号住居跡(第198図、PL. 8)

Ⅲ区B-20・21、C-20・21グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、他遺構との重複、及び南西部が調査区外にあたるため全形、規模は不明である。主軸方向はN-4°-Eを指す。壁は外傾し、確認壁高は22-6cmを測る。床面は地山のローム土を利用している。カマドは北壁のほぼ中央部に構築されている。規模は長さ137cm、幅68cmを測る。主軸方向はN-13°-Eを指す。燃焼部は壁外に掘り込まれている。そで部はおそらく両壁を利用したと思われる。貯蔵穴は北東隅に掘り込まれている。平面は隅丸長方形を呈し、規模は77×55cm、深さ16cmを測る。又ピットは中央ややや東寄りの位置に検出された。平面は楕円形を呈し、規模は52×37cm深さ13cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器の破片が約120点程出土した。出土位置はカマド周辺及び貯蔵穴周辺に集中しており、覆土より出土したものが比較的多い。時期はほとんどが奈良時代に属するものと考えられる。

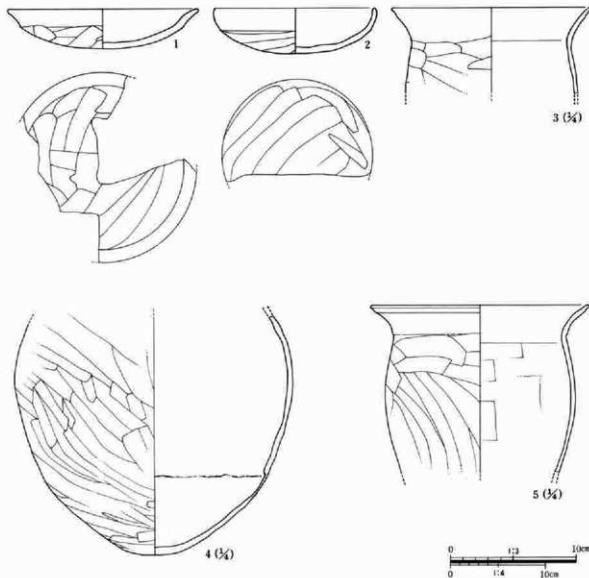
重複遺構は175号住居跡、177号住居跡、178号住居跡、179号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状態より、176号住→177号住・178号住・179号住である。175号住との関係については、前述のとおり同一住居跡の可能性が考えられる。

177号住居跡(第201図、PL. 8)

Ⅲ区B-21グリッドに位置する。カマドのみが検出され、全形や規模等については不明である。カマドはその方向から東壁に構築されたと思われる。規模は長さ140cm、幅95cmを測り、軸方向はS-69°-Eを指す。比較的長大なもので、壁外に長く張り出す形状と思われる。

遺物は床面付近と思われる位置から杯、甕を主とした土器片が出土しているが、重複する遺構が多くその母属は不明である。

重複遺構は176号住居跡、178号住居跡、179号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状態より176号住→177号住と考えられる。

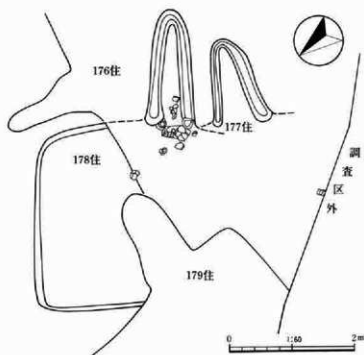


第200図 176号住居跡出土遺物

178号住居跡 (第201図)

Ⅲ区B-21グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、南西半は重複遺構が多く全形は不明瞭となっている。残存する部分から東西方向は2.90mを測り、南北方向はこれよりやや長く、全体として横長長方形になると推測される。主軸方向は推定でS-(55°)-Eを指すと思われる。壁は残存部で13-7cmの壁高を測る。床面は地山のロームを利用している。南西半部は不明瞭。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築されたと思われる。規模は長さ182cm、幅78cmで、軸方向はS-56°-Eを指す。その部は壁際内にあり、燃焼部は壁外に掘り込まれる。燃焼部は比較的狭小で、ほとんど変化を見せずそのまま煙道に続く。煙道はほぼ水平に長く伸び、末端部分で急角度をもって立ち上がる。なおその部左側には円筒埴輪、右側には河原礫が直立した状態で出土し、又焚口と思われる部分で円筒埴輪片が両所で部を繋ぐような状態で横転して出土した。これらはかなり二次的加熱を受けた痕跡が見られる事から、おそらくカマド焚口部の構造材と考えてさしつかえない。なお本住居跡からはカマド以外に貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、小皿、高台付碗等の土器片及び埴輪片が約160点程出土している。出土位置はカマド周辺に



第201図 177・178号住居跡

集中する他はほとんどが覆土からの出土である。時期は奈良～平安時代のものであるが、本住居跡に伴う可能性の高いカマド内出土土器は平安時代の厚手の甕（土釜）である事、又カマド前方の比較的床面に近い部分から小形の皿が出土している事、更に数量的に平安時代のもが主体を占めている事等より本住居跡の時期は平安時代(11世紀代)の可能性が高い。従って第202図・4・7はその特徴から本住居跡に伴うと考えよりむしろ他遺構(176号住か?)からの混入と解釈した方が妥当であろう。なおカマドから出土した円筒埴輪については後述(第V章-9)する。

重複遺構は176号住居跡、177号住居跡、179号住居跡で、カマドの残存状態から新旧関係は176号住→178号住→179号住と思われる。なお177号住との関係は明らかに出来なかったが、本住居跡のカマドの残存状態から177号住が古くなる可能性がある。



第202図 178号住居跡出土遺物

179号住居跡 (第203図)

Ⅲ区B-21・22グリッドに位置する。平面は方形かと思われるが、他遺構と重複する部分が多く又一部が調査区外にあたるため全形と規模については不明である。主軸方向はN-82°-Eを指す。壁は残存部分で14-9

cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、残存部分においてはほぼ平坦である。カマドは東壁の南隅付近に構築され、規模は長さ149cm、幅88cmを測る。軸方向はS-84°-Eを指す。その部は壁をそのまま利用しており、燃焼部は壁外に張り出す。燃焼部と煙道部の境は不明瞭で、煙道はしだいにせばまりほぼ水平に延びる。ピットは住居の南東隅付近で1基が検出された。楕円形を呈し、規模は径52×49cm深さ30cmを測る。

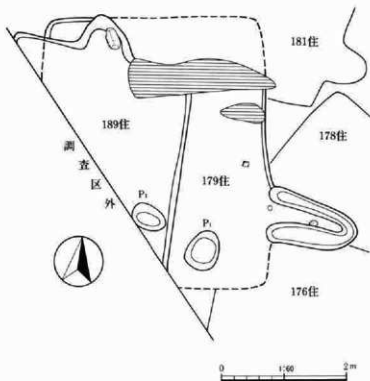
遺物はカマド周辺を中心に杯、甕等の土器片約30点程が出土しているが、ほとんど覆土中からの出土であり、重複する他遺構に伴う可能性もあるためその帰属は不明である。時期は奈良時代～平安時代のものが見られる。

重複遺構は176号住居跡、178号住居跡、181号住居跡、189号住居跡でカマド残存状態より判明した新旧関係は176号住→178号住→179号住→189号住であった。なお本住居跡の北半に細長い不定形の落ち込みが見られるが、これは後世の攪乱痕である。遺物からは判明できなかったがこの住居跡の重複関係より、本住居跡の時期は平安時代であると考えられよう。

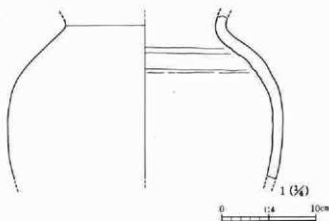
180号住居跡（欠番）

181号住居跡（第205図、PL.9）

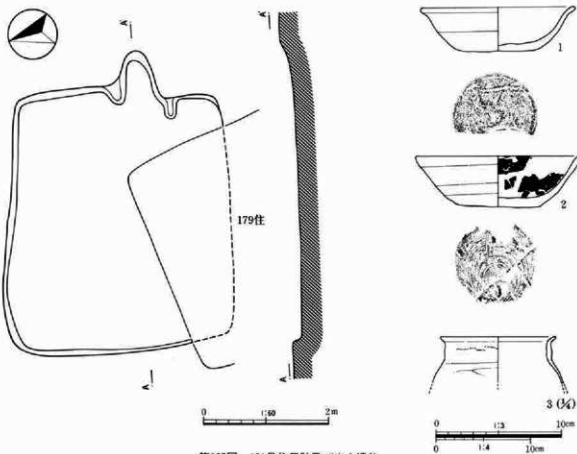
Ⅲ区B-22・23、C-22・23グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.22×(3.55)mを測る。主軸方向はS-84°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は15～8cmを測る。床面は地山のローム土を基盤としそのまま利用している。ほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁のやや南寄りに構築され、その部と燃焼部が残存する。規模は長さ110cm、幅110cmを測る。軸方向はS-81°-Eを指す。その部は壁内に35cm程張



第203図 179・189号住居跡



第204図 179号住居跡出土遺物



第205図 181号住居跡及び出土遺物

り出す。そこで部の左側と右側では張り出しに段差がある。これはおそらく住居掘り形の段階でカマドの両側の壁を故意に段差をつけて掘り込んだためと思われる。貯蔵穴、ピット、周溝等の住居内施設は全く検出されなかった。

遺物は杯、甕、須器器杯等の破片が約100点程出土している。出土位置は覆土中が主である。時期はほとんどが平安時代に属するものである。

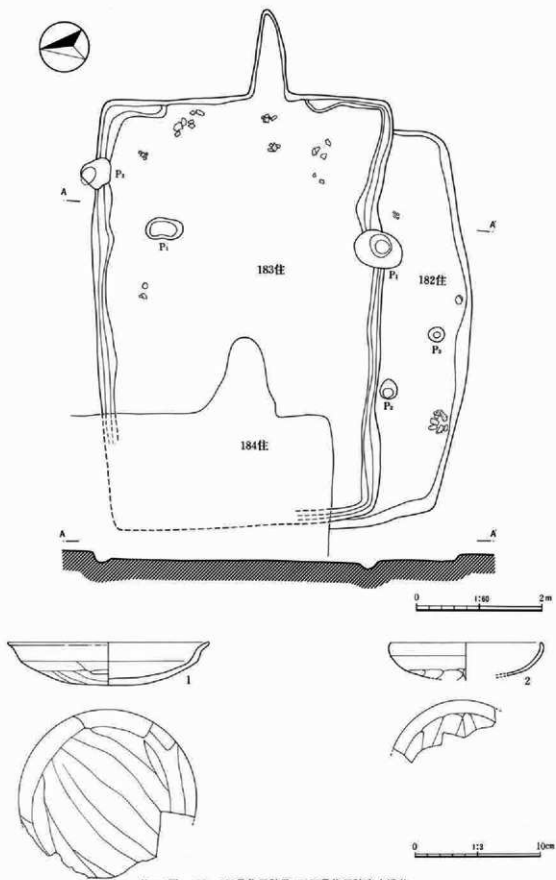
重複遺構は179号住で、新旧関係は不明であった。

182号住居跡 (第206図, PL. 9)

Ⅲ区C-20・21、D-20・21グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、北半の大部分が183号住居跡と重複するため全形、規模については不明である。わずかに残存する東壁—西壁間距離は6.08mを測る。主軸方向は南壁の走向よりS-(78°)-Eを指すと推定される。壁はほぼ直立し確認壁高18~7cmを測る。床面は地山のローム土を利用してそのまま使用している。床面レベルは重複する183号住とほとんど差がない。カマドは検出されなかった。ピットは3基が検出された。規模はP₁径75×55cm深さ31cm、P₂径30×25cm深さ30.5cm、P₃径25cm深さ19cmを測る。なおP₁とP₂は位置や規模から主柱穴になる可能性が考えられる。

遺物は杯、甕の土器片が約30点程出土したが、本住居跡に確實に伴うものは少ない。時期は奈良時代のものである。又南壁際の西寄りの位置で河原礫7点が集中して出土した。

重複遺構は183号住居跡で新旧関係は不明である。



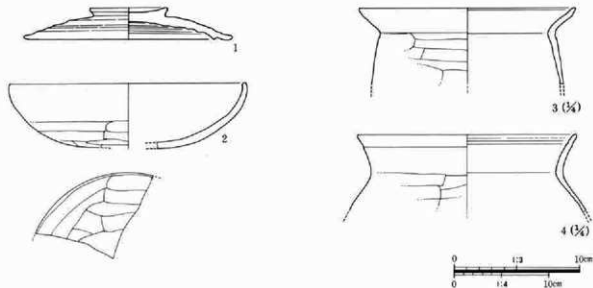
第206図 182・183号住居跡及び182号住居跡出土遺物

183号住居跡 (第206図, PL. 9)

Ⅲ区D-20・21、E-20・21グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は6.80×4.68mを測り、面積は推定値で27.3㎡を測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は18-1cmを測る。床面は地山のローム土で、北側に小さな凹凸が多い。カマドは東壁のほぼ中央部分に構築され、燃焼部と煙道部が残存する。規模は長さ143cm、幅75cmを測る。軸方向はS-83°-Eを指す。燃焼部は壁外に張り出しており、底面は床面より若干レベルが高い。又煙道は燃焼部から弱い段を形成して1段高いレベルでほぼ水平に延びる。ピットは2基が検出された。P₁は北壁際、P₂は北壁を切る位置で検出された。規模はP₁径60×33cm深さ12cm、P₂径45×20cm深さ20cmを測る。P₁は位置的に柱穴の可能性はあるが、P₂については本住居跡に伴うかどうかは不明である。周溝はカマド両脇部を除いて全周すると思われる。規模は幅35-14cm深さ8-3cmを測る。

遺物は杯、甕、蓋、砥石等の破片約520点程が出土した。出土位置はカマド周辺の覆土下層に比較的集中する。時期は大部分が奈良時代(古段階と思われる。)に属する。

重複遺構は182号住居跡、184号住居跡で、判明した新旧関係は183号住→184号住である。なお182号住との関係は床面レベルがほぼ同じである事、主軸方向をほぼ同じくして東西の両壁がさほどずれていない事、又出土遺物の時期が同じと考えられる事等から、これは本住居跡の拡張あるいは張り出し施設の可能性も考えられる。しかしここでは土層によって同一である事が確認できなかったため、別遺構として扱った。



第207図 183号住居跡出土遺物

184号住居跡 (第208図, PL. 9)

Ⅲ区C-21・22、D-21・22グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈する。規模は3.90×5.44mで、面積は21.2㎡を測る。主軸方向はS-83°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は34-1cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用している。凹凸は少なく比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築され残存状態は比較的良好である。規模は長さ137cm、幅130cmを測る。軸方向はS-78°-Eを指す。燃焼部は壁外に張り出す形状で、そでは両壁をそのまま利用したと思われる。燃焼部はしだいにすぼまり煙道部に続き、煙道はほぼ水平に延びる。ピットは6基検出された。規模はP₁径45cm深さ18cm、P₂径23cm深さ17cm、P₃径35×30

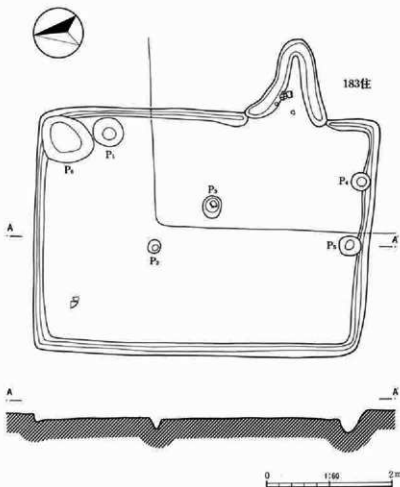
cm深さ9.5cm、 P_1 径30cm深さ8cm、 P_2 径35×30cm深さ23cm、 P_3 径88×73cm深さ18.5cmを測る。このうち P_3 は規模が最大で、掘り形もしっかりしており、住居コーナー部に位置する事から貯蔵穴の可能性が考えられる。又 P_1 と P_2 は南壁際に並んで約35cmの間隔をあけて掘り込まれており、出入口に関連する施設と考えられようか。周溝は全周しておりその規模は幅22~13cm、深さ14~1cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋等の土器片が約120点程出土している。出土位置はほとんどがカマド周辺か覆土下層である。小破片が多く時期不明のものが多いが、全体に奈良時代と平安時代のものが混在する様相を示す。

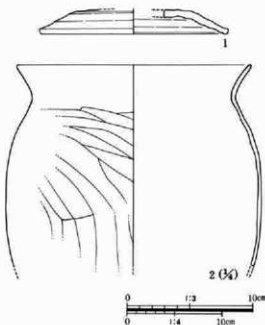
重複遺構は183号住居跡、191号住居跡で、判明した新旧関係は183号住→184号住であった。

185号住居跡 (第210図、PL. 9)

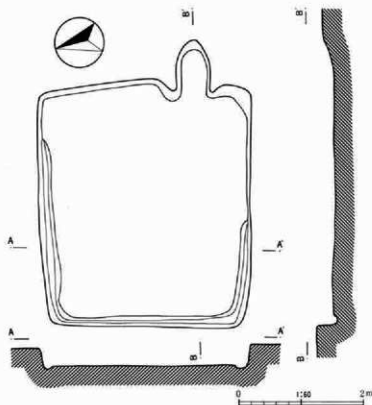
Ⅲ区C-23・24、D-23・24グリッドに位置する。平面は縦長長方形で、東壁がやや胴張り気味の形状を呈する。規模は3.90×3.40mで、面積は13.0㎡を測る。主軸方向はS-86°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は38~4cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土である。カマドは東壁の南寄りに構築され、残存状態は比較的良好である。規模は長さ98cm、幅90cmを測る。軸方向はS-80°-Eを指す。そで部は灰色粘土を張って壁内に40cm程張り出させ、そこに15cm大の河原礫を直立させて補強材としている。燃焼部本体は壁外に架かれる。燃焼部の幅は約40cmを測る。煙道は不明



第208図 184号住居跡



第209図 184号住居跡出土遺物

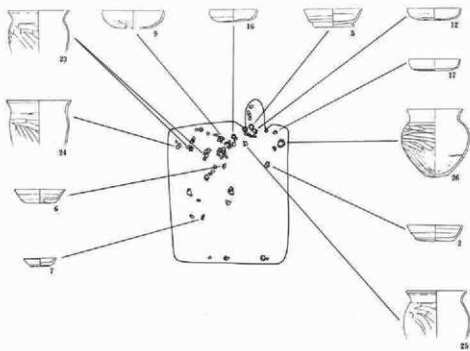


第210図 185号住居跡

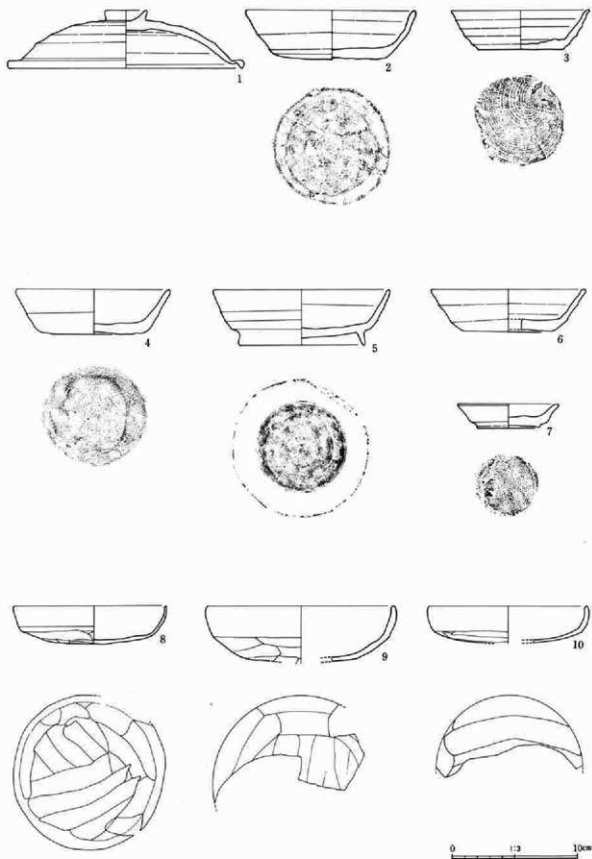
障であるが、おそらく焼焼部奥壁からそのまま急角度で立ち上がったと思われる。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。周溝は北壁の東端約60cm程の位置から西壁及び南壁のほぼ中央付近まで廻っており、カマドのある東半では検出されなかった。規模は幅27~13cm深さ5~3cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕、蓋、高台付杯、横瓶等の土器片約700点近くが出土している。その他に土唾2点と青銅製の湯方が出土している。出土位置はカマド周辺部を中心にして床面及び覆土下層が多い。時期は平安時代初頭頃に限定してよいと思われる。

重複遺構はない。

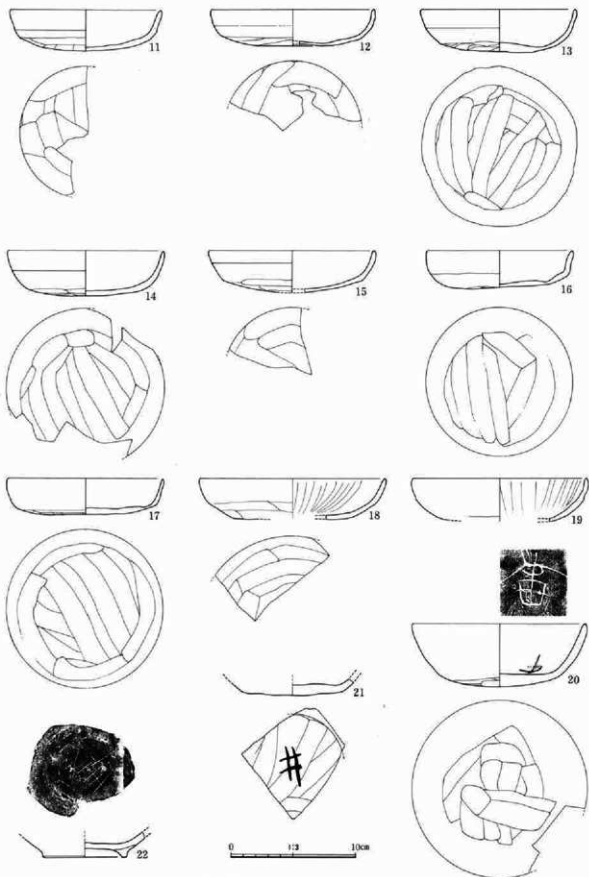


第211図 185号住居跡遺物分布図

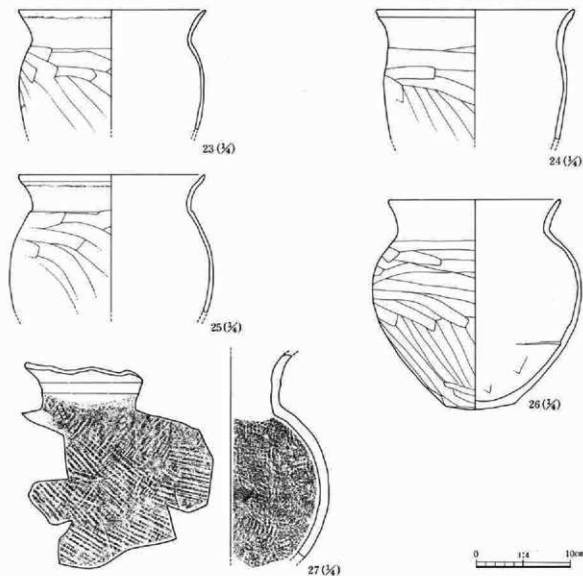


第212図 185号住居跡出土遺物(1)

第V章 検出された遺構と遺物



第213図 185号住居跡出土遺物(2)



第214図 185号住居跡出土遺物(3)

186号住居跡 (第215図)

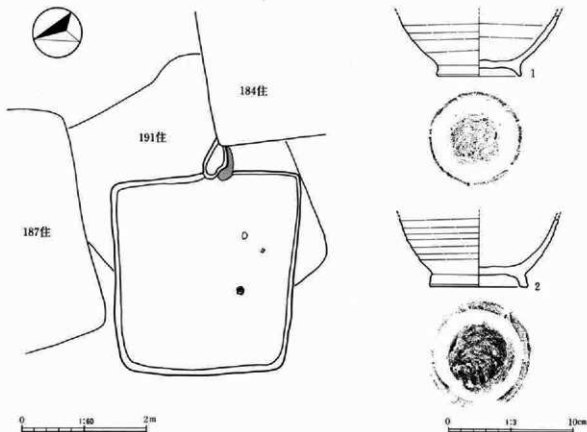
III区C-22・23、D-22・23グリッドに位置する。平面は正方形を呈する。規模は $3.18 \times 3.04\text{m}$ 、面積は 9.1m^2 を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は $9 \sim 3\text{cm}$ を測る。床面はやや凹凸がある。カマドは東壁に構築される。規模は長さ 80cm 前後、幅 48cm を測り、軸方向はS-59°-Eを指す。燃焼部は壁外に張り出す。貯蔵穴、ビット、周溝等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、高台付碗等の土器片約100点が出土しているが、重複する191号住居跡に伴う遺物との分離は困難である。その中で確実に本住居跡に伴うものは図示した高台付碗を含めて平安時代のものが主体である。

重複遺構は184号住居跡、191号住居跡で、判明した新旧関係は191号住→186号住であった。

187号住居跡 (第216図)

III区D-23、E-23グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。北壁が他に比べてやや長い。規模は $4.07 \times 3.72\text{m}$ 、面積は 13.2m^2 を測る。主軸方向はS-77°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は $20 \sim 3\text{cm}$



第215図 186号住居跡及び出土遺物

を測る。床面はほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、そで部と燃焼部が残る。規模は長さ65cm幅87cmを測る。軸方向はS-88°-Eを指す。そで部は約45cm程壁内に張り出す。ピットは2基が検出された。2基とも西壁際のはほぼ中央に並列している。規模はP₁径55×50cm深さ13cm、P₂径55cm深さ18cmを測る。

遺物は杯、甕、小皿等の土器片約20点が出土した。時期は奈良～平安時代のものが混在している。

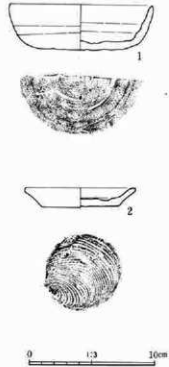
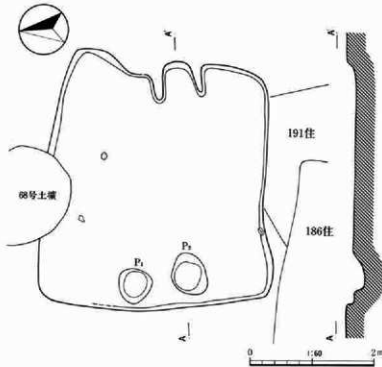
重複遺構は191号住居跡、68号土壌で、判明した新旧関係は187号住→68号墳であった。

188号住居跡（第217図、PL. 9）

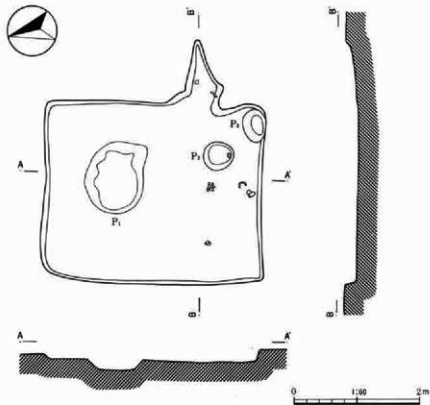
III区E-24・25グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は2.88×3.56m、面積は10.3㎡を測る。主軸方向はS-82°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は22～8cmを測る。床面は地山のローム土で、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ118cm、幅87cmを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。右そで部が若干内側に張り出す形状である。煙道は燃焼部から急激にすぼまり、緩い傾斜で立ち上がる。主体は壁外に繋がるようである。ピットは3基が検出された。規模はP₁径118×93cm深さ18cm、P₂径45cm深さ20cm、P₃径52×38cm深さ40cmを測る。P₁はその規模や形態から床下土壌が別個の遺構になると思われる。

遺物は杯、甕、蓋等の土器片約30点が床面及び覆土下層から出土している。時期は奈良時代と思われる。

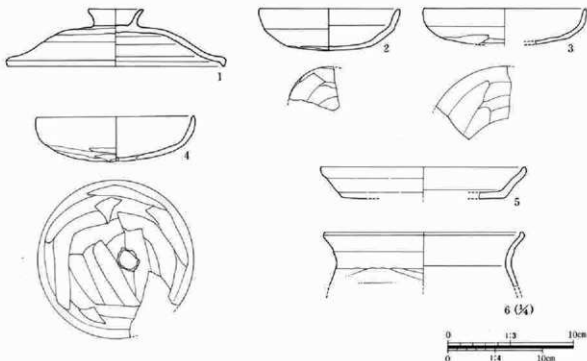
重複遺構はない。



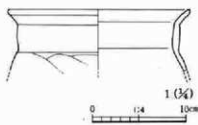
第216図 187号住居跡及び出土遺物



第217図 188号住居跡



第218図 188号住居跡出土遺物



第219図 189号住居跡出土遺物

189号住居跡 (第203図)

Ⅲ区B-22グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南西半が調査区外のため全形、規模は知りえない。主軸方向はN-3°Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は26-14cmを測る。床面は地山のルームで凹凸が多い。カマドは北壁中央に構築される。規模は長さ77cm、幅93cmを測る。燃焼部のみ残存する。なお燃焼部右側の天井部と思われる付近から30cm大の河原礫が出土したが、これがカマドとどのような関係にあったのかは不明である。ピットは1基が検出さ

れた。規模は径55×40cm深さ17cmを測る。

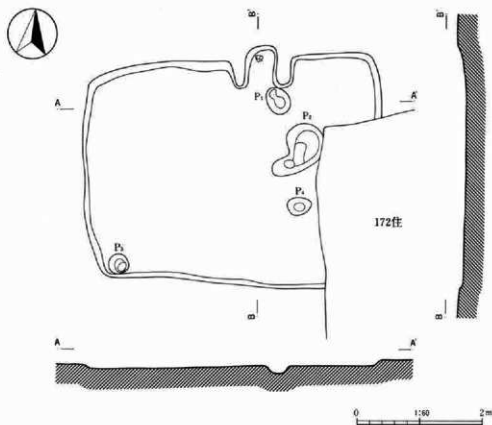
遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕等の破片30点程及び土錘1点が覆土より出土している。時期は平安時代のものが主である。

重複遺構との新旧関係は179号住→189号住である。

190号住居跡 (第220図、PL. 9)

Ⅲ区E-19・20、F-19・20グリッドに位置する。平面は横長長方形と思われる。規模は3.65×4.75mで面積は16.4㎡を測る。主軸方向はN-2°Wを指す。壁は残存状態不良であり、確認壁高は10-4cmを測る。床面はルームブロックを含む黒色土で凹凸が激しい。カマドは北壁の中央よりやや東寄りに構築されている。規模は長さ68cm、幅108cmを測り、軸方向はN-13°Eを指す。そで部は灰色粘土を貼り付けて壁内に48cm程張り出す。煙道部は検出されなかった。ピットは4基が検出された。規模はP₁径45×35cm深さ11cm、P₂径100×65cm深さ9cm、P₃径30cm深さ37cm、P₄径40×25cm深さ12cmを測る。

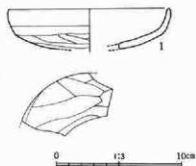
遺物は約40点程の土器片が出土している。杯と甕の破片が大部分である。時期は奈良時代に属するものが



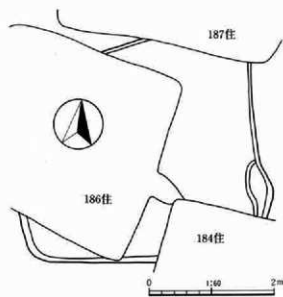
第220図 190号住居跡

大部分を占める。

重複遺構は172号住居跡であるが、新旧関係については不明であった。



第221図 190号住居跡出土遺物



第222図 191号住居跡

191号住居跡（第222図）

III区C-22・23、D-22・23グリッドに位置する。平面は方形と思われるが多数の遺構と重複しており全形、規模は明らかにしえない。壁は残存状態不良で確認壁高10～3cmを測る。床面は地山のローム土である。周溝は東壁南半で検出され、幅40～20cm深さ10cmを測る。

遺物は本住居跡に伴うものは出土していない。重複遺構との新旧関係は191号住→186号住である。

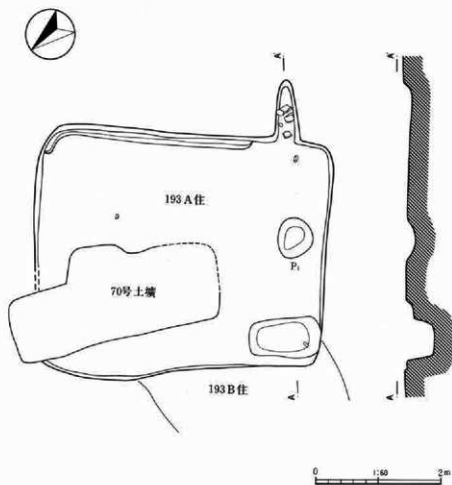
192号住居跡 (欠番)

193A号住居跡 (第223図、PL. 9)

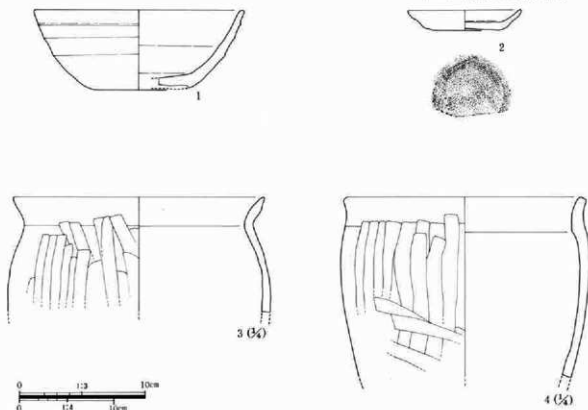
IV区D-1・2、E-1・2グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は4.00×4.73m、面積は17.8㎡を測る。主軸方向はS-45°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は11~1cmを測る。床面は地山のローム土を基盤としそのまま利用している。カマドは南東壁の南西隅に構築され、規模は長さ100cm、幅42cmを測る。軸方向はS-52°-Eを指す。燃焼部と煙道部の境は不明瞭である。主体は壁外にあると思われる。貯蔵穴は西側コーナー部で検出され平面は長方形を呈する。規模は115×59cm、深さ46cmを測る。ピットは南西壁際のほぼ中央で検出された。楕円形を呈し、規模は径60×55cm深さ10cmを測る。周溝は南東壁に沿ってカマド左側において検出された。規模は幅20~15cm深さ4~1cmを測る。

遺物は杯、甕、台付甕、高台付椀、小皿、羽釜等の土器片約300点程が出土している。カマド及び覆土中からの出土が多い。平安時代(10世紀以降)のものが大部分である。

重複遺構は193B号住居跡と70号土塙で、193B号住との新旧関係は不明であり、70号塙との関係は193A号住→70号塙である。



第223図 193A号住居跡



第224図 193A号住居跡出土遺物

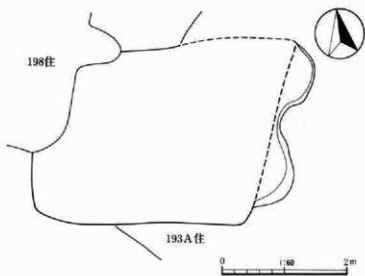
193B号住居跡 (第225図、PL.9)

IV区D-1・2、E-1・2グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、他遺構との重複が激しく全形、規模については明らかでない。壁は残存状態が悪く、壁高もほとんど計測できない。床面はローム粒を含む暗褐色土である。カマドは検出されなかったが、東側で焼土が若干見られるため東壁に構築された可能性が考えられる。

遺物は本住居跡に伴うと判断されるものは出土していない。

重複遺構は193A号住居跡、198号

住居跡、70号土壌、10号溝で、新旧関係は193B号住→198号住・70号塚で、193A号住、10号溝との関係は不明。



第225図 193B号住居跡

194号住居跡 (第226図、PL.9)

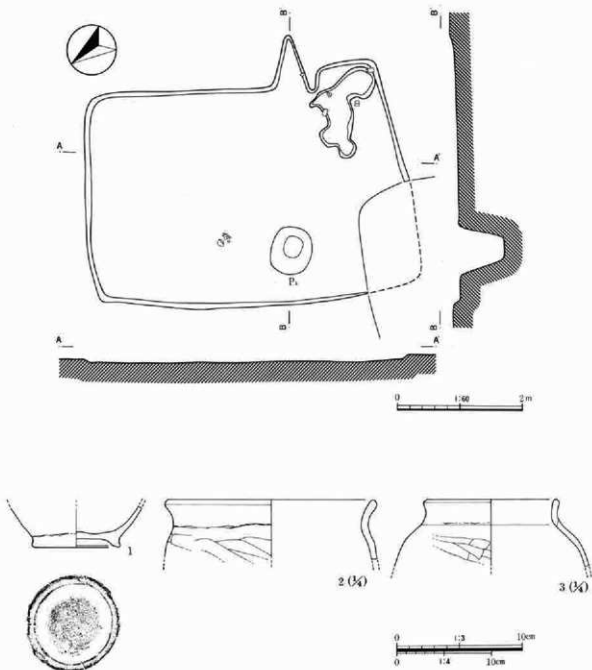
III区C-25、D-25グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.75×5.17m、面積は17.6㎡を測る。主軸方向はS-59°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は18～5cmを測る。床面は地山のローム

第V章 検出された遺構と遺物

漸移土ではほぼ平坦。カマドは南東壁に構築されており、規模は長さ90cm、幅76cmを測る。軸方向はS-58°-Eを指す。そでは壁内に40cm程張り出す。煙道部は燃焼部底面からそのまま続きほぼ水平に延びて末端部分で立ち上がりを見せる。ピットはカマドの反対側、北西壁から約40cm程離れた位置で検出された。楕円形を呈し、規模は径75×65cm(深さ74cm)を測る。性格は不明。又カマド右脇の部分で不定形で皿状を呈する掘り込みが検出されたが、これが本住居跡に伴うものかどうかは判別できない。

遺物は杯、甕、高台付碗等の破片約20点程が覆土から出土している。時期はほとんどが平安時代のもと思われる。

重複遺構はないが、西側コーナー部を掘乱により失っている。



第226図 194号住居跡及び出土遺物

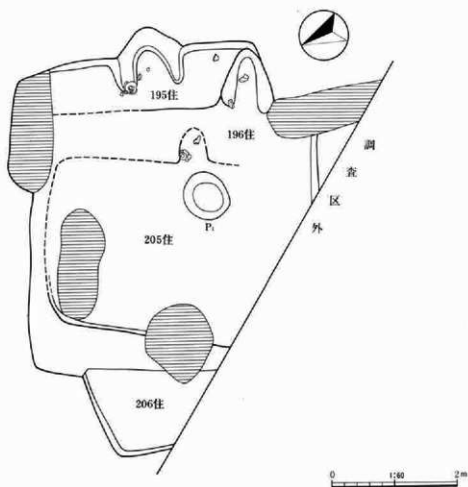
195号住居跡(第227図、PL.9)

III区B-25、C-25グリッドに位置する。平面は方形と思われる。西側の大部分は他遺構と重複するため形状、規模共に不明である。主軸方向はS-71°-Eを指す。壁は凹凸が多く荒れており確認壁高は33~16cmを測る。床面は残存部分に関しては地山のローム土である。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、規模は長さ102cm、幅121cmを測る。軸方向はS-89°-Eを指す。その部は壁内に60cm程張り出し、本体の大部分は壁内にあると思われる。煙道部は検出されなかったが、燃焼部奥壁のかなり高い位置から振り込まれているようである。なお左そでの先端部で壁が潰れた状態で検出されたが、これは補強材として使用されたものと思われる。遺物は壁の破片のみ約30点が出土している。時期は奈良時代の古段階のものかと思われる。

重複遺構は196号住居跡、205号住居跡で、新旧関係はカマド残存状態より195号住→196号住→205号住である。

196号住居跡(第227図、PL.9)

IV区B-1、C-1グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈すると思われる。南西隅は調査区外のため不明。規模は(4.12)×(4.57)mを測る。主軸方向はS-68°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は30



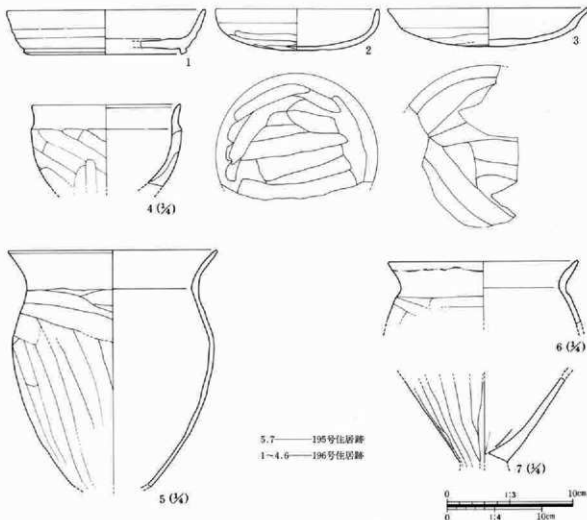
第227図 195・196・205・206号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

cm前後を測る。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは東壁南端に構築され、規模は長さ114cm、幅84cmを測る。軸方向はS-65°-Eを指す。その部はおそらく両壁をそのまま利用したものと思われる。

遺物はカマド周辺から杯、甕、台付甕、高台付杯、小彩甕等の破片及び土鍔が出土している。時期はほとんどが奈良時代に属するものである。

重複遺構は195号住居跡、205号住居跡、206号住居跡で、新旧関係は195号住→196号住→205号住である。

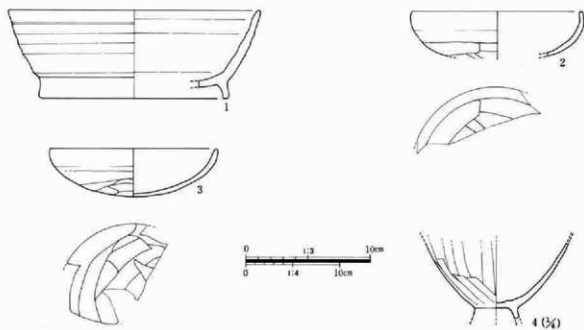
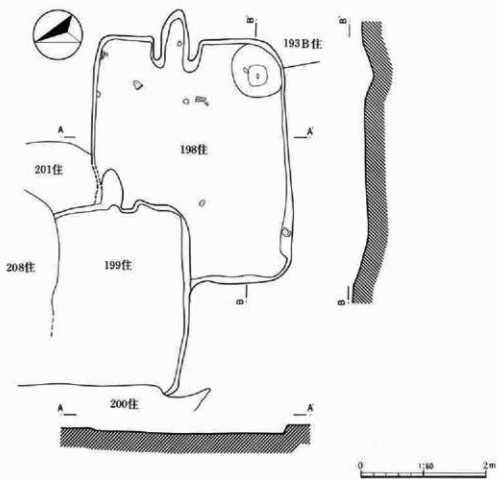


第228図 195・196号住居跡出土遺物

197号住居跡 (欠番)

198号住居跡 (第229図、PL.9)

IV区C-2・3、D-2グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は3.90×3.17m、面積は12.0㎡を測る。主軸方向はS-70°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高は20~6cmを測る。床面は地山のローム土である。やや凹凸が多い。カマドは東壁のやや北寄りに構築され、規模は長さ97cm、幅80cmを測る。軸方向はS-65°-Eを指す。その部は53cm程壁内に張り出す。燃焼部は床面よりやや窪み、煙道は燃焼部底面より直斜状に立ち上がる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、楕円形を呈し、その規模は径88×76cm深さ18cmを測る。



第229図 198・199号住居跡及び198号住居跡出土遺物

遺物は杯、甕、高台付杯、台付甕、羽釜等の土器片が約100点覆土から出土している。重複遺構が多く本住居跡に伴うものの判別が困難である。時期は奈良時代後半～平安時代前半のものがみられる。

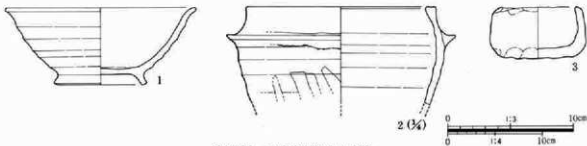
重複遺構は193B号住居跡、199号住居跡、201号住居跡で、新旧関係は193B号住→198号住→199号住である。201号住との関係は不明。

199号住居跡(第229図、PL.9)

IV区C-3・4、D-3・4グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、他遺構との重複が激しく全形、規模は不明。主軸方向はS-73°-Eを指す。壁は15～7cmの高さを測る。床面は地山のローム土で凹凸が多い。カマドは東壁に構築される。規模は長さ67cm、幅44cmを測る。軸方向はS-80°-Eを指す。カマド本体は壁外に張り出す。

遺物は杯、甕、高台付碗、羽釜、埴輪等の破片が出土している。ほとんどがカマド周辺からの出土で、時期も平安時代に限定される。

重複遺構は198号住居跡、200号住居跡、201号住居跡、208号住居跡で、判明した新旧関係は198号住→199号住→200号住で、201号住と208号住については不明であった。



第230図 199号住居跡出土遺物

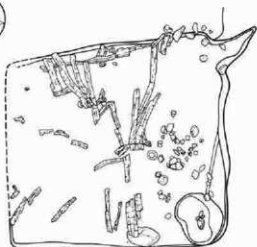
200号住居跡(第231図、PL.9)

IV区C-3・4、D-3・4グリッドに位置する。平面はやや台形形状の縦長方形を呈し、規模は(3.55)×3.35mを測る。面積は推定値で(11.3)m²を測る。主軸方向はS-24°-Wを指す。壁は残存状態不良であるが、南壁部分での確認壁高は24～5cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用し、比較的平坦である。カマドは南壁の東端に構築されており、規模は長さ80cm、幅62cmを測る。軸方向はS-12°-Eを指す。本体は壁外に張り出しており、そでと思われる両壁には河原礫が検出された。煙道はしだいにすばまり、ほぼ水平に延びる。貯蔵穴は南西コーナー部分で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径86×53cm、深さ44cmを測る。又貯蔵穴から南壁中央部にかけて若干段状を呈する部分がある。

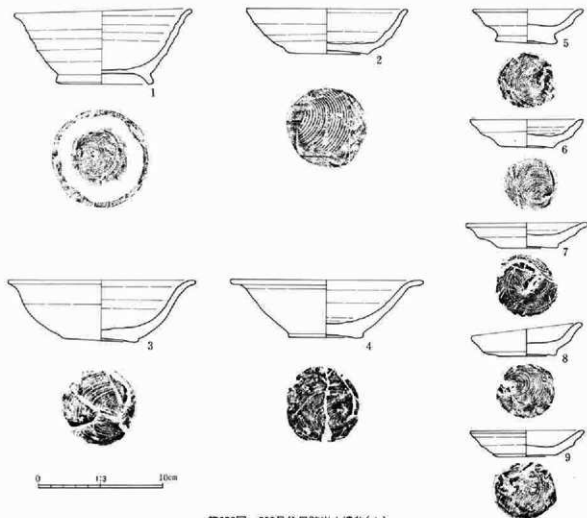
本住居跡からは崩落した上屋根材と思われる炭化材が床面から検出された。焼土はブロック状に炭化材とはほぼ同レベルで検出された。この炭化材が上屋根構造をそのまま反映しているものと想定した場合、棟木と梁、桁は不明であったが、壁の走向に沿って棟木が並べられているのがわかる。最も残存状態の良い東側部分における棟木間隔は20～15cm程でかなり密であった事が知れる。

遺物はカマド周辺及び床面と床面よりやや浮いた状態の覆土中のものと出土位置で二分される。各器種は須恵器杯、高台付碗、小皿、羽釜、甕等で完形、破片を含め120点程が出土している。炭化材と同レベル以下

で出土したものについてはすべて平安時代に属するものであり、須恵器の特徴等から11世紀代のものと考えられよう。なお西壁際の中央よりやや南寄りの位置で54cm程の大形の河原礫が検出された。これは床面に数cm程度埋め込まれた状態であり、又炭化上屋材の下から出土している事から、住居廃棄時以前より据え置かれていた可能性が高く、その性格は入口施設と関連すると思われる。

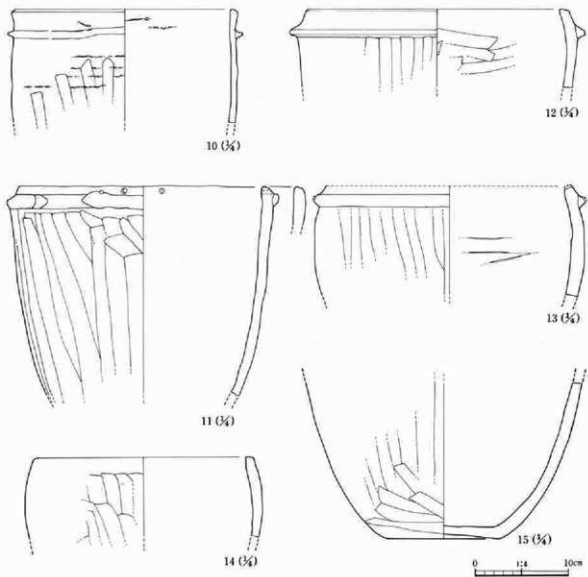


第231図 200号住居跡



第232図 200号住居跡出土遺物(1)

第V章 検出された遺構と遺物



第233図 200号住居跡出土遺物(2)

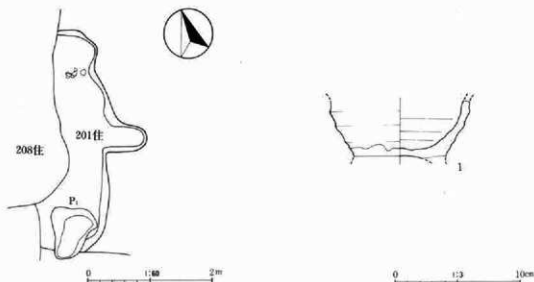
201号住居跡(第234図、PL.9)

IV区D-3、E-3グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。西側の大部分は他遺構と重複するため形状、規模ともに不明。主軸方向はS-85-Eを指す。壁は凹凸が激しく残存状態不良である。確認壁高は17~6cmを測る。床面は地山のローム土を利用する。一部に貼床らしい痕跡が見られる。カマドは東壁中央部に構築され、規模は長さ72cm、幅62cmを測る。軸方向はS-77-Eを指す。本体は壁外に張り出す。ピットは南東コーナー部で1基検出された。平面は不定形で、底面形状によれば楕円形に近い。規模は径90×65cm、深さ22cmを測る。これは本住居跡に伴うものかどうか不明である。

遺物は北側床面より高台付椀の破片が出土している。時期は平安時代のものであろう。

重複遺構は198号住居跡、199号住居跡、208号住居跡で、新旧関係については不明であった。

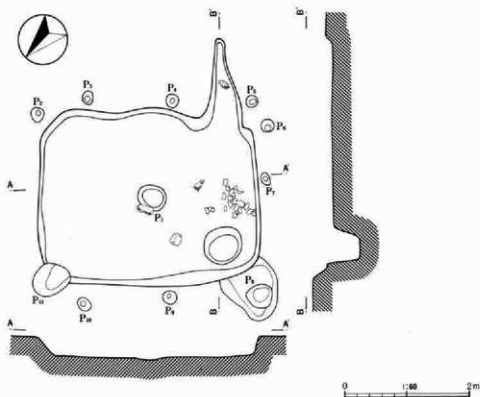
202号住居跡、203号住居跡(欠番)



第234図 201号住居跡及び出土遺物

204号住居跡 (第235図、PL. 9)

IV区F-3・4グリッドに位置する。平面はやや歪んだ横長方形を呈し、規模は2.83×3.57m、面積は9.4㎡を測る。主軸方向はS-45°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高45-23cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用しており、平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築され、規模は長さ147cm、幅91cmを測る。軸方向はS-44°-Eを指す。本体は壁外に張り出す。煙道は燃焼部底面からすばりながらほぼ水平に延

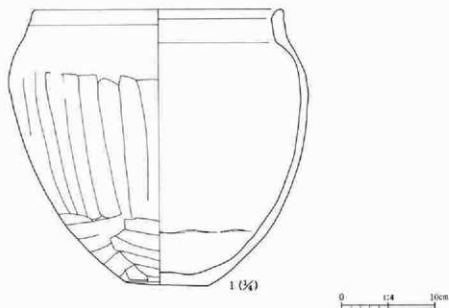


第235図 204号住居跡

び、末端部で急に立ち上がる。貯蔵穴は西側コーナー一部で検出された。ほぼ円形を呈し、規模は径62×50cm深さ51cmを測る。ピットは住居のほぼ中央部で一基検出された。円形を呈し、規模は径46×38cm深さ9cmを測る。又壁外ではあるが壁に沿って11基のピットが検出された。規模はP₂径23×20cm深さ17cm、P₃径23×16cm深さ11.5cm、P₄径23×20cm深さ11.5cm、P₅径19cm深さ22cm、P₆径21cm深さ16.5cm、P₇径20×15cm深さ13.5cm、P₈は径80×90cm深さ36cmで更に径42×37cm深さ15cm程に2段掘りになっている。P₉径23×21cm深さ10cm、P₁₀径24×18cm深さ25cm、P₁₁径62×51cm深さ45.5cmを測る。P₈とP₁₁は他に比べ大きいものであるがP₂~P₇・P₉・P₁₀はほぼ同規模である。住居の各コーナー部にあり、又P₈とP₁₁はそれぞれP₁₀、P₉と対応する位置にある事等から本住居跡に伴う何らかの構造の痕跡と考えられる。掘り込みがほぼ垂直で、10cm以上の深さをもつ事から樫木の支柱穴の可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、須恵器杯、羽釜、灰釉碗等の破片約80点程及び土鍾6点が出土している。位置は南西壁際の床面近くに集中している。時期は平安時代(11世紀代?)と思われる。

重複遺構は11号溝で、カマド先端部で重複するため新旧関係は不明であった。



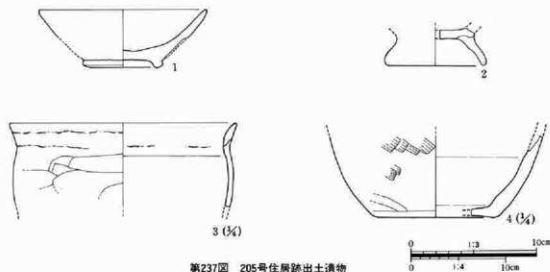
第236図 204号住居跡出土遺物

205号住居跡(第227図、PL. 9)

IV区B-1、C-1グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、他遺構と重複するため詳細は不明である。焼土の分布からカマドと推定される部分が検出された。形状と規模は不明である。なお本住居の壁は北西部のみ検出された。壁高は30cm前後を測る。床面は北西半部分のみ残っており重複する196号住居跡よりも11cm程レベルが低い。なおピットはカマド前方部で1基検出された。平面は円形を呈し、規模は径75cm深さ11cmを測る。しかしカマド前方に位置する事や、他の住居跡と重複する事から本住居跡に伴うものとは限定できない。

遺物はカマド内より高台付碗、甕の破片が出土している。時期は平安時代(11世紀代?)と思われる。

重複遺構は195号住居跡、196号住居跡、206号住居跡で、新旧関係は195号住・196号住→205号住と思われる。



第237図 205号住居跡出土遺物

206号住居跡（第227図、PL. 9）

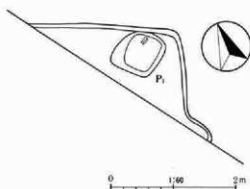
IV区B-1グリッドに位置する。平面形は不明。北西部コーナー部分しか検出されなかった。確認壁高は26~14cmを測る。床面は地山のローム土で平坦である。カマド、ビット、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は出土していない。

重複遺構との新旧関係は不明である。

207号住居跡（第238図）

III区B-23・24グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、西半の大部分は調査区外のため詳細は不明である。従って規模も不明。主軸方向は残存する北壁よりS-(65°)-Eを指すと思われる。壁は8cm前後の高さを測る。カマドは東壁中央部付近に構築される。南西半は調査区外で不明であるが、そこで部が張り出していない事から本体は壁外に架かれたと思われる。貯蔵穴は北東隅で検出された。平面は歪んだ方形を呈し、規模は90×72cm、深さ15.5cmを測る。



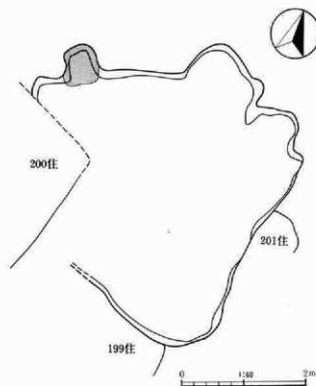
第238図 207号住居跡

遺物は杯、甕、須恵器杯、羽釜等の破片が出土している。時期は平安時代に属するものと思われる。

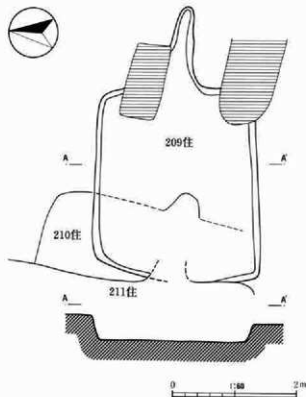
208号住居跡（第239図）

IV区D-3・4、E-3・4グリッドに位置する。平面は不定形で検出されたが、本来の形状は方形かと思われる。明らかに住居部分と思われるのは北西部分でカマド壁の一部が残存する。この部分から主軸方向はN-26°-Wを指すと思われる。カマドは北壁の西端に構築される。規模は長さ63cm幅57cmを測る。軸方向はN-25°-Wを指す。床面は凹凸が激しく後世の攪乱城と重複しているらしい。

遺物は杯、甕、羽釜、須恵器杯、同蓋、壺等の破片約170点及び砥石が出土する。出土位置は覆土がほとんど



第239図 208号住居跡



第240図 209号住居跡

どで本住居跡に確実に伴うと思われるものは残念ながら抽出できなかった。時期は奈良時代と平安時代のものが混在する。

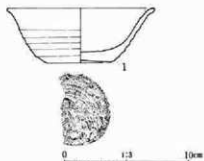
重複遺構は199号住居跡、200号住居跡、201号住居跡で、新旧関係については不明である。

209号住居跡（第240図、PL.9）

IV区F-5・6、G-5・6グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は(2.87)×2.51m、面積は推定値で(8.5)㎡を測る。主軸方向は残存状態の良い南壁の走向よりN-87°-Eを指す。壁は全体に残存状態不良で、確認壁高は40-18cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土である。カマドは東壁の中央よりやや北寄りに構築される。左そで部は後世の擾乱により削平されて不明確なものとなっている。長さは137cm前後と思われる。壁内へのそでの張り出しがないことから本体は壁外に築かれたと思われる。燃焼部と煙道部の境は不明瞭である。住居規模に比べてカマドが比較的大きいものである。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋、台付甕等の破片が約140点出土している。時期は奈良-平安時代で量的には平安時代が多い。

重複遺構との新旧関係はカマド残存状態より160号住→209号住→210号住である。



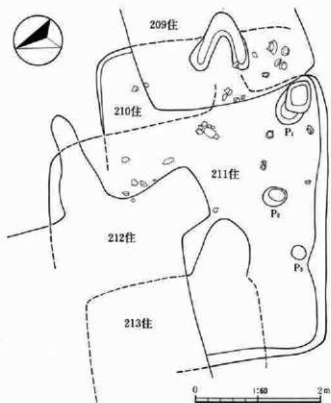
第241図 209号住居跡出土遺物

210号住居跡(第242回)

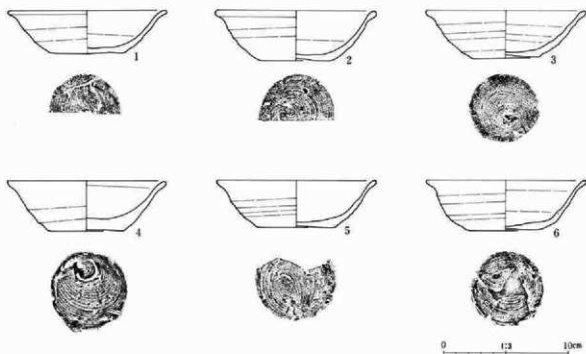
IV区F-5・6、G-5・6グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模及び主軸方向は不明である。壁は東側コーナー部分のみ残存しておりこの部分の確認壁高は20cm前後を測る。床面は地山のローム土と思われるが不明瞭である。カマドは東壁に構築され、規模は長さ92cm、幅95cmを測る。軸方向はS-81°-Eを指す。残存する壁を延長して東壁を推定した場合、そこで部が若干壁内に張り出すようである。煙道部は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同壺、皿、高台付椀、土唾等が出土し、完彩品と破片を合わせて70点程を数える。甕以外はほとんどが須恵器で、その形態的特徴から平安時代(10世紀前半)と思われる。

重複遺構は209号住居跡、211号住居跡、212号住居跡、213号住居跡で、新旧関係はカマド残存状態から212号住・209号住→210号住→211号住→213号住と思われる。

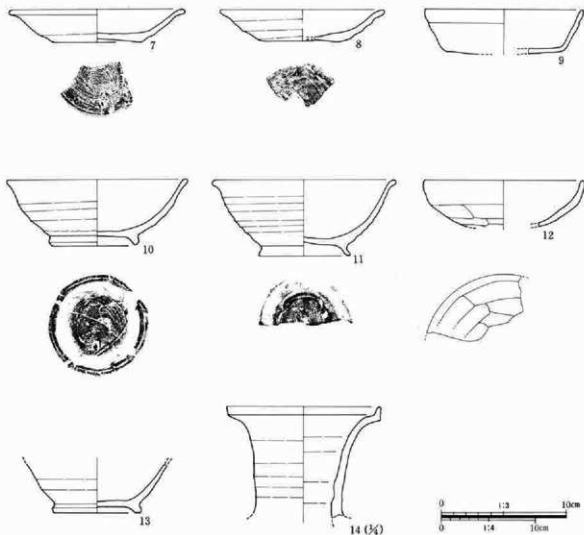


第242回 210・211号住居跡



第243回 210号住居跡出土遺物(1)

第V章 検出された遺構と遺物



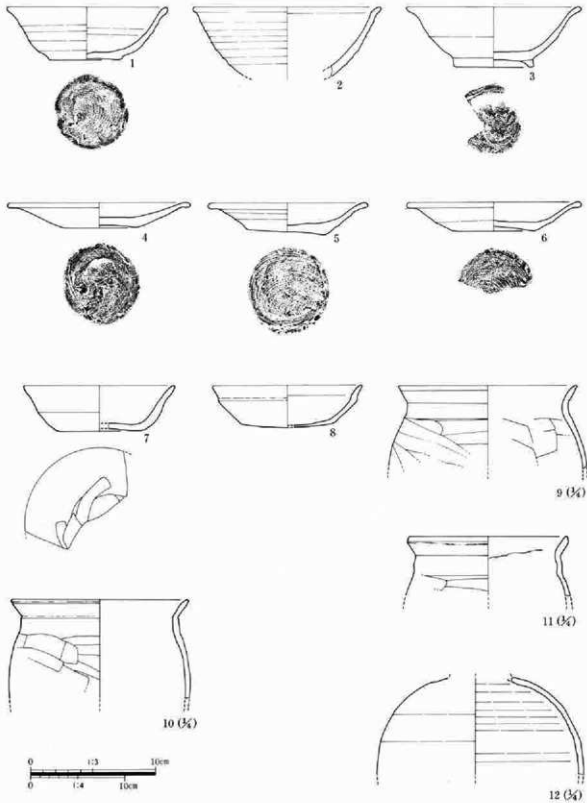
第244図 210号住居跡出土遺物(2)

211号住居跡(第242図、PL.10)

IV区F-5・6、G-5・6グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。壁は南西部と北東コーナー部に検出された。規模は推定値で(4.30)×(4.46)mを測る。主軸方向は残存する南西壁の走向でS-71°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は30-11cmを測る。床面はローム粒を含む黒色土で凹凸が多い。カマドは南東壁の南寄りにそれとわかる焼土の分布が検出されたのみで、形状、規模等については不明である。貯蔵穴と思われる掘り込みは南側コーナー部に検出された。平面はきっちりした長方形を呈し、規模は51×40cm深さ17cmを測る。ピットは3基検出された。P₁は貯蔵穴と重複しており、本来貯蔵穴と同一施設かあるいは時期の異なるものかの判定はつかなかった。P₂は南西壁寄り中央部に検出された。規模は径37×34cm深さ25cm、P₃径23cm深さ27cmを測る。

遺物は杯、甕、高杯、須恵器杯、同壺、皿、高台付椀、灰輪椀、羽釜、土釜等が約860点程出土した。出土位置は覆土が多く、本住居跡に伴うものの判別は困難である。時期は平安時代(10世紀代)のものが多い。

重複遺構は210号住居跡、212号住居跡、213号住居跡で、新旧関係は土層観察とカマド残存状態より212号住→210号住→211号住→213号住である。



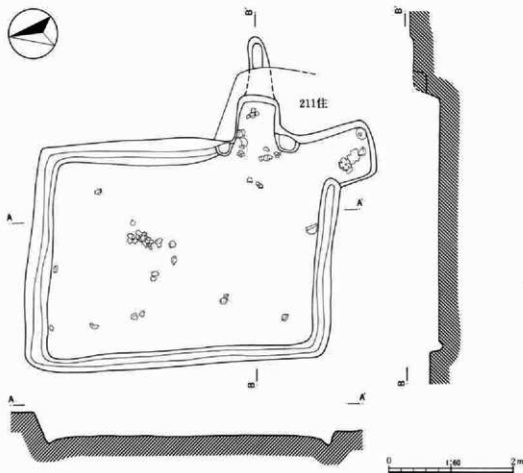
第245図 211号住居跡出土遺物

212号住居跡 (第246図, PL.10)

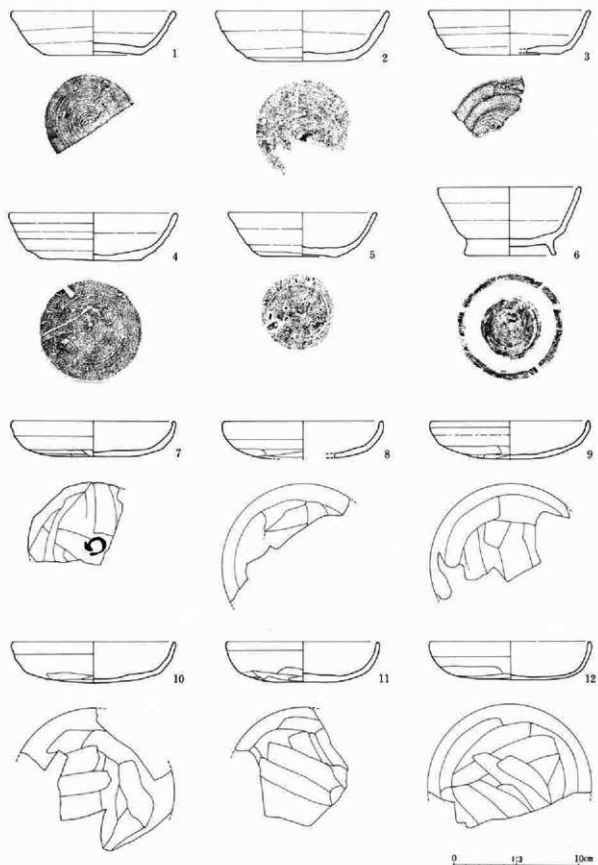
IV区F-6・7、G-6・7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、南東コーナー部分に張り出し部分を設ける。規模は3.64×4.85m、面積は18.7㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は直立し確認壁高は48-18cmを測る。床面は地山のロームをそのまま利用し、平坦である。カマドは東壁の南端部に構築される。規模は長さ170cm、幅135cmを測る。軸方向はS-86°-Eを指す。そで部は壁内へ36cm程張り出す。燃焼部は壁外に張り込まれ、ほぼ長方形を呈し、規模は長さ90cm、幅70cmを測る。煙道は先端部分のみ検出され、中間部分は重複する211号住居跡に切られて不明であるが、おそらく燃焼部奥壁のかなり上位から立ち上がるものと思われる。南東コーナー部の張り出し施設は長方形を呈し、規模は奥行80cm、幅90cmを測る。軸方向はS-12°-Eを指す。周溝は張り出し施設を除いて全周する。規模は幅44-20cm、深さ9-2cmを測る。住居覆土は上層にローム粒、軽石、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土、下層壁際にローム粒を含む暗黄褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、高台付盤、壺、蓋、羽釜、灰軸碗等が床面及び中央部分の覆土から出土する。破片数は約850点程で、そのうち甕が約半数を占め、次に須恵器杯が多い。時期は奈良時代と平安時代のものが混在しているが、床面及びカマド出土の土器を見る限り奈良時代末期～平安時代初頭前後のものが多いと思われる。

重複遺構との新旧関係は212号住→211号住・213号住である。

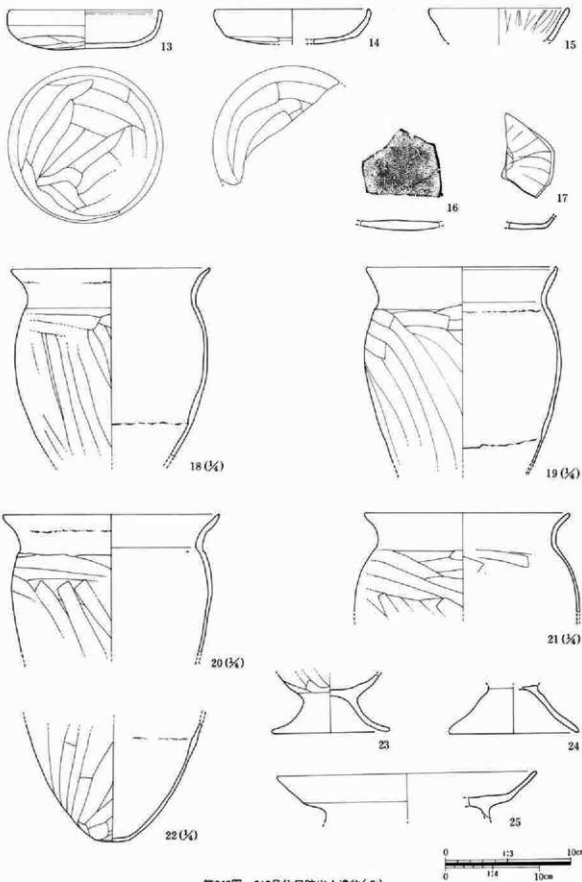


第246図 212号住居跡



第247図 212号住居跡出土遺物(1)

第V章 検出された遺構と遺物



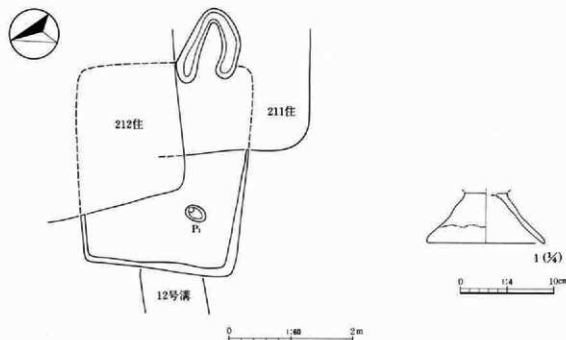
第248図 212号住居跡出土遺物(2)

213号住居跡 (第249図、PL.10)

IV区F-6・7グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われる。東半が他遺構と重複するため、全体の形状、規模等の詳細については不明である。壁は残存する南・西壁で確認壁高29cm前後を測る。床面はほぼ平坦で、他遺構との重複部分については不明である。カマドは東壁に構築される。規模は長さ121cm幅95cmを測り、軸方向はS-65°-Eを指す。ピットは南西部で1基検出された。楕円形を呈し、規模は径30×20cm深さ21cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同慶、灰釉碗の破片約180点及び土鏝2点が出土しているが、ほとんどが覆土からの出土で本住居跡に伴うものを判別するのは困難である。時期は平安時代のものが主体を占める。

重複遺構との新旧関係は212号住→211号住→213号住で、12号溝との関係は不明である。



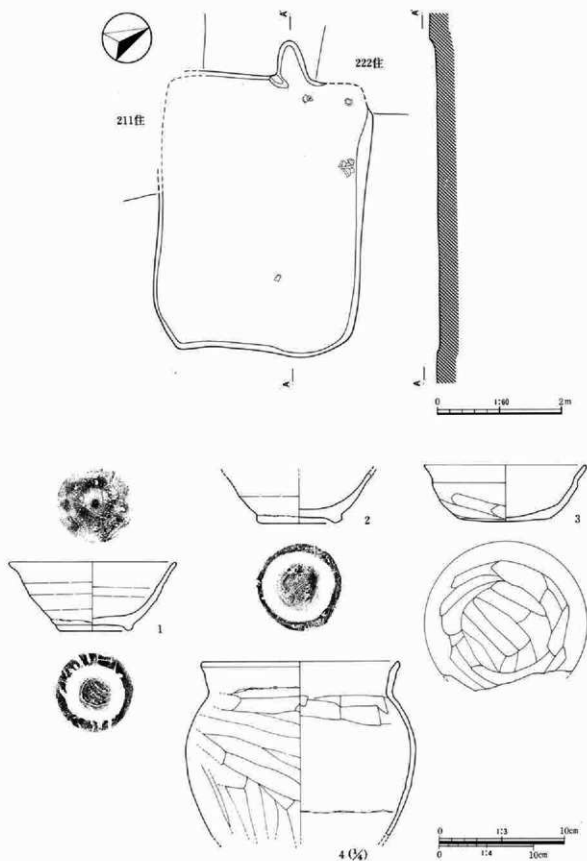
第249図 213号住居跡及び出土遺物

214号住居跡 (第250図、PL.10)

IV区E-6・7、F-6・7グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.36m×3.26mで、面積は推定値(14.4)m²を測る。主軸方向はS-67°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高18~2cmを測る。床面は地山のローム土のまま利用し、平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ75cm、幅68cmを測り、軸方向はS-74°-Eを指す。左そでは地山を若干掘り残して築く。煙道部は不明瞭であった。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、羽釜、高台付碗、須恵器瓶等の破片が約450点及び土鏝が出土した。時期は平安時代(11世紀代?)を主とする。

重複遺構は211号住居跡、222号住居跡で、新旧関係は不明であった。又北側に接して並列するように213号住居跡が位置する。



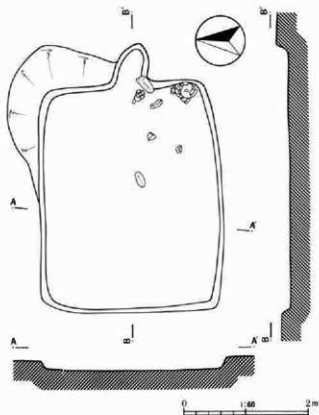
第250図 214号住居跡及び出土遺物

215号住居跡 (第251図, PL.10)

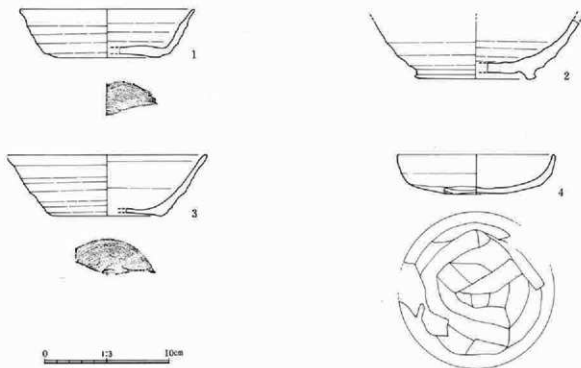
IV区F-8・9、G-8グリッドに位置する。平面はやや胴張り気味の縦長長方形を呈する。規模は長さ3.60×2.93mを測り、主軸方向はN-81°-Eを指す。面積は10.6㎡を測る。壁はやや外傾し、確認壁高は20~7cmを測る。床面は黒褐色土で平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に構築される。規模は長さ82cm、幅59cmを測り、軸方向はS-67°-Eを指す。右そで部と思われる部分に30cm大の円礫が直立した状態で検出された。おそらくそで部の補強材として用いられたと思われる。又これと同大の円礫が床面中央部で出土したが、これも左そで部にあった可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、壺、台付甕、高台付椀、盤等が平安時代を主体として約230点程出土している。位置はカマド周辺が多い。

重複遺構はなく単独で検出された。

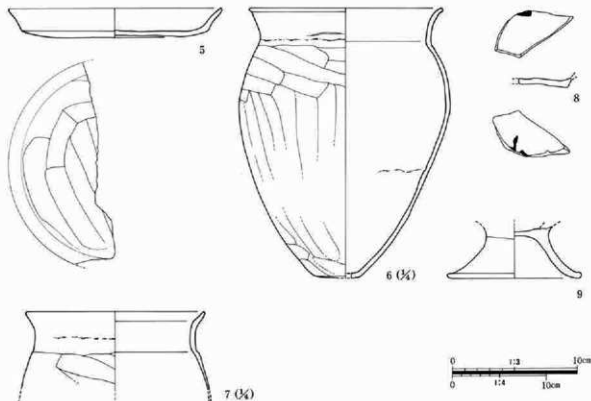


第251図 215号住居跡



第252図 215号住居跡出土遺物(1)

第V章 検出された遺構と遺物



第253図 215号住居跡出土遺物(2)

216号住居跡(第254図、PL.10)

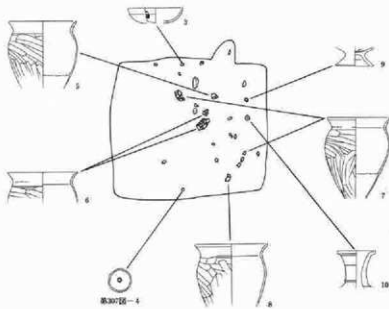
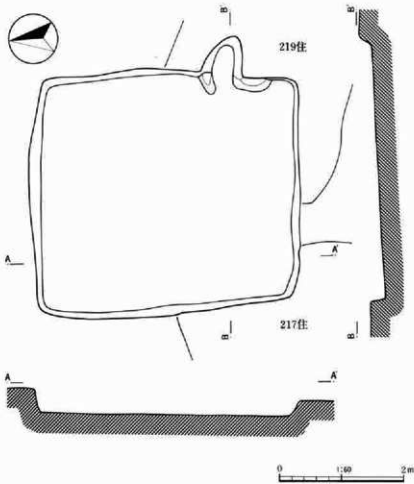
IV区D-7・8、E-7・8グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.93×4.35mを測る。面積は16.3㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高50~22cmを測る。床面は地山のローム土を利用し凹凸が多い。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ97cm、幅120cmを測る。軸方向はS-73°-Eを指す。そで部は40~30cm壁内へ張り出す。燃焼部の大部分は壁外に張り出すと思われる。煙道部は不明であるが、燃焼部奥壁の中心から掘り込まれるようである。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、古付甕、須恵器杯、同壺、蓋、高古付椀、羽釜、灰軸椀等の破片及び紡錘車、土鎌が約650点程出土する。甕が主体を占めるが、杯では須恵器より土師器の方が量的に多い。時期は平安時代全般に亘っており、量的には平安時代初頭(9世紀前半代)のものが多い。出土位置は覆土が大部分である。

重複遺構は217号住居跡、219号住居跡で、新旧関係は217号住・219号住→216号住である。

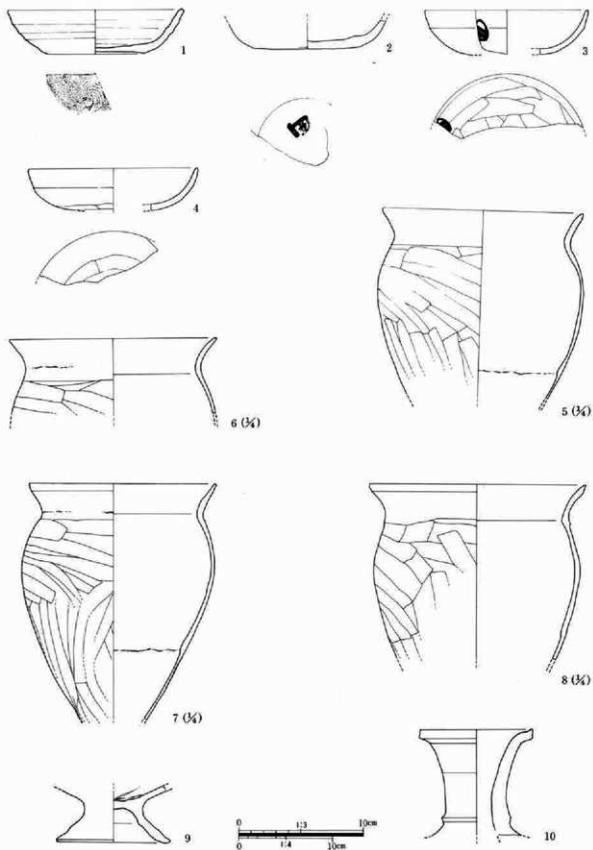
217号住居跡(第256図、PL.10)

IV区C-7・8、D-7・8グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は南北壁間距離で4.53mを測るが、東西壁間は不明。主軸方向はN-9°-Wを指す。壁はほぼ直立し確認壁高35~11cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは北壁に構築され、規模は長さ120cm、幅100cmを測る。軸方向はN-10°-Wを指す。そで部はロームブロックを含む褐色土で築き壁内に38cm程張り出す。燃焼部は壁の線上付近にあると思われる。煙道は燃焼部底面から直斜状に緩い傾斜角で立ち上がる。なおカマドそで部には甕(第259図-8・9)を倒立させ補強材としている。又燃焼部には甕と古付甕と杯(第259図-1



第254図 216号住居跡及び遺物分布図

第V章 検出された遺構と遺物



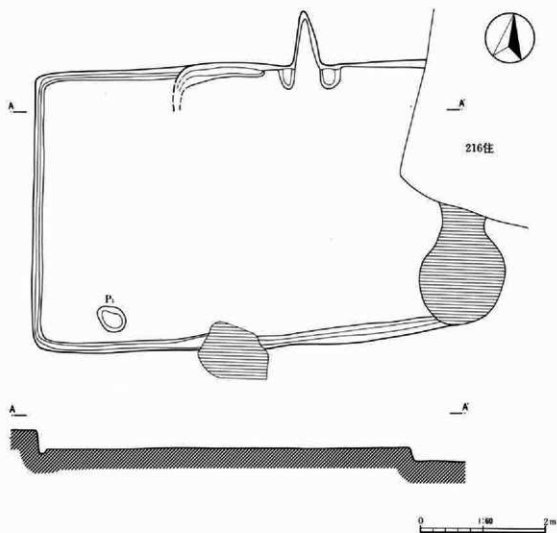
第255図 216号住居跡出土遺物

10・11・12、第258図-4)が「入れ子」の状態出土した。周溝はカマド左側の北壁に沿って廻り、西壁及び南壁にかけて検出されている。又北壁の周溝はカマド脇より1.5m程の所で住居の内側に屈曲する痕跡が残っている。これは本住居跡の旧周溝で、これより西側に拡張したものと推定される。周溝の規模は幅25~17cm、深さ16~2cmを測る。ピットは南壁際の西寄り部分で1基が検出された。平面は楕円形で規模は径50×40cm深さ9cmを測る。

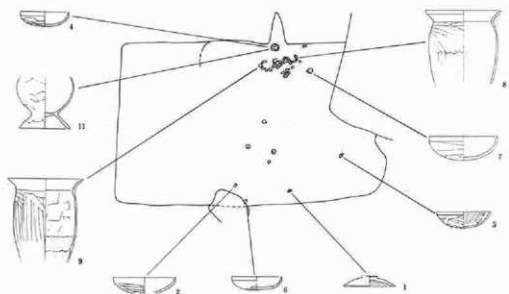
遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕、蓋、高台付碗、長頸瓶等の破片が約500点程出土している。カマド周辺に集中する他は覆土からの出土がほとんどである。時期は古墳時代後期~平安時代に亘るが、カマド及び床面出土のものについては鬼高期末~奈良時代初頭と考えてよいであろう。

重複遺構は216号住居跡で、新旧関係は217号住→216号住である。なお南壁の中央部及び南東コーナー部は後世の攪乱を受けている。

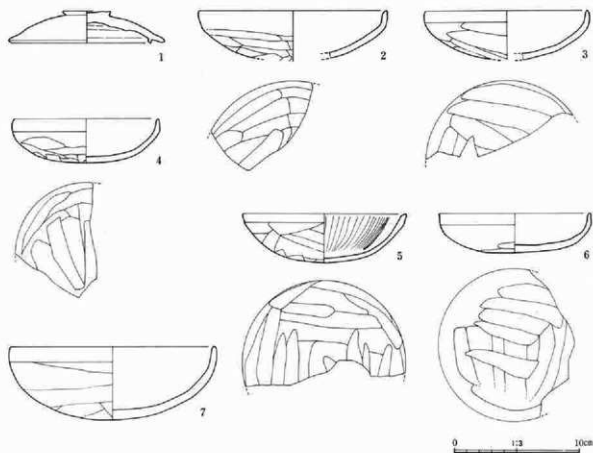
218号住居跡 (欠番)



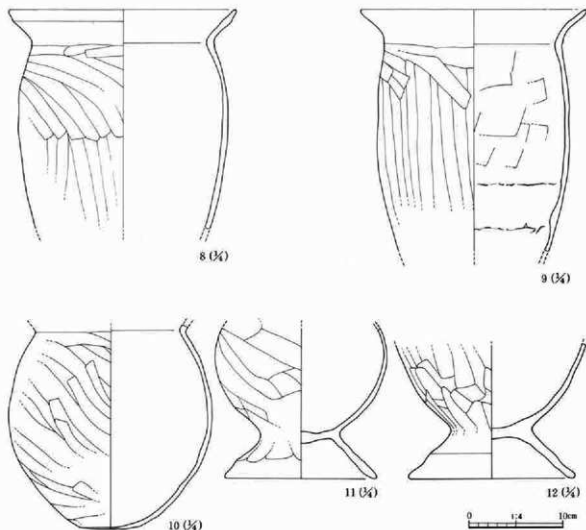
第256図 217号住居跡



第257図 217号住居跡遺物分布図



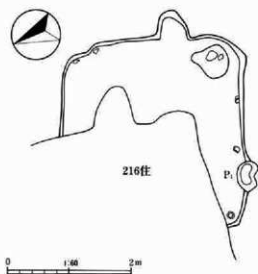
第258図 217号住居跡出土遺物(1)



第259図 217号住居跡出土遺物(2)

219号住居跡 (第260図, PL.10)

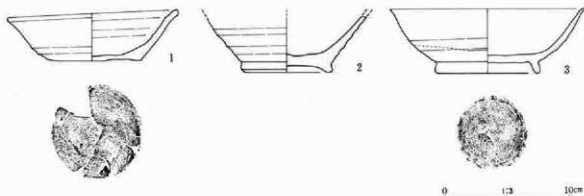
IV区D-6・7、E-6・7グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は東西壁間距離で2.8mを測る。主軸方向はS-77-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高18~6cmを測る。床面は地山のローム土でやや凹凸がある。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、規模は長さ49cm、幅61cmを測る。煙道部は検出されなかった。本体は壁外に築かれる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。平面形は「罎」形を呈し、規模は径60×46cm深さ26cmを測る。ピットは南壁の西寄りで検出され、楕円形を呈しており規模は径45×25cm深さ6cmを



第260図 219号住居跡

測る。

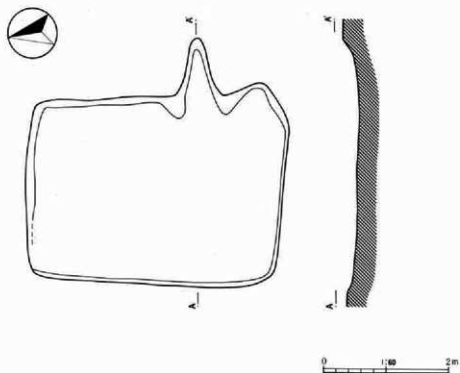
遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付椀、須恵器蓋の破片約120点が出土している。杯類は須恵器が主体を占める。出土位置はほとんどが覆土である。小破片が多いが、残存状態良好なもの時期は平安時代(10世紀代)に限られるようである。



第261図 219号住居跡出土遺物

220号住居跡 (第262図、PL.10)

IV区B-6、C-6・7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.20×4.13m、面積12.3㎡を測る。主軸方向はS-78°-Eを指す。壁は崩落が激しく残存状態不良であり、確認壁高24~1cmを測る。床面はロームブロックを含む褐色土で比較的平坦である。カマドは東壁南寄りに構築され、長さ129cm、幅129

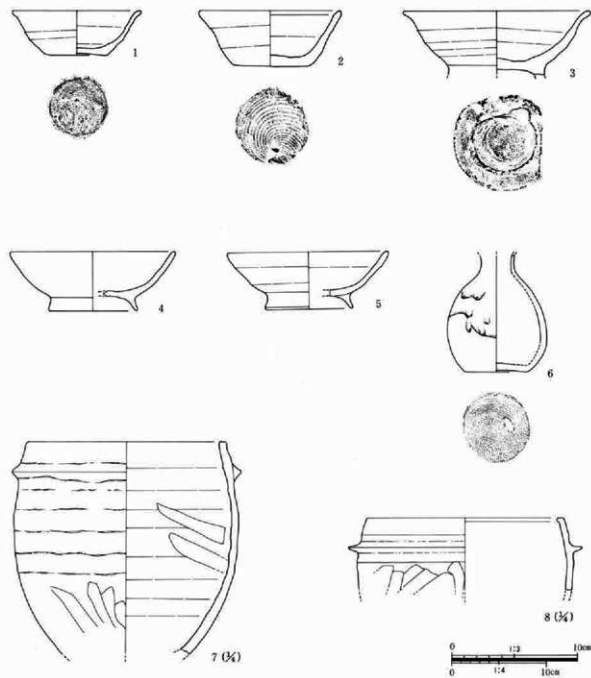


第262図 220号住居跡

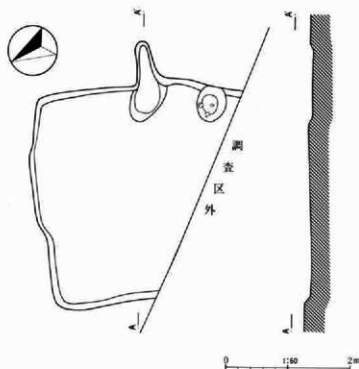
cmを測る。そで部は30cm程地山を掘り残して基部としている。燃焼部は壁外に築かれたと思われる。煙道は燃焼部底面から緩やかな曲線を描いて立ち上がる。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土は上層に軽石（給源不明）を若干含む褐色土、下層はローム粒と灰を含む褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器甕、同杯、高台付碗、羽釜、灰軸小瓶等が約350点、及び砥石2点が出土する。出土位置はカマド周辺に集中する以外はほとんどが覆土中である。又甕の量に比べ羽釜の占める割合が比較的多い。須恵器杯や灰軸から時期は平安時代（10世紀前半）のものと考えてよいようである。

重複遺構は11号溝で南壁部分で接しているが新田関係は不明であった。



第263図 220号住居跡出土遺物

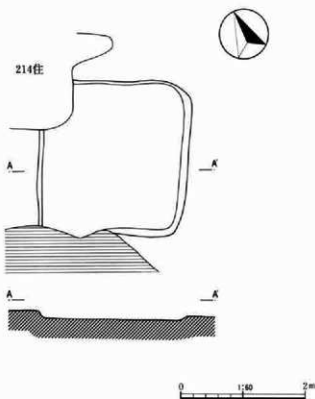


第264図 221号住居跡

221号住居跡 (第264図、PL.10)

IV区B-4・5グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。南西半は調査区外のため不明。東西壁間距離は3.40mを測る。主軸方向はS-71°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高15~4cmを測る。床面は地山のローム土を利用し凹凸が多い。カマドは東壁のほぼ中央に構築され規模は長さ126cm、幅54cmを測る。軸方向はS-69°-Eを指す。燃焼部は床面より5cm程低く掘り込まれている。貯蔵穴は東壁際のカマド右脇で1基が検出された。円形を呈し、規模は径54×46cm深さ17cmを測る。

遺物は貯蔵穴より平安時代と思われる土器片数点が出土したのみである。重複遺構はない。



第265図 222号住居跡

222号住居跡 (第265図、PL.10)

IV区E-5・6、F-5・6グリッドに位置する。平面形は隅丸正方形を呈すると思われる。規模は2.39×2.40mで、主軸方向はN-27°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は21~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用しておりほぼ平坦である。カマド、貯蔵穴、周溝等の住居内施設については全く検出されなかった。

遺物は覆土より時期不明の土器片が数点出土したのみである。

重複遺構は214号住居跡で、新旧関係は不明であった。

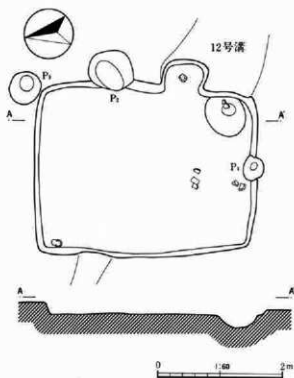
223号住居跡 (第266図、PL.10)

IV区D-8・9、E-8・9グリ

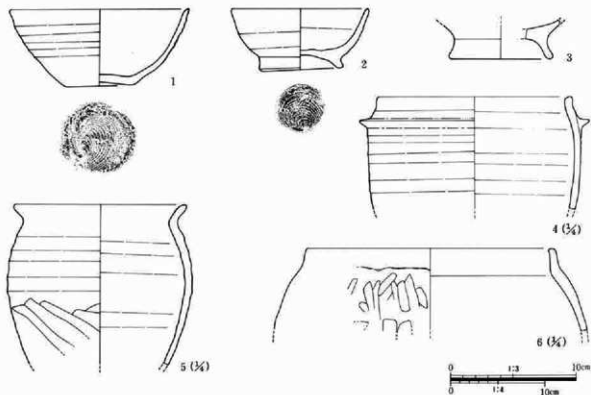
ッドに位置する。平面は横長長方形を呈し規模は2.82×3.53m、面積は9.6㎡を測る。主軸方向はS-83°-Eを指す。壁は残存状態不良で、やや外傾し確認壁高は19~9cmを測る。床面はロームブロックを混入する褐色土で、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。燃焼部のみ検出され、長さ72cm、幅56cmを測る。壁外に築かれたと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。円形を呈し、規模は径72×60cm深さ22cmを測る。ピットは東壁と南壁上に3基が検出された。規模はP₁径41×33cm深さ36cm、P₂径70×67cm深さ17cm、P₃径52cm深さ40cmを測る。性格は不明。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋、高台付碗、羽釜、灰軸等が約780点及び土鍾が出土している。出土位置は覆土が多い。又カマド内から10cm大の河原礫が出土している。時期は平安時代(11世紀代)のものと思われる。

重複遺構は12号溝で、新旧関係は土層観察より223号住→12溝と思われる。



第266図 223号住房跡



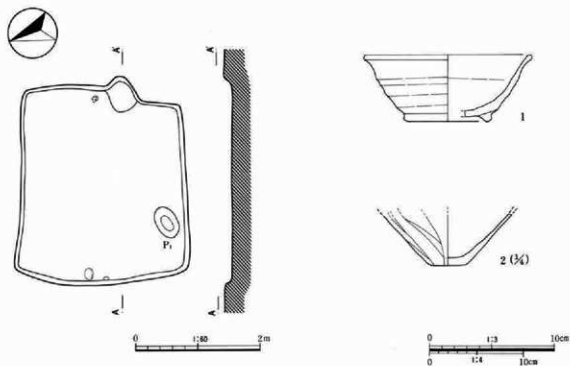
第267図 223号住居跡出土遺物

224号住居跡 (第268図、PL.10)

IV区B-7グリッドに位置する。平面はやや縦長の長方形を呈する。規模は3.15×2.80m、面積8.1㎡を測る。主軸方向はS-74°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高11~1cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。燃焼部のみが検出された。壁を若干掘り込んで築かれ、規模は長さ56cm、幅56cmを測る。ピットは南壁際西寄りで1基が検出された。楕円形を呈し、規模は径50×32cm深さ25cmを測る。住居覆土は上層に軟質茶褐色土、下層に軽石(給源不明)を含む黒褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、高台付碗等の破片約10点が出土している。平安時代のもと思われる。

重複遺構はない。



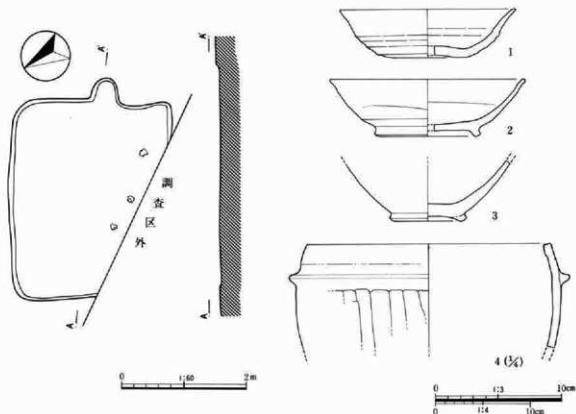
第268図 224号住居跡及び出土遺物

225号住居跡 (第269図、PL.10)

IV区B-8・9グリッドに位置する。平面は縦長長方形と思われる。西半は調査区外のため不明。規模は3.16×2.54mを測る。主軸方向はS-63°-Eを指す。壁は後世の削平を受けてほとんど残存せず、確認壁高10~1cmを測るのみである。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。燃焼部のみ検出され、規模は長さ58cm、幅50cmを測る。燃焼部は壁を掘り込んで築かれる。その他の施設等は検出されなかった。

遺物は須恵器杯、高台付碗、甕、羽釜、灰軸碗等約90点程が出土する。出土位置は覆土が大部分である。時期は平安時代(10世紀代)のもと思われる。

重複遺構はない。



第269図 225号住居跡及び出土遺物

226号住居跡 (第270図、PL.10)

IV区C-10・11、D-10・11グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.60×4.20m、面積は14.7㎡を測る。主軸方向はS-66°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高21~22cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土で、比較的平坦である。カマドは東壁南端に構築される。規模は長さ117cm、幅70cmを測り、軸方向はS-56°-Eを指す。そで部と思われる壁コーナー部に15cm大の河原礫が検出された。おそらく補強材と思われる。燃焼部は壁外に張り出す。煙道は燃焼部底面からはほぼ水平に延び、末端部で急に立ち上がる。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。歪んだ円形を呈し、規模は径64×62cm深さ42cmを測る。又東壁寄り中央部でビットが検出されており、歪んだ円形で径85×73cm深さ50cmの規模を測る。なお住居北半に断面皿状の多数の掘り込みが検出されているが、これは住居掘り形時のものかと思われる。住居覆土は上層に軽石（給源不明）を少量含む黒褐色土、下層にはローム粒と灰を含む黒色土が堆積している。

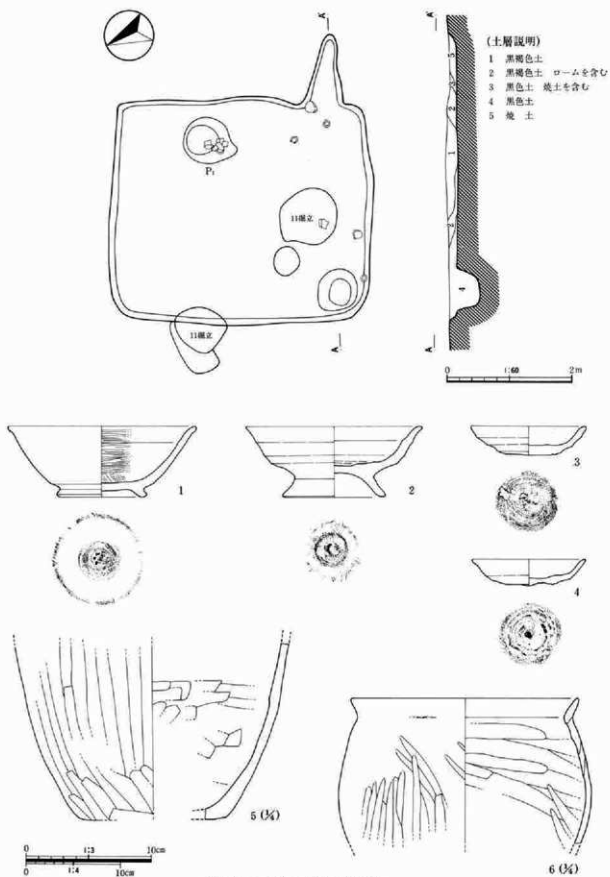
遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付椀、小皿等の破片が約120点程出土している。出土位置はカマド周辺とビットを除けば大部分は覆土である。時期は平安時代（11世紀代）のものが大部分を占める。

重複遺構は10号・11AB号掘立柱建築遺構で、新旧関係は不明であった。

227号住居跡 (欠番)

228号住居跡 (第271図、PL.10)

IV区E-10・11、F-10・11グリッドに位置する。平面は長方形を呈し、規模は4.10×5.05mを測る。主軸



第270図 226号住居跡及び出土遺物

方向はN-3°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は15-1cmを測る。床面は地山のロームを利用する。カマドは検出されなかった。周溝は東壁-南壁で検出され、規模は幅31-19cm深さ5-2cmを測る。

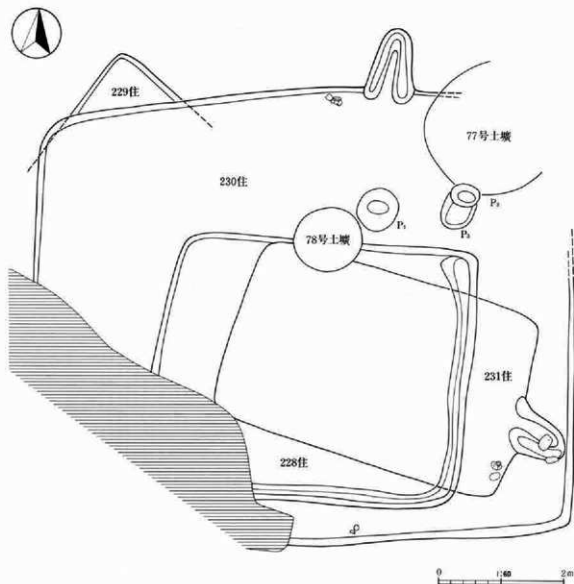
遺物は杯、甕を主体として奈良時代の土器が多量に出土しているが、大部分は覆土からの出土であり、重複する住居跡との分離は不可能であった。

229号住居跡(第271図、PL.10)

IV区E-11グリッドに位置する。230号住居跡と重複しており、北側コーナー部のみ検出された。形状、規模ともに不明である。壁は8-1cmの高さを測る。遺物は出土していない。

230号住居跡(第271図、PL.10)

IV区D-10・11、E-10・11、F-10・11グリッドに位置する。南西コーナー部は攪乱、北東コーナー部で



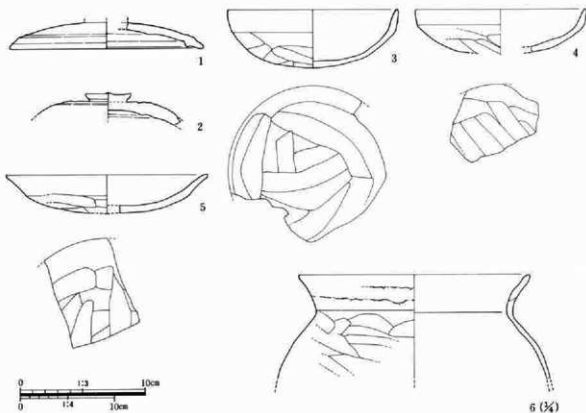
第271図 228・229・230・231号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

他遺構と重複するため、この部分の形状は不明。おそらく横長方形になると思われる。規模は7.50×(8.55)mを測る。主軸方向はN-7°-Wを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は15~4cmを測る。床面は地山のローム土である。なお床面のレベルは重複する228号住居跡より10cm前後高く、229号住居跡より5cm程低い。カマドは北壁の東寄りに構築される。規模は長さ118cm、幅80cmを測り、軸方向はN-5°-Eを指す。そで部は若干壁内に張り出す。煙道は燃焼部底面よりしだいにすぼまりながら水平に延びる。ピットは3基が検出された。規模はP₁径66cm深さ58cm、P₂径46×36cm深さ46cm、P₃径51cm深さ49cmを測る。P₁とP₃は重複する。住居覆土は上層に黒褐色砂質土、下層にローム粒を含む黄褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器蓋等の破片が多量に出土しており、出土位置は覆土が大部分である。時期は奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構は228号住居跡、229号住居跡、231号住居跡、77号土塋、78号土塋、12号溝で、判明した新旧関係は77号土塋→230号住→231号住である。



第272図 230号住居跡出土遺物

231号住居跡 (第271図、PL.10)

IV区E-10・11、F-10グリッドに位置する。カマドと床面が検出されたが、壁は明確でない。縦長方形を呈すると思われる。床面は重複する228号住居跡、230号住居跡の覆土を利用する。カマドは東壁に構築され規模は長さ96cm、幅86cmを測る。軸方向はS-60°-Eを指す。煙道付近で10cm大の円礫が検出されたが、その性格は不明である。

遺物は覆土より奈良時代~平安時代の土器片が出土しているが、重複遺構との分離が困難である。本住居跡に伴う可能性の高いのは図示(第273図-1)した羽釜である。

重複遺構との新旧関係は前述の通り、土層観察により228号住・230号住→231号住である事が確認された。

232号住居跡 (第274図, PL.11)

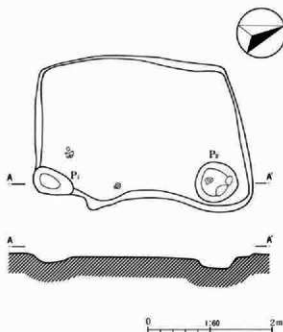
IV区D-9・10グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。主軸方向はN-(17)-Eを指す。壁はほとんど残存しておらず、壁高12~1cmを測る。床面は地山のローム土で比較的平坦。カマドは検出されなかった。ピットは北東と南東のコーナー部で計2基が検出された。規模はP₁径65×45cm深さ7cm、P₂径65×60cm深さ20cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付碗、蓋、灰軸碗等の破片がピット、床面及び覆土下層から出土している。時期は平安時代のもを主とする。

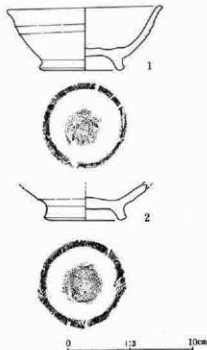
重複遺構はない。なお本住居跡は形状や規模が他と比べ異質であり、又カマドがない点等を考慮すれば住居跡ではなく、別の性格をもつ遺構と考えるべきだろう。



第273図 231号住居跡出土遺物



第274図 232号住居跡及び出土遺物



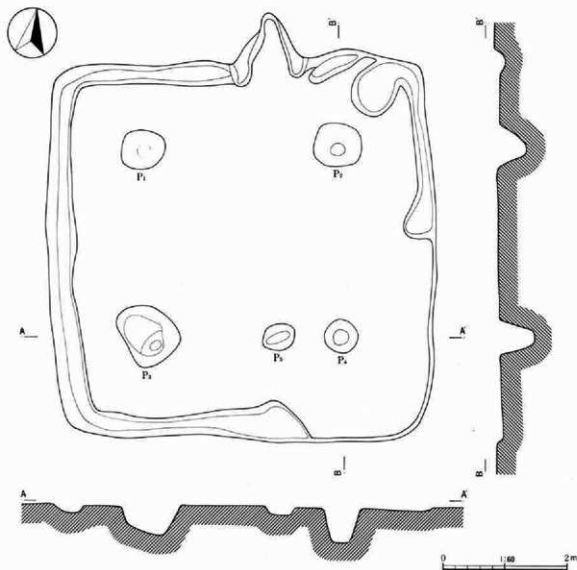
233号住居跡 (第275図, PL.11)

IV区F-12・13・14、G-12・13・14グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は6.24×6.20mを測る。面積は36.5m²を測る。主軸方向はN-9'-Wを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は19~3cmを測る。床面は地山のローム土でほぼ平坦。カマドは北壁の中央よりやや東寄りに構築される。規模は長さ115cm、幅は122cmを測る。軸方向はN-10'-Wを指す。そで部は若干壁内に張り出す。燃焼部は壁を掘り込んで築かれている。煙道は燃焼部奥壁の中位から掘り込まれて延びる。燃焼部中央から15cm大の河原礫が直立した状態で検出されたが、おそらく支脚として用いられたものと思われる。ピットは5基が検出された。規模はP₁径67×60cm深さ53cm、P₂径76×67cm深さ66cm、P₃径100×85cm深さ75cm、P₄径52cm深さ57cm、P₅径55×42cm深さ

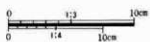
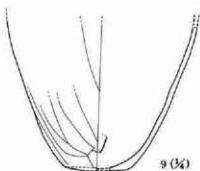
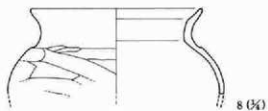
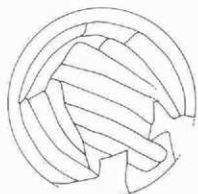
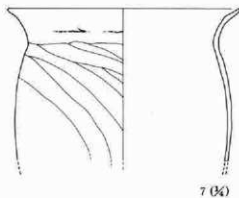
16.5cmを測る。 P_1-P_2 は位置や規模等から主柱穴と考えられる。各柱間距離は P_1-P_2 3.10m、 P_3-P_4 2.95m、 P_1-P_3 3.06m、 P_2-P_4 2.95mを測る。又 P_5 は P_3 と P_4 の結ぶ線上にのる事から上屋構造と関わる可能性が考えられよう。周溝は東壁の南半から南壁の東端部にかけての部分を除いて廻っている。規模は場所により均一ではなく幅50-25cm、深さ15-6cmを測る。なお周溝に続き北東コーナー部で径80cm深さ18cmの皿状の掘り込みが検出されたが、貯蔵穴あるいは掘り形かその性格については不明である。周溝の見られない南東部分は出入口施設が存在した事を想定させる。しかしそれらしき痕跡は全く検出されなかった。

遺物は杯、甕、壺、碗、須恵器杯、高台付杯、蓋等が約300点程出土している。出土位置はカマド及び南壁際に集中する傾向を示し、他は覆土が多い。時期は鬼高期～平安時代に亘るが、本住居跡に伴うと思われるものは奈良時代前半と考えられる。

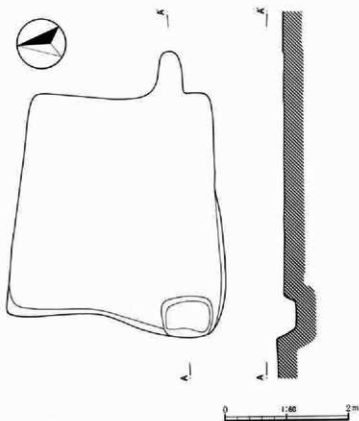
重複遺構は255号住居跡で、土層観察では確認できなかったが、出土遺物の比較から新旧関係は255号住→233号住と思われる。



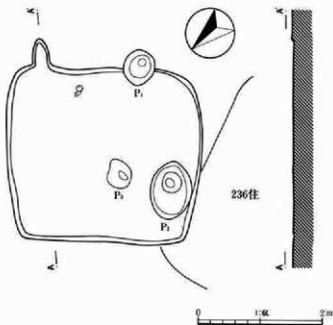
第275図 233号住居跡



第276図 233号住居跡出土遺物



第277図 234号住居跡



第278図 235号住居跡

234号住居跡 (第277図、PL.11)

IV区G-15・16、H-16グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。規模は3.88×3.45mで、面積9.6㎡を測る。主軸方向はS-78°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高6~1cmを測る。床面は地山のローム土である。カマドは東壁南端に構築され、規模は長さ65cm、幅55cmを測る。軸方向はS-85°-Eを指す。燃焼部底面のみの検出で煙道は不明。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。長方形を呈し、規模は82×65cm深さ33cmを測る。

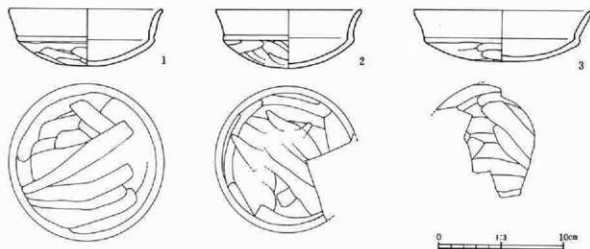
遺物は時期不明の土器片数点が出土したのみである。

235号住居跡 (第278図、PL.11)

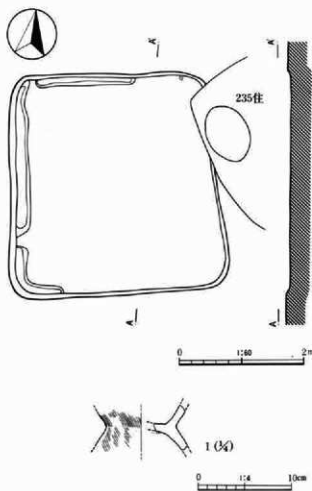
IV区F-14・15、G-14・15グリッドに位置する。平面はやや胴張りの正方形を呈し、規模は2.75×3.05mを測る。主軸方向はS-48°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高11~2cmを測る。床面はローム土を利用し凹凸が激しい。カマドは南東壁の北東隅に構築される。燃焼部あるいは煙道と思われる掘り込みが若干残るのみで、規模は長さ52cm幅30cmを測る。ピットは3基検出された。規模はP₁径57×50cm深さ39cm、P₂径92×66cm深さ26cmを測る。なおP₂は2段になっており下段の径は32cmを測る。P₃は径45×38cm深さ25cmを測る。遺物は床面より杯、甕が20点程出土している。時期は鬼高期に属する。

重複遺構は236号住居跡で、土層観察では確認できなかったが、出土遺物の比較から新旧関係は236号住→235号住

と思われる。



第279図 235号住居跡出土遺物



第280図 236号住居跡及び出土遺物

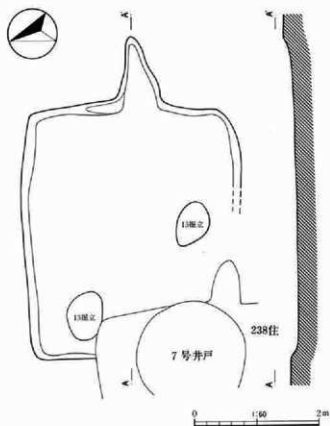
236号住居跡 (第280図、PL.11)

IV区E-15・16、F-15・16グリッドに位置する。平面は隅丸方形を呈すると思われる。規模は3.50×3.55m、面積10.8㎡を測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高14~2cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土である。周溝は北壁、西壁、南西コーナ部と3ヶ所で検出された。幅は30~15cm、深さ5~2cmを測り、底面は凹凸が多い。

遺物は甕、S字状口縁台付甕の破片約15点が出土している。古墳時代初頭の石田川期のもと思われる。

237号住居跡 (第281図、PL.11)

IV区C-13・14、D-13・14グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.00×3.50mを測る。主軸方向はS-72°-Eを指す。壁は崩落部が多く外傾する。確認壁高は33~6cmを測る。床面は主軸方向の中央部分に地山のロームを掘り残し、その両側を断面皿状に掘り窪めており、ここに貼床を行ったらしい。カマ

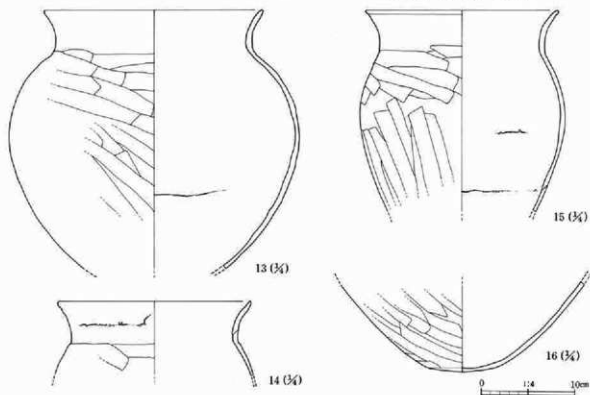


第281図 237号住居跡

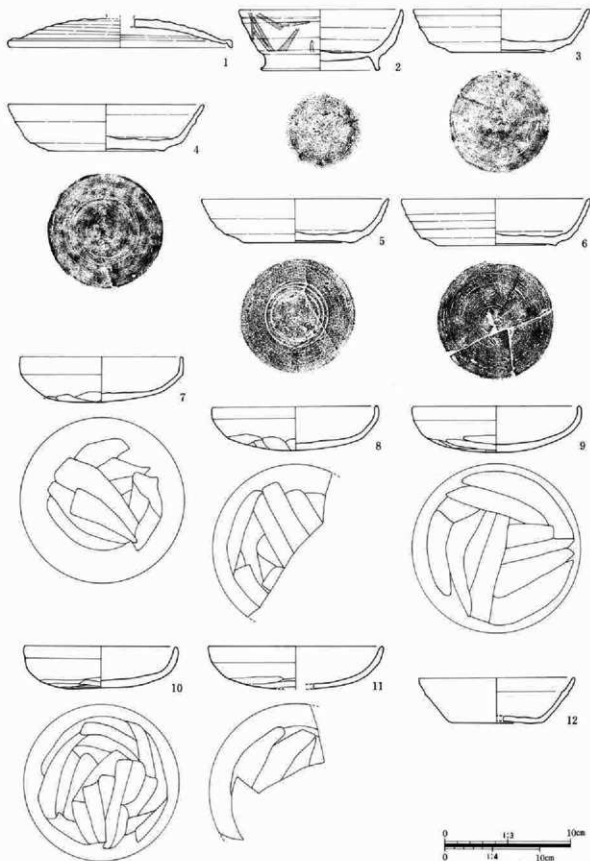
下は東壁中央部に構築され、規模は長さ120cm、幅80cmを測る。軸方向はS-76-Eを指す。燃焼部は壁外に張り出し、底面はしだいに立ち上がり煙道に続く。煙道との境は不明瞭である。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。住居覆土は上層に軽石（給源不明）とロームブロックを含む褐色土、下層にロームブロックを含む暗褐色土が堆積しており、堆積状態から人為的に埋土された可能性が高い。

遺物は杯、甕、台付甕、灰軸瓶、須恵器杯、蓋、高台付杯等の完形品及び破片が約300点程出土している。出土位置はカマド周辺及び南東コーナー部に集中し、他は覆土中央部からのものが多い。床面、カマド、覆土下層のものは平安時代初頭のものと思われる。

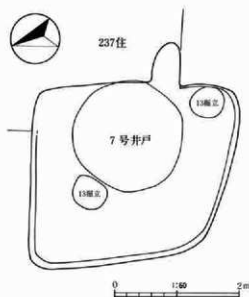
重複遺構との新田関係は237号住→238号住→7号井戸である。



第282図 237号住居跡出土遺物(1)



第283図 237号住居跡出土遺物(2)



第284図 238号住居跡

238号住居跡 (第284図, PL.11)

IV区C-14・15グリッドに位置する。平面は歪んだ横長長方形を呈し、規模は2.85×3.30mを測る。主軸方向はS-(73°)-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は10~2cmを測る。床面は地山のローム土で比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築され燃焼部のみ残存する。規模は長さ68cm幅43cmを測る。

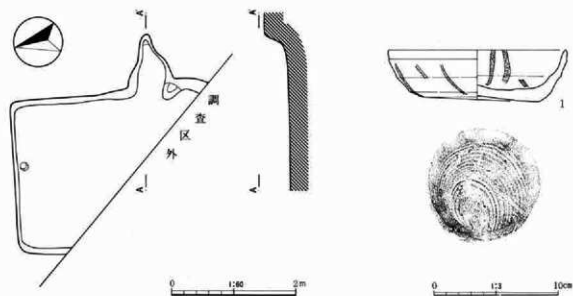
遺物は甕、須恵器杯の破片10点が出土したのみである。時期は平安時代に属するものと思われる。

重複遺構は237号住居跡、7号井戸、13号竈立柱建築遺構で、土層観察で判明した新田関係は237号住→238号住→7号井戸であった。

239号住居跡 (第285図, PL.11)

IV区B-12・13グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈すると思われる。南西半は調査区外のために不明である。規模は東西壁間距離で2.46mを測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高52~31cmを測る。床面は地山のローム土で平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ105cm、幅86cmを測り、軸方向はS-84°-Eを指す。そでは地山を若干掘り残して基部を造り出している。燃焼部底面はしだいに傾斜して立ち上がり煙道に続く。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯等の破片約40点程が出土している。時期は奈良時代(8世紀後半)と思われる。重複遺構はない。



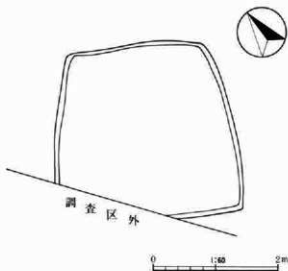
第285図 239号住居跡及び出土遺物

240号住居跡 (第286図、PL.11)

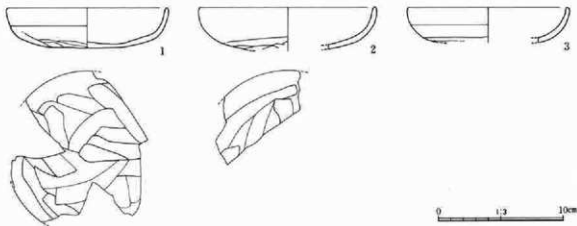
IV区B-13・14グリッドに位置する。平面は台形形状を呈し、規模は2.85×3.00mを測る。南西コーナー部は調査区外のため不明。主軸方向はN-34°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高16~5cmを測る。床面は地山のローム土で一部ロームブロックを混入する茶褐色土となっている。カマド、貯蔵穴等の住居内施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、高杯の破片約35点が出土している。ほとんどが覆土からの出土で、時期は奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構はない。



第286図 240号住居跡



第287図 240号住居跡出土遺物

241号住居跡 (第288図、PL.11)

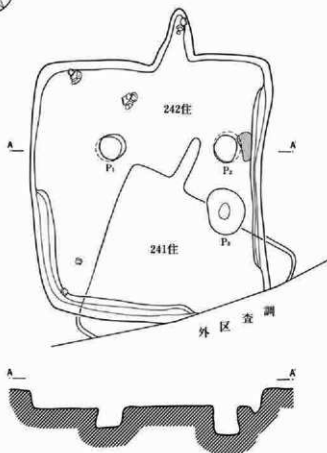
IV区B-15・16、C-16グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。242号住居跡と重複し、又南西部は調査区外にあたるため規模と主軸方向については不明確である。壁は外傾し、確認壁高7cmを測る。床面は不明瞭である。カマドは焼土分布より東壁北寄りに構築されている事が判明した。

遺物は覆土より杯、甕、高台付碗、羽釜の破片約20点程及び土鍾が出土している。時期はほとんどが平安時代に属するものである。

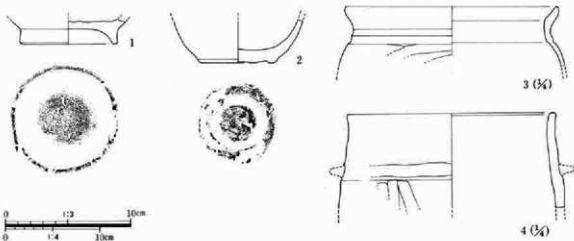
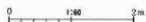
重複遺構との新旧関係は242号住→241号住である。

242号住居跡 (第288図、PL.11)

IV区B-15・16、C-16グリッドに位置する。平面は縦長方形を呈する。規模は4.10×3.85m、面積は15.5㎡前後を測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高33~13cmを測る。床面はカマド側はローム粒を含む褐色土、反対側は地山のローム土である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。



第288図 241・242号住居跡

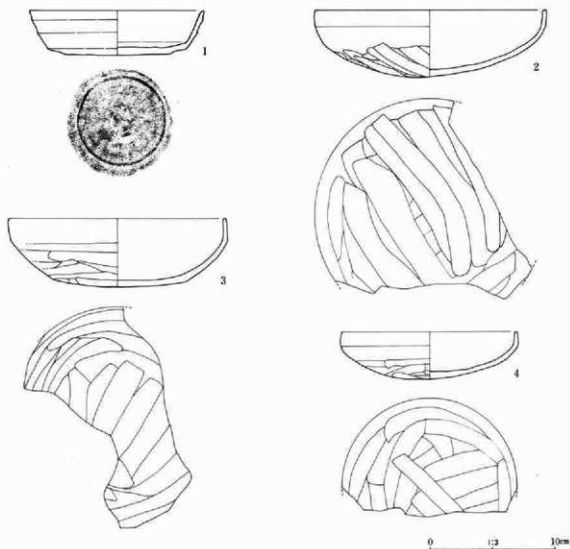


第289図 241号住居跡出土遺物

規模は長さ100cm、幅55cmを測る。軸方向はN-79°-Eを指す。燃焼部は壁外に掘り込まれて張り出しており、煙道は燃焼部奥壁の中位から掘り込まれ緩い角度で傾斜して立ち上がる。ピットは3基が検出された。規模はP₁径43cm深さ33cm、P₂径44cm深さ49cm、P₃径76×58cm深さ27cmを測る。位置的にP₁、P₂は主柱穴の可能性が考えられよう。P₁-P₂の距離は1.85mである。周溝は南壁及び中央部~西壁の部分で検出された。規模は幅35~15cm深さ38~9cmを測る。住居覆土は上層にロームブロックを多量に含む明褐色土、下層に軟質褐色土が堆積する。なおP₂と壁との間に焼土が散布している。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、蓋等が出土している。覆土出土のものは241号住居跡との分離が困難であるが、本住居跡に確実に伴うと思われるものは奈良時代の所産と考えられる。

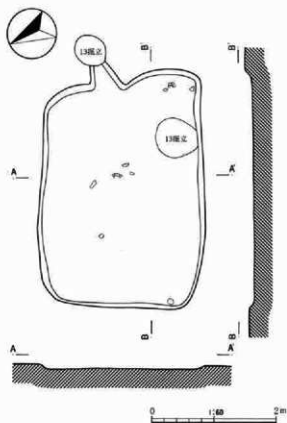
重複遺構との新田関係は前述の通り242号住→241号住である。



第290図 242号住居跡出土遺物

243号住居跡 (第291図、PL.11)

IV区C-15・16、D-15・16グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は3.75×2.65m、面積は9.2㎡を測る。主軸方向はS-70°-Eを指す。壁は崩落が激しく残存状態不良である。確認壁高は13~3cmを



第291図 243号住居跡

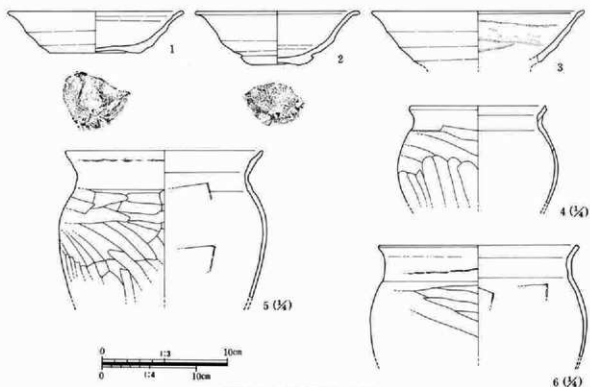
測る。床面は地山のローム土を利用しおそらく貼床をしたと思われる。カマドは東壁の北寄りに構築される。燃焼部のみ残存し、規模は長さ50cm以上、幅55cmを測る。軸方向はS-88°-E付近を指すと思われる。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付碗、蓋、灰軸碗、土錘等の破片約200点程が出土している。時期は平安時代に属するものがほとんどである。出土位置は床面及び覆土下層である。

重複遺構は13号獨立柱建築遺構で、新旧関係は不明であった。

244号住居跡 (第293図)

IV区E-16・17グリッドに位置する。北半は248号住居跡と重複しており、西半は削平され全形、規模は不明。壁は東南部のみ確認され13~3cmの高さを測る。床面は地山のローム土と思われるが不明瞭。ピットはほぼ中央と思われる部分で1基が検出された。楕円形を呈し規模は

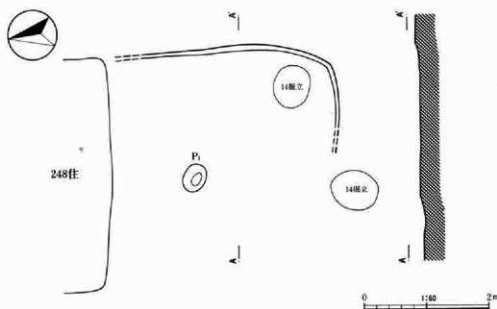


第292図 243号住居跡出土遺物

径45×35cm深さ19cmを測る。

遺物は時期不明の土器片が数点出土したのみである。

重複遺構は248号住居跡、14号掘立柱建築遺構で、新旧関係はいずれも不明であった。



第293図 244号住居跡

245号・246号住居跡 (欠番)

247号住居跡 (第294図、PL.11)

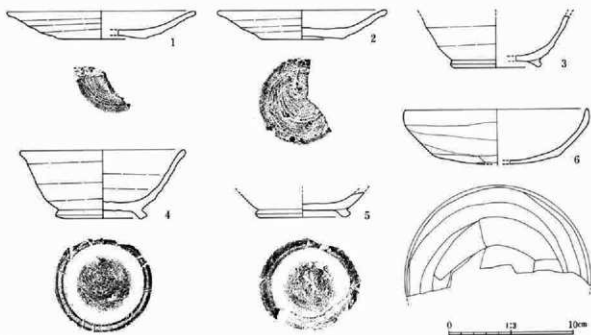
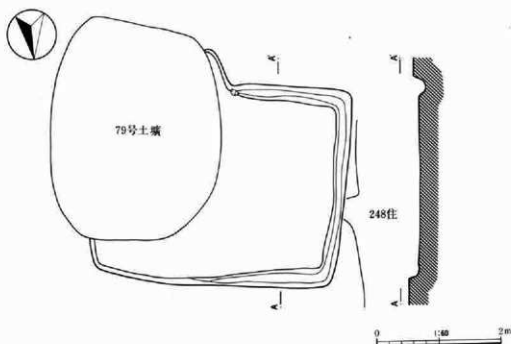
IV区F-16・17グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈すると思われる。東半は79号土壇と重複するため不明。規模は3.20×(3.95)mを測る。主軸方向はS-13°-Wを指す。壁は外傾し確認壁高22~7cmを測る。床面は中央部分をひとまわり小さく掘り込んでこの部分に埋土し貼床としたらしい。カマドは南壁の東寄りに構築されている。形状、規模ともに不明。周溝は西半部の壁に沿って検出された。幅35~15cm深さ6~1cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同皿、高台付碗等の破片約150点が出土している。時期は奈良時代~平安時代に亘るが、数量的には平安時代(10世紀代)のものが主体を占める。

重複遺構は248号住居跡、79号土壇で、新旧関係は不明であった。

248号住居跡 (第295図、PL.11)

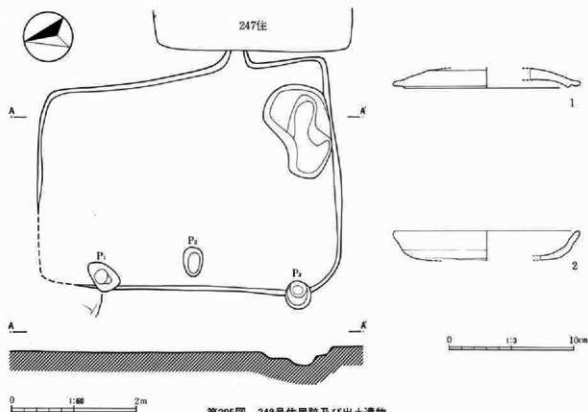
IV区E-17・18、F-17・18グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.70×4.86m、面積16.4㎡を測る。主軸方向はS-87°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高14~4cmを測る。床面は地山のローム土で小さな凹凸がある。カマドは東壁の南寄りに構築されるが、形状、規模は不明瞭である。ピットは西壁際に3基検出された。規模はP₁径57×36cm深さ15cm、P₂径47×32cm深さ18cm、P₃径45×42cm深さ34cmを測る。なお南壁際東寄りの部分で不定形の落ち込み(径152×103cm深さ31cm)が検出されたがその性格については不明である。



第294図 247号住居跡及び出土遺物

遺物は杯、甕、須恵器杯、蓋等の破片約55点が出土した。ほとんど小破片で時期の判明するものは少ないが、奈良時代に属するものが主体を占めるようである。なお出土位置は床面及び覆土中がほとんどでピットやカマドからは出土していない。なお北西コーナー部分で10cm大の円礫が出土している。

重複遺構は247号住居跡で、新旧関係は不明であった。なお本住居跡の北壁は早川の浸食による崖によって削られた可能性が高い。



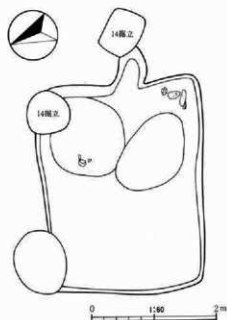
第295図 248号住居跡及び出土遺物

249号住居跡（第296図、PL.11）

IV区D-16-17グリッドに位置する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は3.45×2.67m、面積8.7㎡を測る。主軸方向はS-64°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高45～8cmを測る。床面は住居プランよりひとまわり小さな方形の掘り込み（掘り形と思われる。）がある事から中央部分が貼床であった可能性が考えられる。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、規模は長さ（78）cm、幅48cmを測る。燃焼部のみ残存し煙道は不明である。住居覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積している。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕、灰釉椀の破片が約430点程出土している。出土位置は覆土がほとんどである。時期は平安時代のものが大部分を占める。

重複遺構は14号掘立柱建築遺構で、新旧関係は不明である。なお東半と北西コーナー部は後世の擾乱によって切られている。

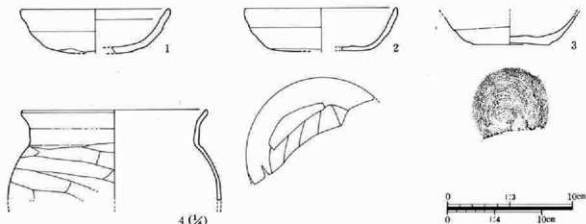


第296図 249号住居跡

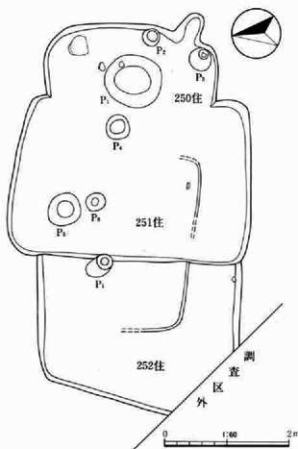
250号住居跡（第298図、PL.11）

IV区C-17グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、他遺構との重複が激しく全体の形状や

第V章 検出された遺構と遺物



第297図 249号住居跡出土遺物



第298図 250・251・252号住居跡

規模は不明であった。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は直立し確認壁高18~15cmを測る。床面は地山のローム土でほぼ平坦である。なお床面レベルは重複する251号住居跡と同一で、そのまま続く可能性がある。カマドは東壁南端に構築され、燃焼部のみ検出された。規模は長さ53cm、幅47cmを測る。軸方向はS-56°-Eを指す。ピットは重複する251号住まで含めて、合計6基が検出された。規模はP₁径83×80cm深さ44cm、P₂径27cm深さ19cm、P₃径35cm深さ26.5cm、P₄径38cm深さ33cm、P₅径50cm深さ24cm、P₆径30×28cm深さ12cmを測る。これらの性格については不明である。

遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付碗、灰釉碗等の破片約180点が出土している。覆土からの出土がほとんどで251号住居跡との分離は困難である。時期は平安時代に属するものがほとんどである。

重複遺構は251号住居跡で、覆土がほぼ同一である事や床面がほぼ同一面である事から本住居跡と同一住居の可能性も考えられる。

251号住居跡 (第298図、PL.11)

IV区B-17・18、C-17・18グリッドに位置す

る。平面は長方形を呈すると思われるが、上記の通り250号住居跡と同一であった場合、カマド部分を含めた東側部分は方形の張り出し施設となるだろう。規模は2.6×3.9mを測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高25~6cmを測る。床面は地山のローム土である。住居覆土は黄褐色土が堆積する。

遺物は250号住居跡と共に取り上げたため本住居跡に伴うものは不明である。

重複遺構は252号住居跡で、土層観察より新旧関係は252号住→251号住である。

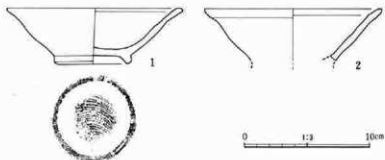
252号住居跡 (第298図, PL.11)

IV区B-17・18グリッドに位置する。平面は方形と思われる。規模は南北間距離で3.26mを測る。壁はほぼ直立し、確認壁高10~4

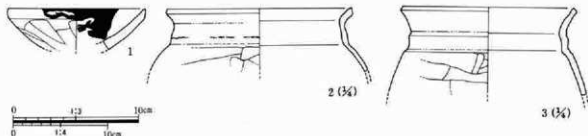
cmを測る。主軸方向はS-(85°)-Eを指す。床面は地山のローム土でほぼ平坦である。ピットは251号住居跡壁際で1基検出された。規模は径46×26cm深さ41cmを測る。住居覆土は黒色粘質土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同慶、蓋、高台付椀、台付甕(?)、壺等の破片約200点が出土した。出土位置は覆土がほとんどで、時期は平安時代を主体とする。

重複遺構との新旧関係は252号住→251号住である。



第299図 250号住居跡出土遺物



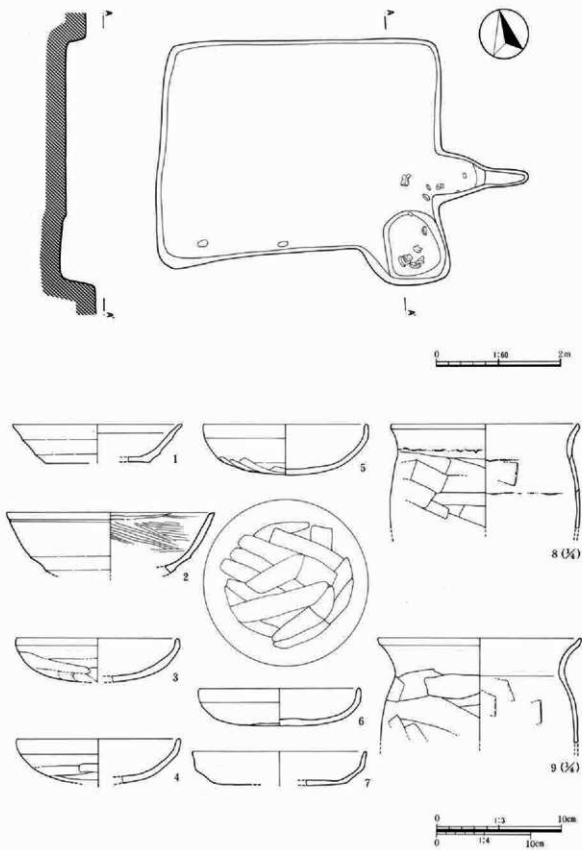
第300図 252号住居跡出土遺物

253号住居跡 (第301図, PL.12)

IV区B-20・21、C-20・21・22グリッドに位置する。平面は縦長方形を呈し、規模は4.55×3.55mで面積は16.5㎡を測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高37~19cmを測る。床面は地山のローム土でほぼ平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ154cm、幅92cmを測る。軸方向はS-77°-Eを指す。そで部は見られない事から本体は壁外に張り出す形態と考えられる。燃焼部は地山を横穴状に掘り込んで築かれており、両壁はオーバーハングしている。底面はやや窪んでいるが、これが灰掻きのために出来たものか、あるいは燃焼部掘り形面であるのかは確認できなかった。煙道部は燃焼部奥壁の中位から段をなして掘り込まれており、緩い角度で傾斜して立ち上がる。貯蔵穴は南東コーナー部に設けられた120×80cm程の方形を呈する張り出し施設の中で検出された。これも隅丸方形を呈し、規模は108×94cm、深さ14cmを測るものである。一般的な貯蔵穴に比べて深さが浅い事から、これは掘り込んだ部分のみでなく張り出し施設全体が貯蔵穴的用途を持っていたと考えられよう。その他のピットや周溝は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、羽釜、鉢、壺、蓋、須恵器杯等の土器片約180点及び円礫3点が出土した。出土位置はカマド周辺と張り出し施設に集中する傾向を示す。時期は奈良-平安時代に亘るが、本住居跡に伴うと思われるものは奈良時代に属するものと考えられる。

重複遺構はない。なお早川の浸食によると思われる崖線が西方約1mに迫っている。



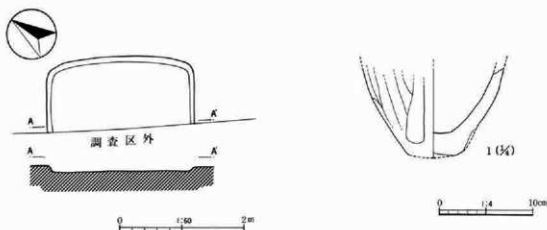
第301図 253号住居跡及び出土遺物

254号住居跡 (第302図)

IV区B-19・20グリッドの調査区西境で検出された。平面は方形と思われるが、西半については調査区外のため、その形状は不明である。規模は検出された北西壁と南東壁間距離で2.36mを測る。主軸方向は北東壁の方向よりN-39°-Wを指す。壁は外傾しており、壁高は9~5cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、地山が黒褐色土を主とするため不明瞭。カマド、貯蔵穴、ピット等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕等の小破片が若干出土している。具体的な形状を知り得るものが少なく、時期的な把握は困難である。図示した土器は小形の甕底部片で、厚手なつくりや胎土の特徴から平安時代所産の可能性が考えられる。

重複遺構はない。



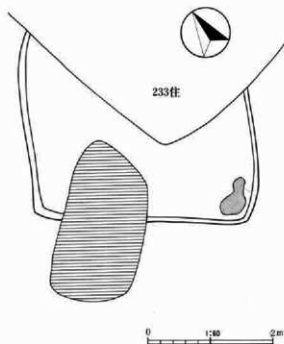
第302図 254号住居跡及び出土遺物

255号住居跡 (第303図、PL.12)

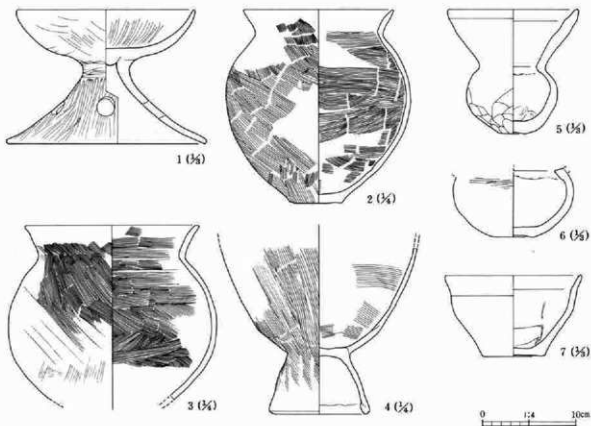
IV区E-12・13グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は残存する東西壁間距離で3.60mを測る。主軸方向はN-30°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高13~7cmを測る。床面は地山のローム土を利用しほぼ平坦である。カマド、ピット、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は甕、S字状口縁台付甕、高杯、埴、小形鉢、磁石等が約120点程出土している。出土位置は床面及び覆土で部分的に集中する傾向はないようである。時期は古墳時代初頭のものと同良時代のものか混在するが、数量的には古墳時代初頭(石田川期)が主体を占める。

重複遺構との新田関係は255号住→233号住である。



第303図 255号住居跡



第304図 255号住居跡出土遺物

2 住居跡出土遺物

本遺跡の竪穴住居跡からは土器、玉類、滑石製模造品、紡錘車、砥石、カマド支脚、埴輪等が出土している。遺物の出土状況は各住居跡の項で述べたが、そのうち覆土出土としたものは廃棄あるいは流れ込みによるものと考えられる。しかしほとんどの住居跡がその上半部を失った状態で検出された可能性が強く、従って覆土は全般的に薄く、床面に近接した位置における出土遺物が多い。この事から本文中で覆土出土として扱ったものは住居廃絶時から1次埋没土の堆積時前後までの間に堆積した可能性が強いと思われる。ただし重複遺構のある場合はこの限りでなく、遺構毎の分離が不可能だったものもある。

以下各遺物毎に詳細を述べる。

土器

竪穴住居跡出土土器は、その器種、出土状況、時期等について各住居跡の項で概述し、又その実測図を掲載している。カマドや貯蔵穴出土等のものを除けば、明らかに一括遺物として取り上げられるのはわずかであった。又従来の土器編年研究からみて時期が異なると判断されるものについても当該住居跡に伴うか否かは別問題とし、あくまでも出土位置を示す意味でここで取り上げ、図示をしている。

以下に各竪穴住居跡出土土器の詳細について一覧表を掲げた。個体数は752点で、住居跡毎に記述している。なお図については前節の各住居跡の項を参照されたい。

住居跡出土土器観察表

口径と底径については原則として1/2以上残存するものを計測したが、それ以下でも値が推定できるものについては()で記載した。

1号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第5図-1 PL17	土 師 杯	カマド	口12.0 高4.3 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第5図-2	土 師 杯	カマド	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第5図-3 PL17	土 師 鉢	床 面	口21.4 高12.5 底6.0 完形	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第5図-4	土 師 甕	床 面	口 (20.6) 口縁～体中位1/4	①砂粒やや多 ②ふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第5図-5 PL17	土 師 甕	床 面	口22.6 口縁～体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第5図-6 PL17	土 師 甕	床 面	口22.6 口縁～体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

6号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第9図-1 PL17	土 師 甕	カマド	口 (27.6) 口縁～体中位1/2	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位は横、中位は 縦ヘラケズリ 内面上位ヘラナデ	体内面に積み上げ 底

7号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第11図-1	埴 土 高台杯	覆 土	底 (11.3) 1/4	①白色砂粒若干日立つ ②灰 ③泥元、硬質	底面転ヘラ削り後付高台	
第11図-2	土 師 甕	床 面	口 (14.7) 口縁～体上位1/2	①砂粒やや多 ②黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第11図-3	土 師 (甕)	床 面	体下位～底1/3	①粗砂やや多 ②黒褐 ③普通	体外面横ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	

8号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 量 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第13図-1 PL.17	土師 杯	床面	高3.7 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第13図-2 PL.17	土師 高杯	カマド	口19.0 杯のみ残存	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面無調整?	杯底近くに穿孔あり
第13図-3 PL.17	土師 高杯	カマド	口17.0 杯-脚中位	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面-脚縁ヘラケズリ 内面ナデ縦放射状ヘラミガキ	
第13図-4 PL.17	土師 杯	床面	口(13.0) 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面下位横ヘラケズリ 内面ナデ放射状ヘラミガキ	
第13図-5 PL.17	土師 鉢	カマド	口14.0 高8.7 底6.0 完形	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ナデ 内面縦ナデ	
第13図-6 PL.17	土師 鉢	貯蔵穴	口13.6 高8.2 底4.0 完形	①細砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面中位以下斜ヘラケズリ 内面ナデ	内面へフ押しと痕
第13図-7 PL.17	土師 埴	壁際	口6.6 高8.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ後ヘラミガキ 体外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面ナデ	体中位焼成後穿孔
第13図-8 PL.17	土師 埴	貯蔵穴	口12.2 高14.0 完形	①砂粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面下位ヘラケズリ 内面ナデ	
第13図-9 PL.17	土師 台付鉢	壁際	口13.8 高15.5 底8.4 ロー体1/2	①砂粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 脚縁ヘラケズリ 体部と脚部内面ナデ	
第13図-10	土師 甕	覆土	口(18.8) 口縁-体上位1/2	①粗砂やや多 ②黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体横ヘラケズリ	

11号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 量 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第15図-1 PL.18	土師 杯	覆土	口(12.5) 高4.0 1/3	①細砂を含む ②灰褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第15図-2	土師 甕	覆土	口(17.2) 口縁-体中位	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位は横、中位以下は縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第15図-3 PL.18	土師 甕	床面	口14.5 口縁-体中位	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第15図-4	土師 (甕)	壁際	底7.7 底部のみ残存	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第15図-5	土師 高杯	床面	脚のみ残存、炬穴	①細砂を含む ②橙 ③普通	脚外面ナデ後縦ヘラミガキ	内面紋り目痕あり

13号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 成形・整形の特徴	備 考
第18図-1 PL.18	土師 杯	床面	口12.2 高4.7 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-2 PL.18	土師 杯	床面	口12.6 高4.4 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-3 PL.18	土師 杯	床面	口(12.7) 高3.7 1/2部	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-4 PL.18	土師 杯	床面	口12.4 高4.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-5 PL.18	土師 杯	床面	口12.7 高5.1 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-6 PL.18	土師 杯	床面	高6.5 1/4	①細砂を含む ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-7 PL.18	土師 甕	壁際	口16.5 高16.5 底7.3 口一部欠	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面へラナデ	
第18図-8 PL.18	土師 甕	壁口	口(16.0) 高21.4 口縁1/2	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第18図-9 PL.18	土師 甕	壁口	口16.4 口縁一体下位	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第19図-10 PL.18	土師 甕	壁口	口20.1 高37.5 底3.5 完形	①粗砂やや多 ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	底木葉痕
第19図-11 PL.18	土師 甕	床面	口18.8 高36.9 底4.4 体一部欠	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	底木葉痕
第19図-12 PL.18	土師 甕	床面	口(14.7) 高25.5 口一部欠	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第19図-13 PL.18	土師 甕	床面	口20.4 底欠	①砂粒やや多 ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデとへラナデ	
第19図-14 PL.18	土師 甕	壁口	口縁一体上位1/3	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第19図-15 PL.18	土師 甕	床面	口縁一体上位1/3	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

17号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第22図-1 PL.18	土師 杯	覆土	口径15.0 高6.7 口縁一部欠	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第22図-2 PL.18	土師 杯	覆土	口径13.8 高4.0 1/2	①細砂を含む ②澄 ③普通	口縁ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

19号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第23図-1	土師 甕	床面	口縁~体上位1/4	①細砂やや多 ②澄 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕
第23図-2	土師 甕	床面	口縁~体上位	①細砂を含む ②にふ い澄 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	頸部に積み上げ痕
第23図-3 PL.19	土師 台付甕	覆土	脚部	①砂粒やや多 ②にふ い澄 ③普通	体ヘラケズリ 内面ナデ 胴内外面横ナデ	

20号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第25図-1 PL.19	土師 杯	覆土	口径(13.8) 1/3	①細砂を含む ②黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

21号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第26図-1	土師 杯	覆土	1/4	①酸化鉄結物粒目立つ ②澄 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第26図-2 PL.19	土師 甕	覆土	高16.0 底6.0 口縁2/3欠	①酸化鉄結物粒目立つ ②にふい褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ 底孔ヘラ切り	
第26図-3 PL.19	土師 小形鉢	覆土	口径9.3 高4.9 底3.6 変形	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ナデ 内面ナデ	底木葉痕

23号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第29図-1 PL.19	土 師 杯	壁 際	口12.4 高3.8 1/2強	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-2 PL.19	土 師 杯	覆 土	口12.4 高4.2 1/2強	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-3	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-4 PL.19	土 師 杯	覆 土	1/3弱	①砂粒を含む ②黒褐 ③普通	口縁2段の横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-5 PL.19	土 師 甕	ビット P ₁	口23.4 口縁一体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半は縦、下半以 下は斜へラケズリ 内面ナデ	
第29図-6	土 師 甕	床 面	口縁一体中位1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第29図-7	土 師 甕	ビット P ₁	口縁一体上半	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜及び縦へラケズ リ 内面ナデ	
第29図-8	土 師 甕	床 面	口縁一体上半1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第29図-9	土 師 甕	床 面	口縁一体上半1/5	①砂粒やや多 ②にぶ い焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第29図-10	土 師 甕	床 面	体下位～底	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	体外面斜へラケズリ 内面ナデ 底周辺へラケズリ	

24号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第31図-1 PL.19	瓦 蓋 高 杯	床 面	口縁1/3と脚	①細砂を含む ②灰黒 ③還元、硬質	杯部外面に垂揺波状文 脚部中位カキ 目を施す	脚長方形透孔3ヶ 所
第31図-2	土 師 杯	床 面	口縁1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第31図-3 PL.19	土 師 杯	床 面	口12.6 高5.0 2/3	①細砂を含む ②にぶ い焼 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第31図-4 PL.19	土 師 甕	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第31図-5 PL.19	土 師 甕	床 面	口縁一体上半1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第31図-6 PL.19	土 師 甕	床 面	口17.8 口縁一体上位2/3	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第31図-7	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①砂粒やや多 ③普通	②明赤 ④普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面横ヘラケズリ	
第31図-8 PL.19	土師 甕	床面	口 (14.8) 口縁～体上半1/2	①砂粒を含む い殻 ③普通	②にぶ い殻	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第31図-9	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む い殻 ③普通	②にぶ い殻	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面横ヘラナデ	

25号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考	
第32図-1 PL.19	土師 杯	床面	口縁1/4	①細砂を含む い殻 ③普通	②にぶ い殻	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第32図-2 PL.19	土師 杯	床面	1/3	①細砂を含む ③普通	②滑	口縁横ナデ 体外面下半横ヘラケズリ 内面ナデ	
第32図-3	土師 甕	床面	口縁～体上半1/4	①細砂を含む い殻 ③普通	②にぶ い殻	口縁横ナデ 体外面上半は横、下半は 縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第32図-4 PL.19	土師 甕	床面	口縁～体上半	①細砂を含む い殻 ③普通	②にぶ い殻	口縁横ナデ 体外面上半は横、中位は 斜、下半は縦ヘラケズリ 内面ヘラケ ズリ	口縁外面積み上げ 底

26号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考	
第34図-1 PL.20	手捏ね 土器	床面	1/3弱	①細砂を含む ③普通	②粒	口縁横ナデ 体外面無調整 底ナデ 内面ナデ	
第34図-2	土師 (甕)	床面	1/4	①砂粒を含む い殻 ③普通	②にぶ い殻	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第34図-3 PL.20	土師 杯	床面	1/4	①酸化鉄粒目立つ ②明赤周 ③普通		口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

28号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考	
第38図-1 PL.20	須恵 高杯	床面	高17.6 脚径16.4 口縁1/2弱一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質		杯口クロ右回転 杯底外面回転ヘラケ ズリ 脚は油転して口口左回転整形 脚方形透孔2段、 交互に3ヶ所づつ	

第38図-2 PL20	須恵 短原壺	床面	口8.0 高5.7 底5.0 口縁1/2欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転 肩部に二段の彫輪状文	
第38図-3 PL20	須恵 短原壺	床面	口6.0 高9.7 体約2/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底へラケズリ整形	口縁の歪み大
第38図-4 PL20	土師 杯	床面	口14.4 高4.4 口縁1/4欠	①細砂を含む ②黒濁 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ後粗い へラミガキ 内面ナデ	
第38図-5 PL20	土師 杯	床面	口14.0 高4.7 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-6 PL20	土師 杯	床面	口13.0 高5.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-7 PL20	土師 杯	床面	口13.4 高4.9 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-8 PL20	土師 杯	床面	口13.2 高5.1 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-9 PL20	土師 杯	床面	口13.0 高4.4 約1/4欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-10 PL20	土師 杯	床面	約1/3	①細砂を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-11 PL20	土師 杯	床面	口13.6 高4.5 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	口唇上面に沈線
第39図-12 PL20	土師 杯	床面	口13.2 高4.8 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-13 PL20	土師 杯	床面	1/3	①細砂を含む ②にふ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-14 PL21	土師 壺	床面	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-15 土師 (鉢)	土師 鉢	床面	口縁-体上半1/5	①砂粒を含む ②にふ い濁 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-16 PL21	土師 瓶	床面	口13.8 高11.0 底3.4 口一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面縦へラケズリ	
第39図-17 PL21	土師 瓶	床面	口19.4 高10.5 底3.2 口一部欠	①細砂を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-18 土師 瓶	土師 瓶	床面	体下半-底	①粗砂目立つ ②橙 ③普通	体外面縦へラケズリ 内面ナデ後へラ ナデ	
第39図-19 PL21	土師 瓶	床面	口25.0 高29.7 底8.7 体一部欠	①砂粒やや多い濁 ②にふ い濁 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ後へラナデ	
第40図-20 土師 甕	土師 甕	床面	口縁-体上位1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第40図-21 土師 甕	土師 甕	床面	口縁-体上位1/4	①粗砂やや多い濁 ②にふ い濁 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第40図-22 土師 甕	土師 甕	床面	口縁-体上半1/4	①細砂を含む ②にふ い濁 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第40図-23 PL.21	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第40図-24 PL.21	土師 甕	床面	体中位～底	①砂粒を含む ②明褐色 ③普通	体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	体部内面に積み上げ 底木炭痕
第40図-25 PL.20	土師 甕	床面	口14.1 高15.1 底5.3 口一部欠	①砂粒を含む ②明黄 褐色 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第40図-26 PL.20	土師 甕	床面	口15.6 体下位～底欠	①砂粒を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	体部内面に積み上げ 底痕
第40図-27 PL.20	土師 甕	床面	口縁約3/4欠	①砂粒やや多 い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	

29号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第42図-1 PL.21	土師 杯	床面	口13.1 高3.8 口縁約2/3破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第42図-2 PL.21	土師 杯	貯蔵穴	口 (15.1) 高6.9	①細砂を含む ②にぶ い赤褐色 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底二次地成痕あり。
第42図-3 PL.21	土師 甕	カマド 右 袖	口17.3 口縁～体上位	①砂粒やや多 い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第42図-4 PL.21	土師 甕	カマド	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第42図-5	土師 甕	カマド	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位縦ヘ ラケズリ 内面ナデ	
第42図-6	土師 (甕)	覆土	口縁約1/8	①黒色泥物を含む ②淡黄褐色 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ハケメ 内面ナデ	二次地成痕あり 東北系か?

30号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第44図-1	土師 杯	床面	口縁1/4	①細砂を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

31号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第47図-1 PL.22	土師 杯	覆土	口12.0 高5.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②明赤 褐色 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第47図-2	土 師 杯	覆 土	口12.9 高6.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②明赤 黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第47図-3 PL22	土 師 杯	覆 土	口 (12.6) 高6.4 口縁3/4欠	①細砂を含む ②明赤 黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第47図-4	土 師 (器台)	覆 土	脚のみ残存	①細砂を含む ②橙 ③普通	脚外面縦ヘラケズリ 内面ナデ 縦横ナデ	

32A号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第48図-1 PL21	土 師 杯	貯蔵穴	口12.6 高4.3 完形	①砂粒を含む ②にぶ い黄黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第48図-2 PL21	土 師 杯	貯蔵穴	口13.0 高4.4 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第48図-3 PL21	土 師 杯	貯蔵穴	口13.2 高4.2 完形	①砂粒を含む ②にぶ い赤黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第48図-4 PL21	土 師 杯	床 面	口12.0 高4.1 1/3欠	①砂粒を含む ②黒黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第48図-5 PL21	土 師 杯	覆 土	口13.9 高4.4 2/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第48図-6 PL21	土 師 杯	壁 際	1/3	①細砂を含む ②にぶ い黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第48図-7	土 師 鉢	床 面	口縁～体上半	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	

33号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第52図-1	須 恵 高台椀	覆 土	底のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い赤黒 ③酸化、軟質	付高台	
第52図-2	須 恵 高台椀	覆 土	底のみ残存	①白色砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	回転糸切り接付高台周道部ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

35号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第54図-1	土 師 杯	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②灰 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ 口唇内側に比線	
第54図-2	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	
第54図-3	土 師 甕	壁 際	口縁～体上半1/4	①白色砂粒目立つ ②にぶい焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラズリ 内面ナデ	
第54図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/3	①細砂を含む ②にぶ い焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	
第54図-5 PL.22	土 師 高 杯	カマド	脚のみ残存	①細砂やや多 ②橙 ③普通	脚内面はユビによるナデ	全体に磨滅

36号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第56図-1	須 志 高台甕	床 面	底1/4のみ残存	①細砂を含む ②灰 ③風元、硬質	付高台 回転未切りと思われる	
第56図-2 PL.22	土 師 鉢	床 面	口18.2 高14.8 底13.5 完形	①粗砂やや多 ②にぶ い焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラズリ 内面ヘラナデ	体部外面に積み上げ痕
第56図-3 PL.22	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/4	①粗砂やや目立つ ②にぶい焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ接ヘラ ナデ 内面ナデ	
第56図-4	土 師 甕	床 面	体下位～底	①粗砂やや目立つ ②にぶい焼 ③普通	体外面縦ヘラズリ 内面ヘラナデと ナデ	
第56図-5 PL.22	土 師 甕	床 面	口 (28.0) 口縁～体下位1/2	①粗砂やや目立つ ②にぶい焼 ③普通	体外面縦ヘラズリ 内面ナデ	

37号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第58図-1 PL.22	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第58図-2	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体ヘラズリか?	口縁に積み上げ痕

第59図-3	土師 甕	床面	口縁～体上位小片	①砂粒やや多 ②にぶ い肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	
第59図-4	土師 甕	床面	口18.2 口縁～体上半	①砂粒を含む 肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ後ナデ 内面ナデ	
第59図-5 PL.22	土師 甕	床面	口縁～体上半1/2	①砂粒やや多 ②肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	
第59図-6 PL.22	土師 甕	床面	高25.7 孔径(6) 口縁～底1/3	①砂粒やや多 ②肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	

38号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地肌	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第61図-1 PL.22	土師 杯	貯蔵穴	口12.3 高4.7 口縁一部欠	①細砂を含む ②肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第61図-2 PL.22	土師 杯	床面	口(12.2) 1/2部	①細砂を含む ②肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第61図-3	土師 鉢	カマド	高13.3 1/4	①砂粒を含む ②にぶ い赤肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	

39号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地肌	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第62図-1	土師 杯	覆土	高(4.9) 1/4	①細砂を含む ②明赤 肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第62図-2 PL.22	土師 甕	貯蔵穴	口22.0 口縁～体下位	①細砂を含む ②肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面ナデ 内面ナデ	口縁に積み上げ底 体外部面ヘラズリ

45号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地肌	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第67図-1 PL.22	土師 杯	覆土	口12.8 高4.4 完形	①細砂やや多 ②にぶ い赤肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第67図-2 PL.22	土師 杯	覆土	口12.0 高4.2 口縁一部欠	①細砂を含む ②肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	

47号住居跡

図 No. 写真図No.	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地肌	技法 成形・整形の特徴	備考
第68図-1 PL.23	土師 甕	覆土	口縁～体上位小片	①砂粒やや多い ② ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	

49号住居跡

図 No. 写真図No.	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地肌	技法 成形・整形の特徴	備考
第71図-1 PL.23	土師 杯	床面	口11.6 高4.8 定形	①細砂を含む ②明赤 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-2 PL.23	土師 杯	床面	口12.3 高4.6 定形	①細砂を含む ② ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-3 PL.23	土師 杯	床面	口11.8 高5.0 定形	①細砂を含む ② ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-4 PL.23	土師 杯	床面	口13.0 高4.8 定形	①細砂を含む ② ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-5 PL.23	土師 杯	床面	口13.0 高4.3 口縁1/3欠	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-6 PL.23	土師 杯	床面	口11.8 高4.5 定形	①細砂を含む ② ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-7 PL.23	土師 杯	床面	口12.5 高3.7 定形	①細砂を含む ② ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-8	土師 高杯	覆土	脚1/2のみ残存	①細砂を含む ② ③普通	脚ヘラケズリ後縦ヘラミガキ 裾横ナデ	
第71図-9 PL.23	土師 甕	床面	口15.5 高17.7 底8.2 体一部欠	①砂粒やや多い ② ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第71図-10 PL.23	土師 甕	床面	口16.7 高14.3 底5.5 口一部欠	①砂粒やや多い ② ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第72図-11 PL.23	土師 壺	カマド	口14.0 口縁～体下位	①粗砂やや目立つ ② ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第72図-12 PL.23	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ② ③普通	口縁横ナデ 内面ヘラナデ	
第72図-13 PL.23	土師 甕	カマド	口18.6 口縁～体上位	①砂粒やや多い ② ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第72図-14 PL.23	土師 甕	カマド	口21.0 口縁～体中位	①砂粒やや多い ② ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第72図-15 PL.23	土師 甕	灰口	口20.3 口縁～体	①砂粒やや多い ② ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

第72図-16 PL.23	土師 甕	口	口24.0 口縁-体1/2	①粗砂やや目立つ ②明赤黒 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第72図-17	土師 (甕)	カマド	口縁と体下平欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

50号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・口径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第73図-1	土師 杯	カマド	口 (15.0) 高4.8 約1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第73図-2	土師 甕	カマド	口 (20.3) 口縁-体上位1/2	①砂粒を含む ②にぶ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

51号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・口径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第75図-1 PL.24	土師 杯	覆土	口縁1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第75図-2 PL.24	土師 高杯	カマド	口 (15.5) 口唇と底部欠	①細砂を含む ②明赤 黒 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面横ナデとナデ 内面ヘラナデとナデ 脚ナデ	
第75図-3 PL.24	土師 甕	カマド	口14.0 高13.8 底6.4 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	口縁と体部外面に 積み上げ筋
第75図-4 PL.24	土師 甕	カマド 左地	口18.0 口縁-体下位	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	口縁に積み上げ筋 体外面に腐付着
第75図-5 PL.24	土師 甕	カマド	口20.3 口縁-体下位	①細砂やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

52号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・口径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第77図-1	土師 甕	カマド	口縁-体上位1/5	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ヘラケズリ後ナデ	
第77図-2 (須恵) 高台杯 PL.24	カマド	カマド	口8.4 高4.1 高台一部欠	①白色磁物若干目立つ ②橙 ③酸化、軟質	ナデ後ヘラミグキ	

53号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第79図-1	土 師 杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第79図-2 PL24	土 師 杯	カマド	高4.4 1/2	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第79図-3	土 師 高 杯	カマド	杯底～脚上位	①細砂を含む ②殻 ③普通	杯底横ヘラケズリ 脚底ヘラケズリ	
第79図-4	土 師 甕	カマド	底3.8 体下半～底	①砂粒やや多 ②黒焼 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	

54号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第81図-1 PL24	土 師 杯	床 面	口10.9 高3.8 口縁一部欠	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第81図-2 PL24	土 師 甕	形盛穴	口13.3 高16.9 底6.5 完形	①砂粒やや多 ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	体部に煤付着
第81図-3 PL24	土 師 甕	カマド	口22.3 高39.6 底4.0 完形	①粗砂やや多 ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面上位ヘラナデ 下位ナデ	体部に積み上げ痕
第81図-4 PL24	土 師 甕	壁 際	口18.2 高15.2 底5.8 口縁体一部欠	①砂粒やや多 ②にぶ い赤焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦、斜ヘラケズリ 内面ナデ 孔は外面より内面へ穿つ	径5mmの孔27ヶ所

55号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第83図-1 PL24	土 師 杯	壁 際	口13.4 高4.4 1/2	①細砂を含む ②明赤 焼 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第83図-2 PL24	土 師 杯	壁 際	口12.8 高4.6 口縁一部欠	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第83図-3 PL24	土 師 鉢	覆 土	口21.0 高15.1 底7.0 体一部欠	①白色、黒色砂粒が目 立つ ②殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

第83図-4 PL25	土 師 甕	カマド	口18.1	①砂粒を含む ③普通	②編 織	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第83図-5 PL25	土 師 甕	カマド	口21.2 高34.7 底4.6 底一部欠	①砂粒やや多 ③普通	②浅黄 色	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第83図-6 PL25	土 師 甕	カマド	口21.5 高40.4 底4.3 口縁1/2欠	①砂粒やや多 ③普通	②にぶ い黒	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	流木葉痕
第83図-7 PL25	土 師 甕	カマド	口22.2 胴下半部欠	①砂粒多く含む ③普通	②暗 赤黒	口縁横ナデ 体外外面斜ヘラケズリ 内面横ヘラナデとナデ	

56号住居跡

図 No 写真図版No	土師種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第84図-1 PL25	土 師 杯	床 面	口13.8 高4.8 完形	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-2 PL25	土 師 杯	壁 際	口 (12.5) 高3.2 1/3	①砂粒を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-3	土 師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-4	土 師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-5	土 師 杯	覆 土	1/5	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-6 PL25	土 師 杯	床 面	口15.0 高4.8 口縁一部欠	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-7 PL25	土 師 杯	床 面	口17.2 高4.1 完形	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-8 PL25	土 師 杯	床 面	口16.4 高3.6 2/3	①細砂を含む ③普通	②橙	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-9 PL25	須 恵 杯	床 面	口 (17.5) 高4.5 底7.2 2/3	①長石を含む ③還元、やや軟質	②灰	底右回転ヘラケズリ 内面一方向ナデ	
第84図-10 PL25	須 恵 瓶	覆 土	肩部～体上半	①白色鉱物を含む ②灰 ③還元、硬質		内外面とも回転利用のナデ 外面肩部に弱い沈痕	肩に自然亀

57号住居跡

図 No 写真図版No	土師種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第86図-1	須 恵 高台瓶	床 面	底6.8 高台のみ残存	①細砂を含む ③還元、硬質	②灰	回転糸切り後付高台周辺部ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

58号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第88図-1	土 師 杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面無調整 底ヘラケズリ 内面ナデ	
第88図-2	土 師 甕	覆 土	口 (18.0) 口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第88図-3	(墳誌) 別 差	カマド	口縁～体上半1/4	①酸化鉄粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ横ナデ 内面ナデ	
第88図-4	土 師 甕		1/4	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ	
第88図-5	土 師 甕	カマド	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第88図-6	土 師 甕	カマド	口縁小破片	①砂粒を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

59号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第90図-1 PL.25	土 師 杯	覆 土	口13.0 高4.5 底7.2 定形	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第90図-2 PL.25	土 師 杯	壁 際	口14.0 高5.7 口縁2/3欠	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底外面に横圧痕
第90図-3 PL.25	土 師 杯	覆 土	口 (13.5) 高5.2 口縁1/2欠	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第90図-4	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第90図-5	土 師 杯	壁 際	口12.5 高3.8 定形	①酸化鉄粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第90図-6 PL.26	土 師 杯	床 面	口13.0 高3.8 定形	①砂粒を含む ②褐～黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-7 PL.26	土 師 杯	壁 際	口11.8 高4.8 1/4欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-8 PL.26	土 師 杯	床 面	口 (11.0) 高4.9 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-9	土 師 杯	床 面	口 (13.0) 高 (5.5) 1/3	①細砂を含む ②にふ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第91図-10 PL.26	土師 杯	壁際	口12.4 高4.3 定形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-11 PL.26	土師 杯	床面	高4.3 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-12	土師 杯	床面	1/4	①砂粒を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-13	土師 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-14 PL.26	土師 高杯	カマド	口12.2 高7.2 脚径8.2	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面ヘラケズリ 脚ヘラケズリ 裾横ナデ	
第91図-15 PL.26	土師 皿	覆土	高9.5 1/2	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	胴部中に円孔を 穿つ
第91図-16	土師 甕	カマド	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②によ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第91図-17	土師 甕	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②によ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第92図-18 PL.26	土師 甕	カマド	口 (22.4) 口縁～体下半1/2	①砂粒やや多 ②浅黄 橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第92図-19 PL.26	土師 甕	カマド	口18.0 高24.5 口縁一部欠	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁外面横ナデ、外面縦ヘラケズリ 内面ヘラケナデ	

61号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 口徑・器高・底径 量 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 成形・整形の特徴	備 考
第93図-1	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第93図-2	土師 甕	覆土	底4.2 底のみ残存	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	体下位ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	

63号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 口徑・器高・底径 量 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 成形・整形の特徴	備 考
第95図-1	(土師) 高台碗	覆土	高台1/2	①白色鉱物若干目立つ ②褐 ③酸化、軟質	付高台	内面黒色処理
第95図-2	須恵 高台碗	覆土	高台1/3	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台	

65号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第98図-1	須 壺 蓋	覆 土	つまみ径5.4 つまみ部のみ残存	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転	
第98図-2	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第98図-3	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ	
第98図-4	土 師 甕	覆 土	口縁一体上位1/4	①細砂を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第98図-5 PL-26	土 師 甕	覆 土	1/4	①細砂を含む ②明焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

66号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第99図-1 PL-26	土 師 甕	覆 土	口縁一体上位1/4	①礫石、カクセン石等 の黒色鉱物若干目立つ ③にふい橙 ③普通	口縁横ナデ 内外面同転利用のナデ 後体下半ヘラケズリ	

67号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第100図-1	土 師 甕	覆 土	口縁一体上半1/4	①細砂を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第100図-2 PL-26	土 師 甕	覆 土	口縁一体上半1/4	①細砂を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	

68号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第101図-1 PL-27	土 師 杯	カマド 左 袖	口 (12.0) 高4.5 口縁2/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	

第104区-2	土 師 杯	カマド	口12.0 高4.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第104区-3 PL.27	土 師 杯	カマド	口11.8 高5.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第104区-4 PL.27	土 師 杯	壁 際	口 (15.2) 高 (5.3) 1/3欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第104区-5 PL.27	土 師 杯	床 面	口14.0 高5.2 口縁一部欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第104区-6 PL.27	土 師 杯	床 面	口13.2 高4.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第104区-7 PL.27	土 師 杯	床 面	口12.8 高4.3 定形	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第104区-8 PL.27	土 師 杯	床 面	口11.2 高4.5 定形	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第104区-9 PL.27	土 師 杯	カマド 左 袖	口17.4 高9.1 口縁-体一部欠	①酸化鉄粒を含む ②にぶい粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第104区-10 PL.27	土 師 甕	覆 土	口21.4 口縁-体上半	①砂粒やや多 ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第104区-11 PL.27	土 師 甕	壁 際	口16.1 高17.8 体一部欠	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第104区-12 PL.27	土 師 甕	床 面	口20.5 高14.4 底4.0 完形	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面横ナデ	

73号住居跡

区 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	注 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第104区-1 PL.26	須 恵 高台杯	覆 土	口14.4 高(5.5) 高台欠	①粗砂若干含む ②明褐 ③酸化、軟質	口クロ左回転 底回転糸切り	

76号住居跡

区 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	注 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第104区-1 PL.26	土 師 甕	覆 土 下 層	口縁-体上半	①粗砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	口縁歪む
第104区-2	土 師 甕	覆 土 下 層	体下位-底	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	体下位縦ヘラケズリ	
第104区-3 PL.26	須 恵 甕	覆 土 下 層	口 (10.6) 1/2 高1.7 底7.4	①砂粒を含む ②明褐 ③酸化、軟質	口クロ右回転 糸切り	

第V章 検出された遺構と遺物

77号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第114図-1	須恵 高台瓶	覆土	1/4	①砂粒を含む ②橙 ③酸化、軟質	底糸切り係付高台	
第114図-2	須恵 高台瓶	覆土	杯底一高台	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底糸切り係付高台	
第114図-3	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラズリ 内面ヘラナデ	
第114図-4	土師 甕	覆土	体下半1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	体外面横ヘラズリ 内面ナデ	

78号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第113図-1 PL.27	土師 杯	覆土	口14.0 高3.8 口縁底一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第113図-2	土師 台付甕	覆土	舞台1/6	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	舞台縦ヘラズリ 内面ナデ 縦横ナデ	
第113図-3	土師 甕	カマド	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラズリ 内面ナデ	
第113図-4	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/6	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラズリ 内面ナデ	

79号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第115図-1 PL.27	須恵 甕	覆土	小破片	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質		
第115図-2	須恵 蓋	覆土	つまみ部1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質		
第115図-3 PL.27	須恵 皿	床 面	口(11.6) 高2.4 底5.0 1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右周転ロクロ整形 底周転糸切り	
第115図-4 PL.27	須恵 皿	床 面	口9.0 高2.5 底4.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底周転糸切り	

第185図-5 PL.27	須志 杯	覆土	口15.6 高4.0 1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転クロロ整形	
第185図-6 PL.27	土師 甕	焚口	口22.0 口縁～体上1/2	①細礫、粗砂若干含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ後ナ デ 内面ナデ	
第185図-7	土師 甕	床面	底(11.0) 体下位～底1/4	①細礫、粗砂若干含む ②赤褐 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	

80号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第186図-1	土師 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第186図-2	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第186図-3	須志 杯	覆土	高4.5 1/4	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底右回転糸切り	
第186図-4	須志 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転利用のナデ整形	

82号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第187図-1	土師 杯	覆土	口(13.2) 高3.5 1/2	①細砂を含む ②にじ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第187図-2	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口唇マミナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ後放射状ヘラミギキ	

83号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第188図-1 PL.27	土師 杯	壁際	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ後放射状ヘラミギキ	
第188図-2 PL.27	土師 杯	壁際	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

84号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 型 形 の 特 徴	備 考
第127図-1 PL.28	須恵 蓋	覆 土	つまみ径5.3 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		
第127図-2	須恵 蓋	覆 土	つまみ径3.4 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		
第127図-3	須恵 蓋	覆 土	1/4	①白色底物を若干含む ②灰 ③還元、硬質		
第127図-4 PL.28	須恵 高台杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底切り難しは未切り りと思われる	
第127図-5 PL.28	土 師 杯	床 面	高3.3 1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第127図-6 PL.28	土 師 杯	床 面	口12.8 高3.5 2/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第127図-7	土 師 杯	床 面	高3.2 2/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第127図-8	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第127図-9	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第127図-10	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第127図-11 PL.28	土 師 罎	カマド	口 (25.0) 口縁一体上半	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	
第127図-12 PL.28	土 師 罎	カマド 左 桶	口 (23.0) 口縁一体上半1/3	①細砂やや多 ②明赤 色 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第127図-13	土 師 罎	床 面	底5.6 体下位～底	①細砂やや多 ②内橙 外黒 ③普通	体下位斜へラケズリ 底へラケズリ 内面ナデ	
第127図-14	土 師 罎	カマド 右 桶	口 (26.0) 口縁一体上位1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	

85号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 型 形 の 特 徴	備 考
第125図-1 (須恵) 羽蓋	須恵 羽蓋	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	紐積み上げ後、ロクロ整形	

第15図-2	須恵 (瓶)	カマド	底小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		
第15図-3	須恵 杯	カマド	1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転	

86号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第15図-1	須恵 杯	床 面	口縁～底小破片	①酸化鉄粒若干含む ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転	
第15図-2 PL.28	須恵 杯	ビッド P ₁	口10.6 高4.0 底6.6 変形	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 底右回転糸切り	
第15図-3 PL.28	須恵 高台碗	覆 土	口 (12.0) 高4.2 口縁1/2欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③酸化	ロクロ右回転 底右回転糸切り後付高台	
第15図-4	須恵 杯	覆 土	口 (12.8) 口縁1/4	①細砂を含む ②褐 ③酸化、軟質		
第15図-5 PL.28	須恵 高台碗	ビッド P ₁	口14.0 高6.5 底8.4 口縁1/3欠	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台 高台内全面ナデ	
第15図-6	須恵 高台碗	ビッド P ₁	口 (16.0) 1/2 高台欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台	
第15図-7 PL.28	須恵 高台碗	覆 土	1/5	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台 高台内全面ナデ	
第15図-8	土 師 高台碗	覆 土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第15図-9 PL.28	灰 輪 段 皿	床 面	1/3	①細砂を含む ②灰 ③普通	ロクロ右回転	見込部に重丸焼痕
第15図-10 PL.28	土 師 甕	カマド	1/5	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横ヘラケズリ 中位縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第15図-11	土 師 甕	床 面	口縁～体小破片	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	体部外面積み上げ 痕
第15図-12	(土師) 甕	床 面	口縁～体小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体内外面回転利用ナデ	
第15図-13	(土師) 甕	床 面	口 (21.0) 口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半ロクロ整形 下半縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第15図-14	(須恵) 羽 釜	床 面	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	ロクロ整形 体中位縦ヘラケズリ	
第15図-15	(須恵) 羽 釜	床 面	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	ロクロ整形	

87号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第182図-1 PL.28	土 師 甕	覆 土	口縁小破片	①細砂やや多 ③普通	口縁横ナデ	外面に積み上げ痕

88号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第180図-1 PL.28	土 師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ②に い ③普通	口縁横ナデ 底外面へラズリ 内面ナデ	
第180図-2 PL.28	須 恵 杯	覆 土	口 (11.0) 高3.2 1/2	①細砂を含む ②赤黒 ③酸化、軟質	底右回転未切り	
第180図-3 PL.28	須 恵 杯	覆 土	口 (10.6) 高5.6 1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底回転未切り	
第180図-4 PL.28	須 恵 高台杯	カマド	口14.0 高6.8 底8.0 完形	①細砂やや多 ②橙 ③酸化、軟質	クロ右回転 付高台 高台内全面ナ デ	
第180図-5 PL.28	灰 釉 高台杯	覆 土	口 (17.0) 高6.0 底8.4 1/2	①細砂を含む ②灰白 ③普通	クロ右回転 高台端は丸味をもつ 輪は口縁のみつけがけ	

89号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第182図-1 PL.29	須 恵 蓋	覆 土	1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転方向不明	
第182図-2	須 恵 高台杯	覆 土	高3.5 小破片	①細砂を含む ②灰白 ③還元、硬質	右回転クロ整形 底回転へラズリ 付高台後周辺ナデ	
第182図-3	須 恵 杯	覆 土	高4.5 1/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底右回転未切り	
第182図-4 PL.29	土 師 杯	覆 土	口 (12.0) 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラズリ 内面ナデ	
第182図-5	土 師 杯	覆 土	高2.9 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラズリ 内面ナデ	
第182図-6	土 師 杯	覆 土	高3.0 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラズリ 内面ナデ	

90号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第D09-1 PL-29	須恵 杯	覆 土	口縁1/3	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転クロコ整形	
第D09-2 PL-29	須恵 杯	覆 土	高(4.5) 1/4	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転クロコ整形 底回転糸切り	
第D09-3	土 師 甌	共 口	体下宇1/4	①粗砂やや多 い橙 ③普通	②にふ 体外面縦ヘラズリ 内面ナデ	
第D09-4	土 師 甌	カマド	口縁～体上半1/5	①粗砂やや多 い橙 ③普通	②にふ 口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ヘラナデ	

94号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第D09-1	須恵 羽蓋	覆 土	口縁～体上半1/5	①砂粒やや多 ②明赤 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラズリ 内面ナデ	

103号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第103-1	(須恵) 杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転クロコ整形	

105号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第105-1	(須恵) 羽蓋	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラズリ 内面ナデ	
第105-2 PL-29	(須恵) 羽蓋	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラズリ 内面ナデ	
第105-3	土 師 甌	覆 土	体下位～底	①粗砂やや多 ②明褐 ③普通	体外面縦ヘラズリ	底面縦圧痕
第105-4	土 師 甌	覆 土	体下位～底	①粗砂やや多 ②明褐 ③普通	体外面縦ヘラズリ	底面縦圧痕

第V章 検出された遺構と遺物

120号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口徑・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第120図-1 PL.29	土 師 杯	床 面	口6.3 高3.9 完形	①細砂を含む ②灰 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第120図-2	土 師 甕	床 面	口縁小破片	①砂粒やや多 ②灰 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第120図-3	土 師 甕	床 面	口縁一休上半1/2	①砂粒を含む ②明焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第120図-4	土 師 甕	床 面	口縁一休上位	①砂粒を含む ②灰 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

129号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口徑・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第129図-1 PL.29	須 恵 杯	壁 際	口12.0 高3.5 底8.9 完形	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底糸切り後手持ちヘラ ケズリ	
第129図-2 PL.29	須 恵 杯	壁 際	口12.0 高4.1 底8.0 口一部欠	①白色底物目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底切り難し不明	
第129図-3	土 師 甕	覆 土	口縁小破片	①細砂やや多 ②灰 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第129図-4	土 師 甕	覆 土	口縁一休上位1/2	①細砂を含む ②にぶ い焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第129図-5	土 師 甕	壁 際	口縁一休上半1/2	①細砂を含む ②明赤 焼 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、下半縦ヘ ラケズリ 内面ナデ	

130号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口徑・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第130図-1 PL.29	須 恵 高台桶	カマド	口15.2 高6.9 底6.2 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形 回転糸切り後付高 白	
第130図-2 PL.29	須 恵 杯	カマド	高4.0 1/4	①細砂を含む ②にぶ い焼 ③酸化、軟質	回転糸切り	
第130図-3 PL.29	土 師 甕	カマド 左 袖	口19.2 口縁一休上位	①酸化鉄粒目立つ ②灰 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

131号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第IS2E-1 PL29	須恵 高台椀	覆土	高4.7 底6.3 口縁1/2欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第IS2E-2 PL29	須恵 皿	覆土	高2.0 1/3	①粗砂やや多 ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第IS2E-3	須恵 杯	覆土	高4.2 小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底切り難し不明	
第IS2E-4	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第IS2E-5	土師 甕	覆土	口縁小破片	①細砂を含む ②橘 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

132号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第IS2E-1	須恵 杯	覆土	高4.2 底6.4 口縁3/4欠	①酸化鉄粒目立つ ②明褐色 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第IS2E-2	土師 杯	覆土	高3.5 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第IS2E-3	須恵 杯	覆土	口13.6 高3.3 底7.6 口一部欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転ヘラケズリ	底部外面に黒書
第IS2E-4	土師 杯	覆土	高3.4 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 内面ナデ	底部内面に黒書
第IS2E-5 PL29	土師 杯	覆土	口(12.7) 高3.0 1/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 内面ナデ	
第IS2E-6 PL29	土師 杯	覆土	口12.4 高3.4 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第IS2E-7 PL29	土師 杯	覆土	口12.7 高3.2 口縁一部欠	①細砂やや多 ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第IS2E-8	土師 台付甕	覆土	口12.4 体一部、台欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上半横、下半斜ヘラケズリ 内面ナデ	体部下半係付着

140号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第150図-1	土 師 甕	覆 土	口縁-体上位1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

141号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第150図-1	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第150図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第150図-3	土 師 甕	覆 土	口縁-体上位1/5	①砂粒やや多 ②赤褐色 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

142号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第150図-1 PL.30	須 恵 蓋	覆 土	径11.0 高1.1 つまみ欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元・硬質	ロクロ左回転整形	
第150図-2 PL.30	土 師 甕	覆 土	高28.5 底5.0 口縁2/3欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	体内面に積み上げ 痕

144号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第150図-1 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第150図-2 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/2強	①砂粒やや多 ②明赤 褐色 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第150図-3 PL.30	土 師 杯	ウマド	1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第123図-4	土師杯	カマド	1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第123図-5	土師杯	カマド	1/4	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第123図-6 PL.30	土師 甕	覆土	口 123.2 口縁～体上位	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半縦ヘ ラケズリ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕

145号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第145図-1 PL.30	土師杯	覆土	口19.0 高6.2 口縁1/3欠	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第145図-2	土師杯	覆土	1/4	①細砂やや多 ②にぶ い肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第145図-3	土師甕	覆土	体下半～底1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	体下半縦で底付近横ヘラケズリ 内面ナデ	

149号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第149図-1	須志 (高台甕)	カマド 左 軸	口16.0	①細砂を含む ②にぶ い肌 ③酸化、軟質	クロ右回転整形 底回転承切り後周 辺ナデ	
第149図-2	須志 杯	ビット P ₁	底1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底回転承切り	

150号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第150図-1	土師杯	覆土	高4.9 1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第150図-2	土師甕	覆土	口縁小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

154号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第154図-1	須恵 蓋	覆土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形	
第154図-2	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

155号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第155図-1 PL30	須恵 高台盤	壁際	口21.4 高4.3 底7.3 口一部欠	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 回転ヘラケズリ後付高台	
第155図-2 PL30	土師 杯	覆土	高3.7 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

156号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第156図-1	須恵 杯	床面	高3.6 1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	左回転クロコ整形 底回転糸切り後周 辺回転ヘラケズリ	
第156図-2	須恵 高台杯	壁際	口14.1 高4.6 口縁1/2欠	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	回転ヘラケズリ後付高台	
第156図-3	須恵 杯	床面	口縁1/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形	
第156図-4 PL30	土師 杯	床面	高(4.2) 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第156図-5 PL30	土師 杯	床面	口12.8 高3.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第156図-6	須恵 蓋	床面	底12.2 休下半～底	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転整形 付高台	自然融かせる
第156図-7	土師 蓋	床面	底9.4 休下半～底	①酸化鉄粒目立つ ②明赤褐色 ③普通	体外面ヘラケズリ後ナデ 底ヘラケズリ 内面ナデ	
第156図-8	土師 甕	床面	口縁～体小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

160号住居跡

区 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第139区-1	土 師 甕	覆 土	体下半～底1/4	①粗砂やや多 ②明赤 釉 ③普通	体外面横ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナテ	

162号住居跡

区 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第139区-1 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナテ 体下半ヘラケズリ 底無調整 内面ナテ	体部外面に墨書
第139区-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナテ 底端以ヘラケズリ 内面ナテ	口縁内部に煤付着
第139区-3	須 志 (空)	覆 土	体下半1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形	

163号住居跡

区 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第139区-1 PL.30	須 志 高台樽	床 面	高5.9 底7.2 口縁1/2欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転糸切り後付 高台周辺部ナテ	
第139区-2 PL.30	土 師 杯	床 面	口13.0 高3.3 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナテ 底外面ヘラケズリ 内面ナテ	
第139区-3	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナテ 底外面ヘラケズリ 内面ナテ	

164号住居跡

区 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第139区-1 PL.30	須 志 杯	床 面	高4.0 底6.0 1/2	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第139区-2 PL.30	土 師 杯	貯蔵穴 壁 際	口13.6 高2.8 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナテ 底外面ヘラケズリ 内面ナテ	

第V章 検出された遺構と遺物

第152区-3 PL.30	土師 杯	壁 障	高3.4 1/2	①細砂を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第152区-4	土師 杯	覆 土	1/2	①細砂を含む ②砂 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第152区-5	土師 杯	床 面	1/3	①細砂を含む ②にぶ い殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第152区-6	土師 甕	壁 障	口縁～体上位1/5	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	口縁積み上げ前

165号住居跡

区 No 写真図取No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第165区-1 PL.30	須 志 高台碗	覆 土	口14.2 高5.9 底6.6 2/3	①白色大粒砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロロ右回転 底回転糸切り 付高台周辺部ナデ	
第165区-2 PL.30	須 志 杯	覆 土	口13.2 高3.9 底6.8 口縁1/3欠	①大粒黒色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロロ右回転 底回転糸切り	内面に重ね焼き痕
第165区-3	土 師 甕	焚 口	1/4	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第165区-4	土 師 甕	焚 口	1/4	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	第165区-3と同一 の可能性

166号住居跡

区 No 写真図取No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第166区-1	土 師 杯	覆 土	1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第166区-2 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ	
第166区-3	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面無調整	
第166区-4	土 師 甕	床 面	小破片	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	底部に指頭痕
第166区-5	須 志 高台杯	壁 障	底8.8 下半～高台	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第166区-6	須 志 蓋	覆 土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロロ左回転	

167号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第167図-1	土 師 杯	覆 土	高(3.3) 1/4	①砂粒を含む ②にぶ い肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-2	土 師 杯	覆 土	1/5	①砂粒を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-3	土 師 杯	床 面	高3.6 1/5	①細砂を含む ②肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-4	土 師 杯	床 面	高4.5 約1/3	①細砂を含む ②にぶ い肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-5	土 師 杯	床 面	1/4	①砂粒を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-6	土 師 杯	覆 土	口(12.0) 高3.6 約1/3	①砂粒を含む ②にぶ い肌 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-7	土 師 小形甕	覆 土	1/4	①酸化鉄粒目立つ ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第167図-8	土 師 甕	壁 際	口縁～体上半1/4	①砂粒を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデナデ	

168号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第168図-1	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第168図-2	土 師 杯	覆 土	高3.0 小破片	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

169号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第169図-1 PL31	土 師 甕	床 面	口18.0 高30.6 底6.0 口一部欠	①砂粒ややち多 ②にぶ い黄粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 下位横ヘラケズリ 内面ナデ	体積み上7版 底木製板
第169図-2	土 師 甕	床 面	口縁～体上位1/2	①酸化鉄粒目立つ ②にぶい肌 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第Ⅲ図-3 PL.31	土師 甕	床面	口縁～体上半1/4	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第Ⅲ図-4 PL.31	土師 甕	床面	口21.4 高22.4 底9.5 口一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ後縦ヘラミガキ	底部積み上げ底
第Ⅲ図-5	手捏お 土器	覆土	高4.9 底5.0 上半1/2欠	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通		

171号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第Ⅲ図-1 PL.31	須恵 高台杯	床面	高4.3 約1/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロロ石回転 底回転ヘラケズリ後付 高台周辺部ナデ	
第Ⅲ図-2 PL.31	須恵 高台杯	床面	高4.4 底11.2 口縁1/2欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロロ石回転 底回転ヘラケズリ後付 高台周辺部ナデ	
第Ⅲ図-3 PL.31	土師 杯	床面	口12.4 高3.4 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

174号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第Ⅲ図-1 PL.31	須恵 高台杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ後付高台	
第Ⅲ図-2	土師 杯	灰口	高3.7 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第Ⅲ図-3	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	底外面ヘラケズリ	底部内面に煤付着
第Ⅲ図-4	土師 甕	床面	口縁～体上位1/5	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

175号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第Ⅲ図-1 PL.31	土師 杯	灰口	口12.8 高4.1 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第198図-2	土師杯	底面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第198図-3	土師甕	底面	口縁1/4破片	①砂粒やや多 ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面積ヘラケズリ 内面ナデ	口縁積み上げ底

176号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第200図-1	土師杯	覆土	口15.2 高3.1 約1/2	①細砂を含む ②に い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第200図-2 PL31	土師杯	覆土	口12.8 高3.6 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第200図-3	土師甕	覆土	口縁一体上位1/2	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面積ヘラケズリ 内面ナデ	
第200図-4	土師甕	覆土	口縁一体上半1/2	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘ ラケズリ 内面ヘラナデ	
第200図-5	土師甕	覆土	口縁～底1/2	①細砂やや多 ②橙 ③普通	体中位斜、下位横ヘラケズリ 内面ヘラナデ	体部内面積み上げ 底

178号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第202図-1	須恵杯	覆土	高4.3 約1/3	①細砂を含む ②に い橙 ③酸化、軟質	クロコ左回転整形 底回転糸切り	
第202図-2 (土師) 高台椀	覆土	覆土	口10.4 高3.8 底6.0 完形	①細砂を含む ②に い橙 ③酸化、軟質	クロコ右回転整形 付高台周辺ナデ	内面黒色処理
第202図-3 PL31	須恵高台椀	覆土	口15.0 高8.3 底8.4 口一部欠	①細砂を含む ②に い橙 ③酸化、軟質	クロコ右回転整形 付高台長全体ナデ	
第202図-4	土師杯	覆土	高3.1 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底ヘラケズリ 内面ナデ	
第202図-5	須恵皿	カマド	高1.5 底6.0 約1/4	①砂粒を含む ②褐 ③酸化、軟質	回転糸切り	
第202図-6 PL31	須恵皿	竈口	口8.2 高1.7 底5.4 完形	①砂粒やや多 ②橙 ③酸化、軟質	クロコ左回転整形 底回転糸切り	
第202図-7 PL31	土師甕	覆土	口13.0 高13.8 底5.2 完形	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半斜ヘ ラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

179号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第362図-1	須恵 壺	覆土	体1/3	①細砂を含む ②灰 ③普通	縁積み上げ後 回転利用のナデ整形	

181号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第362図-1 PL.31	須恵 杯	覆土	口12.4 高4.0 底6.5 口一部欠	①粗砂を含む ②灰場 ③還元、硬質	クロコ右回転? 底回転糸切り	
第362図-2 PL.31	須恵 杯	覆土	口13.2 高4.1 底6.5 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転整形 底回転糸切り	内面に横付者
第362図-3	土師 甕	覆土	口縁~体上位1/3	①細砂を含む ②場 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

182号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第362図-1 PL.31	土師 杯	覆土	口16.0 高3.4 口縁1/2欠	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第362図-2	土師 杯	床面	口縁1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体外面無調整	

183号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第363図-1 PL.31	須恵 蓋	床面	口16.7 高2.5 2/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ左回転? 断面三角形の小規模 なかえりがつく	
第363図-2	土師 杯	床面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第363図-3	土師 甕	覆土	口縁~体上位1/4	①砂粒を含む ②明赤 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第363図-4 PL.31	土師 甕	覆土	口縁~体上位1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁2段の横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

184号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第200図-1	須 恵 蓋	ピット P ₂	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	天井部は低く比較的平坦 口唇は丸味をもつ	
第200図-2	土 師 器	カマド	口縁一休上半1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

185号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 装 形 の 特 徴	備 考
第210図-1	須 恵 蓋	覆 土	高4.5 1/6	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ装形	
第210図-2 PL.32	須 恵 杯	床 面	口13.7 高3.9 底9.2 完形	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底回転糸切り後周辺へ ラケズリ	
第210図-3 PL.32	須 恵 杯	覆 土	口11.0 高3.1 底6.8 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底回転糸切り無調整	
第210図-4 PL.32	須 恵 杯	覆 土	口12.3 高3.6 底8.2 口一部欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底回転糸切り後周辺へ ラケズリ	
第210図-5 PL.32	須 恵 高台杯	カマド	口14.2 高4.4 底16.2 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底回転へラケズリ後付 高台	
第210図-6 PL.32	須 恵 杯	床 面	1/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ左回転 底糸切り後周辺へラケ ズリ	
第210図-7 PL.32	須 恵 盃	床 面	口8.0 高1.9 底5.0 1/2	①砂粒を含む ②明赤 陶 ③酸化、軟質	クロコ右回転 底回転糸切り	
第210図-8 PL.32	土 師 杯	覆 土	口12.2 高3.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第210図-9	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第210図-10 PL.32	土 師 杯	覆 土	1/2弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第210図-11 PL.32	土 師 杯	覆 土	高3.2 1/2	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第210図-12 PL.32	土 師 杯	カマド	1/3	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第210図-13 PL.32	土 師 杯	覆 土	口12.4 高3.3 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第V章 輸出された遺構と遺物

第218回-14 PL32	土 師 杯	覆 土	口12.6 高3.5 口縁1/2欠	①細砂やや多 い赤褐色 ③普通	②にぶ い	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体外面無調整	
第218回-15	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ③普通	②粗 い	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体外面無調整	
第218回-16 PL32	土 師 杯	カマド	口11.8 高3.1 底一部欠	①細砂を含む ③普通	②粗 い	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体下平無調整	
第218回-17 PL32	土 師 杯	埴 際	口12.6 高2.9 口縁一部欠	①細砂を含む い赤褐色 ③普通	②にぶ い	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第218回-18	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ③普通	②粗 い	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ後放射状へツミガキ	
第218回-19 PL32	土 師 杯	覆 土	口縁1/4	①細砂を含む ③普通	②粗 い	口縁横ナデ 内面ナデ後放射状へツミガキ	
第218回-20 PL32	土 師 杯	覆 土	口14.0 高4.9 口縁一部欠	①細砂を含む ③普通	②淡黄 褐色	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	底部内面明書 「器」か?
第218回-21	土 師 杯	覆 土	底のみ残存	①細砂を含む い赤褐色 ③普通	②にぶ い	底外面へラケズリ 内面ナデ	底外面墨書 「弁」
第218回-22	須 恵 高台橋	覆 土	底のみ残存	①砂粒を含む ③還元、硬質	②灰 色	付高台橋全体にナデ	底部内面明書
第218回-23	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/2	①細砂を含む ③普通	②明赤 褐色	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜へ ラケズリ 内面ナデ	
第218回-24 PL32	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ③普通	②明赤 褐色	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜へ ラケズリ 内面ナデ	
第218回-25 PL32	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/3	①砂粒やや多 ③普通	②赤褐 色	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜へ ラケズリ 内面ナデ	口縁積み上げ痕
第218回-26 PL32	土 師 甕	埴 際	口18.2 高32.1 底7.0 完形	①砂粒を含む ③普通	②明赤 褐色	口縁横ナデ 体外面上位横、下半斜へ ラケズリ 底へラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ痕
第218回-27 PL32	須 恵 橋 坂	覆 土	口縁～体下位	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質			体部内外面に叩き 目

186号住居跡

団 体 写真図版No	土 師 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第218回-1	須 恵 高台橋	覆 土	底6.8 1/3 (口縁欠)	①白色粗砂目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底面転系切り後付 高台周辺ナデ	
第218回-2	須 恵 高台橋	覆 土	底7.7 口縁欠	①黒色粗砂目立つ ②灰、③還元、硬質	ロクロ右回転 底面転系切り後付高台 周辺ナデ	

187号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第28図-1	須恵 杯	壁 際	高3.6 1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底回転ヘラケズリ	
第28図-2 PL33	須恵 皿	覆 土	口8.5 高1.7 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	クロコ左回転 底回転糸切り	

188号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第28図-1 PL33	須恵 蓋	床 面	口17.2 高4.5 1/2割	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転方向不明 かえりは断面三角形状	
第28図-2	土 師 杯	壁 際	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 体外面無調整	
第28図-3	土 師 杯	ピット P ₂	小破片	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体下位無調整	
第28図-4 PL33	土 師 杯	壁 際	口12.6 高3.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底部地成後穿孔
第28図-5	土 師 杯	床 面	高(2.5) 口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ	口縁に僅付着
第28図-6	土 師 蓋	床 面	口縁小破片	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上位横ヘラケズリ	

189号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第28図-1	土 師 蓋	覆 土	口縁小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上位横ヘラケズリ	

190号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第28図-1	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

193A号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第22図-1	須 恵 杯	カマド	高(6.2) 1/4	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③酸化、軟質	右回転クロコ整形	高台がつくか?
第22図-2	須 恵 皿	カマド 右 袖	径9.0 高1.5 1/2強	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	右回転クロコ整形 底回転糸切り	
第22図-3	土 師 甕	カマド	口縁一体上1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第22図-4	土 師 甕	カマド	口縁一体上1/4	①砂粒やや多 ②暗赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

194号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第25図-1	須 恵 高台椀	ビッド F ₁	底7.2 高台のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③酸化、軟質	底右回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第25図-2	土 師 甕	床 面	口縁一体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第25図-3	土 師 甕	覆 土	口縁一体上位小片	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ	

195・196号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第28図-1	須 恵 高台杯	覆 土	高3.5 小破片	①砂粒やや多 ②灰 ③普通	回転ヘラケズリ後付高台 高台端は外 側に平坦面をもつ	
第28図-2 PL33	土 師 杯	カマド	径13.0 高3.2 2/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第28図-3	土 師 杯	床 面	高2.9 1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第28図-4	土 師 甕	覆 土	2/3	①細砂やや多 ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第28図-5	土 師 甕	カマド 左 袖	口 (22.0) 口縁一体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	

第228図-6	土師器 覆土	土器	口縁～体上位1/2	①細砂を含む ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第228図-7	土師器 台付甕	床面	体下半のみ残存	①細砂を含む ②泥 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 底内面ヘラナデ	

198号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技法 成形・整形の特徴	備考
第229図-1 PL.33	須恵 高合杯	覆土	高6.9 1/3部	①細砂を含む ②赤灰 ③還元、硬質	右回転クロロ整形付高台 口縁外面に1本の沈線を通らす	
第229図-2	土師器 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②泥 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第229図-3	土師器 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②にぶい赤灰 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第229図-4	土師器 台付甕	覆土	体下位1/3	①砂粒やや多 ②にぶい赤灰 ③普通	体外面縦、斜ヘラケズリ 内面ナデ 脚台接合部横ナデ	体部外面に残存着

199号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技法 成形・整形の特徴	備考
第229図-1 PL.33	須恵 高合杯	覆土	高6.2 1/4	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	左回転クロロ整形か	
第229図-2	(須恵) 羽蓋	覆土	口縁～体上半1/5	①細砂を含む ②にぶい灰褐 ③普通	径積み上げ後クロロ整形 体外面下半 に縦ヘラケズリ	体部凹下積み上げ 痕
第229図-3 PL.33	手捏ね 土器	覆土	高4.0 1/2	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通		

200号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技法 成形・整形の特徴	備考
第229図-1 PL.33	須恵 高合杯	床面	口4.0 高6.0 底6.4 口一部欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転クロロ整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	胎土分析資料

第V章 検出された遺構と遺物

第22図-2 PL.33	須 志 杯	覆 土	高3.6 底6.5 口縁2/3欠	①細砂を含む ②灰褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り後周 辺回転ヘラケズリ調整	
第22図-3 PL.33	須 志 杯	床 面	口14.6 高4.9 底6.0 口一部欠	①全部母含む ②灰 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-4	須 志 杯	床 面	口15.4 高4.6 底6.0 2/3	①全部母含む ②灰 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-5 PL.33	須 志 皿	床 面	口8.8 高2.7 底4.9 口一部欠	①細砂を含む ②褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-6 PL.33	須 志 皿	床 面	口9.0 高2.2 底4.5 口一部欠	①細砂を含む ②褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-7 PL.33	須 志 皿	床 面	口9.6 高2.0 底3.9 口1/4欠	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-8 PL.33	須 志 皿	床 面	口8.6 高2.6 底4.6 定形	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-9 PL.33	須 志 皿	床 面	口8.8 高2.1 底4.9 定形	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転承切り	
第22図-10	(須志) 羽蓋	覆 土	口縁-体上半1/5	①砂粒を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラナデ 内面ナデ	体部外面積み上げ 痕
第22図-11 PL.33	(須志) 羽蓋	覆 土 上 層	口 (26.0) 口縁-体1/2底欠	①粗砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ 踵は一部で消える	口縁穿孔2ヶ所
第22図-12	(須志) 羽蓋	覆 土	口縁-体上位1/5	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	体部外面集積層
第22図-13	(須志) 羽蓋	覆 土	口縁-体上半1/2	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	両部横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第22図-14	土 師 窯	床 面	口縁-体上半小片	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第22図-15	土 師 窯	覆 土	体下半1/2～底	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	体外面縦、下位横ヘラケズリ 内面ナデ	

201号住居跡

図 No 写真図取No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	注 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第22図-1	須志 高白陶	床 面	下半小破片	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形	

204号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第28図-1 PL34	土 師 甕	壁 際	口27.0 高29.1 底9.0 3/4	①粗砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位無調整、中位 縦、下位横ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ筋

205号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第29図-1	須 恵 高合瓶	覆 土	高4.6 底6.4 口縁大部分欠	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③酸化、軟質	付高台周辺ナデ	器面剥離
第29図-2	須 恵 (高合瓶)	覆 土	高台のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質		
第29図-3	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第29図-4	須 恵 甕	オマド	体下半～底	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	体下位ヘラナデ 底外面周辺部ヘラケ ズリ	外面に叩き目痕

209号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第30図-1 PL34	須 恵 杯	覆 土	高4.4 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 回転糸切り	

210号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第30図-1 PL33	須 恵 杯	床 面	口13.0 高5.9 底4.0 1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第30図-2 PL33	須 恵 杯	床 面	高3.4 底6.0 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第30図-3 PL33	須 恵 杯	覆 土	口12.8 高3.8 底5.4 完形	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	

第V章 検出された遺構と遺物

第202区-4	須志杯	覆土	口12.2 高4.0 底6.0 口一部欠	①砂粒を含む ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-5	須志杯	覆土	口12.8 高3.7 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	粘土分析資料
第202区-6 PL.33	須志杯	覆土	口12.8 高4.0 底6.0 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-7	須志皿	覆土	高2.6 1/4	①砂粒を含む ②陶灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-8	須志皿	覆土	高2.4 1/4	①砂粒を含む ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-9 PL.33	土師杯	覆土	高(3.3) 1/4	①砂粒を含む ②澄 ③普通	口縁横ナデ 真無調整	
第202区-10 PL.33	須志高台碗	覆土	高5.2 底7.1 口縁1/2欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	
第202区-11	須志高台碗	覆土	高5.9 口縁1/4 底1/2	①砂粒を含む ②陶 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	粘土分析資料
第202区-12	土師杯	床面	口縁1/4	①細砂を含む ②澄 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ	
第202区-13	須志高台碗	覆土	底(7.0) 口縁欠1/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③泥元、硬質	回転糸切り後付高台周辺ナデ	粘土分析資料
第202区-14 PL.33	須志長頸瓶	覆土	口12.4 口縁のみ残存	①粗砂を含む ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形	

211号住居跡

図 No 写真図表No	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 残存状態	量	①粘土 ②色調 ③焼成	注 成形・整形の特徴	備考
第202区-1 PL.34	須志杯	覆土	口12.9 高4.3 底6.0 口縁1/3欠		①細砂を含む ②明褐色 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-2	須志高台碗	床面	口縁小破片		①白色砂粒目立つ ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ整形形	
第202区-3 PL.34	須志高台碗	覆土	1/3		①砂粒やや多 ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り後付 高台	
第202区-4 PL.34	須志皿	覆土	高2.0 底6.0 口縁1/3欠		①白色砂粒目立つ ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-5 PL.34	須志皿	床面	口12.9 高3.0 底6.2 口縁2/3		①砂粒を含む ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	
第202区-6 PL.34	須志皿	覆土	高2.3 1/4		①砂粒を含む ②灰 ③泥元、硬質	ロクロ右回転整形形 底回転糸切り	

第262図-7	土師杯	床面	高3.6 1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第262図-8 PL34	土師杯	覆土	高(3.3) 1/4	①細砂を含む ②にぶ い砂 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ	
第262図-9	土師甕	床面	口縁～体上位1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデ	
第262図-10	土師甕	覆土	口縁～体上位1/5	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第262図-11	土師甕	覆土	口縁～体上位1/5	①細砂やや多 ②明赤 色 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第262図-12	須恵壺	覆土	肩～上半小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転利用のナデ調整	肩に自然傷

212号住居跡

図 No 写真図版No	土師器 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	找 法 成形・整形の特徴	備 考
第267図-1 PL34	須恵杯	張り出し	口13.2 高3.5 底7.8 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺回転へラケズリ	
第267図-2	須恵杯	覆土	口14.0 高4.0 底9.0 1/2	①黒色砂粒目立つ ②灰 ③還元 硬質	クロロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺手持ちへラケズリ	
第267図-3	須恵杯	覆土	高3.5 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺へラケズリ	
第267図-4 PL34	須恵杯	張り出し	口13.5 高3.8 底8.2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロロ右回転整形 底回転へラケズリ	
第267図-5	須恵杯	覆土	高3.5 底6.3 口縁大部分欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺へラケズリ	
第267図-6 PL34	須恵高台杯	覆土	高5.4 底7.3 口縁1/2	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロロ左回転整形 付高台周辺ナデ	
第267図-7	土師杯	覆土	高2.8 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	底部外面に墨書
第267図-8	土師杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第267図-9	土師杯	覆土	高(3.0) 1/2	①細砂を含む ②にぶ い砂 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第267図-10	土師杯	覆土	高(3.2) 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第267図-11	土師杯	覆土	高3.2 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第267図-12	土師杯	カマド	高3.0 1/2	①細砂を含む ②にぶ い赤泥 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第268図-13 PL34	土師杯 覆土	土	口径2.4 高3.2 底一部欠	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第268図-14 PL34	土師杯 覆土	土	1/2	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第268図-15	土師杯 覆土	土	小破片	①細砂を含む ②粒 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面放射状ヘラミ ガキ	
第268図-16	土師杯 覆土	土	底小破片	①細砂を含む ②粒 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面ナデ	内外面磨子目彫線
第268図-17	土師杯 覆土	土	小破片	①細砂を含む ②粒 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面放射状ヘラミ ガキ	
第268図-18	土師 覆	カマド 右袖	口縁一体上半1/2	①酸化鉄粒目立つ ②明赤帯 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ直
第268図-19	土師 覆	カマド 右袖	口縁一体上半1/2	①細砂やや多 ②にぶ い粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 斜ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ直
第268図-20	土師 覆	カマド	口縁一体上半1/4	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第268図-21	土師 覆	床面	口縁一体上半1/4	①砂粒やや多 ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜 ヘラケズリ 内面ヘラケズリとナデ	
第268図-22	土師 覆	張り 出し	体下半	①細砂を含む ②赤帯 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第268図-23	土師 台付覆	床面	体下位～舞台1/3	①細砂を含む ②粒 ③普通	体外面ヘラケズリ 内面ナデ 舞台横ナデ	
第268図-24	土師 台付覆	覆土	舞台のみ残存	①細砂を含む ②赤帯 ③普通	舞台横ナデ	
第268図-25	須 磨	覆土	小破片	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	付高台 ロクロ回転方向不明	

213号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第1図版-1	土師 台付覆	覆土	舞台のみ残存	①細砂を含む ②場 ③普通	舞台部横ナデ	

214号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第268図-1 PL34	須 高台覆	覆土	口径3.4 高5.5 底6.1 口一部欠	①砂粒を含む ②灰帯 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	

第250図-2	墳志 高台機	壁 際	底3.8 口縁欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転整形 底回転未切り後付 高台周辺ナデ	
第250図-3 PL34	土師 杯	覆 土	口12.0 高4.5 底7.0	①砂粒やや多 ②澄 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第250図-4 PL34	土師 甕	覆 土	口縁-体上半1/2	①細砂を含む ②にぶ い澄 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位部、中位部へ ラケズリ 内面へラナデとナデ	口縁積み上げ痕

215号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 形 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第251図-1	墳志 杯	覆 土	高3.8 小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転未切り	
第251図-2 PL34	墳志 高台機	床 面	1/4 (口縁欠)	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底付高台周辺ナデ	
第251図-3	墳志 杯	覆 土	高4.8 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形 底回転未切り	
第251図-4 PL34	土師 杯	壁 際	口12.4 高3.1 口縁一部欠	①細砂を含む ②澄 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第251図-5 PL34	土師 杯	覆 土	口 (17.0) 1/2割	①細砂を含む ②にぶ い濁 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第251図-6	土師 甕	壁 際	口26.4 高28.5 体上半一部欠	①酸化鉄粒目立つ ②明赤濁 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位部、中位部へ ラケズリ 内面へラナデ、ナデ	口縁積み上げ痕
第251図-7 PL34	土師 甕	床 面	口縁-体上位1/5	①砂粒やや多 ②明赤 濁 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第251図-8	墳志 杯	覆 土	底小破片	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質		内外面に墨書
第251図-9 PL34	土師 台付甕	カマド 袖 部	脚台のみ残存	①細砂、酸化鉄粒目立 つ ②澄 ③普通	縦横ナデ	

216号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 形 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第252図-1	墳志 杯	覆 土	高3.4 約1/3	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形 底回転未切り後へ ラケズリ調整	
第252図-2	墳志 杯	床 面	底部小破片	①砂粒を含む ②灰黄 ③還元、硬質	底部へラケズリ	底部外面に墨書 「田」
第252図-3	土師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い澄 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	口縁部外面に墨書

第V章 検出された遺構と遺物

第250図-4	土師杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②にぶ い灰粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第250図-5	土師甕	床面	口21.2 口縁～体上半	①砂粒やや多 い粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-6	土師甕	床面	口縁～体上位	①細砂やや多 ②赤黒 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-7 PL35	土師甕	覆土	口19.8 口縁～体下半	①細砂を含む ②明赤 黒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半斜ヘラケズリ	
第250図-8	土師甕	覆土	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-9	土師台付甕	床面	脚台のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い粒 ③普通	裾横ナデ 体内面ヘラナデ	
第250図-10 PL35	須恵長頸瓶	覆土	口9.0 口縁のみ残存	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	頸部下位に尖蓋を施らす 口唇は上方につまみ上げ	口縁内面自然輪 頸部積み上げ痕

217号住居跡

図 No 写真図版No	土器種類 器形	出土位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③地成	找 法 成形・整形の特徴	備 考
第250図-1	須恵蓋	床面	高2.5 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	つまみは平坦 小さな突起状のかえりをつける	
第250図-2	土師杯	床面	1/4	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-3 PL35	土師杯	覆土	1/3	①砂粒を含む ②にぶ い粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-4	土師杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-5 PL35	土師杯	床面	1/2	①砂粒を含む ②明赤 黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ後放射状ヘラミガキ	
第250図-6 PL35	土師杯	壁際	口12.0 高3.1 口縁1/3欠	①細砂を含む ②黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第250図-7 PL35	土師杯	床面	口16.4 高5.8 1/2強	①細砂を含む ②粒 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-8	土師甕	カマド右袖	口縁～体上半1/4	①細砂やや多 ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横ヘラケズリ 下位縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-9 PL35	土師甕	カマド左袖	口(24.0) 口縁～体下位1/2	①細砂やや多 ②粒 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下縦ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	体部積み上げ痕
第250図-10	土師甕	カマド	口縁欠	①砂粒やや多 ②黒 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第250図-11 PL35	土師台付甕	カマド	脚径12.4 上半欠	①細砂を含む ②粒 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ 脚台上位ヘラケズリ 裾横ナデ	

第220図-12 PL.35	土 師 合付炭	クマド	口径13.3 上半欠	①細砂やや多 い層 ③普通	②にふ 体外面斜縦ヘラケズリ 内面ナデ 髷台横ナデ	
-------------------	------------	-----	---------------	------------------	------------------------------------	--

219号住居跡

図 No 写真図記号	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第220図-1 PL.35	須 志 杯	壁 際	口13.6 高4.0 底7.5 口一部欠	①細砂を含む ③還元、硬質	②灰 クロロ右回転整形 底回転糸切り	
第220図-2	須 志 高台碗	床 面	底7.4 口縁欠	①細砂を含む ③還元、硬質	②灰 付高古 底全面ナデ	
第220図-3	灰 輪 高台碗	床 面	高5.1 底8.4 口縁大部分欠	①細砂を含む 灰白 ③良好	②素地 口縁は弱く外反 体部下半は膨らむ 高台端は丸味をもつ 輪つけかけ	

220号住居跡

図 No 写真図記号	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第220図-1 PL.35	須 志 杯	覆 土	口19.4 高3.5 底5.2 完形	①砂粒を含む ③還元、硬質	②灰 クロロ右回転整形 底回転糸切り	
第220図-2 PL.35	須 志 杯	覆 土	口11.4 高4.4 底6.0 完形	①細砂を含む ②にふ い層 ③還元、普通	②灰 クロロ右回転整形 底回転糸切り	
第220図-3	須 志 高台碗	クマド	口15.0 口縁1/2、高台欠	①細砂やや多 ③酸化、軟質	②橙 クロロ右回転整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	
第220図-4	須 志 高台碗	覆 土	高4.7 小破片	①細砂を含む ②にふ い層 ③酸化、軟質	②灰 付高古周辺ナデ	
第220図-5 PL.35	須 志 高台碗	覆 土	1/4	①細砂を含む ②にふ い黄橙 ③酸化、軟質	②灰 付高古周辺ナデ	第220図-4と同一 の可能性あり
第220図-6 PL.35	灰 輪 小 瓶	覆 土	底5.0 口縁欠	①細砂を含む ③良好	②素地 右回転クロロ整形 底回転糸切り 輪つけかけ	
第220図-7 PL.35	(須志) 羽 釜	覆 土	口縁～体下位2/3	①細砂を含む い層 ③普通	②にふ 口縁横ナデ 体外面上半ナデ下半縦ヘ ラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ直
第220図-8 PL.35	(須志) 羽 釜	覆 土	口縁～体上位1/4	①細砂やや多 ③普通	②黄橙 口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

223号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第33図-1 PL.36	須 志 椀	壁 際	口径5.5 高6.2 底5.5 ロー部欠	①砂粒やや多 ②焼 ③酸化気味、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第33図-2 PL.36	須 志 高台椀	壁 際	口径10.2 高5.0 底6.8 ロー部欠	①砂粒を含む ②によ い煙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底糸切り後付高台 高台周辺ナデ	
第33図-3	須 志 高台椀	覆 土	下半小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台	
第33図-4 PL.36	(須志) 羽 蓋	壁 際	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	回転利用のナデ調整	
第33図-5	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①酸化鉄粒やや目立つ ②煙 ③酸化、軟質	回転利用のナデ調整 体下半斜ヘラズリ	
第33図-6	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位小片	①砂粒を含む ②灰質 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラナデ	口縁積み上げ痕

224号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第33図-1	須 志 高台椀	覆 土	高5.3 1/5	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台	
第33図-2	土 師 甕	覆 土	下半1/3	①細砂を含む ②焼 ③普通	体下半縦ヘラズリ 内面ナデ	

225号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第33図-1	須 志 杯	覆 土	高3.8 1/2割	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第33図-2 PL.36	灰 輪 高台椀	覆 土	高4.5 底8.4 1/2	①細砂を含む ②灰質 ③還元、硬質	付高台周辺ナデ	
第33図-3 PL.36	須 志 (高台椀)	覆 土	底6.2 口縁欠	①細砂を含む ②灰質 ③還元、硬質	付高台後全周ナデ	
第33図-4 PL.36	(須志) 羽 蓋	覆 土	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラズリ 内面ナデ	

226号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第226図-1 PL.36	(土師) 高台樽	覆 土	高5.6 底6.6 口縁大部分欠	①細砂を含む ②にぶ い焼 ③酸化、硬質	ロクロ整形後内面横ヘラミガキ 付高台周辺ナデ	内面黒色処理
第226図-2 PL.36	須 恵 高台樽	覆 土	高5.6 口縁、高台1/2欠	①砂粒やや多 ②にぶ い焼 ③酸化、軟質	付高台 高台内全面ナデ	
第226図-3 PL.36	須 恵 皿	壁 際	口9.2 高2.9 底4.9 口一部欠	①金雲母含む ②にぶ い焼 ③酸化、軟質	底回転ヘラ切り無調整	
第226図-4 PL.36	須 恵 皿	笑 口	口9.0 高2.1 底5.0 完形	①細砂を含む ②にぶ い焼 ③酸化、軟質	底回転ヘラ切り無調整	
第226図-5 PL.36	土 師 甕	貯蔵穴	下半1/3	①粗砂やや多 ②にぶ い焼 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第226図-6	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/3	①粗砂やや多 ②黒 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面横ヘラナデ	

230号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第230図-1	須 恵 蓋	覆 土	小破片	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	わずかにかえりをつける	
第230図-2 PL.36	須 恵 蓋	床 面	つまみ、天井部	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	扁平な宝珠状つまみをつける	
第230図-3 PL.36	土 師 杯	覆 土	高4.6 口縁2/3欠	①細砂を含む ②焼 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第230図-4	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②焼 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第230図-5	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②焼 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第230図-6 PL.36	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜ヘラケズリ 内面ナデ	

231号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第231図-1	(須恵) 羽 蓋	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②焼 ③普通	口縁横ナデ	

232号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第232図-1 PL.36	須 志 高台輪	ヒット P ₂	口14.3 高5.1 底6.2 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転車切り後付 高台周辺ナデ	
第232図-2	須 志 高台輪	床 面	底6.6 下半一高台	①砂粒やや多 ②黒灰 ③還元、硬質	底回転車切り後付高台周辺ナデ	

233号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第233図-1 PL.36	須 志 蓋	床 面	1/5	①粗砂を若干含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形	
第233図-2 PL.36	須 志 高台杯	覆 土	高4.3 底10.4 口縁大部分欠	①砂粒多く含む ②灰 ③還元	底回転ヘラケズリ後付高台	
第233図-3 PL.36	須 志 杯	覆 土	口14.2 高3.9 底10.0 口一部欠	①黒色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ	
第233図-4	須 志 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ	
第233図-5	土 師 杯	覆 土	1/3	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通	口縁ナデ 底外面ヘラケズリ 内面放射状ヘラミダキ	
第233図-6 PL.36	土 師 杯	床 面	口15.0 高3.4 口縁一部欠	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第233図-7 PL.36	土 師 罎	カマド	口縁一休上半1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第233図-8	土 師 罎	カマド 抽 部	口縁一休上半	①細砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第233図-9	土 師 罎	カマド	下半1/4	①細砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ 底ヘラナデ	

235住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第235図-1 PL.37	土 師 杯	床 面	口13.6 高4.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第235図-2 PL.37	土 師 杯	床 面	口11.6 高4.6 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第226図-3	土師杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
---------	-----	----	-----	-------------------------	------------------------	--

236号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技法 成形・整形の特徴	備考
第226図-1	土師台付甕	覆土	舞台部上位小破片	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	斜ハケメを施す	S字状口縁台付甕 と思われる

237号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種類 器形	出土位置	法量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技法 成形・整形の特徴	備考
第226図-1	須恵蓋	覆土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロ右回転整形	
第226図-2 PL.37	須恵高台杯	床面	口13.0 高4.8 底9.6 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロ右回転整形 底回転高切り後へ ラ調整、付高台	外面ひだすき擦痕
第226図-3 PL.37	須恵杯	床面	口14.0 高3.4 底8.4 完形	①粗砂若干含む ②灰 馬 ③還元、硬質	クロ右回転整形 底回転ヘラケズリ	
第226図-4	須恵杯	床面	高3.7 底9.4 口縁3/4欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロ右回転整形 底回転ヘラケズリ	
第226図-5 PL.37	須恵杯	床面	口15.0 高3.5 底8.8 口縁2/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	クロ左回転整形 底回転ヘラケズリ	
第226図-6	須恵杯	床面	高3.7 底9.6 口縁3/4欠	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	クロ右回転整形 底回転ヘラケズリ	
第226図-7 PL.37	土師杯	床面	口13.0 高3.6 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第226図-8	土師杯	覆土	高3.4 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第226図-9 PL.37	土師杯	床面	口13.4 高3.6 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第226図-10 PL.37	土師杯	床面	口12.4 高3.4 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第226図-11	土師杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第226図-12 PL.37	須恵杯	覆土	高3.5 1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ	

第V章 検出された遺構と遺物

第303図-13 PL.37	土師 甕	覆土	口縁～体下位1/3	①細砂やや多 ②普通	②橙 口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第302図-14	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い陶 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕
第303図-15	土師 甕	覆土	口縁～体上半1/2	①細砂やや多 ②明赤 陶 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横 中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第303図-16	土師 甕	覆土	体下位～底	①細砂やや多 ②普通	②橙 体外面斜ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	

239号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 形 器	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第356図-1 PL.37	須恵 杯	床 面	口14.2 高4.0 底9.5 ロ一部欠	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	ログロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺回転ヘラケズリ	内外面ひたすき標 痕

240号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 形 器	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第378図-1	土師 杯	覆土	口 (13.0) 高3.2 2/3割	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第378図-2	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第378図-3	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②にぶ い陶 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

241号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 形 器	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第289図-1	須恵 高台輪	覆土	底7.8 高台のみ残存	①砂粒を含む ②にぶ い陶 ③酸化、軟質	回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第289図-2	須恵 (高台輪)	覆土	下半(高台欠)	①細砂を含む ②にぶ い陶 ③酸化、軟質	付高台	器面荒れる
第289図-3 PL.37	土師 甕	床 面	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②にぶ い陶 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第289図-4	土師 釜	床 面	口縁小破片	①細砂を含む ②にぶ い陶 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

242号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第242図-1 PL.37	須 志 杯	カマド	口13.9 高3.5 底11.0 ロ一部欠	①細砂を含む ②灰褐 ③酸化気味、硬質	ロクロ右回転整形 底回転ヘラケズリ	
第242図-2 PL.37	土 師 杯	灰 面	口18.4 高5.3 口縁2/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第242図-3	土 師 杯	カマド	高5.5 1/3	①細砂を含む ②にふ い馬 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第242図-4 PL.37	土 師 杯	カマド	口14.0 高3.7 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	

243号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第243図-1	須 志 杯	覆 土	高3.3 1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③酸化、軟質	底回転糸切り	
第243図-2	須 志 杯	覆 土	高4.2 1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転糸切り	
第243図-3	灰 輪 (高台碗)	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②他灰 オリブ ③良好	右回転ロクロ整形 輪はけかけ	
第243図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①砂粒を含む ②にふ い赤馬 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第243図-5 PL.37	土 師 甕	覆 土	口20.8 口縁～体上半	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体上位横、中位斜ヘラケ ズリ 内面ヘラナデ	
第243図-6	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にふ い馬 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	体外面横付着 口縁積み上げ痕

247号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第247図-1	須 志 皿	覆 土	高2.2 1/4	①粗砂粒若干含む ②灰 ③還元、硬質		
第247図-2 PL.37	須 志 皿	覆 土	高2.3 底6.6 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第247図-3	須 志 高台碗	覆 土	下半1/2	①粗砂若干含む ②灰 ③還元、硬質	付高台周辺ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第298図-4 PL37	須恵 高台橋	覆土	口13.3 高5.5 底7.4 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ 灰 ③還元、硬質	② ロクロ右回転整形 底回転系切り接付 高台	
第298図-5	須恵 高台橋	覆土	底7.6 高台のみ残存	①細砂を含む ②明赤 陶 ③酸化、軟質	底回転系切り接付高台	
第298図-6 PL37	土師 杯	床面	1/2部	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

248号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第298図-1	須恵 蓋	覆土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	小規模なかえりをつける	
第298図-2	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

249号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第298図-1	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第298図-2	土師 杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第298図-3	須恵 杯	覆土	底6.0 下半2/3	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第298図-4	土師 甕	覆土	口縁一休上平	①砂粒を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

250号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第298図-1	須恵 高台橋	覆土	口12.7 高4.7 底6.6 口縁1/4欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転系切り接付高台周辺ナデ	口縁直む
第298図-2	須恵 高台橋	覆土	口縁1/4	①砂粒を含む ②灰濁 ③酸化気味、硬質		

252号住居跡

区 No. 写真図取No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第300区-1	土 師 杯	床 面	口縁1/4	①砂粒やや多 い殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	内外面縦付着 灯明皿か
第300区-2	土 師 甕	覆 土	口縁一体上位小片	①細砂やや多 い ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラズリ 内面ナデ	
第300区-3	土 師 甕	床 面	口縁一体上位小片	①細砂を含む い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラズリ 内面ナデ	

253号住居跡

区 No. 写真図取No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第300区-1	須 恵 杯	床 面	高2.9 小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元・硬質	回転方向、切り難し不明	
第300区-2	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②にぶ い殻 ③酸化・軟質	口縁外面に1本の沈線が廻る 内面同心円状ヘラミダキ	内面黒色処理
第300区-3	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第300区-4	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第300区-5 PL38	土 師 杯	床 面	口13.2 高4.0 完形	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ 体部無調整	
第300区-6	土 師 杯	貯蔵穴 床 面	口13.0 高3.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ 体部無調整	
第300区-7	土 師 杯	床 面	小破片	①細砂を含む ②殻 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラズリ 内面ナデ	
第300区-8	土 師 甕	床 面	口縁一体上半1/4	①金雲母含む い殻 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜ヘラズリ 内面ヘラナデ	口縁積み上げ底
第300区-9 PL38	土 師 甕	貯蔵穴 床 面	口21.6 口縁一体上半	①細砂やや多 い ②明赤 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜 ヘラズリ 内面ヘラナデ	

254号住居跡

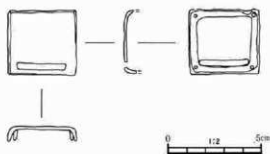
区 No. 写真図取No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第300区-1	土 師 甕	覆 土	底5.2 胴下半～底	①大粒砂粒を含む ②灰褐 ③やや不良	外面縦ヘラズリ 内面ナデ	底面は二次的地成 を受け器面刺彫

255号住居跡

図 No 写真図No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第306図-1 PL38	土 師 高 杯	覆 土	口14.2 高10.6 杯、脚各1/2残存	①細砂を含む ②にぶ い色 ③普通	杯内外面ヘラミダキ 脚外面ヘラミダ キ 内面ナデ 履横ナデ 杯、脚の接 合部粘土埋填	赤色土彩（脚内面 除く） 脚中に 径1.5cmの円孔4 ヶ所穿つ
第306図-2	土 師 甕	覆 土	口17.8 高22.8 底5.3 口縁1/2欠 体1/3欠	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	紐積み上げ後口縁横ナデ 頸斜ハケメ 体外面上半～下半斜ハケメ、下半～底 近く縦ハケメ 内面横ハケメ	体部外面扉付着
第306図-3 PL38	土 師 甕	床 面	口18.4 口縁～体上半1/3	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	紐積み上げ後口縁横ナデ 頸、体外面 斜ハケメ 内面、口縁～体横ハケメ	ハケメ工具2種類 使用
第306図-4 PL38	土 師 台付甕	床 面	底10.7 体下半～脚台	①砂粒を含む ②粒 ③普通	体外面横ハケメ 脚外面まばらに斜ハ ケメ 内面横ハケメ、ナデ	脚底折り返し S字状口縁台付甕
第306図-5 PL38	土 師 壇	覆 土	口(10.4)高(9.8) 口縁1/3	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体上半無調整体下半ヘラ ケズリ 底ナデ、内面ナデ	底部内面指頭痕
第306図-6 PL38	土 師 壇	覆 土	口縁欠	①砂粒やや多 ②にぶ い色 ③普通	体外面ナデ	
第306図-7 PL38	土 師 小形鉢	覆 土	高6.4 底5.2 口縁1/2	①酸化鉄粒目立つ ②にぶい赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体、底ナデ 内面ヘラナデ	

銅器具 (第305図、PL.39)

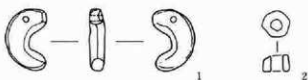
185号住居跡の床面上より還方が1点出土している。長さ3.67cm、幅3.35cm、高さ0.81cmを測る。下端に長さ2.64cm、幅0.37cmの長方形の透かし穴があげられている。裏面の四隅には裏金具をとめるための釘が4本鑄出されている。材質は全面に緑青が発生している事から銅あるいは銅合金である事は間違いないが、表面に漆の痕跡が全く見られない事からすれば青銅製の可能性が考えられる。



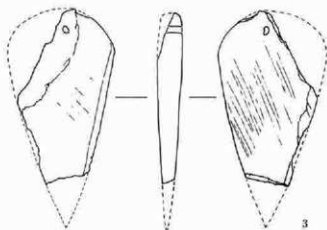
第305図 住居跡出土銅器具

玉類と滑石製模造品 (第306図)

1は143号住居跡出土の石製勾玉である。「C」字形を呈する小形品で、長さ1.60cm、厚さ0.43cmを測る。頭部の穿孔は両側面からあげられており、孔径2mmを測る厚さは全体に均等である。頭部背面部分をやや薄く仕上げているが、これは穿孔を容易にするためかと思われる。全面に研磨を施し、光沢をもつ。研磨によって背と腹部は丸味をもち、両側面は平坦に仕上げられている。石材は硬質で、緑色の斑文を有するものを用いている。



2は51号住居跡出土の白玉である。直径6.9mm、厚さ5.2mmを測る。孔はほぼ中央に穿たれており、孔径は2.7mmを測る。側面には縦方向の研磨痕、孔内面には穿孔時のものと思われる横方向の擦痕が認められる。なお側面形が整った方形でなく台形状を呈するのは、未製品段階での調整が不十分であったか、あるいは管玉状のものを幾等分かに打割る事によって製作したためと思われる。石材は黒灰色を呈する滑石である。



第306図 住居跡出土玉類・滑石製模造品

3は剣形の滑石製模造品で、77号住居跡より出土している。長さ4.6cm、幅2.4cm程を測るが一方の側辺と剣先部が欠失するため、全体形状、大きさについては不明。基部付近に径2.1mmの孔を穿つ。穿孔方向は不明

である。形状は基部が丸味を帯び、剣先に向かってしだいにすままるものと思われる。又表裏両面は平坦で剣先部に向かって薄くなる傾向がみられる。なお側辺部は錆を意識したような弱い稜をつくり出している。表裏面、側面とも研磨によって仕上げられており、斜方向の擦痕が明瞭に残る。石材は灰緑色を呈しており、滑石あるいは緑泥片岩を使用した可能性がある。

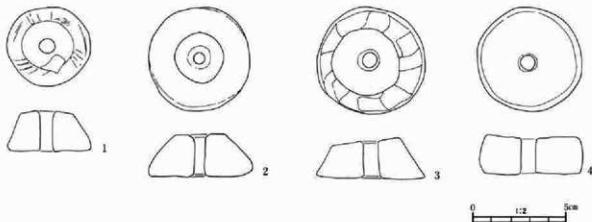
紡錘車 (第307図, PL.39)

1は49号住居跡出土の滑石製の紡錘車である。平面形はほぼ円形で、側面は丸味を持つ台形状を呈する。大きさは上面径2.85cm、下面径3.80×3.60cm、高さ1.40cmを測る。上面の一部を欠くが、擦痕や磨減痕が他の部位と同様に残っている事からそのまま使用されたと思われる。重量は56.1gを測る。又紡錘を差し込む孔はほぼ中央部に穿たれる。孔基は上面部で8.3mm、中位で7.8mm、下面部で8.3mmを測る。内面には回転穿孔の擦痕が残る。整形時のものと思われる横方向の擦痕、又放射状の磨減痕が残る。なお下面縁辺部はかなり磨耗しており光沢を帯びている。

2は68号住居跡出土の土製紡錘車である。平面は円形で、側面は丸味を持つ台形状を呈する。大きさは上面径2.90×2.63cm、下面径5.55×5.49cm、高さ2.37cmを測る。重量は64.4gを測る。中央孔はほぼ垂直に穿たれ、孔口部分が上下両面とも剝離している。孔径は上面部5.9mm、下面部6.3mm、中位で6.0mmを測る。下面縁辺部はヘラケズリで小平坦面をつくり出しており、この一部は使用によると思われる磨減が激しい。胎土には酸化鉄粒を含む小砂粒を多く含む。焼成はやや還元気味である。

3は150号住居跡出土の土製紡錘車である。平面はやや角の立つ円形で、側面は整った台形を呈する。大きさは上面径3.60cm、下面径5.77×5.62cm、高さ2.19cmを測る。重さは268.2gを測る。中央孔は中心よりややずれて穿たれる。孔径は上面で11mm、下面で8.6mm、中位で7.6mmを測る。下面孔口部の剝離が激しい事から上面から下面にかけて穿孔した可能性がある。全体にヘラケズリによって整形し、その後粗いヘラミガキを加えている。胎土は黒色、白色の小鉱物を主とする砂粒を含む。焼成は酸化気味で、一部に黒斑あり。

4は216号住居跡出土の土製紡錘車である。他の截頭円錐形と異なり、背の低い樽形を呈する。上面径5.07cm、下面径4.90cm、中位の最大径5.66cmを測る。高さは縁辺部が1.96cm、中央部で1.91cmを測る。重量は77.1gである。中央孔は中心よりややずれて穿たれる。孔径は上面で9.1mm、下面で10.3mm、中位で8.8mmを測る。側面及び側縁部は磨減が激しい。胎土は白色針状物質を多く含む。焼成は還元質である。厚手の須恵器片を再利用した可能性がある。



第307図 住居跡出土紡錘車

土製円板 (第308図、PL.39)

いずれも土器の一部を再利用したものである。なお7、8は中央を穿孔しており「はづみ車」としての使用も推察される。1～5は79号住居跡、6は144号住居跡、7は64号住居跡、8は168号住居跡出土である。

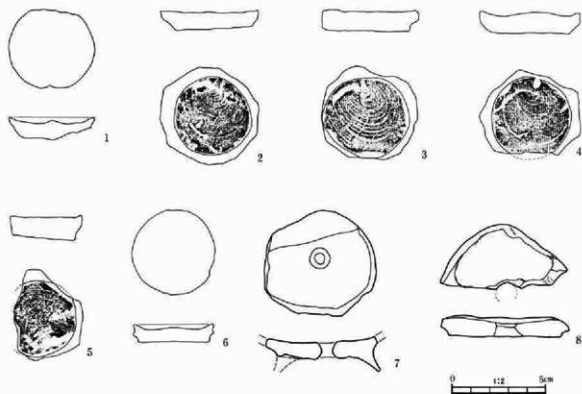
1は須恵器蓋のつまみを利用したもので径4.51cm、厚さ1.07cmを測る。端部の一部を欠く。全体に縁辺部が磨減している。胎土に長石の小砂粒を含む。十分な還元がなされず軟質である。

2～5はいずれも土師器皿(あるいは杯)の底部を利用したものである。周辺部を打ち欠くか折る等により成形し、調整は施されない。大きさは2が径5.52cm、厚さ0.96cm、3が径5.15cm、厚さ1.14cm、4が径5.40cm、厚さ1.04cm、5は径(残存部で)4.72cm、厚さ1.23cmを測る。底面にはいずれも右回転糸切痕が残る。底面及び周縁部が磨減している。

6は須恵器蓋のつまみを利用している。大きさは径4.33cm、厚さ0.90cmを測る。縁辺部が磨減している。胎土には黒色小鉱物を含む。十分な還元がなされず、軟質である。

7は高台付椀の高台部を利用したもので、高台の約1/2を欠く。残存部の径5.80cmを測る。中央の円孔は両面から回転穿孔されている。孔口径は9.4mm、中位は5.8mmを測る。全体に磨減している。胎土は比較的金メが細かく金雲母を含む。色調は淡黄褐色を呈し、酸化焼成されている。

8は杯底部破片を利用し、約1/2を欠く。直径は推定で6～7cmのものと思われる。中央部で円孔を両面から回転穿孔する。底面に糸切痕が残る。胎土には小砂粒を多く含む、焼成は酸化気味である。



第308図 住居跡出土土製円板

磁石 (第309・310図、PL.40)

第309図-1は17、18、19号住居跡のいずれかの覆土から出土したものである。平面はほぼ長方形で、側面

第V章 検出された遺構と遺物



第309図 住居跡出土礎石(1)

は外反する形状を呈する。大きさは長さ8.34cm、幅2.60~2.41cm、厚さ1.92~1.29cmを測る。全面を使用している事から完形品と思われる。下面には製作時の打削痕が残る。石材は目の細かい青灰色を呈する凝灰岩を使用する。ほぼ全体が磨耗しており、一部に擦痕が残る。本遺跡出土土石の中では最小の部類であり、当初から小形品として製作されたか、あるいは使用するにつれ小さくなったものと思われる。

第309図-2は78号住居跡出土の上部破片である。おそらく長方形を呈すると思われ、中央部に一ヶ所円孔が穿たれる。幅4.38cm、厚さ2.30cmを測る。孔径は5.5mmである。穿孔は凹痕によると思われる。石材は黄灰色を呈する凝灰岩で表面がやや黒味を帯びる。欠損部以外は全面を使用しており、一部に斜方向の浅い擦痕が残る。円孔がある事からここに紐等を結び、携帯用あるいは住居内等に吊しておいたものであろう。

第309図-3は162号住居跡出土の小片である。大きさは長さ3.93cm、幅2.99cmを測る。裏面に打削痕あるいは折損痕が残る。石材は目の細かい灰白色凝灰岩である。表面の一部のみ使用しており、おそらく部分的な研ぎに使われたのであろう。

第309図-4は79号住居跡出土で、上半が楕円形状、下半が台形状を呈する。長さは13.25cm、幅4.07~3.90cm、厚さ3.44~1.69cmを測る。上端は製作時の打削痕あるいは使用時の折損痕が残る。下面は製作時の細かい調整がなされ、ほぼ平坦になっている。表裏両面及び両側面とも使用されており、表裏面が外反し、側面が内湾するのは研ぎ方の相違によるものだろう。石材は青灰色の目の細かい凝灰岩である。

第309図-5は85号住居跡から出土した破片である。平面は台形状、側面は一方に湾曲する形状を呈する。長さは8.49cm、幅5.65~4.20cm、厚さ2.07~1.99cmを測る。上面は製作時の打削痕が残る。なお下半は折損したと思われる。石材は黄灰色を呈する目の細かい凝灰岩である。表裏両面、両側面が使用される。側面に鋭い削痕が残る。

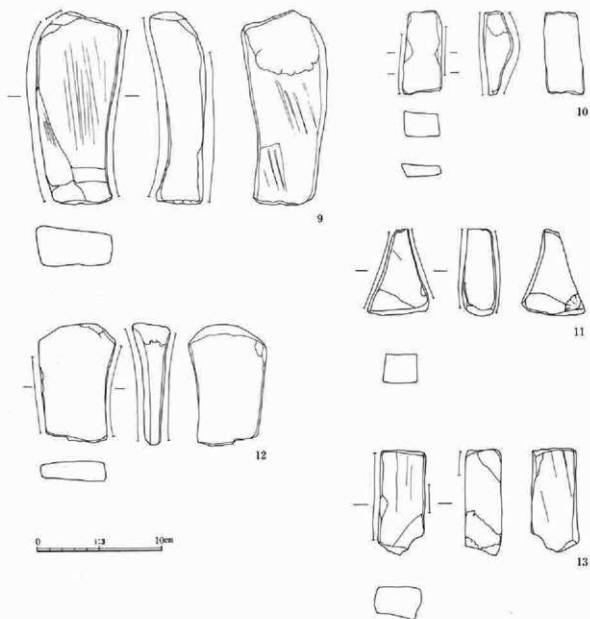
第309図-6は130号住居跡から出土しており、下半部を欠く破片である。表裏、両側面とも弱く外反しており、中央部がかなり細くなる。長さは10.80cm、幅6.40~3.90cm、厚さ5.39~4.08cmを測る。上面は製作時の細部調整がなされ平坦面をなす。下半は使用時の折損と思われる。石材は赤城山系の安山岩を使用し、やや目が短い。表裏面及び両側面とも使用されている。なお上端部に赤色の顔料と思われる物質が付着する。

第309図-7は131号住居跡から出土している。平面は長方形に近いが、側面形は著しく内湾し、中央部が薄くなっている。長さは10.4cm、幅4.94~3.04cm、厚さ3.38~1.18cmを測る。上面、下面は製作時の細部調整がなされ、平坦面をなす。表裏面及び両側面とも使用されているが、使用頻度は表面が最も高いようである。又裏面の下位で欠損と思われる部分があるが、ここに鋭い削痕が認められる。石材は青灰色の目の細かい凝灰岩である。

第309図-8は183号住居跡から出土している。ほぼ直方体を呈し、長さ3.48cm、幅3.88cm、厚さ2.08~1.88cmを測る。上面は折損あるいは製作時の打削と思われ、細調整がなされ平坦面をなす。下面は約1/2が剥離するがこの部分も使用している。石材は灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。上面を除いて他面は使用されている。

第310図-9は164号住居跡から出土している。平面は長方形形状を呈し、側面形は一方に湾曲している。大きさは長さ15.26cm、幅6.61~4.78cm、厚さ3.53~2.51cmを測る。上下両面は打削したままである。石材は灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。表面は縦方向の鋭い削痕がみられるが、鎌用に使われた可能性が高い。裏面は縦方向の削られたような痕跡が残っており、刀子状の鉄器を研いだものかと思われる。

第310図-10は208号住居跡から出土している。平面は長方形で、側面形は表面上部が膨らむ形状を呈する。長さは6.65cm、幅3.02~2.40cm、厚さ2.22~0.80cmを測る。両側面はあまり使用されておらず、製作時



第310図 住居跡出土磁石(2)

と思われる削痕が残る。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。表裏両面を使用しており、特に表面は上半と下半に分けて使用したようである。なお上下両端は折損している。

第310図-11は220号住居跡出土の欠損破片である。両側面が極端に外反する。大きさは長さ6.98cm、幅は4.94-1.18cm、厚さ2.53-1.84cmを測る。下面は製作時の調整痕が残るが、やや使用された磨減痕が残る。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。側面の湾曲から録用に使用されたものだろう。

第310図-12は220号住居跡出土の欠損品である。平面は上部が丸味をもつ長方形で側面は表面が外反する形状で中央部が薄くなる。下半は欠損する。長さ9.54cm、幅6.18-4.88cm、厚さ3.10-1.03cmを測る。上面は製作時の調整痕が残り、この部分に数条の鋭い削痕が走る。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。表面と右側面はよく使用されているが、他面は磨耗が少ない。

第310図-13は255号住居跡出土である。ほぼ直方体を呈する。長さ8.08cm、幅3.59~3.55cm、厚さ2.80~2.64cmを測る。上面及び表裏両面に整形時のものと思われる削り痕が残る。石材は灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。右側面が多用され、他面はさほど使用されなかったようである。

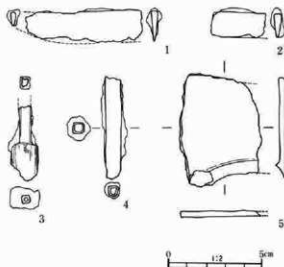
鉄製品 (第311図、PL.39)

1、2は143号住居跡出土の刀子である。鋒と凹部を欠く刀身破片である。1は長さ6.06cm、幅1.67cm、棟厚3.8mmを測る。2は長さ2.80cm、幅1.25cm、棟厚4.2mmを測る。いずれも錆化が進んでおり、原形の復元は困難である。

3は161号住居跡出土で、鉄鎌と思われる。茎付近の破片で矢柄の木質部が錆化して残存する。幅6mm、厚さ5mm、木質部幅13.6mm、厚さ11.0mmを測る。茎を矢柄に差し込んでいる。

4は166号住居跡出土で、鉄鎌と思われる。長さは5.14cm、幅6.9mm、厚さ5.6mmを測る。錆化が進んでいる。

5は199号住居跡出土のもので、上下両辺が内湾、左側辺が外湾する。断面は板状を呈し、下辺に「-」形の刃部のような形をつくり出している。他の縁辺は「コ」字状を呈する。裏面は平坦である。右半分は欠損する。長さ5.76~5.45cm、幅4.30cm以上、厚さ5.3mmを測る。全形状及び用途は不明である。



第311図 住居跡出土鉄製品

土 錘 (第312図、PL.41)

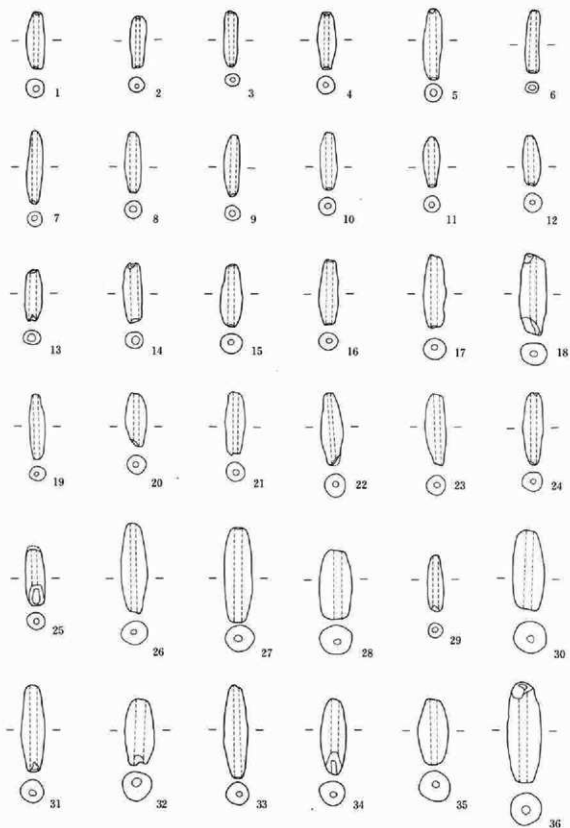
すべて小形の紡錘形を呈する。平安時代のものが大部分で、他は鬼高期1点、奈良時代1点であった。

土錘一覧表

No	出土位置	法 量 (cm, g)			備 考
		長 寸	最大径	重量	
1	7号住	3.18	1.04	3.5	平安。
2	10号住	3.00	0.95	2.3	時期不明。
3	10号住	3.10	0.73	1.7	時期不明。
4	11号住	3.20	0.98	2.8	古墳時代後。
5	77号住	3.87	1.09	4.4	平安。
6	79号住	3.53	0.84	2.9	平安。
7	80号住	4.10	0.89	3.2	平安。
8	80号住	3.45	1.11	3.9	平安。
9	80号住	3.56	0.93	3.0	平安。
10	80号住	3.21	1.03	3.6	平安。
11	80号住	2.82	1.04	2.8	平安。
12	80号住	2.96	1.12	3.4	平安。
13	87号住	2.78	0.85	2.1	端部一部欠。平安。
14	87号住	3.29	0.98	2.6	端部一部欠。平安。
15	149号住	3.48	1.20	4.8	平安。
16	185号住	4.03	1.26	6.3	平安。
17	185号住	3.54	1.10	4.0	平安。
18	189号住	4.56	1.44	8.8	両端部欠。平安。

No	出土位置	法 量 (cm, g)			備 考
		長 寸	最大径	重量	
19	196号住	3.50	0.79	2.3	奈良。
20	204号住	2.92	1.16	3.5	端部一部欠。平安。
21	204号住	3.38	1.05	3.8	平安。
22	204号住	3.77	1.18	4.7	平安。
23	204号住	3.81	1.10	4.6	平安。
24	204号住	3.88	1.05	4.0	平安。
25	204号住	3.10	1.08	2.9	両端部欠。平安。
26	210号住	4.84	1.34	7.3	平安。
27	211号住	5.01	1.58	11.7	端部一部欠。平安？
28	211号住	3.73	1.67	12.1	平安？
29	211号住	2.98	0.81	2.1	平安？
30	213号住	4.44	1.88	15.6	平安？
31	213号住	4.88	1.36	7.1	平安？
32	214号住	3.76	1.62	8.5	端部一部欠。平安。
33	216号住	5.16	1.40	9.0	平安。
34	223号住	4.28	1.48	8.6	平安。
35	241号住	3.62	1.70	9.2	平安。
36	243号住	5.57	1.68	16.2	端部一部欠。平安。

第V章 検出された遺構と遺物

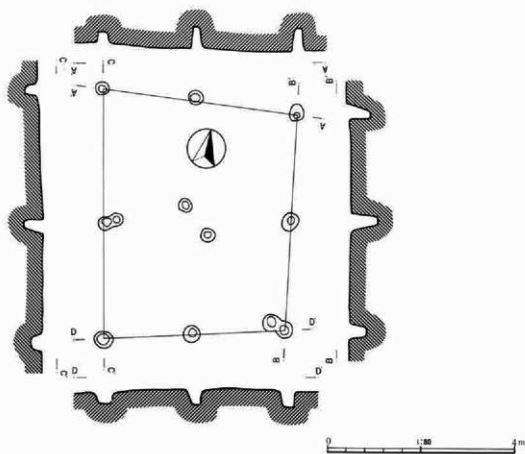


第312図 住居跡出土土鐘

3 掘立柱建築遺構

1号掘立柱建築遺構 (第313図、PL.12)

III区D-2グリッド付近にある2間(4.5~5.2m)×2間(4.0m)のやや南北に長い歪んだ方形建物である。つまり北辺と南辺は長さは同一であるが、東辺に比して西辺が0.7m長く、右形状を呈す。柱間寸法は、北辺、南辺は2.0m(7尺)等間、東辺は2.25m(7.5尺)、西辺は2.6m(8.5尺)等間である。柱穴の掘形は径30cmの円形を呈し、深さは10~30cmを測る。総柱建物の可能性もある。主軸方向はN-10°-Wを指す。

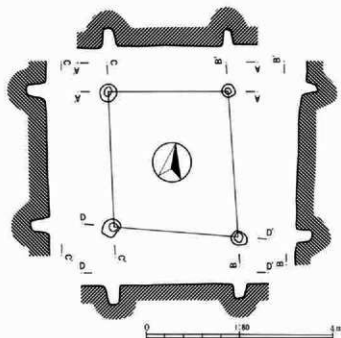


第313図 1号掘立柱建築遺構

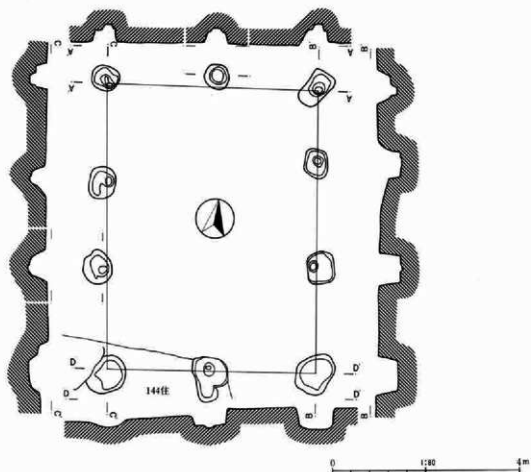
2号掘立柱建築遺構 (欠番)

3号掘立柱建築遺構 (第314図、PL.12)

III区E-2グリッド付近に位置しており、1間(2.4~3.0m)×1間(2.5m)の歪んだ方形建物である。柱間寸法は、東辺が2.4m(8尺)、西辺が3.0m(10尺)、北辺と南辺が2.5m(8尺)である。柱穴の掘形は、径30cm程の円形を呈し、深さは20cmを測る。主軸方向はN-12°-Wを指す。



第314図 3号掘立柱建築遺構



第315図 6号掘立柱建築遺構

重複遺構は79号住居跡、80号住居跡で、いずれも新田関係は不明であった。なお1号掘立柱建築遺構とは主軸方向をほぼ同一にして隣接するが、これが1棟の建物を構成するのか、あるいは別個の建物かは明らかにしえなかった。柱穴からの出土遺物はなく時期は不明である。

4号・5号掘立柱建築遺構（早川河川改修地域調査分）

6号掘立柱建築遺構（第315図、PL 12）

Ⅲ区H-19・20グリッド付近にある3間（6.0m）×2間（4.5m）の南北

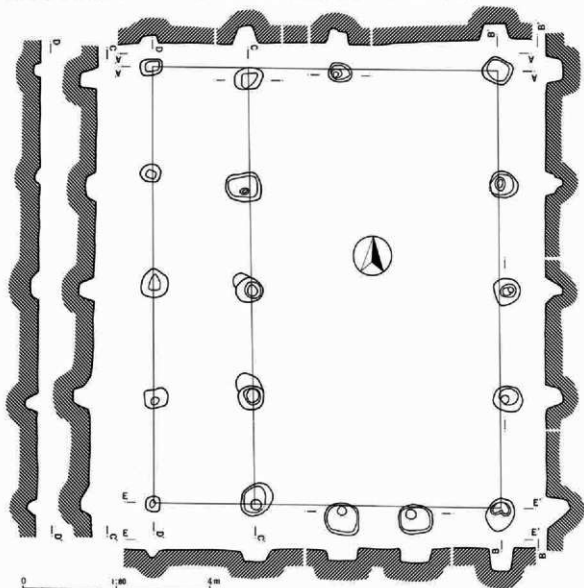
棟建物である。柱間寸法は桁行は2m（7尺）梁行は2.5m（8.5尺）等間であるが、桁行西面の柱位置は不規則である。柱穴の掘形は径60cm、深さ20cmで平面形は長方形、不整形など不揃いである。掘形内には径20cmほどの柱痕のみられるものもある。主軸方向はN-10°-Wである。

重複遺構は144号住居跡、5号井戸跡で、判明した新旧関係は144号住→6号掘立であった。

出土遺物はなく時期は不明である。

7号掘立柱建築遺構（第316図、PL.12）

Ⅲ区E-20・21、F-20・21・22グリッドにある4間（9.2m）×4間（7.5m）の南北棟建物であり、西面に廂がつく。柱間寸法は桁行は2.3m（7.5尺）等間、梁行は、身舎部分は1.8m（6尺）等間、廂の出は2.1m（7尺）である。柱穴の掘形は身舎部分は径60～80cm深さ20～40cm、径30～60cm、深さ20cmであって既して不整形である。廂の柱穴掘形は、径20～30cm、深さ25cmほどであって、身舎部より小規模である。身舎部では大部分の柱穴掘形内に20cmほどの柱痕跡がみられる。主軸方向はN-3°-Wである。



第316図 7号掘立柱建築遺構

重複遺構は9号溝で、新田関係は不明であった。

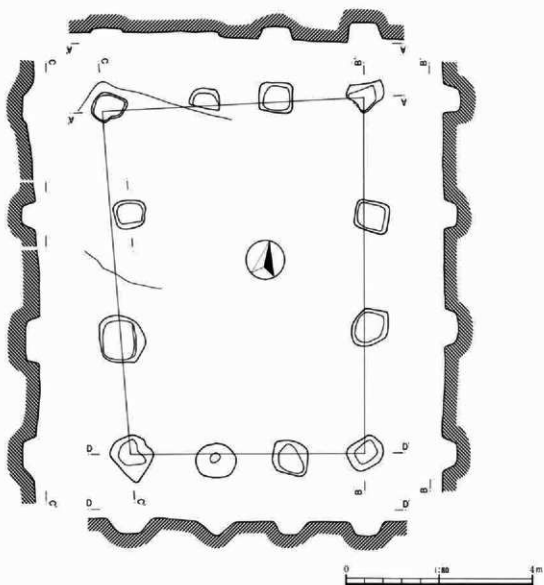
時期は平安時代と思われる。

8号掘立柱建築遺構 (第317図、PL.12)

Ⅲ区G・H-15・16・17グリッドにある3間(7.2m)×3間(4.8-5.4m)の南北棟建物である。桁行は両辺とも長さと同じであるが、梁行は南辺が北辺よりも0.6m短いため建物の平面形は台形状を呈する。柱間寸法は桁行は2.4m(8尺)等間、梁行は北辺が1.8m(6尺)等間、南辺が1.6m($\frac{16}{3}$ 尺)等間である。柱穴の掘形は不整形形状であって、径60-90cm、深さ20cm程である。主軸方向はN-10°-Wを指す。

重複遺構は140号、141号、142号、146号住居跡で、確認された新田関係は140号住→8号掘立であった。

出土遺物はなく、時期は不明である。



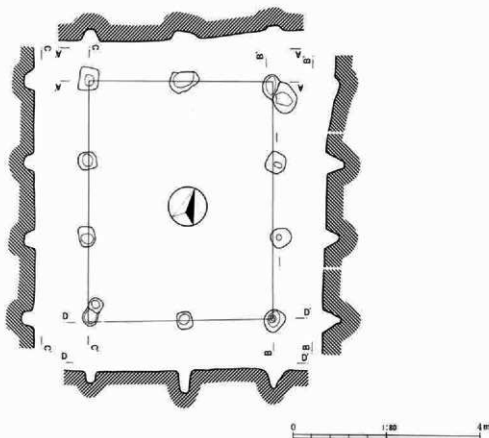
第317図 8号掘立柱建築遺構

10号掘立柱建築遺構 (第318図、PL.12)

IV区B-10、C-10グリッドにある3間(5.1m)×2間(3.9m)の南北棟建物である。柱間寸法は桁行が1.7m($\frac{17}{10}$ 尺)等間、梁行が1.95m($\frac{13}{6}$ 尺)等間である。柱穴の掘形は不整形を呈し、径40cm深さ20cmを測る。主軸方向はN-23°-Wを指す。

重複遺構は226号住居跡、75号土壌で、新旧関係は不明であった。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第318図 10号掘立柱建築遺構

11A号・11B号掘立柱建築遺構 (第319図、PL.12)

IV区C-11・12グリッドにある3間×2間の南北棟建物である。建替えと考えられ、内側(小規模)のものを11A号、外側(大規模)のものを11B号と呼びわける。

11A号掘立は3間(6.0m)×2間(4.2m)である。柱間寸法は桁行が2.0m($\frac{20}{10}$ 尺)等間、梁行が約2.1m(7尺)等間である。柱穴掘形は不整形を呈し、径40~50cm、深さ20~40cmである。主軸方向はN-20°-Wを示す。

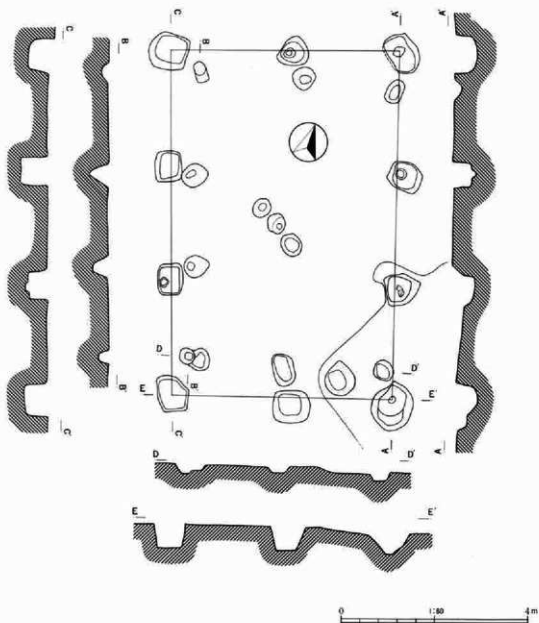
11B号掘立は3間(7.2m)×2間(4.8m)である。柱間寸法は桁行、梁行とも2.4m(8尺)等間である。柱穴掘形は方形状を呈し、径50~20cm深さ10cm内外の柱痕跡が認められるものがある。主軸方向はN-23°-Wを指す。

なお11A号と11B号の柱穴間の切り合い関係は不明であった。226号住居跡と重複するが、その新旧関係は

第V章 検出された遺構と遺物

不明であった。

遺物は出土せず、時期は不明である。



第319図 11A号・11B号掘立柱建築遺構

12号掘立柱建築遺構（欠番）

13号掘立柱建築遺構（第320図、PL.12）

IV区C-13・14、D-13・14グリッドにある3間（6.75m）×4間（6.0m）の方形建物である。柱間寸法は桁行が2.25m（7.5尺）等間、梁行が1.5m（5尺）等間である。柱穴掘形は不整形を呈するが径50～70cm

深さ20~30cmとやや大きめである。柱穴掘形内に径20~30cm深さ10~15cmの柱痕跡のみられるものもある。

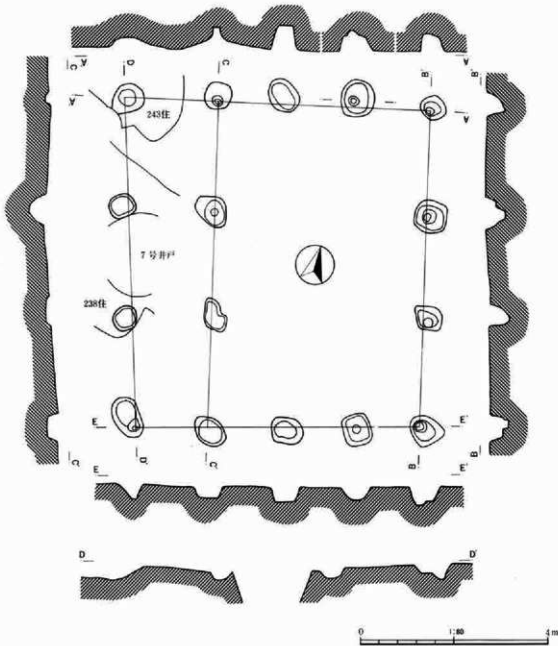
主軸方向はN-15°-Wである。本建物は身舎が3間×3間で、西側に廂をもつ可能性を有する。

重複遺構は237号、238号、243号住居跡、7号井戸で、新旧関係は不明であった。

時期は不明である。

14号掘立柱建築遺構 (第321図、PL.12)

IV区D-16、E-16グリッドにある2間(3.6~3.9m)×2間(3.6~3.9m)の不整形を呈する掘立柱建物で



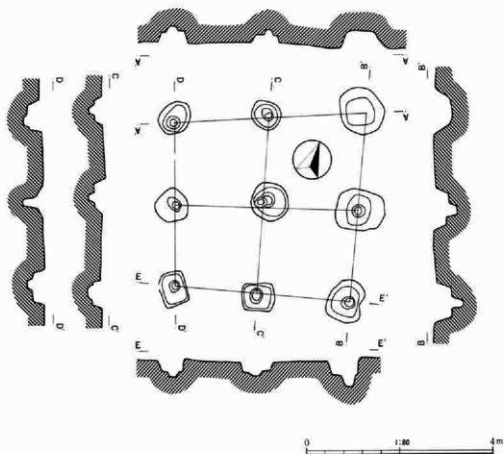
第320図 13号掘立柱建築遺構

第V章 検出された遺構と遺物

ある。柱間寸法は西辺と南辺が1.8m（6尺）等間、北辺と東辺が1.95m（6.5尺）等間である。柱穴掘形は長方形ないし不整形を呈し、径50～100cm深さ20～30cmを測る。柱痕跡は北東隅柱を除いて他の柱穴に認められ、径20～30cm深さ10～20cmを測る。主軸方向はN-17°-Wを指す。

重複遺構は244号住居跡、249号住居跡で、新旧関係は不明であった。

柱穴覆土の上位から土器片が散点出土しているが、形態や時期については不明である。



第321図 14号獨立柱建築遺構

4 土 壕

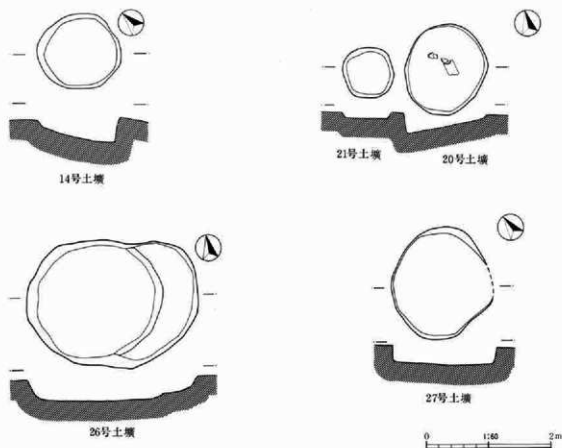
本遺跡全体で検出された土壕数は82基で、そのうち上武国道地域調査分は72基、早川河川改修地域分は10基であった。平面形態は円形、長方形、楕円形が主で、その他に不定形のもの等がある。なお調査段階で住居跡あるいは住居跡に伴う施設と考えられたもののうち、調査及び整理作業が進む段階で土壕に変更したものもある。又当初土壕として考えられている中で、住居跡に伴う貯蔵穴や、掘立柱建築遺構の柱穴等と判断されたものについてはこれらの遺構記述で取り扱った。

時期の明確な土壕は15基で、他は不明であった。以下時期別にその特徴と出土遺物について概述する。なお各土壕の具体的な位置、計測値等の記述については一覧表にまとめて掲載した。

縄文時代の土壕と出土遺物（第322・323図、PL.14・45）

縄文時代に属する土壕は14、20、26、27号土壕の計4基である。すべて円形を呈しており、規模は直径2～1.5m前後を測る。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは比較的急角度を呈しており、皿状あるいは椀状の断面形を呈するものはないようである。遺物は覆土より土器片が出土しており、27号土壕を除いて他は中期末（加曾利E4期）の時期と考えられる。

なおこれらの土壕は調査区の南東側台地のほぼ中央付近に集中しており、又この周辺からは遺構に伴わない縄文土器も比較的多く出土している。



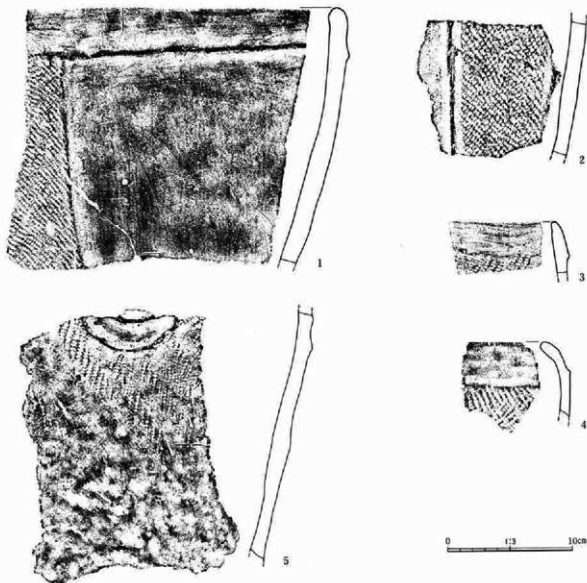
第322図 縄文時代の土壕

第323図-1は14号土壌覆土から出土した土器である。口縁部が弱く内湾しながら開く深鉢の口縁部破片で、口唇下に無文部において断面三角形の微隆帯をめぐらし、そこから同微隆帯で区画された充填縄文帯を垂下させている。口唇下の無文部、および胴部無文部には研磨が施されており、後者には斜位の細沈線が認められる。縄文はLRの縦位施文である。加曾利E4式土器。

第323図-2～4は26号土壌覆土から出土した土器である。3・4は内湾する口縁部破片で、いずれも口唇下に無文部において断面三角形形状の微隆帯をめぐらし、以下に縄文を施している。2は深鉢の胴部破片で、微隆帯で区画された充填縄文帯で文様が構成される。縄文は2がLR、3・4がRLで、いずれも縦位に施文が施されており、4では微隆帯下の一帯のみ横位に施されている。3点とも加曾利E4式土器である。

第323図-5は20号土壌覆土中から出土している。断面三角形の2本の微隆帯で曲線的な文様が構成される。微隆帯の周囲にRL縄文が施される。加曾利E4式土器である。

なお27号土壌から土器片が数点出土しているが、時期は不明であった。



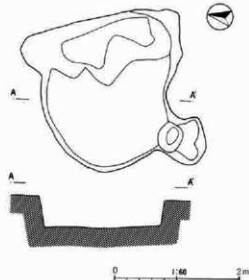
第323図 土壌出土遺物（縄文土器）

弥生時代の土壇と出土遺物(第324・325図、PL.45)

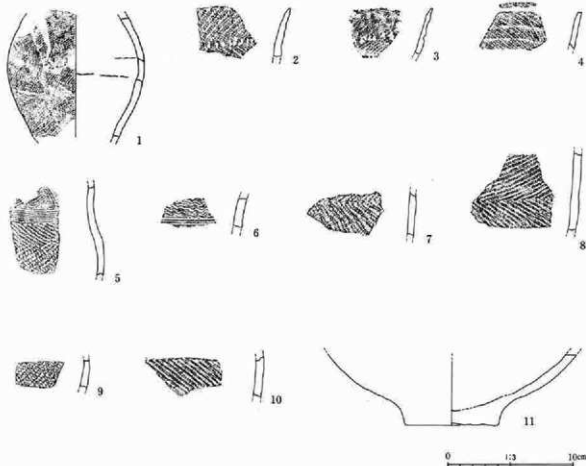
IV区F-11グリッドで検出された77号土壇が弥生時代に属する。平面形態は歪んだ円形を呈している。掘り込みの壁はほぼ直立しており、底面はほぼ平坦である。なお東側に不定形の細長い掘り込みが見られるが、本土壇の一部というより、風倒木痕あるいは後世の攪乱痕かと思われる。又南西部に直径80cm程のピットがあり、これも本土壇に伴うものではないだろう。

重複遺構は230号住居跡で、土層観察では確認できなかったが、出土遺物から本土壇が古いものである事は明らかである。

遺物は30点程の土器片で、ほとんどが覆土中からの出土である。縄文及び櫛描文と縄文の組合せを主文様としており、その特徴から栃木県に分布の中心をもつ二軒屋式系の土器と思われる。なおこれらに伴って古墳時代初頭期と思われる壺の底部が一点出土している事から、本土壇の時期は弥生後期～古墳時代初頭の幅をもつ。



第324図 弥生時代の土壇



第325図 土壇出土遺物(弥生土器)

土壌出土遺物観察表(1) 弥生時代

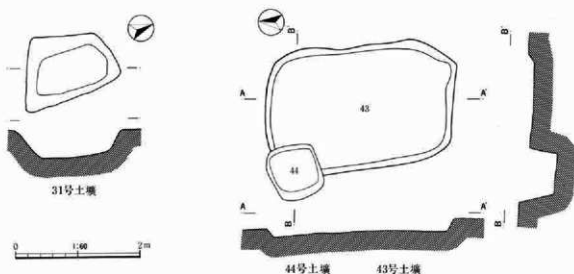
図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口徑・器高・底径 現 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第3528-1 PL.45-23	弥生 甕	77号 土 壇	胴部約1/3破片	①比較的微密で、小砂粒を含む ②黒褐～淡褐 ③普通	外面全体に縄文を施す。原体はLRの軸縄にRの縄2条を付加した附加条第1種である。内面は横ナデ。	二軒屋式系。
第3528-2 PL.45-24	弥生 (甕)	77号 土 壇	口縁破片	①長石等の砂粒を多く含む ②赤褐 ③良好	外面に羽状縄文を施す。羽状の交差部分で上位の施文原体の末端部を押しながらかircularさせる。原体は上位がLR軸縄にR2条付加、下位はRL軸縄にL2条付加の附加条第1種である。内面は丁寧なナデ。	二軒屋式系。
第3528-3 PL.45-25	弥生 (甕)	77号 土 壇	口縁部片	①小砂粒を含む ②黒褐 ③普通	口唇部に縄文施文具と思われる原体で刻目文を施す。外面には縄文と原体先端部を押しして文様を構成する。原体はLR軸縄にR2条付加と思われるがやや不明である。	二軒屋式系。
第3528-4 PL.45-26	弥生 (甕)	77号 土 壇	口縁部片	①白色小砂粒を含む ②黒褐～暗褐 ③普通	口唇部～口縁外面に縄文を施す。外面に2条の粘土紐積み上げ痕を残す。縄文原体はRL軸縄にL2条付加した附加条第1種と思われる。	赤井戸式か。
第3528-5 PL.45-27	弥生 (甕)	77号 土 壇	胴部～胴上半部片	①小砂粒を含む ②赤褐～暗褐 ③普通	胴部に縞縞波状文、胴部と胴上部の境に横線文、胴部に羽状縄文を施す。施文原体の縞縞文は先端の丸く不揃いな8本前後の帯状具、縄文は単筋のLRとRLを用いる。縞縞文は右回り(時計回り)に施している。羽状縄文は2種の原体を横回転で交互に施文している。内面ナデ。	二軒屋式系。
第3528-6 PL.45-28	弥生 (甕)	77号 土 壇	胴部破片	①小砂粒を含む ②外面黒、器内と内面淡黄～赤褐 ③普通	縞縞波状文とその下に横線文を施す。原体は5本の不揃いな目をもつ帯状具(植物の茎状のものか)を用いる。	二軒屋式系か。
第3528-7 PL.45-29	弥生 (甕)	77号 土 壇	胴部破片	①小砂粒を多く含む ②黒～黒褐 ③普通	縄文を全面に施す。原体はRL軸縄にL2条を付加した附加条第1種と思われる。羽状を構成するらしい。	
第3528-8 PL.45-30	弥生 (甕)	77号 土 壇	胴部破片	①比較的砂粒を多く含む ②暗褐 ③普通	羽状縄文を施す。原体はRL軸縄にL2条付加、LR軸縄にR2条付加の2種類を用いる。内面粗いナデ。	二軒屋式系か。
第3528-9 PL.45-31	弥生 (甕)	77号 土 壇	胴部破片	①砂粒を多く含む ②淡褐 ③普通	LR軸縄にR2条付加した原体を用いて施文している。羽状を構成する可能性あり。	
第3528-10 PL.45-32	弥生 (甕)	77号 土 壇	胴部破片	①赤色酸化鉄粒が目立つ ②よい黄褐 ③普通	RL軸縄にL2条付加した原体を用いて施文。羽状を構成する可能性あり。	
第3528-11	(土師 甕)	77号 土 壇	底7.5 底部破片	①大粒砂粒を多量に含む ②淡褐 ③普通	縦ヘラミガキ。底面ヘラuzziリ。外面に赤色塗彩の痕跡が残る。底部は突出している。	

古墳時代の土壌と出土遺物（第326・327図、PL.14・43）

本時期に属するものとして31号土壌、43号土壌、44号土壌の計3基が検出されている。そのうち43号土壌は規模が比較的大きく、当初住居跡と考えられたが、カマド等の炊飯施設がない点や、床面が不明瞭である事等から土壌として取り扱った。規模や形態がそれぞれ異なる事からこれらは異なる性格をもつものとしてとらえられよう。

遺物はいずれも鬼高期に属するものと思われる。

なお43号土壌と44号土壌は重複しているが、新旧関係は不明であった。

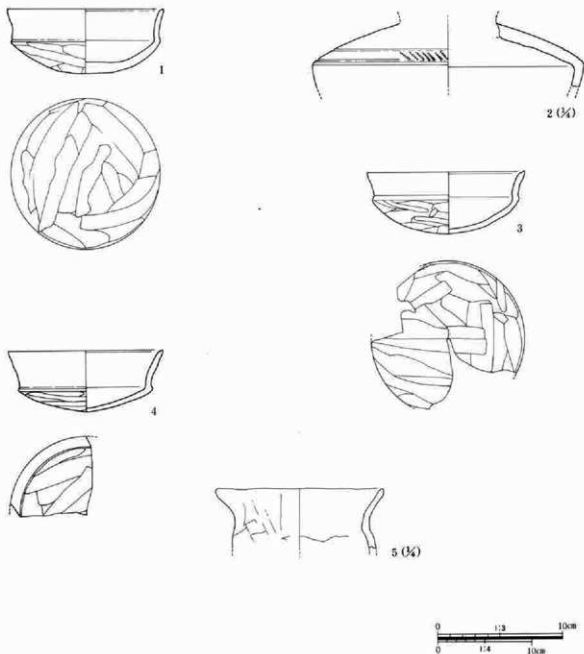


第326図 古墳時代の土壌

土壌出土遺物観察表(2) 古墳時代

図 Na 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	杖 成形・整形の特徴	備 考
第327図-1 PL.43	土師 杯	43号 土壌	口12.4 高5.2 口縁、底部の一部 欠	①酸化鉄粒等の小砂粒 を含む ②橙 ③普通	口唇部内側に稜をもち小さな平坦面 をつくり出す。口縁～杯内面に横ナデ。 底面中央は横方向、周辺部は同心円状 のヘラケズリ。	
第327図-2 PL.43	須恵 (長頸)	43号 土壌	肩部約1/4破片	①長石粒を若干含む ②灰 ③還元、硬質	内外面にロクロ目を残す。肩部縁に同 心円状の浅い沈線をも2条掘らし、その 中に帯状具先端の押捺による文様を充 填する。	
第327図-3	土師 杯	44号 土壌	口(12.6) 高4.9 口縁部約2/3を欠	①酸化鉄粒等の砂粒を 含む ②橙 ③普通	口唇部内側に稜をもち小さな平坦面を をつくり出す。口縁～杯内面に横ナデ。 底面横方向と同心円状のヘラケズリ。	
第327図-4	土師 杯	44号 土壌	口(12.3)高(4.9) 口縁～底部の 約1/4破片	①小砂粒を含む ②橙 ～黒褐 ③良好	口唇部内側に稜をもち小さな平坦面を をつくり出す。口縁～杯内面に横ナデ。 底面ヘラケズリ。	

第V章 検出された遺構と遺物



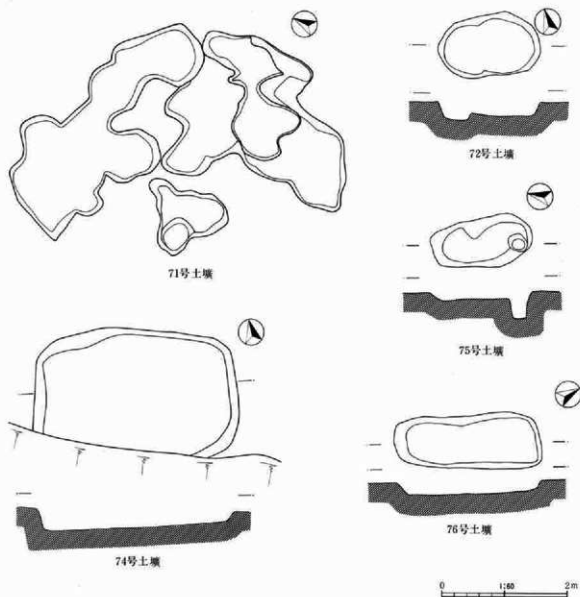
第327図 土壇出土遺物（古墳時代）

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 成形・整形の 特徴	備 考
第327図-5	土 罌	44号 土壇	口(18.0) 口縁部約1/6破片	①砂粒を多く含む ② により黄褐色 ③酸化	頸部縦ヘラケズリ。口縁部内外面とも 横ナテ。頸部内面横ヘケメ。なお口縁 部外面に横ナテ以前のものと思われる 縦方向のヘラをあてたような比喩が現 れる。	

平安時代の土壇と出土遺物 (第328・329・330・331回, PL. 43)

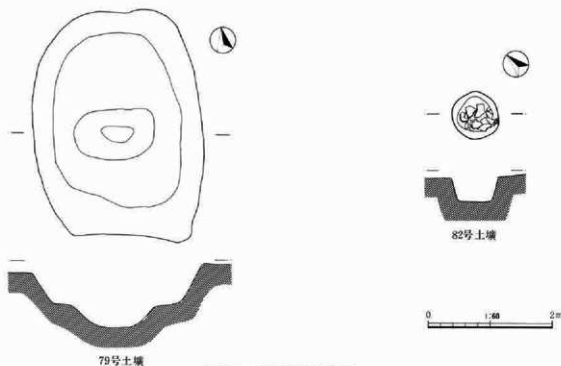
本時期に属すると思われるものは71号、72号、74号、75号、76号、79号、82号土壇の計7基であった。平面形態は72号、74号、75号、76号土壇が長方形ないしは楕円形を呈し、これらは断面形状も近似し、共通して浅い。これに対し79号土壇は規模の大きな楕円形で中央が2段に掘り込まれている。又82号土壇はビット状を呈する。71号土壇は不定形を呈する。これらの性格はいずれも不明であるが、71号と82号は隣接している事、71号は確認プランが方形に近かった事、更にこの部分に土器片が多く出土している事等から、71号土壇は住居跡の掘り形跡で82号はこれに伴う貯蔵穴である可能性も考えられる。

遺物は土器片が主で、いずれも平安時代のもと考えられる。特に71号土壇と82号土壇から煮沸具の裏類(所謂「土釜」を指す。)が多く出土した事は注目される。



第328回 平安時代の土壇(1)

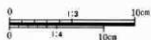
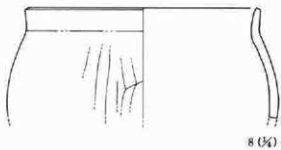
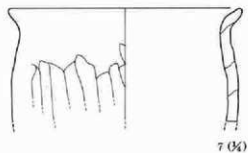
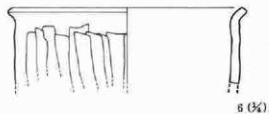
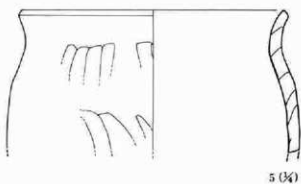
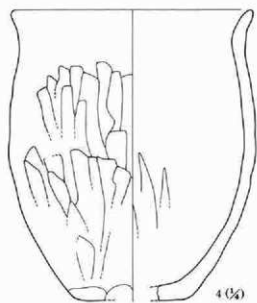
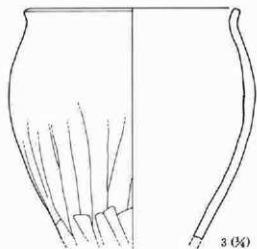
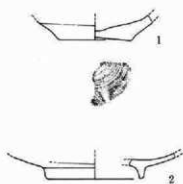
第V章 検出された遺構と遺物



第329図 平安時代の土坑(2)

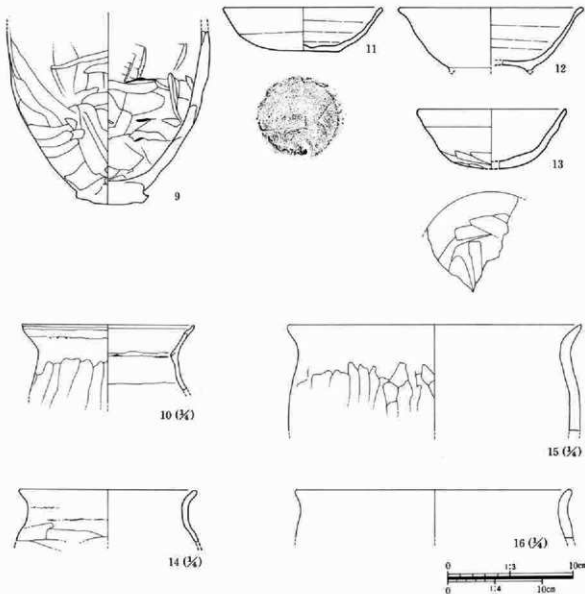
土坑出土遺物観察表(3) 平安時代

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第330図-1	土 師 皿	71 号 土 坑	底 (5.7) 底部約1/5破片	①金雲母を含む ②淡 黄褐色 ③軟質	ロクロ左回転成形と思われる。底未切 り無調整。	
第330図-2	灰釉陶 (皿)	71 号 土 坑	底部小破片	①緻密 ②灰灰 ③良 好	高台部は横ナデで端部は丸味をもつ。 底部内外面を除いて淡黄灰色の灰釉を かける。輪がけは刷毛ぬりと思われる。	東渡産か。
第330図-3	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (23.0) 口縁～胴上半部約 1/4破片	①白色小砂粒、大粒の 赤色酸化鉄粒を含む ②黄褐色 ③普通	口縁外面～胴上半は縦ヘラケズリの後 横ヘラミガキ。胴下半部外面は縦ヘラ ケズリ。内面全体は指頭による横ナデ、 なお胴下半の一部にヘラミガキ状の痕 跡が見られる。	
第330図-4	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (26.0) 高30.6 底 (11.5) 口縁～底部約1/6 破片	①大粒砂粒を多量に含 む ②黄褐色 ③普通	口縁部横ナデ。外部外面は縦方向、底 部付近は縦方向ヘラケズリ。内面は縦 方向のナデ、口縁部～頸部内面は横ナ デ。	
第330図-5	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (28.6) 口縁～胴上半部約 1/4破片	①大粒砂粒を多量に含 む ②黄褐色 ③普通	口縁部は縦く外反し、口縁外側に強い 稜をもつ。口縁～頸部外面は縦ヘラナ デ。胴部中位以下外面は縦ヘラケズリ、 口縁部内面は縦方向、胴部は縦方向の ナデ。	
第330図-6	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (25.0) 口縁部約1/6破片	①砂粒を多く含む ② 暗褐色 ③軟質	口縁内外面横ナデ、胴上半外面は縦ヘ ラケズリ、胴部内面は縦ナデ。	



第330図 土壇出土遺物(平安時代)(1)

第V章 検出された遺構と遺物



第331図 土壇出土遺物(平安時代)(2)

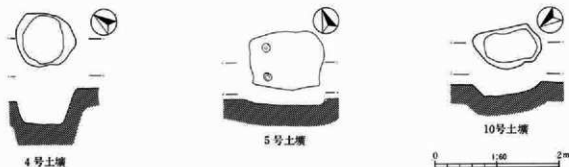
図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 残存状態	量 ①粘土 ②色調 ③焼成	注 成形・整形の特徴	備 考
第331図-7	土師 甕	71号 土壇	口(25.5) 口縁部約1/5破片	①大粒砂粒を多量に含む ②橙 ③普通	口縁は小さく外反し、口唇部外側に稜をつくる。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ヘラケズリ、胴部内面は横ナデ。	
第331図-8 PL.43	土師 甕	71号 土壇	口(25.6) 口縁～胴上部 約1/6破片	①大粒を多量に含む ②暗黄褐色 ③普通	口縁は強く外反し、口唇部外側に強い稜をつくる。口縁部ナデ、頸部に縦ヘラナデ。	
第331図-9	土師 甕	72号 土壇	底5.1 胴中位以上を欠	①砂粒を多く含む ② 外面黒褐色、内部赤褐色 ③軟質	外面は縦方向を主としたヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。内面はヘラあて痕を残す等粗雑な仕上げである。	古墳時代の可能性あり。

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第329図-10	土師 甕	72号 土 壇	口18.4 胴部以下欠	①胎土 ②色調 ③焼成	口唇部は上方に屈曲し、外側に調整時の沈痂が癒る。胴部外面は縦へラケズリ、口縁一帯部内面は横ナデ。	
第329図-11	須恵 杯	74号 土 壇	口12.8 高3.5 底6.0 口縁部の1/3欠	①白色胎物(針状のものを若干含む)を含む ②灰 ③還元、普通	ほぼ直斜状に立ち上がり、口唇部は小さく肥厚してやや外反する。ロクロ右回転成形、口縁部は横ナデ調整、底回転承切り無調整。	
第329図-12	須恵 高台碗	74号 土 壇	口(16.8)底(6.7) 口縁一底部約1/3 破片	①黒色酸化鉄粒を含む ②淡褐色 ③還元、やや軟質	体部の湾曲が強く、口唇部は肥厚して外反する。ロクロ右回転成形、内外面ともナデ調整か、底回転承切後付高台	器面は風化して荒れる。
第329図-13	土師 杯	74号 土 壇	口(12.0)高(4.7) 口縁一底部約1/5 破片	①小砂粒を含む ②黄褐 ③普通	体部上位は外側に屈曲。口縁部内外面とも横ナデ、底面へラケズリ、内面ナデ体部中央は無調整。	内面に煤付着
第329図-14	土師 甕	74号 土 壇	口(19.0) 口縁部の1/6破片	①黒色胎物、赤色酸化鉄粒等を含む ②橙 ③普通	口縁部内外面横ナデ、胴上半部外面横へラケズリ、胴上半部内面ナデ。口縁の屈曲部分外面に粘土結核み上げ痕が残る。	
第329図-15	土師 甕	82号 土 壇	口(31.2) 口縁部の1/4破片	①大粒砂粒を多量に含む ②暗褐 ③普通	口縁部内外面横ナデ。胴上半部外面は縦へラケズリ、胴部内面はナデか。	
第329図-16	土師 甕	82号 土 壇	口(29.4) 口縁部の1/8破片	①小砂粒を含む ②暗黄褐 ③普通	口縁部内外面横ナデ、胴上半部外面縦へラナデ、胴部内面は指頭による横ナデ。	

中世の土壇と出土遺物(第332・333・334・335図、PL.14・43・44)

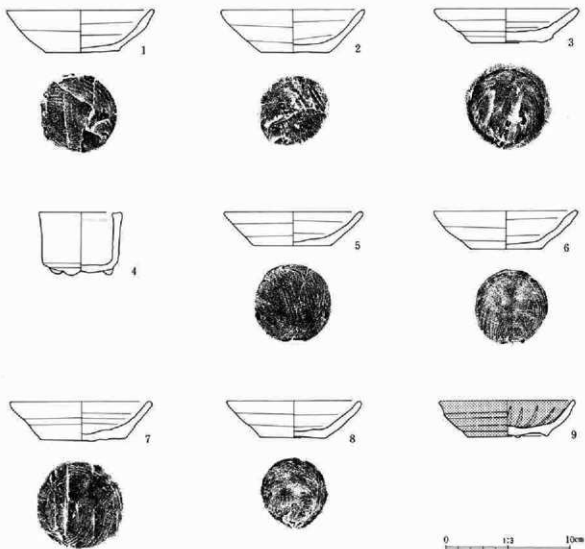
本時期に属すると思われるものは4号、5号、10号土壇の計3基であった。いずれもI区の中央付近(C-21、D-22、E-22グリッド)で検出され、ほぼ等間隔で並ぶ。4号は円形、5号は方形、10号は楕円形とそれぞれ平面形態や規模は異なるが、出土遺物の検討からすべて中世の墓壇と判断された。

遺物は骨片(大腸骨か)、土師器小皿、陶器、銭貨が出土している。土器類は正立位できちんと並べられていた。銭貨はすべて永樂通宝6枚づつで土壇内に散在していた。陶器は4号から香炉、10号から皿が出土し、時期は16世紀代のものと考えられる。



第332図 中世の土壇

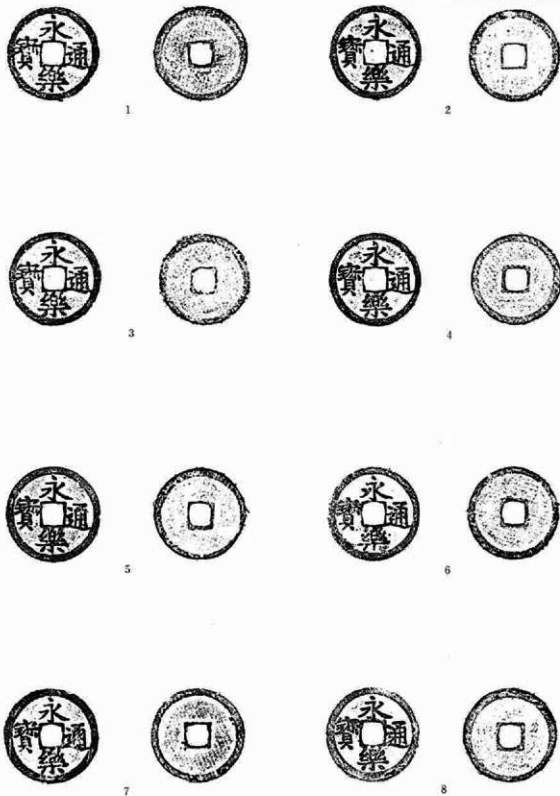
第V章 検出された遺構と遺物



第333図 土壇出土遺物(中世)

土壇出土遺物観察表(4) 中世

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第333図-1 PL.43	土 鉢 皿	4号 土 壇	口径11.8 高3.4 底5.9 完形	①カクセン石等黒色紅 物が目立つ ②淡橙 ③普通	ロクロ左回転成形。体部を上下2段横 ナテ調整し、中央部が肥厚する。見込 み部エビナテ。底糸切り後ヘラケズリ 状の調整。	
第333図-2 PL.43	土 鉢 皿	4号 土 壇	口径11.5 高3.4 底5.5 体部一部欠	①素地緻密、黒色紅物 が目立つ ②器内黒。 器表黄褐色 ③器内還元。 器表酸化、良好	ロクロ左回転成形。体部横ナテ調整。 見込み部エビナテ。底糸切り後ヘラケ ズリ状の調整。底面に縦目状圧痕が残 る。	



第334図 土壇出土遺物(銭貨)

第V章 検出された遺構と遺物

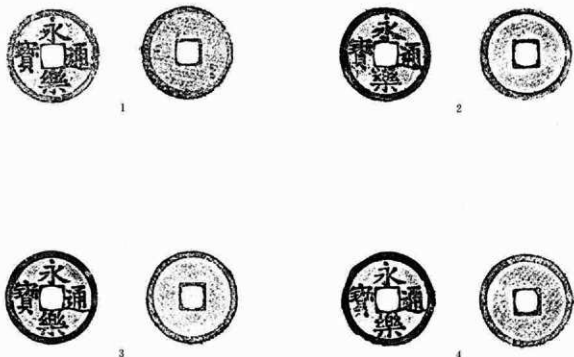
図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第334図-3	土 師 皿	4 号 土 壇	口(11.7) 高2.7 底5.7 体部2/3欠	①粗く赤色酸化鉄粒、 白色砂粒を含む ②鉄 粒 ③やや軟質	ロクロ右回転成形。口唇肥厚。底回 転糸切り後ヘラケズリ状の調整。底面 に並行する2条の板目状圧痕が残る。	
第334図-4 PL.43	陶 器 香 が 4 号 土 壇	口6.6 高4.8 底5.9 定形	①やや粗く黒色の小鉱 物粒を若干含む ②胎 土黄白、釉白緑 ③酸 化、普通	ロクロ右回転成形。底回転ヘラ切り後 小粘土塊による低い3脚を貼付する。 釉は淡緑色と白色の「露降り」状で、 内面全体及び外面体部全体にかける。	美濃産か。	
第334図-5 PL.43	土 師 皿	5 号 土 壇	口11.2 高2.7 底6.1 定形	①カクセン石等黒色鉱 物が目立つ ②赤味を 帯びた黄褐 ③普通	ロクロ右回転成形。口縁部横ナデ調整。 見込み部ユビナデ。底糸切り後の目の 細かい板目状圧痕が残る。	
第334図-6 PL.43	土 師 皿	5 号 土 壇	口11.5 高3.0 底5.6 定形	①カクセン石等黒色鉱 物が目立つ ④鉄 粒 ⑤普通	ロクロ左回転成形。口縁一体部内外面 とも横ナデ調整。見込み部ユビナデ。 底糸切り後一部ヘラケズリ状の調整。 底面に目の細かい板目状圧痕が残る。	
第334図-7 PL.43	土 師 皿	10 号 土 壇	口11.4 高3.0 底6.8 定形	①カクセン石等黒色鉱 物、赤色酸化鉄粒が目 立つ ②鉄 粒 ③普通	ロクロ右回転成形。口縁内外面横ナデ 調整。ロクロ目を明瞭に残す。見込み 部ユビナデ。底糸切り後の板目状圧痕 が残る。	
第334図-8 PL.43	土 師 皿	10 号 土 壇	口10.8 高2.9 底5.2 口縁1部欠	①カクセン石等黒色鉱 物、赤色酸化鉄粒が目 立つ ②赤味を帯びた 黄褐 ③普通	ロクロ左回転成形。口縁一体部内外面 横ナデ調整。底糸切り無調整。	
第334図-9 PL.43	陶 器 皿	10 号 土 壇	口10.9 高2.8 底6.4	①やや粗 ②胎土黄白、 釉淡緑 ③酸化普通	ロクロ成形。腰部が強く張り出し、口 縁部がやや外反する。見込み部に菊弁 弁状の除刻文を施す。透明度の高い炭 物を内外面とも施す。底面に重ね焼き 用の輪ナデの痕跡が残る。	

土壇出土の銭貨（第334・335図、PL.44）

5号土壇、10号土壇から永楽通宝6枚づつが出土している。おそらく明の渡来銭と思われる。いずれも銚出しが明瞭で、重量もほぼ均一である。

出土銭貨一覧表

図 No	写真図版No	出土位置	直径 (cm)	重量 (g)	図 No	写真図版No	出土位置	直径 (cm)	重量 (g)
第334図-1	PL.44	5号土壇	2.54	3.1	第334図-7	PL.44	10号土壇	2.54	2.8
第334図-2	PL.44	5号土壇	2.45	2.2	第334図-8	PL.44	10号土壇	2.52	3.3
第334図-3	PL.44	5号土壇	2.48	2.7	第335図-1	PL.44	10号土壇	2.48	2.2
第334図-4	PL.44	5号土壇	2.44	3.1	第335図-2	PL.44	10号土壇	2.47	2.6
第334図-5	PL.44	5号土壇	2.46	3.3	第335図-3	PL.44	10号土壇	2.48	2.5
第334図-6	PL.44	5号土壇	2.47	2.4	第335図-4	PL.44	10号土壇	2.50	3.1



第335図 土壇出土遺物(銭貨)

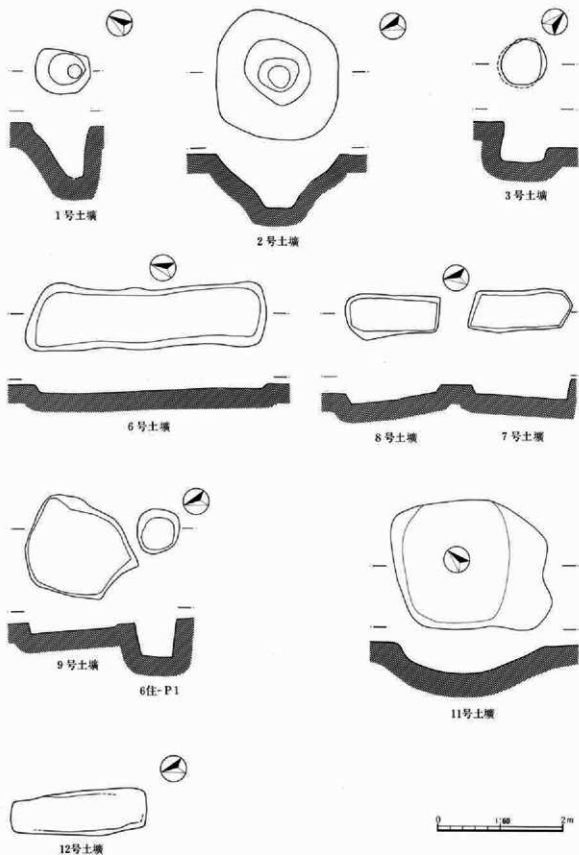
時期不明の土壇（第336・337・338・339・340図、PL.14）

総数52基が検出された。（早川河川改修地域調査分を除く。）ここで取り上げた土壇はいずれも出土遺物が無いか非常に乏しいもので、又重複遺構との関係も不明瞭である事からその時期を限定し得ないものである。平面形態は長方形、円形、楕円形、その他の不整形、不定形等で、数量は長方形（隅丸長方形を含む。）が16基、円形が13基、楕円形が10基、その他13基であった。

長方形土壇は長さ1.5m前後、幅0.6m前後を測る小形のもの、長さ2m以上、幅1.0m前後を測る長大なもの二種に分ける事ができるようである。主軸方向については北北東と西北西を指すものが大部分を占める。覆土については全土壇の検討はできなかったが、概してロームブロックを多量に含む人工的埋土が多いようである。性格付けについては推定の域を出ないが、小形ものは墓塚、長大なものは高作に伴う貯蔵穴（“イモアナ”あるいは“ムロ”等と呼称されるもの）の可能性が考えられる。

円形土壇についてはその規模や断面形状からかなりのバラエティがあるようである。形態の近似性から井戸、墓塚、柱穴等の性格が考えられるが、根拠となる具体的な痕跡や他遺構との関連性は見られなかった。

第V章 検出された遺構と遺物



第336図 土壇(1)

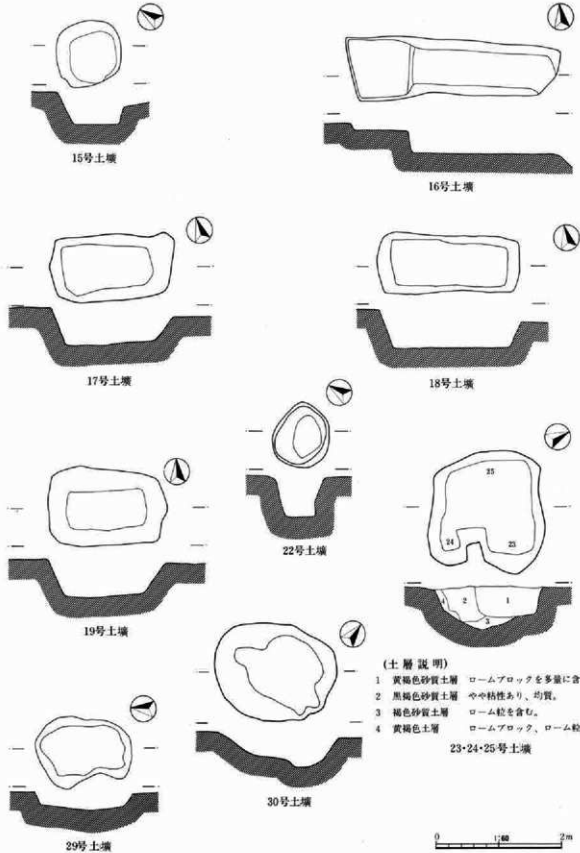
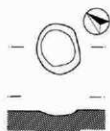


図337 土壌(2)



32・33号土坑



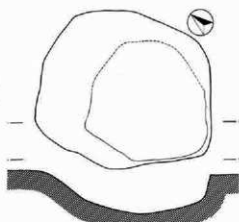
34号土坑



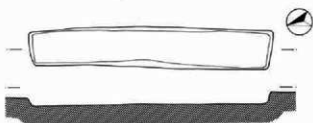
35号土坑



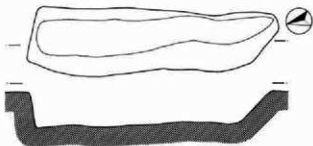
36号土坑



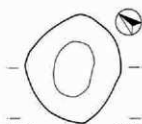
37号土坑



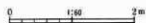
39号土坑



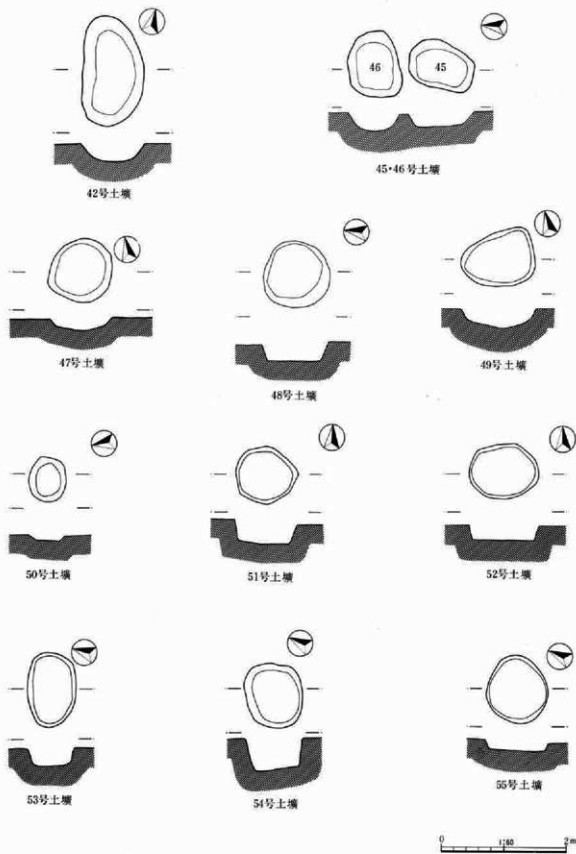
41号土坑



40号土坑

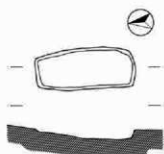


第338図 土坑(3)

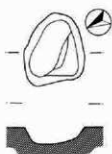


第339図 土壇(4)

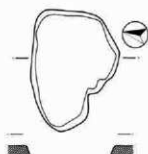
第V章 検出された遺構と遺物



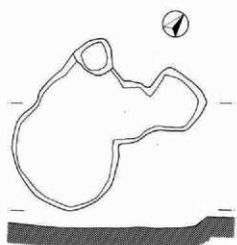
56号土坑



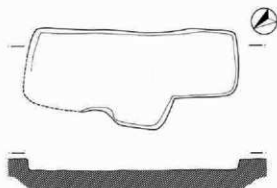
67号土坑



68号土坑



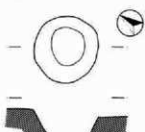
69号土坑



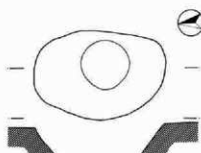
70号土坑



73号土坑



78号土坑



80号土坑



第340図 土坑(5)

土壌一覧表

土壌No 図 No	位 置	平面形態	規 模 (m) 長径(辺)×短径(辺) 深さ 主軸方向 (方形のもの)		直探遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
1号土壌 第336図	I 区 C-18・19	楕円形	0.89×0.68	0.87		32A・B号住 と接する。	柱穴痕の可能性あり。
2号土壌 第336図	I 区 F-18	円形	1.95×1.94	1.24			
3号土壌 第336図	I 区 C-20, D-20	円形	0.75×0.73	0.63		溝3	
4号土壌 第332図	I 区 D-21・22	円形	0.95×0.85	0.42		骨片、土師小皿 3、陶器香炉1	墓塚と思われる。
5号土壌 第332図	I 区 E-22	(方形)	(1.25)×(0.95)	(0.10)		土師小皿2、木 炭通宝6	墓塚と思われる。
6号土壌 第336図	I 区 B-23	隅丸長方形	3.74×0.90 N-10'-W	0.45	48号住居跡を 切る。		
7号土壌 第336図	I 区 G-18	長方形	1.55×0.62 N-17'-E	0.30	42A・B号住 居跡を切る。		
8号土壌 第336図	I 区 G-18・19	長方形	1.50×0.63 N-18'-E	0.16	42A・B号住 居跡を切る。		
9号土壌 第336図	I 区 A-12・13	不整形円形	1.83×1.55	0.15	6号住居跡 新出不明。		
10号土壌 第332図	I 区 C-21	不整形円形	1.10×0.65	0.36	38号住居跡を 切る。	骨片、土師皿2 陶器皿1、木炭 通宝6	墓塚と思われる。
11号土壌 第336図	I 区 E-11	(方形)	2.50×2.05	0.33			当初住居跡と考えられたが、検 討後に土壌に変更。
12号土壌 第336図	I 区 F-14	長方形	2.17×0.73 N-12'-E	不明	20号住居跡		
13号土壌 (欠番)							6号住居跡ヒットP ₁ に変更。
14号土壌 第322図	II 区 D-1	円形	1.32×1.18	0.42		縄文土師 (加曾 利E4)	
15号土壌 第337図	II 区 C-1	円形	1.05×1.00	0.59			
16号土壌 第337図	II 区 E-2	隅丸長方形	3.42×1.00 N-82'-W	0.48	方形遺構墓南 東溝		西半部は深さ10cm程度の段を呈す るが土壌の重複か。
17号土壌 第337図	II 区 F-3	隅丸長方形	1.97×1.05 N-78'-W	0.74			
18号土壌 第337図	II 区 E-3	隅丸長方形	2.26×0.98 N-76'-W	0.66			

第V章 検出された遺構と遺物

土層No 区 No	位 置	平面形態	規 模 (m)		重複遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
			長さ(辺)×短径(辺) 深さ 主軸方向 (方形のもの)				
19号土層 第337区	II 区 D-4、E-4	隅丸長方形	1.90×1.27 N-90°-W	0.79			16号土層、17号土層、18号土層と規模、主軸方向、土層ともほぼ一致し、同様の性格のものか。
20号土層 第329区	II 区 D-3	円形	1.40×1.25	0.36		縄文土器 (加曾利E4式) 礎	
21号土層 第322区	II 区 D-3	円形	0.84×0.80	0.14			
22号土層 第337区	II 区 D-4、E-4	楕円形	1.05×0.85	0.64			
23号土層 第337区	II 区 D-4	(長方形)	1.95×(1.10) N-65°-W	0.43	24号溝を切る 25号溝は不明		
24号土層 第337区	II 区 D-4	不明			23号土層、25号土層		
25号土層 第337区	II 区 D-4	不明			23号土層、24号土層		
26号土層 第322区	II 区 B-3	楕円形	2.74×1.95	0.30		縄文土器 (加曾利E4式) 礎	円形土層の重複の可能性あり。
27号土層 第322区	II 区 D-6	楕円形	1.75×1.62	0.34	方形埴溝北西溝、新田不明	縄文土器 (型式不明)	
28号土層	II 区 B-10	円形	1.25×1.13	0.43			
29号土層 第337区	II 区 C-14、D-14	不整形円形	1.53×1.00	0.29			
30号土層 第337区	II 区 E-14・15	不整形円形	1.90×1.55	0.57	5号溝 新田不明		痕跡のみ。
31号土層 第326区	II 区 B-15	不整形方形	1.63×1.15	0.56		土師器片 (瓶の可能性有。丸高期)	
32号土層 第338区	II 区 B-17	(長方形)	1.13×(0.56)	0.38	33号土層 新田不明		
33号土層 第338区	II 区 B-17	円形	0.70×0.68	0.63			
34号土層 第338区	II 区 B-18	円形	0.80×0.66	0.10		土器片 (時期不明)	
35号土層 第338区	II 区 C-17	長方形	1.80×0.60 N-75°-W	0.46			
36号土層 第338区	II 区 D-17	隅丸長方形	1.12×0.60 N-65°-E	0.27			

土層No 区 No	位 置	平面形状	規 模 (m) 長径(辺)×短径(辺) 深さ 主軸方向 (方形のもの)	重複遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
37号土層 第338区	II 区 D-19・20 E-19・20	不整形円形	2.72×2.50 0.69			
38号土層	II 区 B-20	不定形	1.60×1.17 0.65			視覚域か。
39号土層 第338区	II 区 B-22 C-22・23	長方形	3.85×0.63 N-14°-E			
40号土層 第338区	II 区 C-21	円形	1.66×1.54 0.40			
41号土層 第338区	II 区 C-22	楕円形	1.76×0.97 0.30			
42号土層 第339区	II 区 F-22	(長方形)	3.93×1.00 N-10°-E			
43号土層 第326区	II 区 G-24, H-24	長方形	3.20×1.99 N-10°-W	74号住居跡 に切られる。	杯(鬼高期) 櫛(平安)長頸蓋	当初住居跡と考えられたが検討 後に土層に変更。
44号土層 第326区	II 区 G-24・25 H-24・25	方形	0.85×0.81 N-63°-E	74号住居跡 に切られる。	杯、櫛(鬼高期)	
45号土層 第339区	II 区 E-23	楕円形	1.03×0.74 0.26			
46号土層 第339区	II 区 E-24	楕円形	1.94×0.83 0.31			
47号土層 第339区	II 区 C-22・23	円形	1.10×0.97 0.16			
48号土層 第339区	II 区 B-25	円形	1.08×1.06 0.33	73号住居跡 新旧不明		
49号土層 第339区	II 区 G-25	不整形円形	1.18×0.86 0.31			
50号土層 第339区	III 区 F-1・2	楕円形	0.70×0.60 0.11	79号住居跡 新旧不明		
51号土層 第339区	III 区 E-3	円形	0.95×0.90 0.40			
52号土層 第339区	III 区 F-2	楕円形	1.08×0.86 0.26			
53号土層 第339区	III 区 F-3, G-3	楕円形	1.18×0.78 0.30			
54号土層 第339区	III 区 H-5	不整形円形	1.02×0.94 0.52			

第V章 検出された遺構と遺物

土壌No. 図 No.	位 置	平面形態	規 模 (m)		重複遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
			長径(北)×短径(南) 主軸方向(方形のもの)	深さ			
55号土壌 第339図	Ⅲ 区 H-6	円形	1.06×0.98	0.10			
56号土壌 第340図	Ⅲ 区 G-7、H-7	長方形	1.58×0.64 N-4'-E	0.17	90号住居跡を 切る。		
57号土壌	Ⅲ 区 I-6						早川河川改修地域調査分
58号土壌	Ⅲ 区 L-12						早川河川改修地域調査分
59号土壌	Ⅲ 区 L-11・12						早川河川改修地域調査分
60号土壌	Ⅲ 区 O-15						早川河川改修地域調査分
61号土壌	Ⅲ 区 K-17、L-17						早川河川改修地域調査分
62号土壌	Ⅲ 区 J-17・18						早川河川改修地域調査分
63号土壌	Ⅲ 区 J-23						早川河川改修地域調査分
64号土壌	Ⅲ 区 J-24						早川河川改修地域調査分
65号土壌	Ⅲ 区 I-24、J-24						早川河川改修地域調査分
66号土壌 第169図	Ⅲ 区 H-24、I-24	長方形	0.96×0.58 N-9'-E	不明	152号住居跡 を切る。		
67号土壌 第340図	Ⅲ 区 F-16	円形	1.10×0.95	0.31		土器片(時期不 明) 数点	
68号土壌 第340図	Ⅲ 区 D-23・24 E-23・24	不定形	1.90×1.40	0.30	187号住居跡 を切る。	土器片(時期不 明) 数点	
69号土壌 第340図	Ⅳ 区 B-3、C-3	不定形	3.10×2.58	0.22		土器片(時期不 明) 数点	数基の土壌が重複している可能 性がある。
70号土壌 第340図	Ⅳ 区 D-2、E-2	(長方形)	3.33×1.51 N-25'-E	0.17	193A・B号住 居跡を切る。		
71号土壌 第328図	Ⅳ 区 F-1・2 G-1・2	不定形	(5.13)×(4.33)	0.18	154・155号住 居 新田不明	杯、襷、輪(平 安)、地輪片	住居跡掘形が複数の土壌の重複 した可能性がある。
72号土壌 第328図	Ⅳ 区 C-2・3	楕円形	1.60×0.97	0.22		裏(平安)	

第V章 検出された遺構と遺物

土層No 図 No	位 置	平面形態	集 積 (m) 長径(辺)×短径(辺) 深さ 主軸方向 (方形のもの)	重複遺構 新田関係	出土遺物	備 考
73号土層 第340図	IV 区 E-4・5	隅丸長方形	1.48×0.89 0.14 N-52°-W			
74号土層 第328図	IV 区 G-5・6 H-5・6	隅丸長方形	3.19×(2.05) 0.28 N-77°-W	12号溝 新田 不明	杯、碗、甕 (平安)	当初住居跡と考えられたが検討後に土層に変更。
75号土層 第328図	IV 区 B-10	隅丸長方形	1.57×0.75 0.43	10号掘立柱建 築遺構	土器片 (平安) 約25点	
76号土層 第328図	IV 区 C-9, D-9	隅丸長方形	2.31×0.80 0.25 N-28°-E		土器片 (平安) 約30点	
77号土層 第324図	IV 区 F-11	(円形)	2.05×1.45 0.50	230号住居跡 に切られる。	土器片 (弥生後 期、古墳時代初)	東側の掘り込みは風割木根の可能性がある。
78号土層 第340図	IV 区 E-11, F-11	円形	1.03×1.03 0.61	228号・231号 住居跡		
79号土層 第329図	IV 区 F-16・17	楕円形	3.57×2.68 1.03	247号住居跡 新田不明	土器片 (平安)	中央部に楕円形の小ピットが掘られ、2段になる。
80号土層 第340図	IV 区 D-17・18 E-17・18	楕円形	2.07×1.39 0.89			
81号土層	III 区 L-14					早川河川改修地城調査分
82号土層 第329図	IV 区 F-2	円形	0.75×0.74 0.38		甕 (平安)	

5 井戸跡

1号井戸跡 (第341図)

I区A-12、B-12グリッドに位置する。平面は歪んだ楕円形を呈する。上端規模は2.07×2.02m、深さは3.14mを測る。掘り込みはほぼ垂直で、底面は平坦。底面規模は径1.00×0.90mを測る。覆土上位から須恵器甕、灰釉皿、壺、甕等の土器片が出土する。6号住居跡と重複しており、床面の存在から新旧関係は1号井戸→6号住である。

2号井戸跡 (第341図、PL.14)

II区B-19グリッドに位置する。平面は楕円形を呈し、上端規模は1.01×0.77m、深さ1.20mを測る。掘り込みはほぼ垂直と思われるが、南壁がややオーバーハングする。底面は「鉢状」状を呈し、規模は0.5×0.3mを測る。遺物は出土していない。形態から柱穴に近い性格を持つ可能性もある。

3号井戸跡 (第341図)

III区I-20グリッドに位置する。平面は歪んだ楕円形を呈し、上端規模は2.31×1.85m、深さ0.79mを測る。掘り込みは台形状で、中央部に径50×35cm、深さ12cm程の小ピットがある。遺物は出土していない。

4号井戸跡 (早川河川改修地域調査分)

5号井戸跡 (第341図)

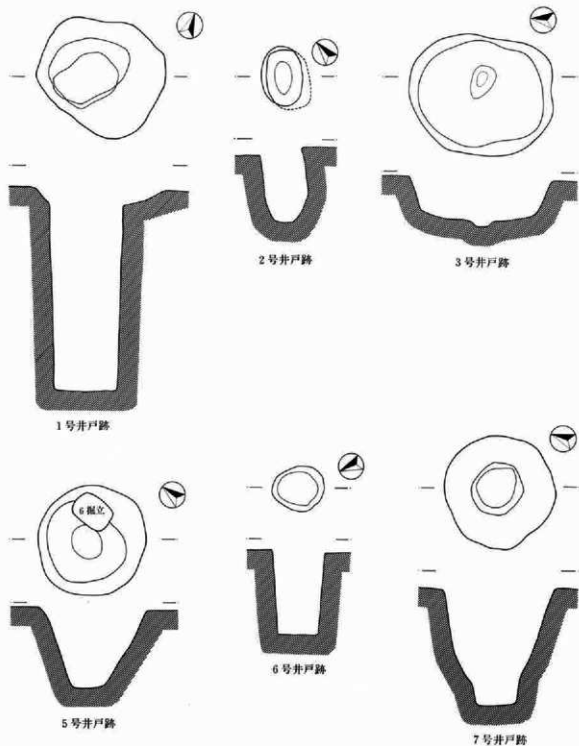
III区H-19、I-19グリッドに位置する。平面はほぼ円形を呈し、上端規模は径1.75m、深さ1.27mを測る。掘り込みは逆台形状で、底面は平坦である。底面規模は径55cmを測る。遺物は出土していない。なお6号獨立柱建築遺構の柱穴と重複しているが、新旧関係は不明であった。深さがやや浅く形態上からは井戸よりむしろ柱穴的な性格を持つ可能性がある。

6号井戸跡 (第341図、PL.14)

IV区G-9グリッドに位置する。平面は楕円形を呈し、上端規模は0.86×0.69m、深さ1.38mを測る。掘り込みはほぼ垂直で、底面は平坦である。底面規模は径60cm前後を測る。覆土は最下層に黒色砂質土、中層にロームブロックを多量に含む黒色砂質土、上層に浅間B軽石を含む褐色土が堆積している。遺物は出土していない。重複する遺構はないが、東側で165号住居跡と10cm程で隣接している。

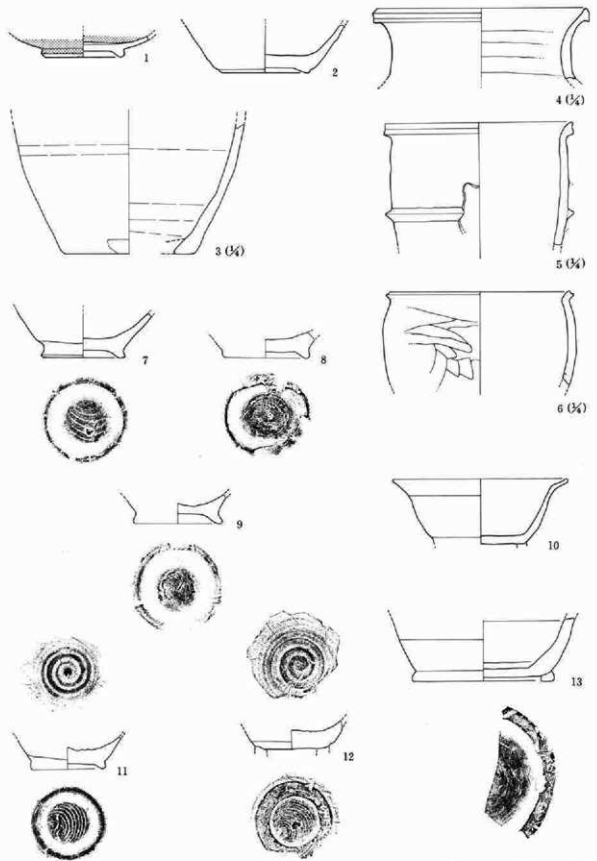
7号井戸跡 (第341図、PL.14)

IV区C-14グリッドに位置する。平面は円形を呈し、上端規模は1.70×1.37m、深さ1.80mを測る。掘り込みは下半まで逆台形状で、底部付近がほぼ垂直になっている。底面はほぼ平坦であり、規模は径60cmを測る。逆台形部分は地山の崩落によるかあるいは人為的なものかは判断できない。覆土は最下層に灰褐色砂質土、中層はロームブロックと黄褐色土の互層、上層はローム粒と焼土粒を含む暗褐色土が堆積する。遺物は高台付甕、須恵器壺等が出土している。重複する238号住居跡を切っている。時期は平安時代以降と思われる。

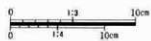


第341図 井戸跡

第V章 検出された遺構と遺物



第342図 井戸跡出土遺物



井戸跡出土観察表

区 No. 写真図版No	土器種 部形	出土 位置	法 量 口径・砂高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③地成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第3区図-1	灰 釉 皿	1号 井戸	底(6.7) 底部約1/2破片	①緻密、黒色粒を含む ②灰白 ③良好	高台部外側に弱い稜をもつ、付高台。釉は刷毛塗りと思われ、色調は淡緑色で透明度が高い。	見込み部分に重ね施きの痕跡が残る。
第3区図-2	須 恵 高台碗	1号 井戸	底(7.0) 下半部約1/2破片	①石英、白色粒を含む ②淡灰 ③還元、軟質	経輪成形か、低い高台で底部に丁寧なナデを施し切り離し痕を消す。ロクロ目をほとんど残さない。	器表面が荒れる。
第3区図-3	須 恵 (破)	1号 井戸	底(14.0) 下半部約1/4破片	①大粒の石英、長石を含む ②淡灰 ③還元、普通	経輪積後ロクロ整形か。内外面共横ナデ。底面ヘラケズリ。	
第3区図-4	須 恵 壺	1号 井戸	口(25.7) 口頸部約1/8破片	①大粒の砂粒を多く含む ②器内一帯、器面一帯 ③酸化気味	経輪積。内外面共横ナデ。	
第3区図-5	須 恵 飯 椀	1号 井戸	口(22.3) 口縁～体部上半約1/5破片	①大粒の白色底物(長石等)を多く含む ②暗赤褐 ③暗灰 ③還元、硬質	経輪積。内外面共横ナデ。体部上半に断面三角形の野を廻らす。	体部上半に把手をつけた痕跡あり。
第3区図-6	土 師 羹	1号 井戸	口(22.3) 口縁～体部上半約1/8破片	①大粒砂粒(径5mm)を多く含む ②淡赤褐 ③酸化、やや軟質	経輪積。外周下半は縦、上半は横方向のヘラケズリ。内面ナデ。口唇部はナデによる凹縁を廻らす。	
第3区図-7	須 恵 高台碗	7号 井戸	底6.7 口縁～体部上半欠	①小砂粒を含む ②淡灰 ③還元、軟質	ロクロ整形。回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第3区図-8	須 恵 高台碗	7号 井戸	底7.0 底部破片 高台の一部欠	①小砂粒を含む ②淡灰 ③還元、軟質	ロクロ整形と思われる。見込み部は丁寧なナデ。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	底面に織維状のものや圧痕あり。
第3区図-9	須 恵 高台碗	7号 井戸	底7.1 底部破片	①礫石、カクセン石等 黒色底物が目立つ ②灰～灰白 ③還元気味 軟質	ロクロ整形。見込み部中心は盛り上がる。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第3区図-10	須 恵 高台碗	7号 井戸	口(14.0)高(5.5) 体部約2/3と高台部欠	①小砂粒を含む ②淡灰 ③還元、普通	右回転ロクロ整形。口縁部は大きく外反しやや肥厚す。底部回転糸切り後ほぼ全面をナデ。	
第3区図-11	須 恵 高台碗	7号 井戸	底6.1 底部破片	①赤色酸化鉄粒を含む ②黒～灰白 ③酸化気味、やや軟質	右回転ロクロ整形。見込み部はロクロ目を明瞭に残す。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第3区図-12	須 恵 高台碗	7号 井戸	高台部を欠く底部破片	①赤色酸化鉄粒を含む ②器内一帯、器表一帯褐 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形。見込み部はロクロ目を明瞭に残す。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第3区図-13	須 恵 壺	7号 井戸	底(11.3) 体部下半～底部約1/3破片	①大粒の長石粒を含む ②灰黒 ③還元、硬質 良好	経輪積後ロクロ整形か。内外面にロクロ目様のナデ痕が残る。底部回転ヘラケズリ調整?後付高台後周辺部ナデ。	内面底部に自然釉がかかる。

6 溝

1号溝 (第345図)

II区D-11、E-11、C-12グリッドで検出された。N-50°-60°-Eを指して走向する。北東端は3号溝に入り、南西端は2号溝に合流する。上端幅は38cm-20cm程で、深さは10cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。遺物は出土しておらず、時期は不明。2号溝とはほぼ併行して走り、これに合流するような重複関係を示していることから、1号、2号溝はほぼ近似した時期の同一性格を有するものの可能性がある。

2号溝 (第345図、PL.13)

II区B-12、C-12、D-12、E-12グリッドで検出された。N-40°-60°-Eを指して走向しDグリッドライン付近で屈曲する。北東端は3号溝と重複し、南西端は調査区外に延びるため不明。上端幅は、南西端で最も広く1.15mを測り、他は65-40cm前後を測る。深さは平均的に20-30cmを測る。断面形状は箱形を呈する。覆土は細砂を多量に含む灰褐色土が堆積する。遺物は出土しておらず、時期は不明。

3号溝 (第345図、PL.13)

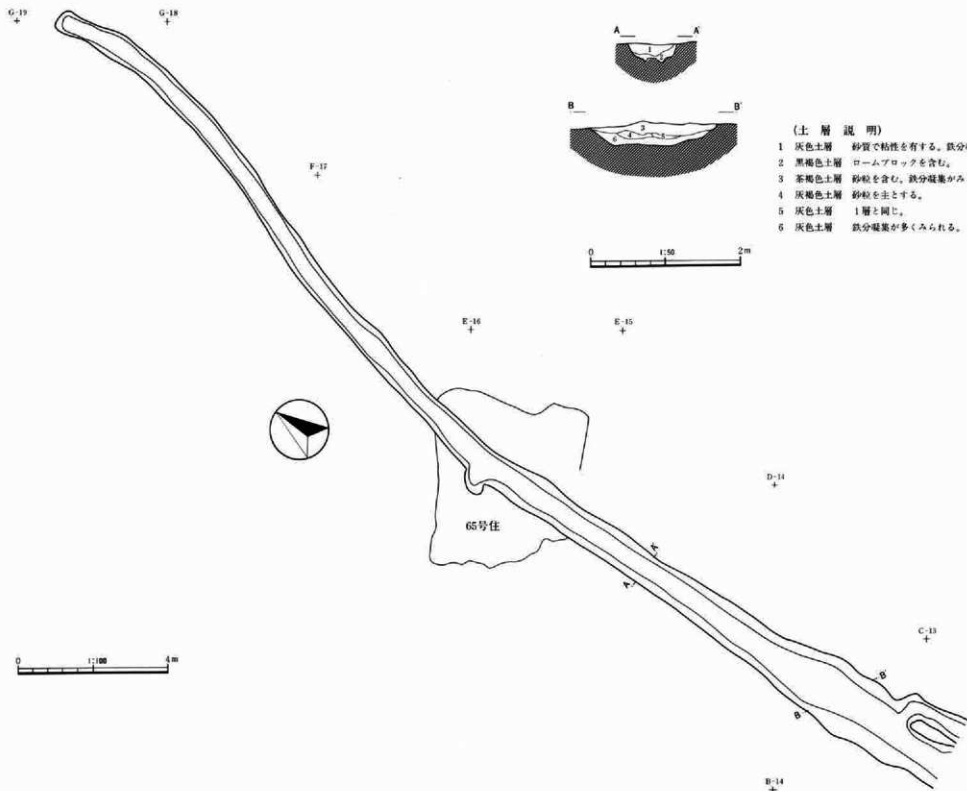
II区B-12、C-12、D-12、E-11・12グリッドで検出された。N-70°-E、N-40°-Eを指して走向し、D-12グリッドで屈曲する。北東端は早川崖に落ち込み、南西端は調査区外のため不明。上端幅は2.0-1.2m程を測る。深さ70cm前後で、断面は茶研壺の形状を呈する。南西より東方向へ傾斜している。遺物は底面及び覆土より鬼高期の杯、平安時代(10世紀以降と思われる)の甕、埴輪等が出土している。周辺には住居跡が検出されず、重複遺構は溝及び時期不明の攪乱層であることから、出土遺物は廃棄されたものと考えられよう。時期は平安時代以前ととらえておきたい。

4号溝 (第343図、PL.13)

II区B-13、C-14・15、D-16、E-16・17、F-17・18グリッドで検出された。ほぼ南北方向に走向する。G-18グリッド付近でその北端が終結する。南端は調査区外になるため不明である。上端幅は1.65m-0.50mで、深さは30-12cm程を測る。断面形状は深皿状を呈する。覆土には砂利層が堆積する。重複遺構は65号住居跡で、新旧関係は不明である。遺物は住居跡との重複付近から破片が出土しているが、これは65号住居跡に属するものであろう。

5号溝 (第346図、PL.13)

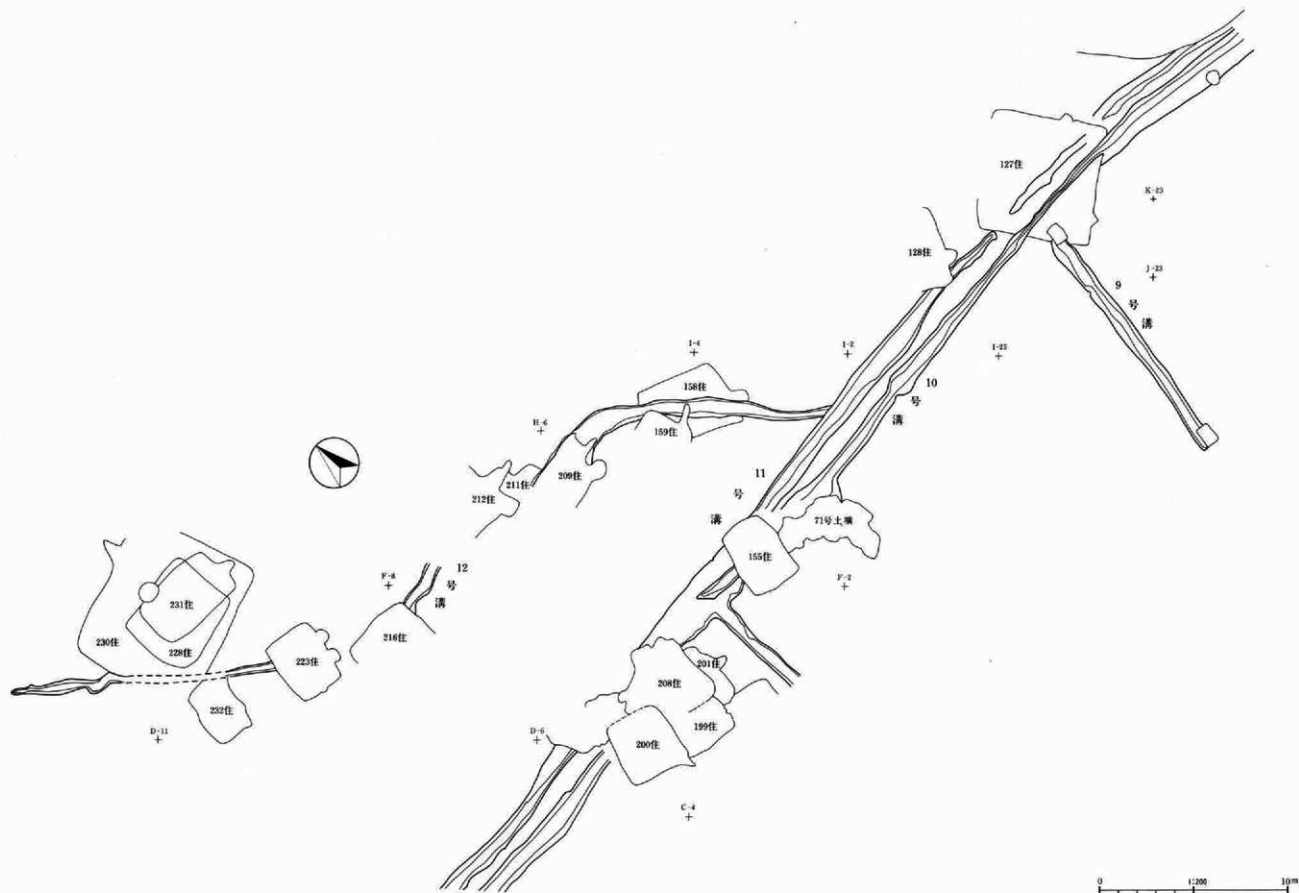
II区D-13・14、E-14・15、F-15グリッドに位置する。ほぼ南北方向でN-10°前後-Eを指して走向する。北端は早川崖、南端は攪乱層によって切られており形状や走向は不明となっている。上端幅は1.4m前後で深さは10cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。覆土には浅間山噴出の軽石(天明三年)を含んでいる。出土遺物はない。なお30号土層と重複しているが、新旧関係は不明であった。時期は近世以前のものと思われる。4号溝とはほぼ並行して走っているが、覆土や断面形状の相違から、両者は異なる時期のものと推定される。しかし同一地形面にほぼ同一方向で構築されていることから、機能的に両者が近似する性格をもっていた可能性も考えられる。



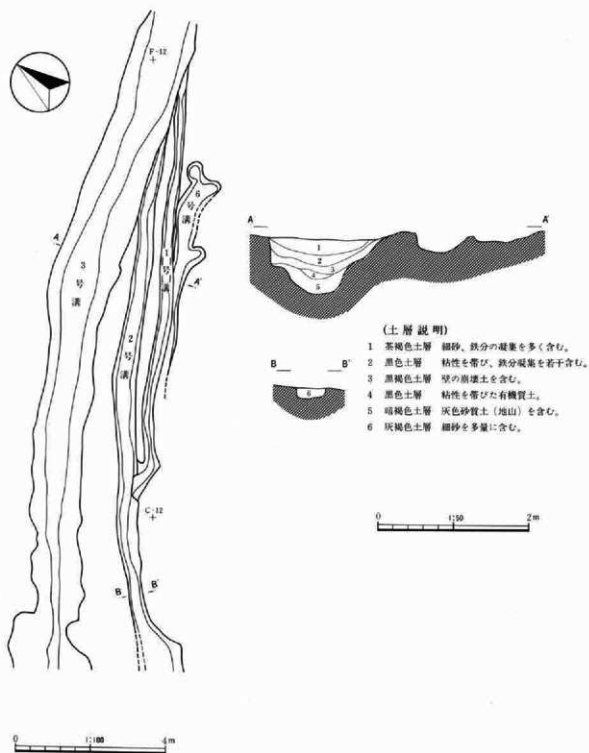
(土層説明)

- 1 灰色土層 砂質で粘性を有する。鉄分凝集がみられる。
- 2 黒褐色土層 ロームブロックを含む。
- 3 茶褐色土層 砂粒を含む。鉄分凝集がみられる。
- 4 灰褐色土層 砂粒を主とする。
- 5 灰色土層 1層と同じ。
- 6 灰色土層 鉄分凝集が多くみられる。

圖349 4号溝



第344图 9号·10号·11号·12号沟



第345図 1号・2号・3号・6号溝

6号溝 (第345図)

II区D-11、E-11グリッドで検出された。東端部はやや屈曲してE-11グリッドで終結する。南西端は1号溝に並走しながらD-11グリッドで消滅する。上端幅は30~25cm、深さ5cm程を測るが、大部分は削平されており、本来の断面形状、深さ、幅等は明らかにしえない。1号溝と一部重複するが、新旧関係は不明であった。出土遺物はなく、時期は不明である。1号溝、2号溝と近似した性格をもつかもしれない。

7号溝 (第347図)

II区G-20・21、H-21・22グリッドに位置する。北端は早川崖によって切られ、南端はG-20グリッドポイント付近で終結する。ほぼ南北方向(N-5~E)を指して走向する。上端幅は50cm前後、深さ12.5cm前後を測る。断面形状は皿状あるいは箱状を呈している。54号住居跡、64号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。遺物はなく時期は不明である。

8号溝 (早川河川改修地域調査分)

9号溝 (第344図)

III区G-21・22、H-22、I-23、J-24グリッドで検出された。北端は10号溝に流入し、南端はF-21グリッド付近で消滅する。N-9~Eを指して走向する。上端幅は80~55cm、深さ8cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。127号住居跡、7号掘立柱建築遺構と重複するが、新旧関係は不明であった。10号溝との関係は同時期における同一性格をもったものであるか、あるいは時期、性格の全く異なるものであったかは判別できなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

10号溝 (第344図)

IV区B-5・6、C-5、E-3・4、F-3、G-1・2、H-1グリッドで検出された。東端は早川河川改修地域調査区までそのまま延び、早川崖で切られる。西端はB-6グリッド付近で調査区外にはずれる。N-82~Eを指してほぼ東西方向に走っている。上端幅は2.2~0.5m、深さ20cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。覆土は暗褐色土が堆積する。遺物は出土していない。重複遺構は155号住居跡、208号住居跡、200号住居跡等で、これらとの新旧関係は土層観察から住居跡より新しい可能性も考えられるが、確実な新旧関係を裏づけるような証拠は得られなかった。なお、E-2・3グリッド付近で本溝より直行して分岐する幅40cm前後の小溝が検出された。これは走向がほぼ南北方向で、規模、形状の相似から9号溝と近似する性格をもつ可能性がある。

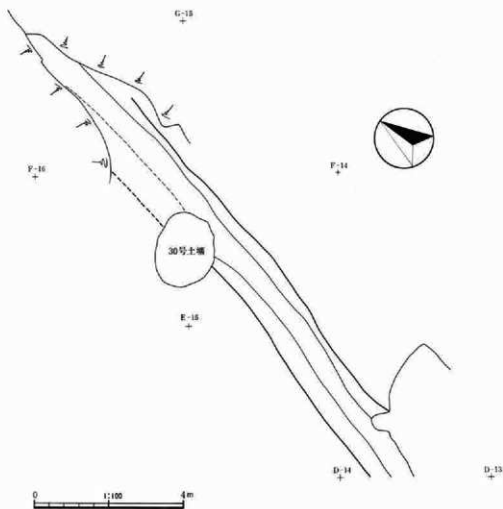
11号溝 (第344図)

IV区の10号溝の北側に接して検出された。10号溝とはほぼ並行して走る。上端幅は1.20~0.68m、深さは30cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。覆土は暗褐色土が堆積する。重複遺構は155号住居跡、156号住居跡、208号住居跡等で、新旧関係は不明であった。走向、断面形状、覆土、規模等の相似より10号溝とはほぼ同時期で同一性格の可能性が高い。出土遺物はなく、時期は不明である。

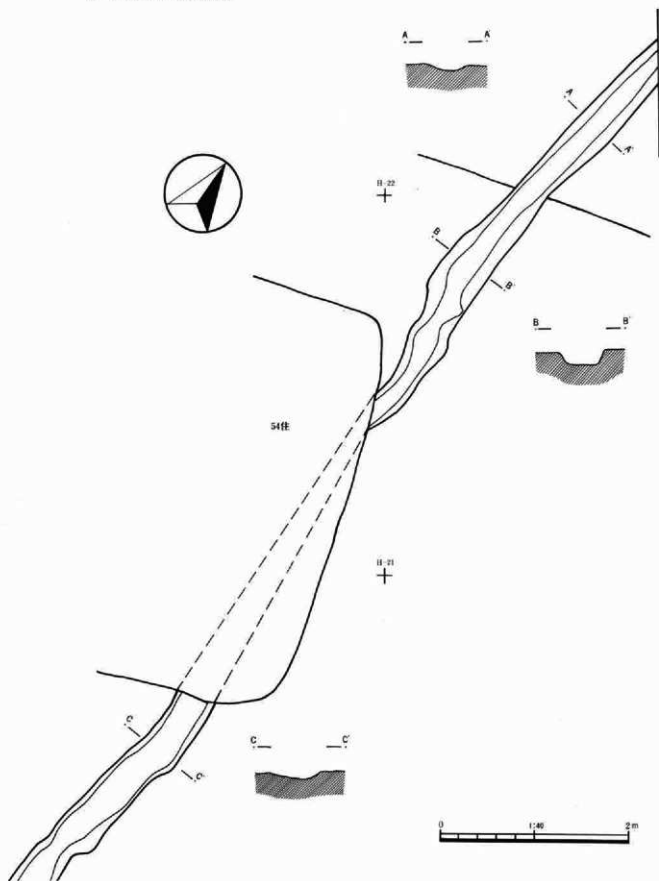
なお9~11号溝は土層と走向から近世以降の畑等に伴う区画溝の可能性が考えられるかもしれない。少なくとも水の流れた痕跡はないようである。

12号溝 (第344図)

IV区H-2・3・4・5、F-7、G-7・8、D-9・10・11・12グリッドで検出された。南東端はH-2グリッドで11号溝に合流し、D-12グリッドで終結する。H-5グリッド、E-7グリッド付近で屈曲しており、全体に蛇行して走る。上端幅は1.5~0.5m、深さ20cm前後を測る。断面形状は皿状を呈する。覆土には浅間噴出のB軽石(天仁元年と弘安4年説あり)が混入している。遺物は砥石1、紡錘車1、土鏝8が出土している。他に土器片も出土したが、形態や時期は不明であった。重複遺構は158号住、159号住、209号住、210号住、211号住、212号住、213号住、216号住、223号住、232号住、74号土壌で、判明した新旧関係は158号住、223号住→12溝であった。出土遺物、覆土、重複関係より平安時代に属する可能性が考えられよう。性格については不明である。



第346図 5号溝



第347図 7号溝

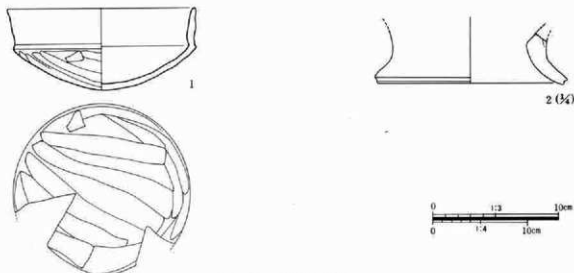
溝出土遺物 (第348・349回、PL.43)

3号溝より鬼高期の杯、平安時代の瓶、形象埴輪片が出土しており、前述の如く投棄された可能性がある。12号溝から出土した砥石、紡錘車、土鍾は重複する住居跡からの流れ込みと考えられよう。従ってこれら出土遺物は本溝の時期を限定するものではないと考えられる。

砥石(第349回-1)は下半を欠く破片で、長さ9.12cm、幅4.26cm、厚さ2.86~0.96cmを測る。上端は面取りがなされている。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩を用いている。使用面は表裏、両側面で、表面が最も使用されている。

紡錘車(第349回-2)は截頭円錐形を呈する半欠品である。下面直径は推定で4.5cm前後、高さは1.86cmを測る。中央孔の径は7.4mmを測る。孔内面に回転穿孔を推定させる横方向の擦痕が残る。なお上面孔口付近には放射状、側面には斜方向、下面には文字様の刻線がみられる。上下の縁辺部は使用痕と思われる磨減が著しい。又中央孔内面には酸化鉄らしき物質の付着がみられるが、これは紡錘に鉄製品を使用したためかもしれない。石材は黒色でやや軟質の石を用いる。

土鍾は全て紡錘形を呈し、長さ5cm前後のものとは3cm強のものとは大小2種がある。12号溝と重複する住居跡から比較的多く土鍾が出土していることから、本溝出土のものはこれらの住居跡からの流れ込みの可能性が高い。

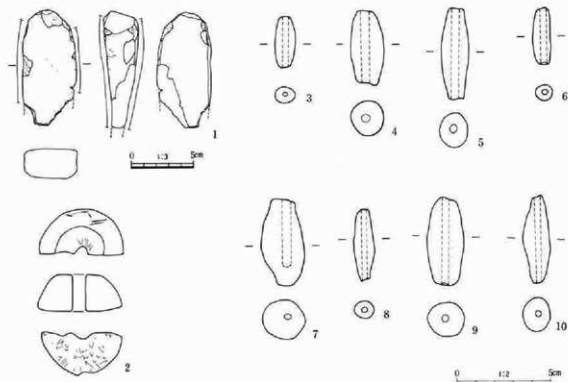


第348回 3号溝出土遺物

3号溝出土遺物観察表

図 No 写真図版No	土器種 類・形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第348回-1 PL.43	土 器 杯	底	口 (14.8) 高6.3 口縁~底部約1/4 欠	①砂粒を少量含む ② 黄褐色 ③良好	口唇内側に平坦面をつくる。口縁と内 面横ナデ。底面周辺は同心円状、中央 は一方方向のヘラケズリ。	
第349回-1	土器質 類	底	底20.2 胴部以上を欠。	①赤色酸化鉄粒、黒色 鉱物等を含む ②鉄黄 褐色 ③硬質、酸化焙	内外面とも横ナデ。外面一部に斜位ヘ ラナデ。	一部に赤斑がみら れ、二次的焼成を 受けた可能性有。

第V章 検出された遺構と遺物



第349図 12号溝出土遺物

12号溝出土土錘一覧表

No	出土位置	法 量 (cm, g)			備 考
		長さ	最大径	重量	
第368図-3	覆土	2.92	1.08	2.3	鉄分付着。 中央孔貫通せず。 端部一部欠。
第368図-4	"	4.10	1.80	14.4	
第368図-5	"	5.09	1.48	9.6	
第368図-6	"	3.20	0.99	3.4	
第368図-7	"	4.85	2.42	21.5	
第368図-8	"	3.94	1.09	4.4	
第368図-9	"	5.00	2.09	19.3	
第368図-10	"	4.97	1.52	9.0	

7 柵 列 (第350図、PL.13)

Ⅲ区D-15~M-13グリッドにかけて42基のビットが東北東から西南西方向に延びる。西側のF-16グリッド付近では列が乱れ、二重になる部分もみられる。ビットの規模は径50cm前後、深さ30~15cm程を測る。重複する170号住居跡との新旧関係は不明で、出土遺物もない事から時期は不明である。しかしその配列や位置より南東側の窪地と北西側の集落を画するものであった事は疑いなかろう。



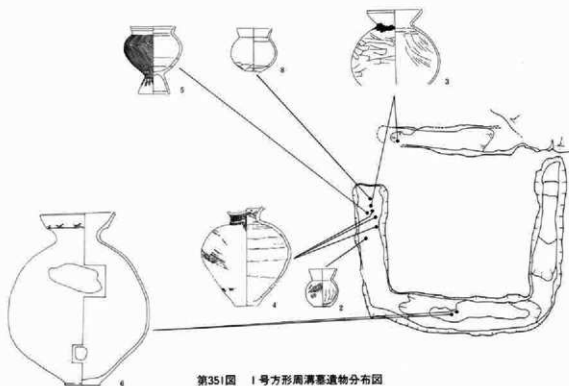
第350図 横列

8 方形周溝墓

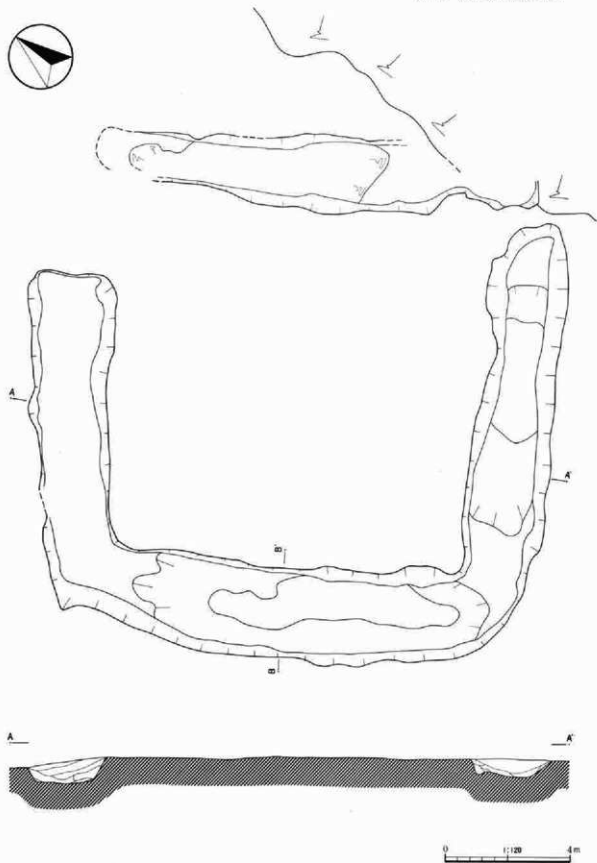
1号方形周溝墓（第351・352・353・354・355図、PL.13・42）

調査区の南東部、早川の浸食による崖際で一基が検出された。Ⅱ区C-2～5、D-2～6、E-2～6、F-2～6、G-3～5グリッドに位置する。東端は崖で切られ、北端は近現代の道路により削平されている。平面は北側と東側のコーナー部にブリッジを持ち、北東溝が分離する形状を呈する。規模は、溝の外郭が16.3×16.4m、溝の内郭が12.2×11.2mを測る。主軸方向はN-58°-Eを指す。各溝の走向はほぼ直線状であるが、南東溝のみ外郭線が外側に弱い弧を描く。溝の幅は2.50m前後で、最大幅3.16m、最小幅2.14mを測る。コーナー部分はいずれも狭い。溝断面形は碗状で、両壁は急傾斜、底面は平坦な形状を呈する。覆土は下層にロームブロックを含む黒色砂質土及び黒色有機質土、中層に軽石（赤城山給源と思われるが時期は不明）を含む黒色砂質土、上層にロームブロックと浅間B軽石を含む褐色砂質土が堆積する。土層堆積状況からマウンドの存在が予想されたが、確認はできなかった。封土の流れ込みとしては溝覆土の上～中層が想定できる。なお中央部分に11基の土壌が検出されたが、これは主軸方向、形態、覆土等の検討より異時期のものと考えられ、本遺構に伴う主体部とは認められなかった。

出土遺物は壺、埴、高杯、S字状口縁台付甕が出土しており、出土位置は南西溝中央部と北西溝に集中する。いずれも溝覆土中層下位から出土しており、これらの土器の埋没が溝の第1次堆積後であった事が知られる。壺は焼成後の穿孔や人為的な破砕と思われるもので、祭祀用としての性格が与えられよう。出土状態は埴が完形品で横転、壺は破損した破片が集中する状態であった。これらの土器の時期はいずれも古墳時代初頭のものであるが、形態や製作技法の特徴から所謂「石田川」期の中でも新しい段階に位置付けられる。

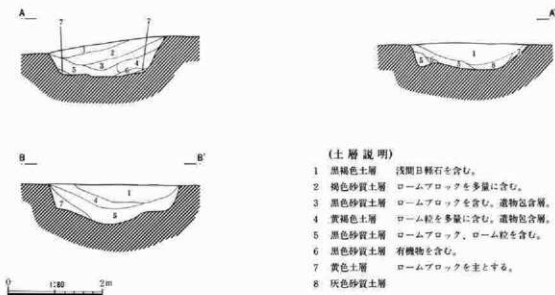


第351図 1号方形周溝墓遺物分布図

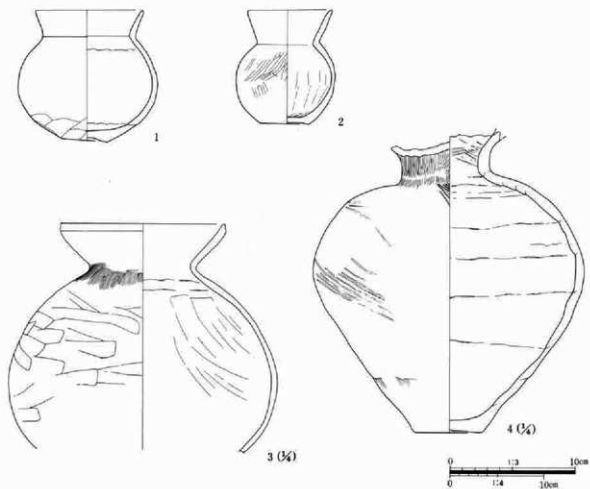


第352図 1号方形周溝基

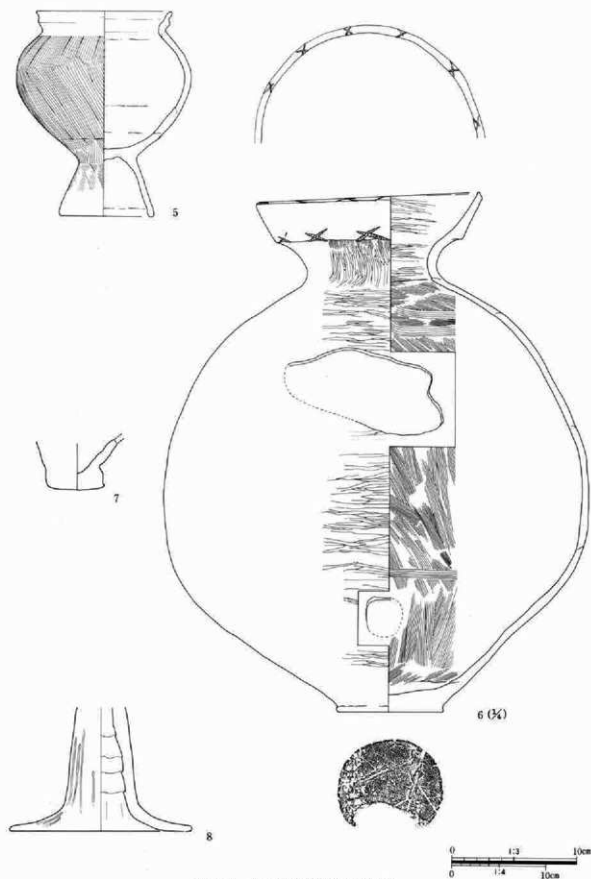
第V章 検出された遺構と遺物



第353図 1号方形周溝墓断面図



第354図 1号方形周溝墓出土遺物(1)



第355図 1号方形周溝墓出土遺物(2)

第V章 検出された遺構と遺物

1号方形周溝墓出土遺物観察表

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第36図-1 PL.42-5	土 師 埴	北西溝 第3層	口8.7 高10.3 底4.1 口縁の一部を欠	①小砂粒(石英、長石 カクセン石等)を多く 含む ②灰赤褐～赤褐 ③良好、硬質	粘土練積み上げ痕を残す。口縁～頸部 は横ナデ。胴部外面は縦方向の粗いヘ ラミガキ、胴部内面は荒削り工具による ナデ。底部内外面はヘラズリを施す。 底部はドーナツ状の上げ底を呈する。	底部外面のみ黒斑 が見られる。
第36図-2 PL.42-6	土 師 埴	北西溝 第3層	口6.5 高9.2 底4.0 完形	①小砂粒を含む ②灰 褐 ③良好、硬質	口縁はやや内湾し、底面はヘラズリ で平底に成形。口縁は横ナデ、胴部内 面は横ヘラズリ後ナデ、胴部外面は 斜及び縦方向のヘラミガキを施す。	
第36図-3 PL.42-1	土 師 壺	北東溝 北西溝 第4層	口17.3 胴下半部以下欠	①大粒砂粒を多く含む ②灰黄褐 ③普通	口唇部つまみ上げナデ、口縁～頸部内 外面はハケム後横ナデ、胴部内面は斜 方向、胴部外面は横方向のヘラズリ 後胴部付近を主体に粗いヘラミガキを 施す。	胴下半部の粘土接 合部以下が欠損 するが、焼成後底 部穿孔の可能性も ある。
第36図-4 PL.42-2	土 師 壺	北西溝 第4層 底面	高(35.0) 前後 底7.3 口縁部、胴部中位 の一部欠	①大粒砂粒を含む ② 黄褐～灰赤褐 ③普通	胴部の直立する有段口縁と思われる。 胴部は肩の著る「無花果」形を呈 する。頸部内面は横ハケム後粗いヘ ラミガキ、頸部外面は縦ハケム、胴部 ～底部内面は横ハケム後ナデ、胴部外 面は条痕様の目の粗い工具による斜方 向ハケム後斜方向ヘラミガキ、底面は ヘラズリを施す。	人為的な破砕の可 能性あり。
第36図-5 PL.42-4	土 師 S字状 口縁甕	北西溝 底面	口10.8 高16.3 底7.6 厚3mm 完形	①砂粒(石英、赤色焼 成灰砂粒等)を含む ② 灰赤褐 ③良好	口縁部は2段階の横ナデ、胴部内面は 横ナデ後底部のみ砂粒の多い粘土の補 填ナツケ。胴部外面は下半部を左上 →右下方→胴部中位の3段階のハ ケム、その後胴部～上位を右上→左下 ハケムを施す。工具の節曲単位は9本 である。胴部内面は縦を折り返した後 ナデを施す。	胴の一部に赤色塗 彩らしき痕跡が残 るが明確ではない。
第36図-6 PL.42-3	土 師 壺	南西溝 第4層	口24.2 高54.8 底11.3 胴部上位と下位 の一部欠	①小砂粒(カクセン石、 雲母等)を含む ②灰 褐 ③良好、硬質	有段口縁を呈し、口唇部つまみ上げ状 のナデ、口縁部内外面は丁寧な横ヘ ラミガキ、頸部内面は横ヘラミガキ、頸 部外面は縦ハケム後縦ヘラミガキ、胴 部内面は目の細かい工具による縦ハケ ム後目の粗い工具による横ハケムを 施す。胴外面に丁寧な横ヘラミガキ、口 唇部に12ヶ所、口縁部下端に12ヶ所目 の粗い板状工具の木口部分を用いて 「メ」状の押圧文を施す。底面には 木葉紋が残る。	胴部に横長楕円形 状、胴下半部に小 円形状の欠損部が あり、両者は相対 して位置する。人 為的な破砕も考え られよう。
第36図-7	土 師 (鉢)	南西溝	底4.5 体部上半欠	①粗砂を多く含む ② 灰褐 ③普通	外面縦ヘラズリ、内面無調整。	底面が若干丸味を 帯び、磨滅が見ら れる事から天地逆 で支脚の可能性有
第36図-8	土 師 高 杯	南東溝	胴部約1/5、杯部欠	①小砂を含む ②赤褐 ③やや不良	内面に積み上げ痕を残す。外面縦方向 及び胴部外面は荒削り状のヘラミガキ。 胴部内面横ナデを施す。	二次焼成の可能性 あり

9 遺構出土の埴輪

本遺跡出土の埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪に大別され、更に円筒埴輪は、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪に、形象埴輪は、器財埴輪、人物埴輪、動物埴輪に細別される。普通円筒埴輪は、2次調整にB種ヨコハケを^(E5)使うもの(22)と、1次調整タテハケのみのものに分類され、後者が圧倒的である。この1次調整タテハケは、一般的なハケの他にヘラ状工具によるもの(20、21)もある。

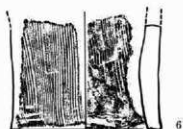
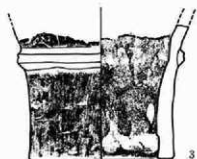
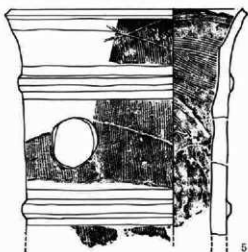
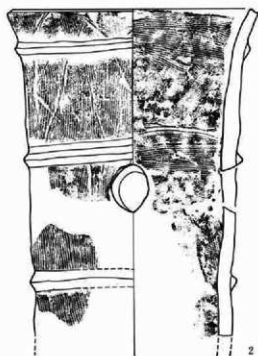
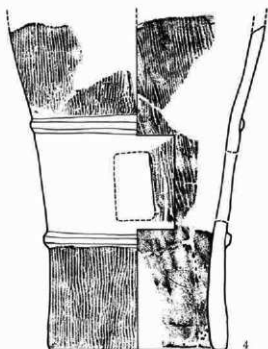
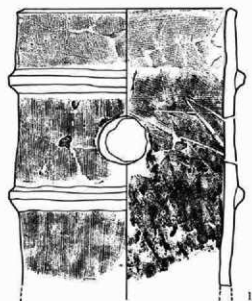
形態的には、胴径15cmで底部からタガ最下段までの高さが25cm前後と高く、細身で長身のもの(9)と、胴径20cmで底部からタガ最下段までが9cm前後と低く、更に口縁部とタガ最上段までの高さが8cmと短かいくずんぐりしたもの(2、7)がある。細身で長身のものの器高は不明であるが、ずんぐりしたものは、50cmと推定される。製作技法としては、輪台状の基部の上に粘土紐を巻き上げることを一般としている。

底部調整は、形象埴輪の基部を含めると2種類存在する。1種類は、円筒埴輪の器内の重さと変形を調整するために、底部外面は斜ヘラケズリ、内面を横ヘラケズりするもの(13)、他の種類のものは、外観を強く意識した形象埴輪の調整技法の一種とも考えられ、基部外面を高さ10cmほどの縦ヘラケズリ、内面は横ヘラケズリして端部を尖らせ、不整形となった底面を更にヘラケズリして安定させるもの(23)である。

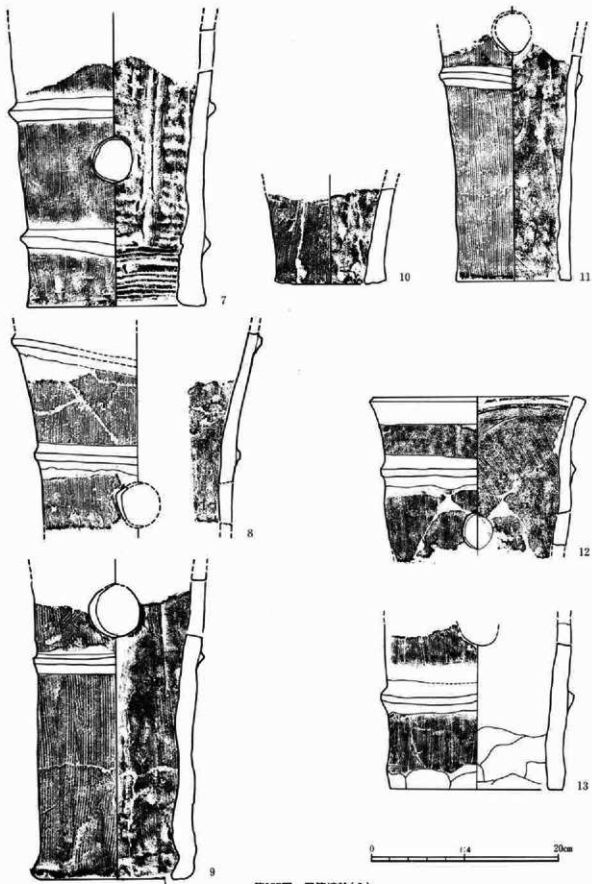
朝顔形埴輪は、花卉部と胴上部のみ(24、26)である。胴径は、18cmと小ぶり、タガの中間に一对のスカシ穴を穿つ。胴下部は不明であるが、普通円筒で細身、長身とした一群がこれに該当するのかもしれない。胴上端部から二重にひろがる花卉部は、くびれ部に補強の突帯が廻る。製作技法上、特に注目されるのは、花卉部の一段目、単口縁状に開く口縁内側に、接着強化のために鋸歯状のヘラによる刻みが施されることである。このことは二段目の花卉積み上げとの間に、若干の乾燥時間のあることを示し、興味深い。(24、PL. 49参照)

形象埴輪の基部が2点出土している。これはスカシ穴が突帯間に位置しない一群のものを分離した。一点は底径17cm、残存高22cmで上端にスカシ穴を残すもの(30)であり、上方に向かってすぼまる。他の一点は、前述の底部調整技法を持つもの(23)で、底径13cm、残存高12cmを測り、上方に向かって開く。上端部に小さなスカシ穴を穿つ。

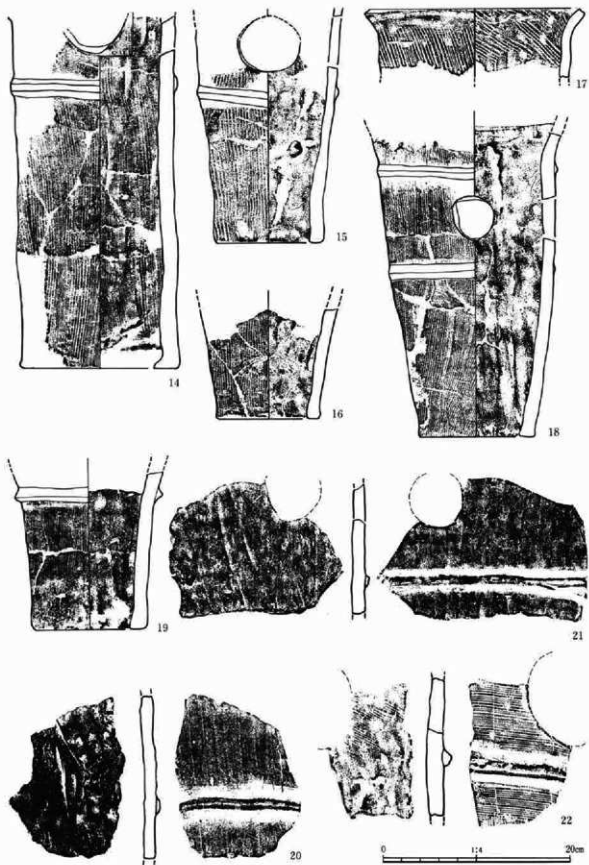
馬形埴輪は、頭部(27)、泥障(32)、脚部(33)の各部位が出土しているが製作技法、色調から同一個体ではないと考えられる。頭部は左顔の一部分で、口から目にかけて残存する。面繫は、辻金具で固定され、鏡板に連結する。引手の先端は環状にまとめる。面繫の上には部分的に赤彩が残る。泥障は粘土板をハケメのみで仕上げたもので、施文はない。脚部は、底径11cmと小ぶり、踏の切り込みを脚後方に入れる。鞍形埴輪とした一群(28、31、34)は、当地方で一般的な盾形埴輪より小形である点や、施文の違いに注目して分離した。基部(28)は円筒でスカシ穴は背面に近接して2孔を穿つ。突帯を廻らせた上に両袖を貼りつける。袖部(34)は円筒形の矢筒から「鼠」形に張り出したものであるが下端は斜め上方に切り、上端は平らにそろそろ。皮革の綴りと考えられる鋸歯状のヘラ書きが、くずれた弱い線で施されている。なお、前面に2ヶ所、背面に1ヶ所、広葉樹の葉脈が強く押されて残る。製作過程で使用されたものであろう。矢筒(31)の円筒からの袖は上下に分かれるが、そのくびれ部に皮革で背に固定する紐が表現されて、その上に赤彩が残る。人物埴輪(29)は、脚部の足結と想定した。断面は短径14cm、長径17cmの楕円形で内面の仕上げは丁寧である。以上、本遺跡出土の埴輪の時期を考えると、B種ヨコハケ技法を持つ5世紀後半から、多様な底部調整技法を持つ6世紀後半にかかるものであろう。



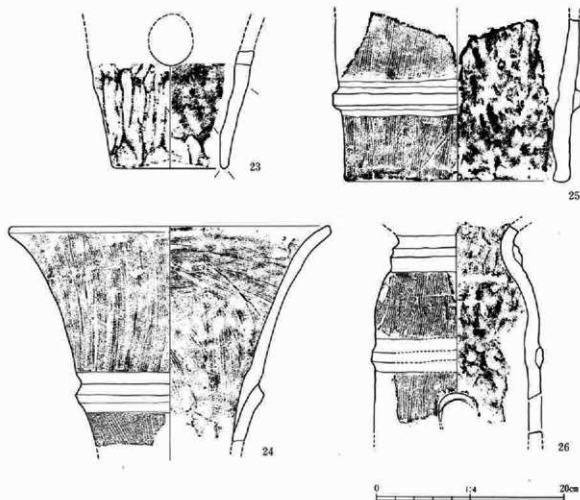
第356図 円筒壺輪(1)



第357図 円筒壇輪(2)



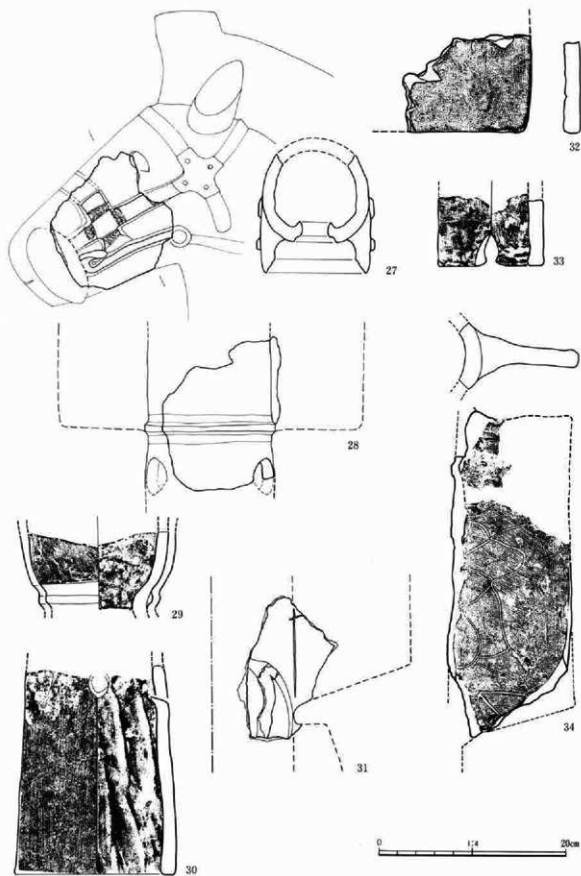
第358図 円筒埴輪(3)



第359図 内筒埴輪(4)

埴輪観察表 (写真図版における番号は挿図の番号に一致する)

図 No 写真図版No	出土 遺 構	種 類	部 位	法 量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	検 査 法 成・整形の特 徴	備 考
第359図-1 PL.46	36号 住居跡	円 筒	口縁部-胴 部	口径22	①軽石砂粒、赤褐色粘 土粒若干含む ②赤橙 色 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯 貼付	
第359図-2 PL.46	36号 住居跡	円 筒	下半部を欠 損する。	口径25	①軽石砂粒、赤褐色粘 土粒若干含む ②赤褐 色 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯 貼付	
第359図-3 PL.46	52号 住居跡	円 筒	基底部-胴 部下位	底径16	①軽石砂粒若干含む ②橙 ③良好	縦ヘラナア後突帯貼付	



第360図 形象埴輪

図 No. 写真図版No.	出土 遺構	種類	部位	法量 (cm)	①粘土 ②色調 ③構成	検 成・整 形の特 徴	備 考
第36図-4 PL.46	36号 住居跡	円筒	基底部-胴 部	底径19	①軽石砂粒、赤褐色粘 土粘若干含む ②にぶ い橙 ③良好	一次縦ハケメ(7本/2cm)調整後突帯 貼付	長方形スキャン
第36図-5 PL.46	50号 住居跡	円筒	口縁部-胴 部	口径24	①軽石砂粒、赤褐色粘 土粒少量含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯 貼付	口縁部外面 ヘラ記号
第36図-6 PL.46	52号 住居跡	円筒	基底部	底径16	①角閃石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整	
第36図-7 PL.46	73号 住居跡	円筒	基底部-胴 部	底径18	①軽石砂粒若干含む ②明赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-8 PL.46	80号 住居跡	円筒	胴部のみ	残存高12	①軽石砂粒、赤褐色粘 土粘若干含む ②にぶ い赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-9 PL.47	10号 住居跡	円筒	基底部-胴 部下位	底径15	①角閃石砂粒若干含む ②明褐色 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-10 PL.47	73号 住居跡	円筒	基底部	底径12	①赤褐色粘土粘若干含 む ②にぶい黄橙 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整	
第36図-11 PL.47	73号 住居跡	円筒	基底部-胴 部下位	底径11	①赤褐色粘土粘若干含 む ②明赤褐色 ③良 好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-12 PL.47	10号 住居跡	円筒	口縁部-胴 部上位	口径21	①赤褐色粘土粒多量に 含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ハケメ(14本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-13 PL.47	10号 住居跡	円筒	基底部-胴 部下位	底径18	①軽石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(18本/2cm)調整後突帯 貼付。底部ヘラズリ調整	底部調整
第36図-14 PL.47	10号 住居跡	円筒	基底部-胴 部下位	底径16	①角閃石粘若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-15 PL.47	10号 住居跡	円筒	基底部-胴 部下位	底径11	①赤褐色粘土粘若干含 む ②にぶい黄橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-16 PL.47	15号 住居跡	円筒	基底部	底径10	①赤褐色粘土粘若干含 む ②明赤褐色 ③良 好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯 貼付	
第36図-17 PL.47	10号 住居跡	円筒	口縁部	口径(22)	①赤褐色粘土粘若干含 む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(7本/2cm)調整	
第36図-18 PL.48	10号 住居跡	円筒	基底部-胴 部	底径12	①赤褐色粘土粘若干含 む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(11本/2cm)調整	
第36図-19 PL.48	10号 住居跡	円筒	基底部-胴 部下位	底径11	①軽石砂粒、赤褐色粘 土粘含む ②黄橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯 貼付	

第V章 検出された遺構と遺物

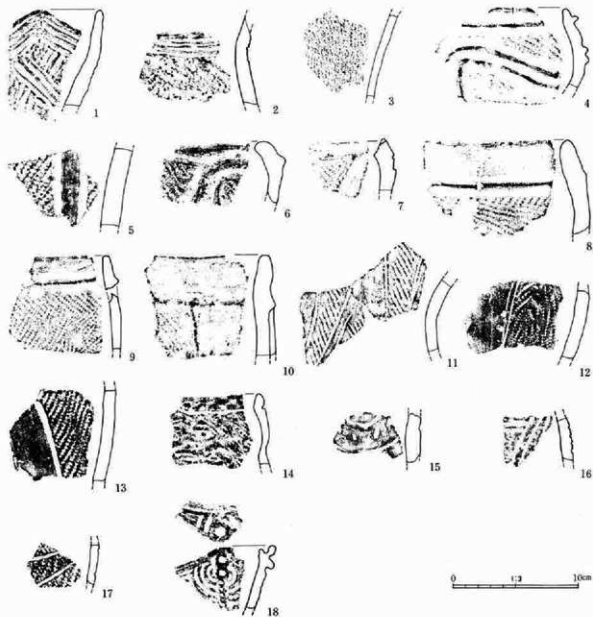
図 No. 写真図版No.	出土 遺構	種類	部位	法 量 (cm)	①粘土 ②色調 ③構成	技 成・整形の 特徴	備考
第30図-20 PL.48	79号 住居跡	円筒	胴部	残存高17	①赤褐色粘土粒若干含む ②浅黄橙 ③良好	ヘラ状工具による調整	
第30図-21 PL.48	7号 住居跡	円筒	胴部	残存高14	①赤褐色粘土粒若干含む ②橙 ③良好	ヘラ状工具による調整	
第30図-22 PL.48	44号 住居跡	円筒	胴部	残存高14	①赤褐色粘土粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	
第30図-23 PL.49	82号 土 壙	形 象	基底部	残存高12	①角閃石砂粒若干含む ②にふい橙 ③良好	一次縦ヘラズリ	底部調整
第30図-24 PL.48	16号 住居跡	朝 顔	口縁部~胴部上位	口径33	①角閃石砂粒若干含む ②にふい橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整	
第30図-25 PL.48	80号 住居跡	形 象	基底部~胴部下位	底径23	①赤褐色粘土粒を多く含む ②にふい橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整後突帯貼付	
第30図-26 PL.48	82号 土 壙	朝 顔	台版上半	残存高21	①赤褐色粘土粒若干含む ②にふい橙 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯貼付	
第30図-27 PL.49	53号 住居跡	馬	頭部	残存長 12×12	①細砂を含む ②明橙 ③良好	筒形の頭部に引手の貼付される板を補う。外面はいいいなナデで仕上げ、内面はコヒナデが残る。	丹彩
第30図-28 PL.49	58号 住居跡	靴	踵部	残存高15	①赤褐色粘土粒若干含む ②黄褐色 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯貼付	
第30図-29 PL.49	80号 住居跡	人 物	足	残存高8	①赤褐色粘土粒若干含む ②明赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(11本/2cm)調整後突帯貼付	新?
第30図-30	94号 住居跡	形 象	台部	底径17	①角閃石砂粒、粘石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整	
第30図-31 PL.49	3号溝	靴	筒、裏部	残存長 8×14	①角閃石砂粒多量を含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(15本/2cm)調整後粘土糊貼付	丹彩
第30図-32 PL.49	7号 住居跡	馬	泥障	残存長 10×12	①角閃石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(13本/2cm)調整	
第30図-33 PL.49	90号 住居跡	馬	足	残存高8	①赤褐色粘土粒を含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整	
第30図-34 PL.49	58号 住居跡	靴	裏部	残存高33	①赤褐色粘土粒を含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(13本/2cm)調整	

10 遺構外の出土遺物

縄文土器 (第361図、PL.45)

本遺跡からは前期関山式～後期堀之内I式までの土器群、及び草創期の有舌尖頭器をはじめとする少数の石器類が出土している。分布は1号方形周溝墓の周辺部に限られており、縄文時代の土壌もこの地区に認められる。土器は総数100点前後と少ないが、なかでも加曾利E式～堀之内式土器が主体となっている。

1・2は関山式土器である。口縁部が弱く内湾する波状口縁の深鉢で、口縁部に半截竹管の凹面を3条重ねて施し、以下に同集合沈線を斜格子状に施文している。2は同一個体の胴部破片で、胴括れ部に同集合沈線を廻らして文様帯を区画している。地文はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ L \end{array} \right.$ である。3は縄文LRが施された胴部破片で、諸磯a式土器であろう。4は加曾利E1式土器の口縁部破片である。縄文RLを地文に、2本の陰帯によるクランク文が



第361図 遺構外出土の縄文土器

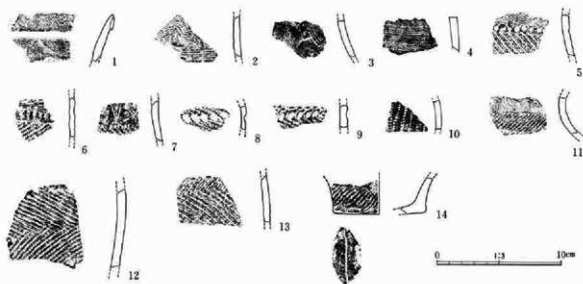
施されている。5・6は同3式土器である。5は口縁部破片で、隆帯による渦巻文の一部が認められる。6は磨消縄文帯を懸垂させた胴部破片である。地文はともに縄文RLである。7~14は同4式土器である。7・11・12・13・14は沈線で文様が施された土器で、同3式に比べてより細かい沈線が使用されている。7・13は無文帯部分がアーチ状を呈する土器であろう。11は上下からの槍先状の区画文が胴部中程で交互に入り組んだモチーフの土器である。区画内を充填する縄文は11がL、他はRLである。8・9・10は断面三角形の微隆帯で文様が構成された土器である。いずれも口唇下に幅広く無文帯がおかれ、その下を廻る微隆帯で画されている。10は微隆帯による区画懸垂文が施された土器である。縄文は8・9・10ともRLと思われる。なお9の微隆帯直下に補修孔が一ツ所認められる。15は沈線間に列点状の刺突文が施された称名寺Ⅱ式土器である。16~18は塚之内Ⅰ式土器である。18は小波状を呈する口縁部破片で、波頂部に刺突を伴う円形の貼付文を施し、その両側には刻み目状の沈線が施している。波頂下には「8」の字状の貼付文とその下に刻み目を施した微隆帯を垂下させて、「8」の字文を中心に陰刻状の太い沈線と同心円状に弧線が施している。地文は16~18とも縄文LRである。なお個別時期が判明した縄文土器で、以上の型式以外のものは認められない。

弥生土器 (第362図、PL45)

本遺跡では後期の土器破片が約20点程出土している。出土地点は調査区全域に散るが、弥生時代後期の土壌である77号土壌の周辺(IV区E-11グリッド周辺)に集中する傾向がみられる。出土したのは全て小片で全形の判明するものはない。文様は櫛波状文と附加条第1種を原体とするものがほとんどで、栃木県を中心に分布する二軒屋式に近似するものが主体をなしている。

遺構外出土弥生土器観察表

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第362図-1 PL.45-33	(破)	II区 B-20	口縁部片	①灰石、石英、黒色鉱物含 ②暗褐 ③普通	口縁折り返して外面に櫛波状文を施す。胴部と内面はナデか。	樽式と思われる。器面が荒れる。



第362図 遺構外出土の弥生土器

図 No 写真図No	土器種 砂形	出土 位置	法 口縁・器高・底径 量 残存状態	①粘土 ②色調 ③焼成	注 法 成形・整形の特徴	備 考
第3628-2 PL.45-34	(復)	I 区 B-18	頸部破片	①小砂を含む ②明褐色 ③赤褐色 ④やや軟質	先端に丸味をもつ施文具により縞線状文と横位の直線文を施す。内面はナデか。	
第3628-3 PL.45-35	(復)	IV 区 F-8	頸部破片	①長石粒を多く含む ②黒褐色 ②軟質	先端に丸味をもつ6本前後の縞線状施文具により波状文を施す。波長は大きく波形は比較的緩やか。	二軒屋式系か。
第3628-4 PL.45-36	(復)	III 区 H-17	頸部破片	①長石、石英を含む ②暗黄褐色 ③やや軟質	先端に丸味をもつ目の細かい縞線状施文具により波長の小さな細かい波状文を施す。内面は横へラミガキ。	
第3628-5 PL.45-37	(復)	IV 区 E-10	頸部破片	①長石、白色鉱物、石英を含む ②暗赤褐色 ③普通	先端に丸味をもつ縞線状施文具により波状文を施す。その下位に原体先端部を押ししながら縄文を施す。原体は軸縄RLを2条付加した附加条第1種である。	二軒屋式系。
第3628-6 PL.45-38	(復)	IV 区 D-11	頸部破片	①小砂を含む ②灰褐色 ③軟質	上位に縞線状文、中位に縄文原体先端部による押し列点文、下位に縄文を施す。原体はLR単部か附加条第1種と思われる。	二軒屋式系。
第3628-7 PL.45-39	(復)	IV 区 10号溝	頸部破片	①白色鉱物、黒色鉱物 石英を含む ②明褐色 ③普通	上位に先端の丸い縞線状施文具による波状文、下位に縄文を施す。原体は軸縄RLにL2条を付加した附加条第1種と思われる。内面ナデ。	二軒屋式系。
第3628-8 PL.45-40	(復)	IV 区 H-9	口縁部片	①小砂を含む ②暗黄褐色 ③普通	軸縄RLにL2条を付加した附加条第1種を原体として縄文を施し、中位に原体先端部を押しした列点文を横位に施す。内面ナデ。	二軒屋式系。
第3628-9 PL.45-41	(復)	IV 区 E-9	口縁部片	①石英、長石を多く含む ②黒褐色-黄褐色 ③ やや軟質	軸縄RLとLR2種の附加条第1種を用いて羽状縄文を施し、その中央に原体先端部を押しした列点文を施す。	二軒屋式系。
第3628-10 PL.45-42	(復)	IV 区 H-8	胴部破片	①小砂を含む ②黒褐色 ③普通	縄文のみ施す。原体はLを巻いた単縄絡条体と思われる。	
第3628-11 PL.45-43	(復)	III 区	胴部破片	①小砂を含む ②黒褐色 ③普通	上位は無文、下位はLR単部の原体を用いて斜縄文を施す。	
第3628-12 PL.45-44	(復)	IV 区 E-10	胴部破片	①長石、石英等小砂を含む ②外-黄褐色 内- 黒褐色 ③普通	LR、RLを軸縄とした2条付加の附加条第1種を原体とし羽状縄文を施す。軸縄の圧痕はわずかに認められる。	二軒屋式系か。
第3628-13 PL.45-45	(復)	III 区 H-16	胴部破片	①長石、石英を多く含む ②赤褐色 ③普通	12と同様に反対側の附加条第1種を用いて羽状縄文を施す。軸縄圧痕が12よりも明瞭に認められる。	二軒屋式系か。
第3628-14	(復)	III 区	底 (7.4) 底部約1/4片	①小砂を含む ②暗褐色 ③普通	附加条あるいは単縄絡条体を原体とした縄文を施す。底面に木炭痕が明瞭に残る。	

石器 (第363・364図、PL50)

本遺跡より出土した石器は総数47点で、その内訳は有舌尖頭器1・打製石斧5・剥片の周縁に粗い打調の調整加工を施す打製の石器4・磨石1・石棒片1・石核1・剥片33点である。これらの石器は有舌尖頭器を除いて、Ⅱ区、1号方形周溝墓の周辺から出土した。遺構に伴って出土したものはないが、石器の分布は縄文中期(加曾利E4)の所産である土壌の分布に近接している。以下、図示し得た各々について記述する。

第363図-1 有舌尖頭器。Ⅳ区、ソフトローム層より単独で出土。先端部、および、舌部をわずかに欠損する。側縁は概ね直線的形状を呈すが、右側縁はわずかに丸味をもつ。返し部は比較的浅い。調整加工は丁寧に施されているが、一部にステップ状の剥離痕が見られる。チャート製、4.2g。

第363図-2 は楕形打製石斧。横長の不定形剥片を素材とする。刃部は表→裏面側への調整加工により直線的形状となっている。側縁の調整加工は右側縁で裏→表面側の順に、左側縁では表面側のみ施される。黒色頁岩製、95.0g

第363図-3・4・8 は分銅形の打製石斧。本形態の打製石斧は扁平な自然石、あるいは、板状に剥離する性質をもつものを使用している。これは機能的な制約による素材の選択であると思われ、小形のものに扁平な自然石が、大形のものに板状に剥離する石材が対応する可能性がある。3は器体下半部欠損。黒色頁岩製、98.1g。4は器体上半部欠損。凝灰岩製、73.4g。8の刃部には使用による結果と思われる大きな剥離痕が観察され、全体の形状が歪んだものとなっている。「挟り部」は左側縁に比して右側縁で鋭い。頁岩製、511g。

第363図-6・7・9・10の4点は、剥片の周縁に粗い調整加工を施すことにより作出された打製の石器である。6は側縁に粗い調整加工が施される。欠損品であり、全体の形状は不明である。黒色頁岩製、32.8g。10は加熱により剥離された剥片を素材としたと思われ、側縁に粗い調整加工が施される。右側縁部に「挟り」に類似する部分があって、打製石斧としての要素も否定できない。刃部は微細な剥離痕よりなる。器体の上部欠損。チャート製、27.7g。7は巾広の不定形剥片を素材としたもので、側縁部に粗い調整加工が施される。刃部は剥片の縁辺をそのまま利用したものと思われる。黒色頁岩製、70.6g。9は巾広の不定形剥片を素材としたもので、周縁に粗い調整加工を施す。器体の左側縁部は剥片を折断した後、微細な調整加工が施されている。安山岩製、47.1g。

第364図-11は黒色頁岩製の不定形石核である。正面の最も新しい剥離面は、剥離面の中央部にフィッシャーが集中し、「割れ円錐」が生成されたかのような観を呈する。「割れ円錐」のなす角度は114°を測る。他の剥離面のあり方から作出された剥離面を次々に打面とする(結果として90°に打面転移を行う)ものと思われる。表面の自然面には打痕が見られる。黒色頁岩製、262.4g。

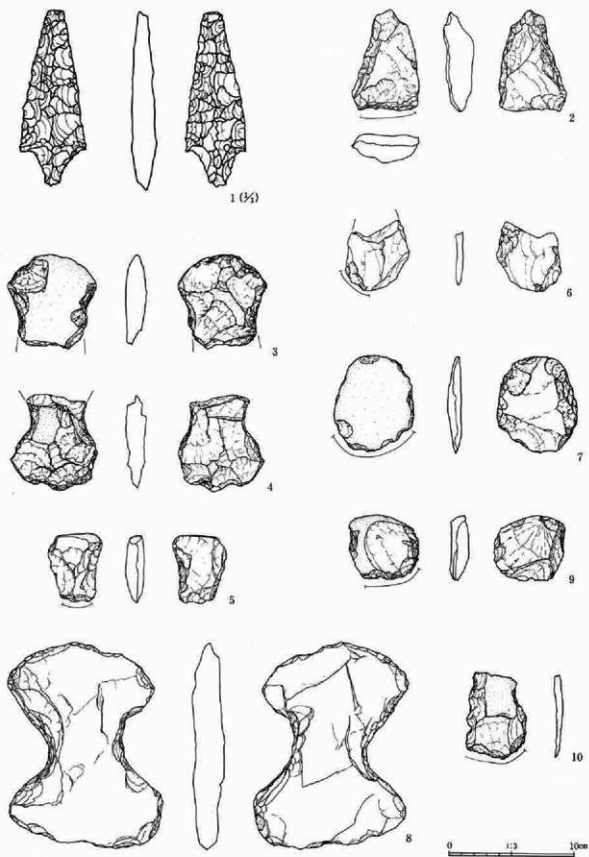
第364図-12は雲母片岩製の石棒片か。剥離面が見られる側に著しい磨減痕があること、形状が整っていること等から判断した。63.8g。

第364図-13は扁平な安山岩製の磨石である。側縁の一部にわずかに打痕が見られる。229.6g。

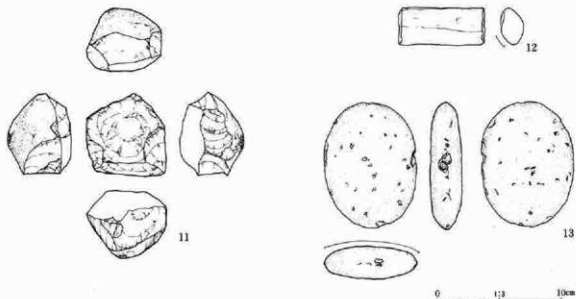
以上が出土した石器の概要である。調査は路線内という限定された範囲のうえ、台地の縁辺が河川による浸蝕を受けているといった制約があり、多くを述べることはできないが、若干をまとめてみたい。

単独で出土した有舌尖頭器から、遺跡内に生活跡の存在を求めることはできない。周辺には神谷、中江田^(註6)遺跡B地点をはじめとして、先土器時代終末から縄文時代初頭にかけての遺跡が知られており、石器が単独の出土^(註7)とはいえ、地域における遺跡のあり方のひとつとして理解しておきたい。

有舌尖頭器以外はいずれも縄文時代の石器で、包含層からの出土である。ここでは、石器と剥片の関連を



第363図 遺構外出土の石器(1)



第364図 遺構外出土の石器(2)

指摘しておく。出土した石器のうち、剥片類には石器作出に伴う調整剥片の類が全く存在しないこと、剥片の周縁に調整加工を施す石器(第363図6・7・9・10)の素材となり得る原石を輪切りにしたと思われる剥片が存在することの2点を指摘できる。

前者の石器製作に伴う調整剥片は少なくとも遺跡内で石器製作が主体的に行なわれなかったことを推測させ、遺跡が縄文期に関しては恒常的居住域としてとらえにくいという遺構、遺物のあり方と関連するものと思われる。また、後者の石器、および、その素材としての剥片の存在は剥片剥離から石器製作までを一連にとらえ得る可能性を示すものと思われる。これまで縄文期の石器の多くは、いくつかの定形化した石器を除いて「剥片石器」あるいは「不定形石器」としてとらえられてきたものがほとんどであり、それらについては全く言及していない報告例も多い。ここに図示した4点の石器は旧来においては「剥片石器」・「不定形石器」としてとらえられてきたものであるが、累下の他遺跡を含めてこの種の石器、および、その素材となる剥片は伴出する例が多いこと、少なくとも前期以後の石器群に一般的な存在であること、また、機能的にはスクレイパーの範疇に属し、定形化した石匙を補完するものとしてとらえられるものと思われる。上述の理由により4点の石器は石器器種としてとらえ得る内容をもつものと思われるが、具体的な分析は名称の問題を含めて今後の課題としておきたい。

〈註〉

- 1 群馬県・長野県境の活火山である浅間山から噴出した軽石。噴出時期は天仁元年(1108年)説と弘安4年(1281年)説がある。
- 2 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』8(昭和53年)で命名される。
- 3 柿沼幹夫氏「V-結露1、住居跡について」(『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書田下田・諏訪』埼玉県教育委員会昭和54年)によれば、カマド出現以降の住居跡の入口は、東側あるいは南側に限定されるものが多いとされており、その論拠にされたカマドの位置に見られる傾向が本遺跡でも同様に看取できることから、氏の見解に従い出入口の位置を東側あるいは南側と考えたい。
- 4 既刊された『群馬県史研究』8(昭和53年)所収の「群馬県下の歴史時代の土器」で「三ツ木遺跡220号住居」の遺物として扱った須恵器高台杯、杯、盤、古付壺は注記ミスより212号住居跡出土である事が判明した。ここに記してお詫びしたい。
- 5 川西玄幸「岡田塚輪廻論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 昭和53・54年
- 6 中東耕三、坂本久純「神谷遺跡の爪形軟土器と周辺遺跡」群馬考古通信第8号 1983年
- 7 県立博物館「群馬の旧石器」『野尻湖発掘展-水洞時代の狩人を求めて』1981年

第VI章 調査の成果と問題点

三ツ木遺跡は早川の右岸地城370mの区間にわたって調査した遺跡である。その遺構は調査範囲が細長いこともあって地域毎にかなりその様相を異にしていることが判明した。従って周辺の遺跡との関連性や相違を確認するためにも多面的な考察が必要となるであろう。そうした意味では、それら周辺の遺跡と比較、検討する中でなされないと正確を期することができない事は間違いない。そのため本稿は本遺跡の一応のまとめとして、遺構、遺物の状況やその変遷、地形的な変化と遺跡等の対応関係などを中心に述べ、あわせて将来のまとめの方向についてふれておきたい。

1 遺構の時期的な分布と旧地形との関連

三ツ木遺跡の範囲は長さ370mにも及ぶため、遺構の分布や種類についてみると必ずしも単一でない状況を取ることが出来る。特に早川は最近まで暴れ川であったことを裏付けるように旧地形はかなり複雑であったと思われる。その変化は大別して三つに分けることができようである。即ち、一つは洪積台地で、その基盤を形成する関東ローム層が堆積している部分である。その意味ではこの区域は昔から安定した地形を呈していた部分である。二つめはローム層を基盤としながらも、その上に黒色の粘質土層をのせている部分である。この区域はローム層が削られて、多少の変化をみせた区域である。三つめは白色砂質土が黒色沖積土の上にある部分である。この下層はローム層がほとんど削られており、基盤層はシルト状の粘質土である。おそらく、当初の旧地形は水流が削った部分とみられる。

これらの変化をグリッド別に区分し、それぞれの遺構分布の状況を概括すると下表のようになるであろう。区分は調査グリッドによっており、南東の下流から北上する形でまとめられている。

区分	グリッド区画	旧地形の特徴	遺構の状況等
A	I区7グリッド ～II区5グリッド	ローム層を基盤とする区域遺構は、古墳時代前期から後期、奈良、平安時代と分かれるが、中世には墓地がある他は耕化化した。	遺構の状況では、まず古墳時代前期に墓域として形成されたが主体はより北にのびていた。その後、古墳時代後期に集落として発展したが、古墳時代後半に大きな流れで北及び東を削られた。遺構がそれにより半分残ったものもある。
B	II区6グリッド ～II区15グリッド	ローム層の上層に黒色沖積土がのる区域である。特に古墳時代前期に一時的に上面が押し流されて削平されたとみられる。	ほとんど、古墳時代前期以降、南北方向に小さい湿地帯が入りこみ、遺構が形成されない。早川の蛇行が直に台地を横切る方向に流れた可能性がある。
C	III区15グリッド ～III区7グリッド	ローム層上に黒色沖積土がのる区域。ローム層上の黒色土はうすく、早川によりロームが削られたとみられる。	集落は早川の中のにびていたが地形が削れてしまったため、古墳時代の住居が一部残っているが、他は奈良～平安時代に土地が安定して集落が拡大した。
D	III区8グリッド ～III区15グリッド	灰白色砂質土層積層のある地域。平安期にようやく地形が安定したものとみられる。	住居跡は平安後期に入りようやく形成されている部分であるから少なくとも9世紀ごろまでは、早川の流路が一部小さい流れが入りこんでいた部分とみられる。
E	III区16グリッド ～IV区22グリッド	A区と同様、本遺跡中では最も安定したローム層を基盤とする地域である。IV区15グリッド以北は黒色沖積土地域へ。	最も早くから安定した地域で集落は最も発達した。特に奈良～平安時代にかけては集落の中心的な階層が居住した地域で独立柱群が奈良～平安に及びその周辺に整った住居が並ぶ。

2 集落の変遷と時期的な特質

前項でまとめた区分に従って集落の変遷を追ってみよう。

A区—まず、方形周溝墓で台地が墓域として開発される。状況的にみてこの1基に留まるとも考えられない事から、おそらく早川方向（左岸寄り）にのびていた墓域が河川により削られたものとみられる。4世紀後半の時期に形成された墓域は現在の早川左岸域にのびている可能性がある。しかし、その規模はあまり大きくなかったとみられる。

集落が形成されるのは古墳時代後期前半（5世紀末）以降であるが、特に6世紀に急激に拡大した。その基盤は扇状地扇端部の湧水域の湿地帯が安定することによるものとみられ、この地域全般の傾向とみることができる。そして7世紀前半には更に発展して、調査区の中では最も濃い住居分布を示している。しかし、奈良時代以降はその中心E区に移行していく。おそらく河川の変化に起因するものであろう。

B・C区—古墳時代末期から集落が形成されている。このことより早川が、6世紀段階において一部広瀬川（旧利根川）の水を流したのではないかと推定される。その原因となったのはやはり火山の大噴火によるものである可能性が強く、榛名山二ツ岳の噴火によるものが最も大きな原因と考えられる。それは一部、この流域に沿って榛名山山麓の角閃石安山岩を利用した古墳の石室が存在することがそれを証明している。しかし、この時期にはまだ白色砂質土層の堆積部分は、河川が湿地で人が居住できる状況ではなかったものとみられる。

D区—この部分は平安時代後半の住居しか検出されない。このことからすると、この部分は早川の水が粕川・広瀬川と完全に分離し、流れが安定した時期に当るとみられる。この時期の住居ではカマドに古墳の埴輪を持ち込んでいる点が注目される。その供給源は上河名か小角田古墳群であろう。

E区—律令期に入った時点の中心はE区である。Ⅲ区及びⅣ区で集中して発見された掘立群を中心とした集

落構成は時期的には奈良時代後半期以降とみられるが、掘立3群の内、Ⅲ区・Ⅳ区にまず掘立がつけられる。郷とすれば、「河名郷」の一部とみられるが、郷戸主階層の屋敷構えが掘立柱建物群になった可能性がある。その内、一列に並列する様相をみせるⅣ区の配置と「コ」の字形の屋敷構えに横列が付属するものは同じ郷戸主階層における力関係にも相違があった事も推察させて興味ぶかい。特にⅢ区のもの、平安時代になると廂をもつものが出現すること、南側の窪地に沿って横列をめぐらして5軒ほどを一群とした中心的なものを想定させる。

それに比べⅣ区のは、当初倉庫と一般掘立柱建物が1棟ずつあり、後に東側に並列させて一直線上にのぼしていく掘立柱建物の配置は同族の郷戸主階層の建物である可能性が考えられる。この傾向は周辺の小角田前・西今井遺跡でも同様二形態のものが認められるようで、今後検討を要するであろう。

竈穴住居の時期別数

時期	住居数	備考
古墳前期	E区 2軒	A区墓域
古墳後期	A・C・E区 47軒 ₄₉	A区中心
奈良時代	A・C・E区 56軒 _{1・5}	E区中心
平安時代	A・C・E区 95軒 _{2・9}	Ⅱ区～ Ⅳ区 中心
不明	35軒	

須恵器の胎土分析について

今回の須恵器胎土分析は、三ツ木遺跡出土遺物中に、埼玉県の窯跡から搬入された可能性を持つ須恵器があり、その傾向把握に努めたものである。本遺跡210・247号住居跡からは、末野窯跡群の製品とよく似た須恵器が出土しているが、これらの須恵器は群馬県東部の諸遺跡で多量に出土している。また216号住居跡からは白色針状物質を含む土製紡錘車(PL44)が出土した。南比企窯跡群の製品の搬入が考えられるが、荒砥上川久保遺跡^(注1)で白色針状物質を含む杯の出土例があり、末野ほど多量ではないが、群馬県東部の遺跡に流布するものと思われる。これら、埼玉県内の窯跡の製品と推測した須恵器に、理学的分析による検討を加えることを目的とし、下記21点の資料について、群馬県工業試験場 花岡純一氏に胎土分析を依頼した。

No.	器形	出土遺跡
201	高台付杯	笠懸村 山際瓦窯跡
202	蓋	〃
203	杯	吉井町 西武団地内窯跡
204	杯	〃
205	杯	南比企窯跡群
206	裏	〃
207	蓋	〃
208	裏	赤沼11支群
209	杯	〃
210	杯	比砂田沼窯跡群
211	杯	〃
212	蓋	藤岡市 たら沢窯
213	杯	〃 金山瓦窯
214	三ツ木遺跡	出土遺構不明
215	杯	〃 210住-5
216	高台付柄	〃 210住-11
217	高台付柄	〃 210住-13
218	高台付柄	〃 200住-1
219	杯	荒砥東原遺跡 6住-1
220	杯	荒砥上川久保遺跡 5区5住-1
221	杯	〃 6区1井-3

○201・202は砂粒の混入の多い、重層感のある須恵器である。「笠懸村史」(原始古代)1983 若月晋吾 に詳しい。8世紀の製品である。

○203・204は吉井町教委 茂山由行氏の採集品である。灰色を呈した緻密な胎土の須恵器で、吉井窯跡群の典型とは言えない。8世紀の製品である。

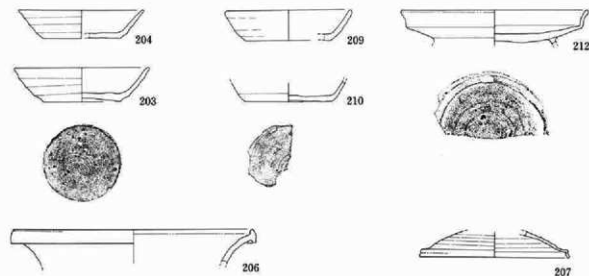
○205-211は、表模器である。いずれも白色針状物質をわずかに含んでいる。なお、南比企窯跡群については、埼玉県立歴史資料館の継続的女研究調査があり「埼玉県における古代窯業の発達③-⑥」に詳しい。8世紀代の製品である。

○212・213は藤岡市教委 志村 哲氏の採集品である。大粒の夾雑物を含む、ボツボツした粗い胎土の須恵器で、末野窯跡群と類似している。

○214-218は三ツ木遺跡出土須恵器で、すべて本報告で取り扱ったものである。9世紀末-10世紀前半にかけての製品である。

○219は群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥東原遺跡」(昭59)で報告した須恵器である。

○220-221は同事業団「荒砥上川久保遺跡」(昭57)で報告した須恵器で、白色針状物質をわずかに含むものであり、210・211の資料と極めて似ている。8世紀中葉から後半にかけての製品である。



第365図 胎土分析資料

須恵器の胎土分析（蛍光X線分析）について

群馬県工業試験場 花岡 純一

試験方法および測定条件

分析用試料は各試料を10 μ m以下に粉砕し、5～10gを径4cmの円板に成型し、分析用試料とした。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電機(株)KG-4型

X線管球：銀対陰極 50KV, 20mA

分光結晶：Fe, Sr, Rbには LiF ($2\alpha=4.028\text{\AA}$) Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT ($2\alpha=8.808\text{\AA}$)
MgにはADP ($2\alpha=10.648\text{\AA}$)

検出器：LiFを使用したときS, C. EDDT, ADPを使用したときP, C.

時定数：1

計数法：Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートによった。Si, Al, Mgは定時計数法によった。チャートは4 $\frac{1}{2}$ /minとした。

胎土分析表

波光分析器：積分方式

測定器：FeK α , CaK α , KK α

TiK α , SiK α , AlK α

MgK α , SrK α , RbK α

の各1次線を使用した。

X線照射面積：20mm ϕ

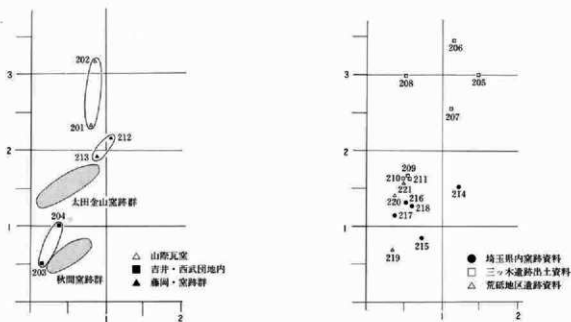
標準試料：Na2O3, Na2O5, Na210, Na215

を化学分析し、標準値とした。

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/ K	Sr/ Rb
201	64.6	22.5	7.45	0.96	1.02	1.01	1.48	0.79	2.31
202	62.7	24.4	7.73	0.93	0.97	0.62	1.34	0.83	3.17
203	75.2	16.2	2.75	0.99	0.29	1.28	2.25	0.14	0.51
204	69.6	20.6	4.26	0.96	0.52	0.77	1.64	0.36	1.00
205	69.3	20.6	5.36	1.14	0.89	0.60	0.71	1.47	3.00
206	70.6	17.8	7.06	1.08	0.82	0.61	0.82	1.16	3.45
207	72.1	19.7	4.83	1.18	0.73	0.57	0.77	1.11	2.55
208	70.3	20.9	4.14	1.15	0.38	0.54	0.82	0.52	2.95
209	71.8	16.0	5.05	0.94	0.55	0.71	1.17	0.54	1.67
210	71.8	18.5	4.65	0.96	0.51	0.90	1.20	0.50	1.64
211	68.9	22.8	4.26	1.04	0.67	0.70	1.33	0.58	1.62
212	65.7	22.7	6.85	1.28	0.87	0.68	0.94	1.07	2.15
213	64.1	18.3	11.35	1.31	0.85	0.68	1.13	0.88	1.92
214	64.0	20.8	8.76	1.25	1.08	0.92	1.04	1.21	1.52
215	59.5	22.8	9.53	1.29	0.94	0.67	1.52	0.71	0.85
216	60.3	26.2	7.52	1.14	0.77	1.06	1.75	0.51	1.30
217	62.1	24.4	7.60	1.12	0.55	0.85	1.68	0.37	1.14
218	62.1	23.2	7.82	1.12	0.81	0.89	1.59	0.59	1.26
219	60.6	25.2	9.54	1.23	0.53	0.82	1.79	0.34	0.69
220	69.2	20.1	5.32	0.92	0.45	0.70	1.34	0.38	1.40
221	70.2	19.5	5.60	1.03	0.58	0.69	1.37	0.48	1.58

以上の結果を表に示したものが第366図である。秋間と太田金山の資料は「塚廻り古墳群」より転用した。これより、末野製と推定した三ッ木遺跡出土須恵器は、量産され、広く分布する土器であるにもかかわらず、その分析値は群馬県内の主要な窯跡の傾向とは合致せず、末野製とする考えを一步前進させる数値を示した。今後、末野窯群の資料を分析し、確認作業を実施したい。

荒砥上川久保遺跡出土須恵器は、南比企窯群の集中分布域にドットされ、肉眼観察の類似性に裏付けがされた。しかし、このドットの位置は、太田金山窯群の分布範囲と重複し、胎土分析によるデータから直接産地を同定することの限界が改めて明らかになった。肉眼観察の最大の視点である白色針状物質の夾雑についても、群馬県内の窯跡についての検討がなされておらず、推測の前提さえ築かれていない段階ではあるが、今回の分析結果を、南比企窯群製須恵器の県内搬入を想定する資料の増加と捉えたい。



第366図 群馬県内の主要な窯跡資料

8世紀代の群馬県東部窯業地帯は、活発な瓦生産の影響もあり、須恵器生産が盛んである。このような地域への南比企からの須恵器搬入について、疑問点が多い。

しかし9世紀末から10世紀にかけて、この地域の須恵器生産は低調であり、県内の主要窯業地帯は、吉井・藤岡の群馬県西部へ移っている。末野地区の須恵器が、国を超えて群馬県東部の諸遺跡へ搬入されたとしても、秋間や吉井・藤岡の窯跡群との距離を比較すれば、不自然さは感じられない。また、同様の視点から、麓山周辺に代表される栃木県西部の窯跡群についても、十分な注意を払う必要があろう。



第367図 窯跡位置図

〔註〕

- 1 宇津川徹 上條明去「土器胎土中の動物堆積体について」『考古学ジャーナル』181・184(1980)に詳しい。
- 2 『荒砥上川久保遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(昭和57年)
- 3 『藤岡古墳群』群馬県教育委員会(1980)

第Ⅶ章 結

三ツ木遺跡は、古墳時代から平安時代を中心とする集落が中心で、旧地形と遺構分布の関連など興味ある問題や又土器や遺構からその変遷や特質について貴重な成果を提供した。特に律令期への過渡期、律令期の集落構成、掘立柱建物の配置とその性格などについて考えさせる内容をもっている。

しかし、これらは、この遺跡単独で考察すると、誤りを犯すおそれがあるので、周辺の遺跡の内容の解明を待って結論付けたいと考え、本報文ではあえて触れなかったことを断っておきたい。

それにしても250軒にも及ぶ住居跡とその出土遺物、14棟もの掘立柱建物とその配置など、その実態をまとめてみると、今更ながらその偉容に圧倒される。内容的にみるとE区と称した部分の様相は北に接する西今井遺跡との関連を物語っており、むしろそれと同時に検討されるべきものと考えている。

こうした、平安時代後期の集落の様相が、かなり広範にわたってこの周辺の遺跡で調査されていることは南に接する中世荘園との関連を考える上で貴重な西今井館跡との関係も推察される。更にその後、新田荘に組み込まれる郷の中に三ツ木も含まれていることからすると、この遺跡も当然「新田荘」の一部に入ったことは明らかである。その前段階の集落構成やその文化内容の実態は注目されるべきであろう。

本報文を草するに当たり、改めて本調査に便宜を図られた建設省高崎工事事務所関係者各位、群馬県河川課伊勢崎土木事務所等関係機関の各位に対し衷心より感謝申し上げ、また、直接、調査に際し協力いただいた佐波郡境町教育委員会及び作業に当たられた各位の労を多として筆をおく。

写 真 图 版



I区全景



II区全景



III区全景



III区南东半



III区西半



IV区全景



1号住



3号住



4号住



6号住



7号住



8号住



10号住



11号住



13号住



14号住



17・18号住



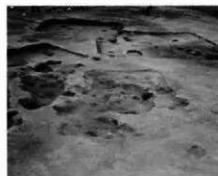
19号住



20号住



21号住



22号住



23号住



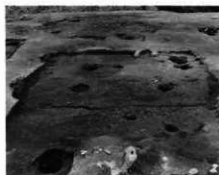
23号住貯蔵穴



24号住



25号住



26号住



28号住



29号住



30号住



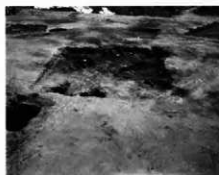
31・32A・32B・33号住



35号住



37号住



38号住



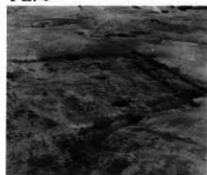
39号住



39号住貯蔵穴



41号住



42A・42B号住



43号住



45号住



47号住



49号住



50号住



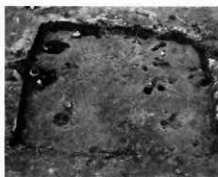
51号住



52号住



53号住



54号住



55・56・59号住



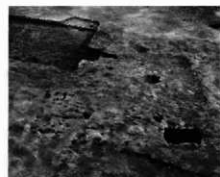
57号住



58号住



61・74号住・43号土塙



62号住



64号住(54号住)



65号住



67号住



68号住



70・71・72号住



73号住



76号住



77号住



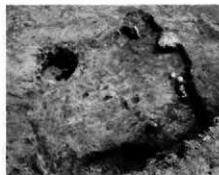
78号住



79・80号住



81・82号住



83号住



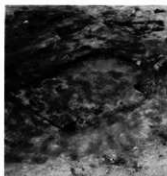
84号住



85号住



86号住



87号住



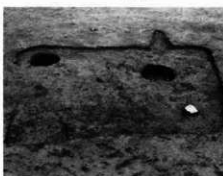
88号住



89号住



90号住



93号住



103号住



104号住



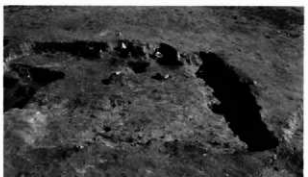
105号住



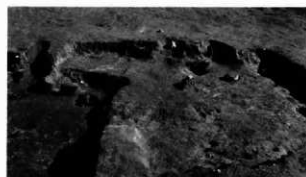
108号住



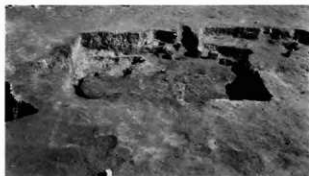
120号住



129号住



130号住



131・132号住



140号住



141号住



142号住



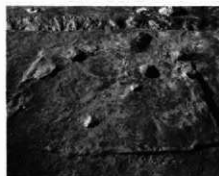
143・144・146号住



149号住



150号住



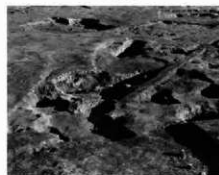
151号住



152号住



153号住



154号住



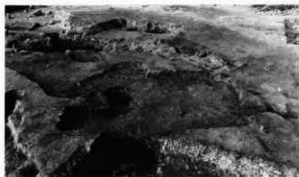
155号住



156号住



158号住



159・160号住



162号住



164号住



165号住



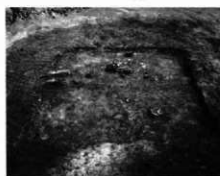
166号住



167号住(166号住)



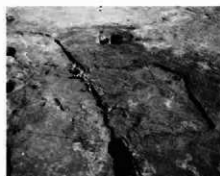
168号住



169号住



170号住



171号住



172号住



174号住



175号住



176・177号住



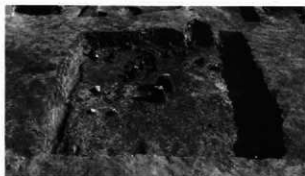
181号住



182・183号住



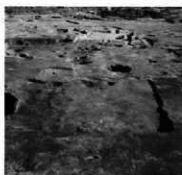
184号住



185号住



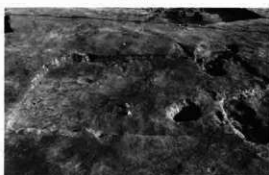
188号住



190号住



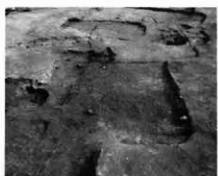
193A・193B号住



194号住



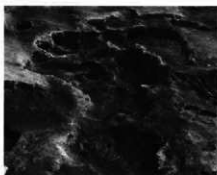
195・196・205・206号住



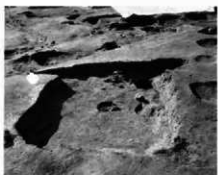
198号住



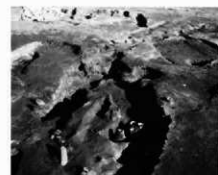
199・200号住



201号住



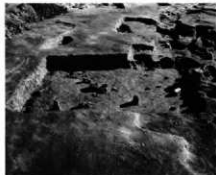
204号住



209号住



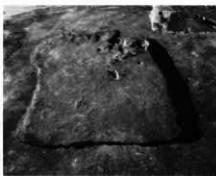
211号住(手前213号住)



212号住



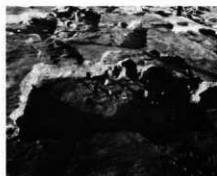
214号住



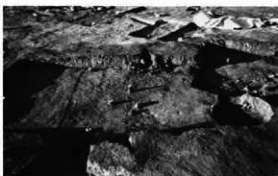
215号住



213号住(中央)



216・219号住



217号住



220号住



221号住



222号住



223号住



224号住



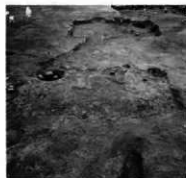
225号住



226号住



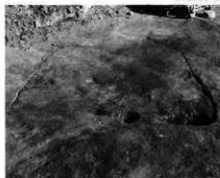
228・229・230・231号住



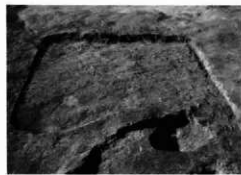
232号住



233号住



234号住



235号住



236号住



237号住



238号住



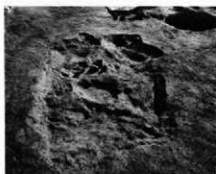
239号住



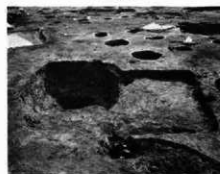
240号住



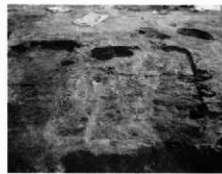
241・242号住



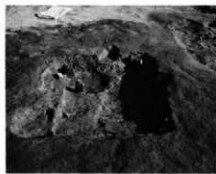
243号住



247号住



248号住



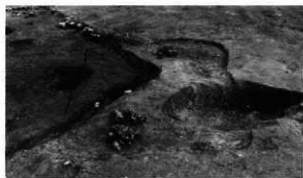
249号住



250・251・252号住



253号住



255号住



1・3号掘立



6号掘立



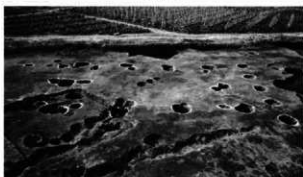
7号掘立



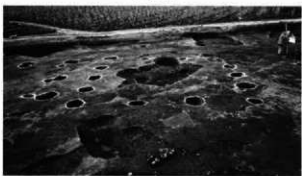
8号掘立



10号掘立



11A・11B号掘立



13号掘立



14号掘立



方形周墓全景



方形周墓北西溝遺物出土狀況



方形周墓南西溝土層剖面



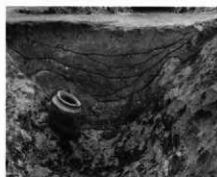
方形周墓南東溝土層剖面



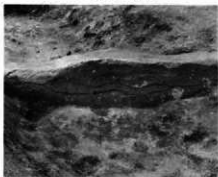
方形周墓北西溝土層剖面



2号溝土層剖面



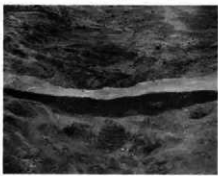
3号溝土層剖面



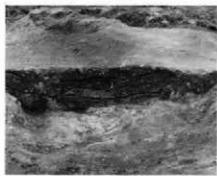
4号溝土層剖面(B-B')



4号溝土層剖面(A-A')



5号溝土層剖面



5号溝土層剖面



排列



2号井口



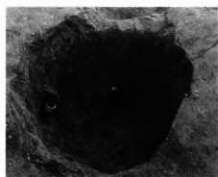
6号井口



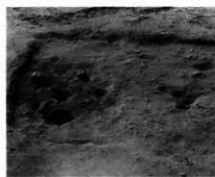
7号井口



2号土坑



4号土坑



10号土坑



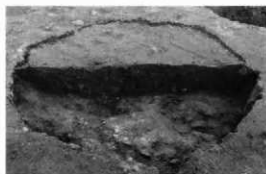
14号土坑



20号土坑



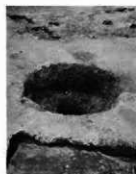
22号土坑



21号土坑



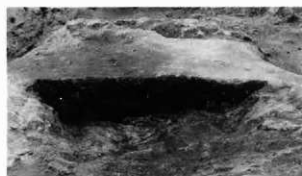
26号土坑



31号土坑



23·24·25号土坑



30号土坑



1号住カマド



6号住カマド



8号住カマド



8号住カマド



13号住カマド



31号住カマド



36号住カマド



38号住カマド



49号住カマド



51号住カマド



51号住カマド



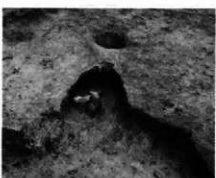
55号住カマド



59号住カマド



68号住カマド



77号住カマド



79号住カマド



80号住カマド



84号住カマド



90号住カマド



104号住カマド



143号住カマド



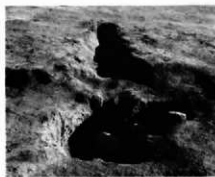
164号住カマド



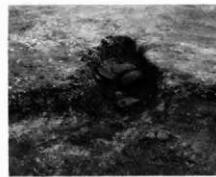
175号住カマド



185号住カマド



190号住カマド



193号住カマド



200号住カマド



220号住カマド



233号住カマド



239号住カマド



1-1



1-3



1-5



1-6



6-1



8-6



8-1



8-2



8-6



8-7



8-4



8-8



8-5



8-3



8-8



8-9



11-1



17-1



17-2



11-3



13-1



13-2



13-4



13-5



13-6



13-7



13-8



13-9



13-10



13-11



13-12



13-13



19-3



21-2



21-3



20-1



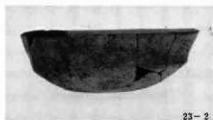
23-1



23-5



23-4



23-2



24-1



24-4



24-5



24-3



24-6



24-8



25-4



25-2



25-1



26-3



26-1



26-4



26-9



26-12



26-5



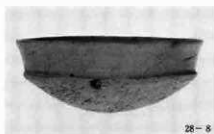
26-13



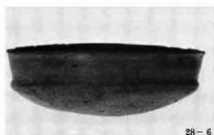
28-1



28-7



28-8



28-6



28-11



28-10



28-2



28-3



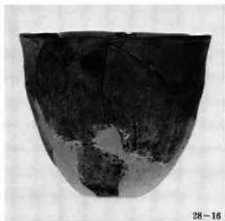
28-26

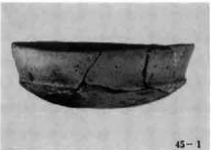
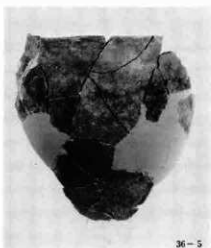
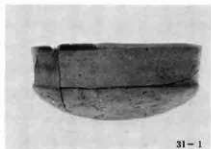


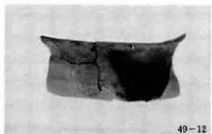
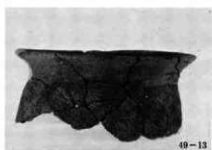
28-25

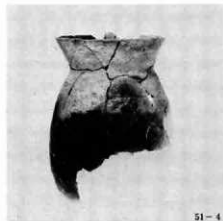


28-27







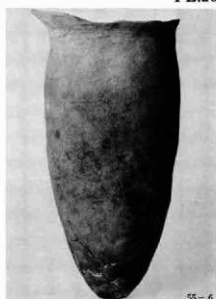




55-4



55-5



55-6



55-7



56-1



56-2



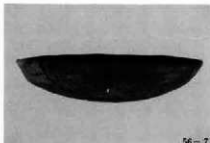
56-6



56-8



56-10



56-7



56-9



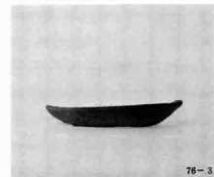
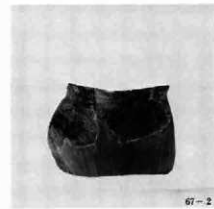
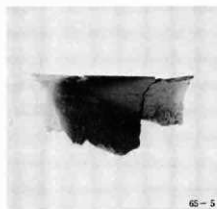
59-1

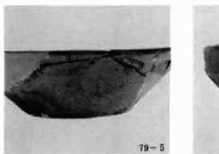
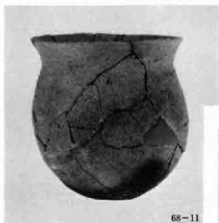


59-2



59-3







84-1



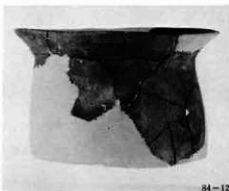
84-4



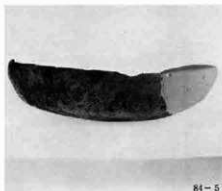
84-6



84-11



84-12



84-5



86-2



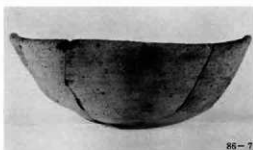
86-3



86-9



86-5



86-7



86-10



87-1



88-2



88-3



88-4



88-5



89-1



89-4



90-1



105-2



120-1



90-2



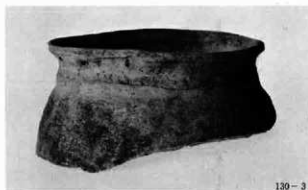
129-1



129-2



130-1



130-3



130-2



132-5



131-1



132-7

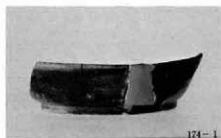
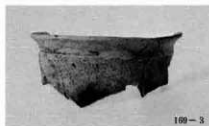
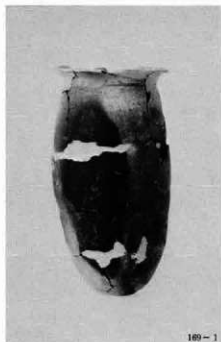


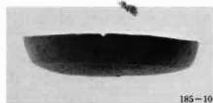
131-2

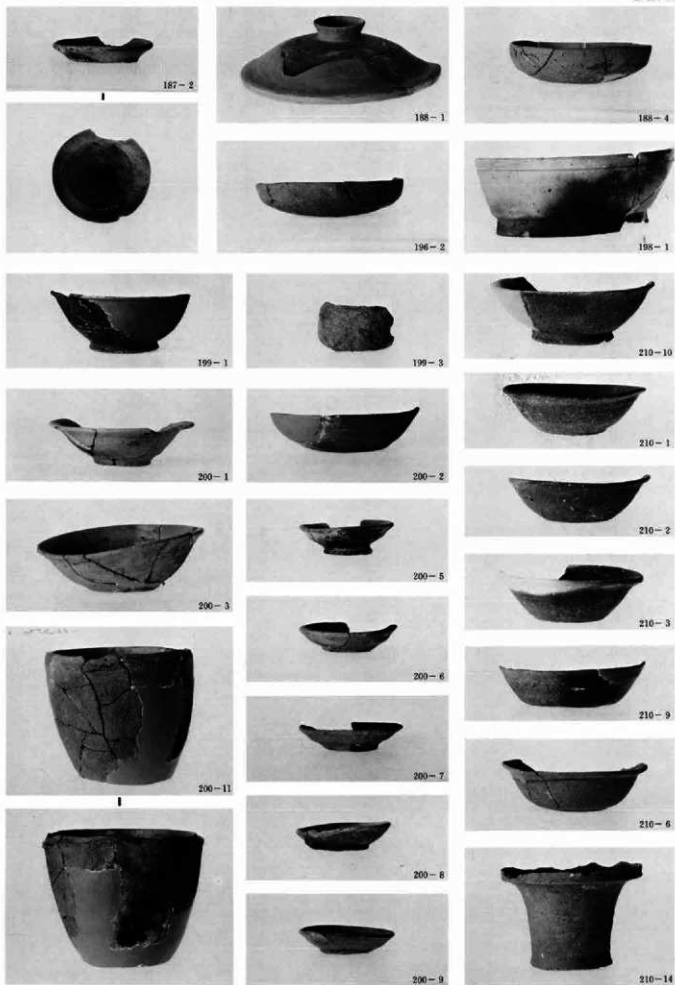


132-6









住居跡出土遺物



204-1



209-1



211-1



211-5



211-3



211-4



211-6



211-8



212-1



212-4



212-6



212-13



212-14



214-4



214-1



214-3



215-7



215-4



215-9



215-5



215-2





223-1



223-2



223-4



225-2



225-3



225-4



226-2



226-3



226-4



226-5



226-1



226-4



230-2



230-3



230-6



232-1



233-1



233-3



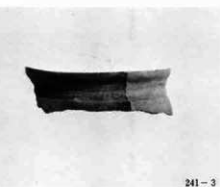
233-2



233-6

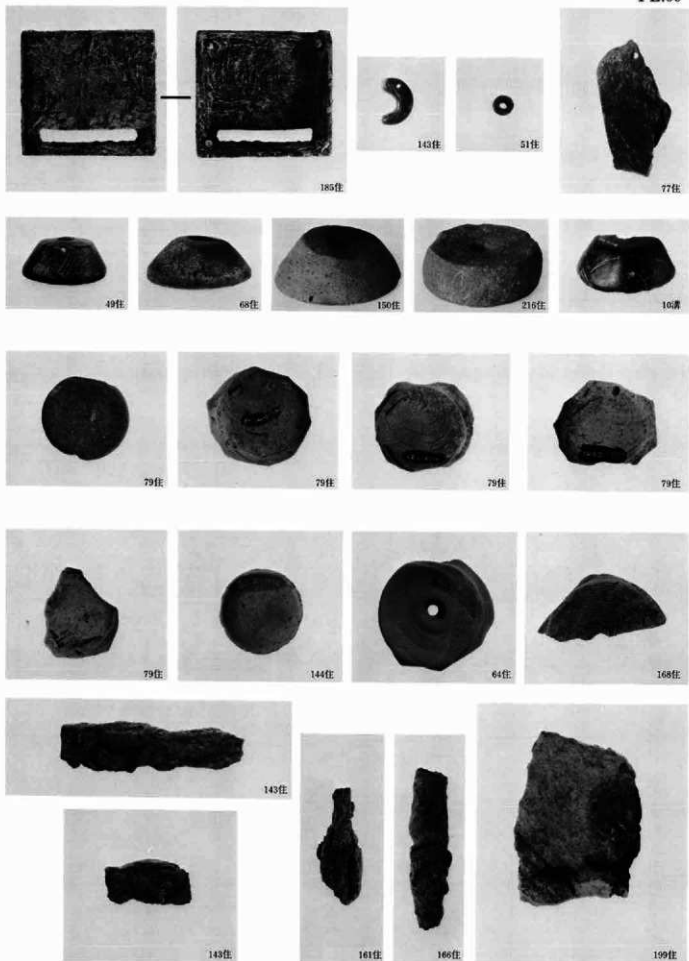


233-7





住居跡出土遺物



住居跡出土鈔幣具、石製模造品、紡錘車、土製円板、鉄製品



17・18・19住



85住



79住



131住



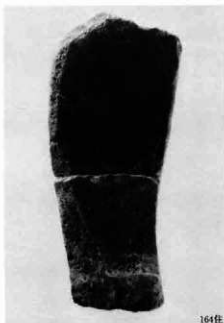
78住



183住



130住



164住



208住



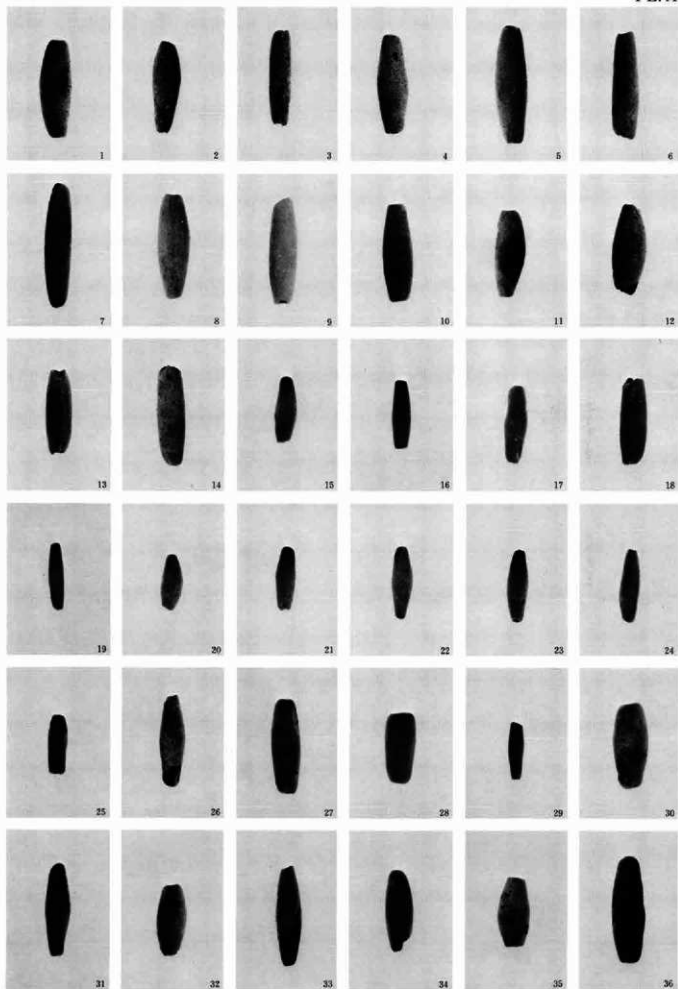
220住



220住



255住



住居跡出土土鏝





4 匜



4 匜



4 匜



5 匜



5 匜



10 匜



10 匜



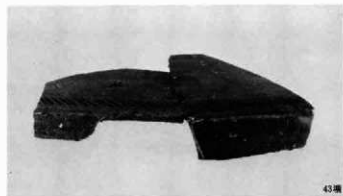
10 匜



43 匜



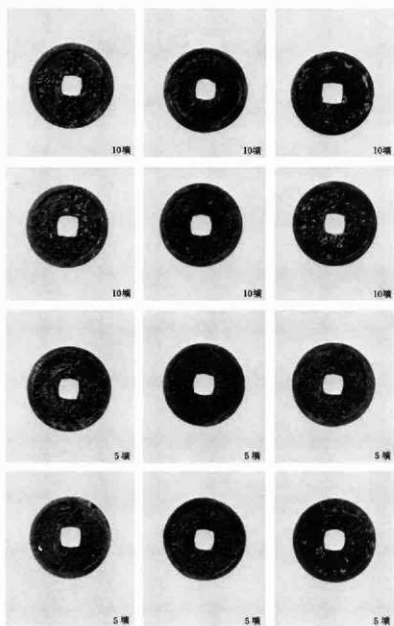
71 匜



43 匜



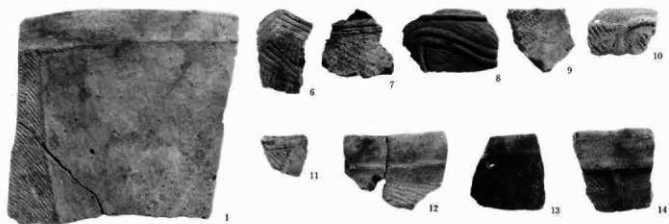
3 匜



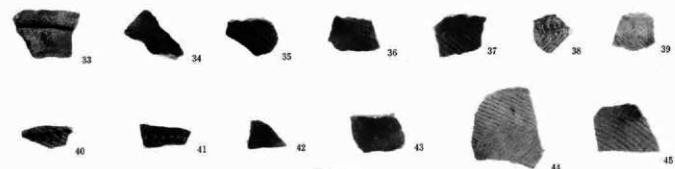
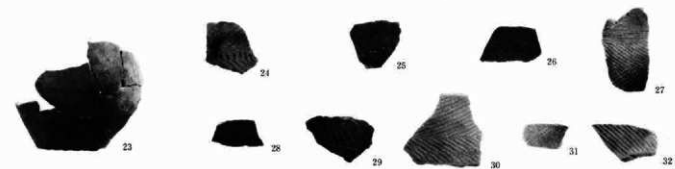
土壇出土錢貨



216号住出土的錢幣放大写真(3.5倍)



调文土器



弥生土器



円筒埴輪



9



10



11



12



13



14



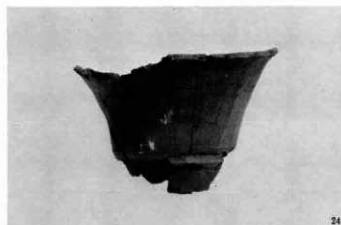
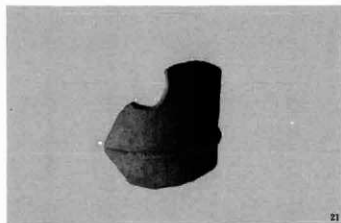
15

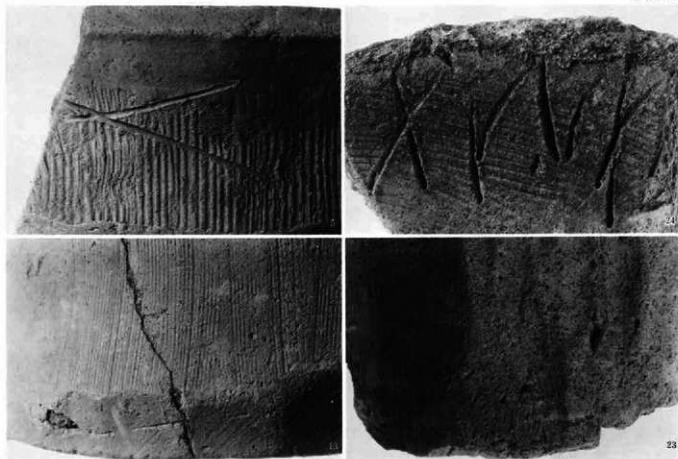


16

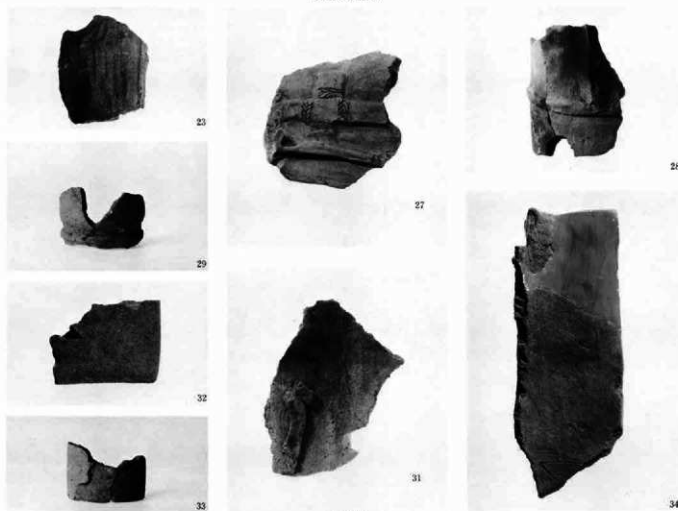


17

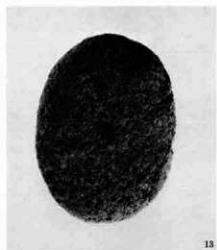




埴輪部分拡大



形象埴輪



185住-20
「中田」あるいは「田中」印



185住-22

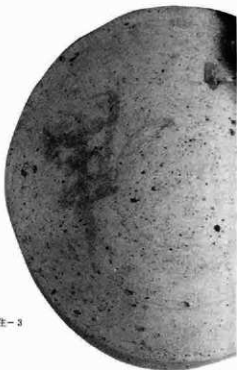


239住-1
「+」印





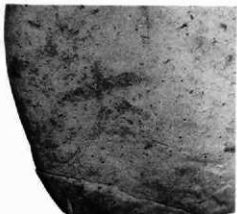
59住



132住-3



132住-4



162住-1



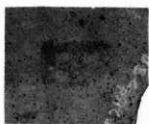
185住-2



22住-7



25住-8



26住-2



26住-3

三ツ木遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月25日 印刷

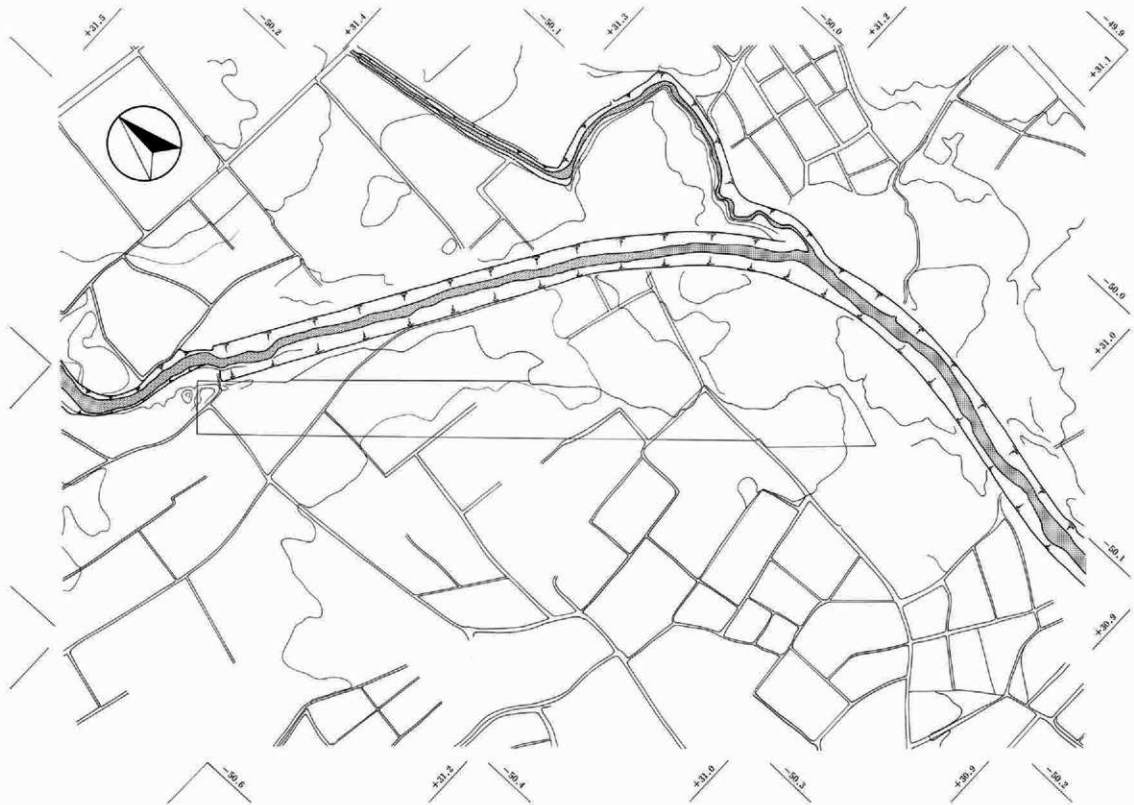
昭和60年3月30日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

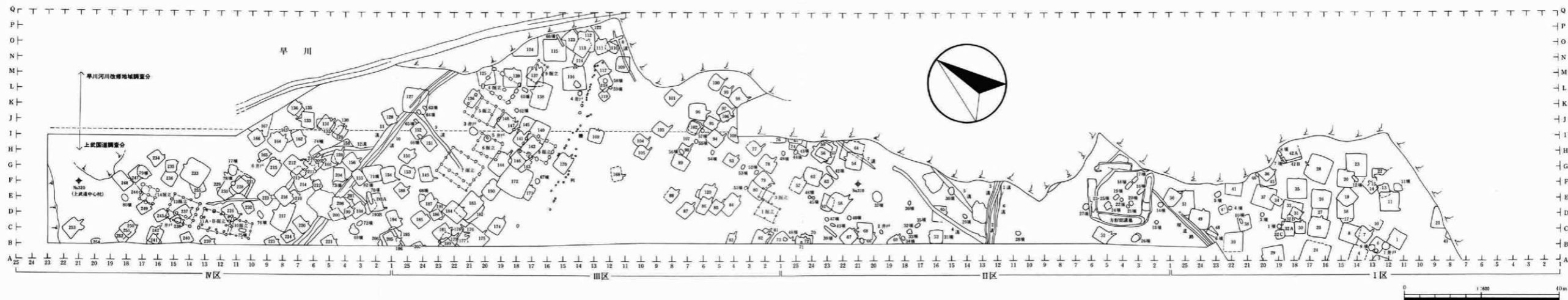
勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社



第368圖 通跡位置圖



第369回 連携配置図